

史跡 とうみょう じ きゅうけい だい 等妙寺旧境内

— 平坦部A（如意頭院跡）発掘調査報告書 —
(第2分冊)

令和3年（2021）3月

き ほうちょう
愛媛県鬼北町教育委員会



1 奈良山（鬼ヶ城連山）と国史跡等妙寺旧境内の位置（北東上空より）

写真中央が鬼ヶ城連山最高峰の高月山（標高1,229 m）で、背後に三本杭山（1,226 m）が見える。西は宇和島市域で、10 kmほどで宇和海に接する。等妙寺旧境内は、高月山より東の郭公岳（標高1,010 m）の中腹から麓にかけて伽藍が築かれていた。



2 九島（宇和島市）から奈良山（鬼ヶ城連山）を望む（北西より）

奈良山（鬼ヶ城連山）西方にあたる宇和島湾からの眺めは特徴かつ圧巻で、海岸部から平野をほとんど挟まずに標高1,000 m級の急峻な山々が聳えている。

等妙寺

中心伽藍



1 国史跡等妙寺旧境内の位置（上空より、写真上が南）



2 国史跡等妙寺旧境内鳥瞰写真（北西上空より）



1 磐座に坐す旧等妙寺本尊、木造菩薩遊戯坐像（伝如意輪観音）



2 磐座に記された墨書

【磐座銘】

（上面）

「□為

十三日

始申日

終申日」

（側面）

「再興修造応永

三十四年「丁未」卯月廿五日

住持宗秀

本願静能

大檀那綱」

※静能「法勝寺第二世紹空上人（前住等妙寺）」

巻頭図版 2-4



1 平坦部A（如意頭院跡）全景（北東上空より）



2 平坦部AⅢ区庭園地区（東上空より）



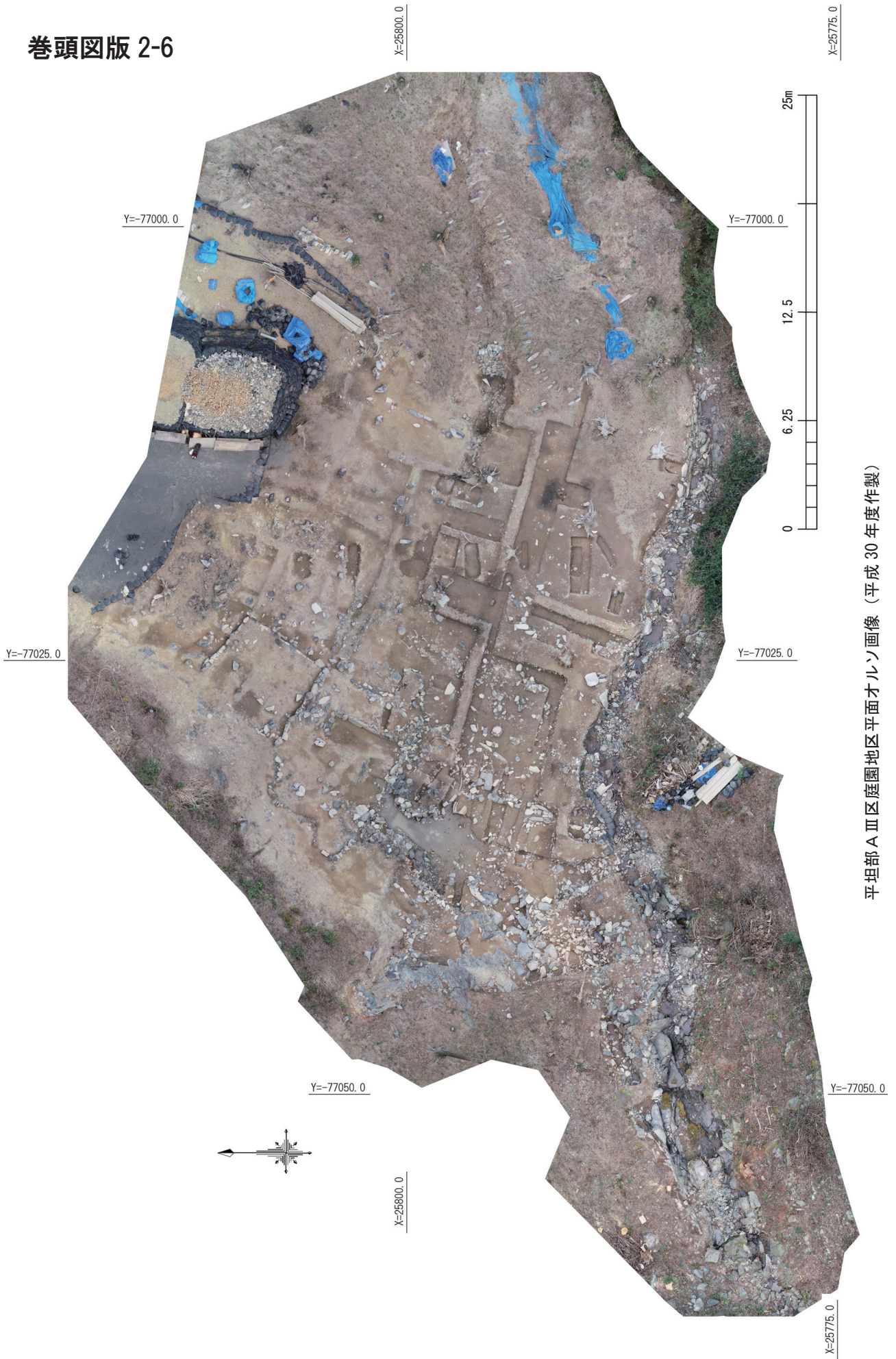
1 平坦部AⅢ区庭園地区 池SG01、滝SX02と観音堂跡（平坦部A-2）（東より）

写真中央巖崖の岩脈に石積みを施し、築かれているのが滝SX02。その下方手前の石積みを護岸とし、池SG01が形成されている。池SG01、巖崖のすぐ上段に位置する平場が観音堂跡（平坦部A-2）である。



2 池SG01の滞水状況（南より）

池SG01の東側には土手状遺構が形成されている（写真右）。発掘調査の結果、大きく2時期の変遷が判明し、等妙寺開山期にはⅡ区本堂地区で検出された日本堂跡（SB01）の主軸に合わせた配置がなされていた。



平坦部AⅢ区庭園地区平面オクルソ画像（平成30年度作製）



1 平坦部AⅢ区庭園地区土手状遺構護岸際出土 土師質土器杯



2 平坦部AⅢ区庭園地区小祠跡A及び周辺出土 土師質土器杯・皿



3 平坦部AⅡ区本堂地区出土 銅製品（飾り金具か）

卷頭図版 2-8



平坦部 A Ⅲ区庭園地区出土 銅製品（奉納鏡か）

例 言

- 1、本書は鬼北町が平成24年度から平成31年・令和元年度にかけて実施した愛媛県北宇和郡鬼北町大字芝・中野川に所在する国史跡等妙寺旧境内の発掘調査事業（国庫補助事業）のうち、平成27年度から平成31年・令和元年度事業を主に対象としてとりまとめ、平坦部A（如意願院跡）発掘調査報告（第2分冊）として刊行するものである。
- 2、鬼北町内遺跡発掘調査事業は、文化庁記念物課、愛媛県教育委員会文化財保護課、史跡等妙寺旧境内調査・整備検討委員会の指導を得て実施した。

調査指導 史跡等妙寺旧境内調査・整備検討委員会（平成24～31年度・令和元年度）

（委員長） 下條信行（愛媛大学法文学部 名誉教授）

（副委員長） 江崎次夫（愛媛大学農学部 名誉教授）

（委員） 高瀬哲郎（石垣技術研究機構 代表）

木戸雅寿（滋賀県 文化スポーツ部 文化財保護課）

三浦正幸（広島大学文学部 名誉教授）

石野弥栄（元愛媛県歴史文化博物館 学芸課長・令和元年10月まで）

久保智康（叡山学院 教授・令和元年7月から）

清家直英（鬼北町文化財保護委員・平成26年3月まで）

水野岩根（鬼北町文化財保護委員・平成26年3月まで）

関本健夫（鬼北町文化財保護委員・平成26年4月から）

関 覚圓（宗教法人等妙寺代表役員 第42代住職・平成24年7月まで）

関 秀圓（宗教法人等妙寺代表役員 第43代住職・平成25年4月から）

上記委員のほか調査及び報告書刊行に関しては、委員のほかに下記の方々にご指導・ご協力を賜った（敬称略、五十音順）。

大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）、柴田圭子（（公財）愛媛県埋蔵文化財センター）、村上恭通（愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター）、山本義孝（袋井市歴史文化館）

- 3、令和2年度の本報告書作成にかかる事務局は下記のとおりである。

鬼北町教育委員会事務局 教育課

教 育 長 松浦 秀樹

課 長 渡邊 甫

課長補佐兼

文化スポーツ係長 佐竹 八重

文化財担当係長 幡上 敬一

主 査 織田 誠司

- 4、本書で使用した標高は海拔標高を表す。座標系は世界測地系で、方位は座標北を示す。
- 5、本書の執筆は、第3章第2節3～5を織田、6を幡上、遺物のうち金属製品、銭貨、その他については西澤千絵里（鬼北町会計年度任用職員）が行った。第4章は委託業者による分析結果報告であり、担当は目次に記す。第5章については久保智康氏、山本義孝氏に玉稿を賜った。
- 6、本書の編集は幡上、織田が分担して行った。
- 7、本書に関わる遺物・記録類は鬼北町教育委員会にて保管している。

凡 例

- 1、主要遺構については下記のように付した。なお、遺跡全体の連番ではなく、各地点及びトレンチごとの遺構番号のため、重複があるので注意されたい。

SB：建物 SD：溝状遺構 SG：苑池・池状遺構 SP：柱穴等ピット SK：土坑
SE：井戸 SA：塀・柵 SH：広場 SS：石列・石積み（小規模） SX：性格不明遺構
SW：石積み・石垣

- 2、縮尺は各遺構・遺物図面に表記した。

本文目次

(第2分冊)

第3章 平坦部A(如意頭院跡)の調査

第2節 遺構と遺物

3	Ⅲ区庭園地区	織田誠司	1
(1)	基本土層		1
(2)	S B 0 5 基壇と前庭部		1
(3)	池S G 0 1と周辺の遺構		10
(4)	広場S H 0 1と周辺の遺構		42
(5)	Ⅲ区庭園地区の遺構変遷		56
(6)	Ⅲ区庭園地区表採及び出土遺物		58
4	その他の遺物(地区・地点不明)		72
5	過去報告の遺物		73
(1)	平坦部AⅠ区本坊地区の遺物		73
(2)	平坦部AⅡ区本堂地区の遺物		77
(3)	平坦部AⅢ区庭園地区の遺物		77
6	近世の遺構と遺物	幡上敬一	78
(1)	S B 0 6		78
(2)	平坦部A表採・出土の近世遺物		79
(3)	近世遺物の出土・分布状況		82
(4)	平坦部Aの近世以降の利用状況		84

第4章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

1	平坦部AⅠ区本坊地区出土炭化材の放射性炭素年代測定	パレオ・ラボ	89
2	平坦部AⅠ・Ⅱ区出土炭化材の放射性炭素年代測定	パレオ・ラボ	92
3	平坦部AⅢ区及び平坦部A-2出土炭化材の放射性炭素年代測定	パレオ・ラボ	97

第2節 樹種同定

	平坦部A出土炭化材の樹種同定	黒沼保子	103
--	----------------	------	-----

第3節 花粉分析

	平坦部AⅢ区採取試料の花粉分析	森 将志	115
--	-----------------	------	-----

第4節 珪藻分析

	平坦部AⅢ区池状遺構S X 0 1採取試料の珪藻分析	野口真利江	119
--	----------------------------	-------	-----

第5章 附論

1	等妙寺開創前夜の信仰空間をめぐる諸問題	久保智康	125
2	宗教史の立場から見た等妙寺研究の課題—「奈良山」とは—	山本義孝	135
3	Ⅰ区本坊地区・Ⅱ区本堂地区出土の土師質土器について	織田誠司	155

目 次

(第2分冊)

図 2-1	基本土層模式図 (縮尺任意)	1
図 2-2	平坦部 A の調査地区設定 (1 : 500)	2
図 2-3	調査区土層図位置 (1 : 250)	3
図 2-4	調査区土層 1 (1 : 50)	4
図 2-5	調査区土層 2 (1 : 50)	5
図 2-6	調査区土層 3 (1 : 50)	6
図 2-7	調査区土層 4 (1 : 50)	7
図 2-8	S B 0 5 と前庭部 (1 : 100)	8
図 2-9	S B 0 5 平・断面図 (北・東面) (1 : 50)	9
図 2-10	S B 0 5 断面図 (南面) (1 : 50)	10
図 2-11	塀 S A 0 2 平・断面図 (1 : 40)	10
図 2-12	S B 0 5 基壇西面立面図 (1 : 60)	11
図 2-13	S B 0 5 基壇 東側前庭部出土遺物 (1 : 3)	12
図 2-14	S B 0 4 ・池状遺構 S X 0 1 ・階段状遺構平面図 (1 : 60)	13
図 2-15	S B 0 4 ・池状遺構 S X 0 1 立面図 1 (1 : 40)	14
図 2-16	S B 0 4 ・池状遺構 S X 0 1 立面図 2 (1 : 40)	15
図 2-17	1 トレンチ断面図 (1 : 40)	15
図 2-18	階段状遺構平面・断面・立面図 (1 : 60 / 1 : 40)	16
図 2-19	池 S G 0 1 周辺平面図 (1 : 100)	17
図 2-20	2 トレンチ平・断面図 (1 : 40)	18
図 2-21	土手状遺構・出島状遺構周辺平面図 (1 : 60)	19
図 2-22	池 S G 0 1 ・土手状遺構断面図 1 (1 : 40)	20
図 2-23	池 S G 0 1 ・土手状遺構平・断面図 2 (1 : 40)	21
図 2-24	池 S G 0 1 ・土手状遺構断面図 3 (1 : 40)	21
図 2-25	土手状遺構・出島状遺構立面図 (1 : 40)	22
図 2-26	出島状遺構 トレンチ平・断面図 (1 : 40)	23
図 2-27	石組遺構周辺平面図 (1 : 40)	25
図 2-28	土手状遺構・石組遺構周辺断面図 1 (1 : 40)	26
図 2-29	土手状遺構・石組遺構周辺断面図 2 (1 : 40)	27
図 2-30	池 S G 0 1 周辺出土遺物 (1 : 3)	28
図 2-31	池 S G 0 1 旧段階池底上層堆積土出土遺物 (1 : 3)	29
図 2-32	池 S G 0 1 底部付近出土遺物 (1 : 3)	29
図 2-33	池 S G 0 1 底面青灰色粘土層出土遺物 (1 : 3)	29
図 2-34	池 S G 0 1 周辺造成土に伴う遺物 (1 : 3)	30
図 2-35	池 S G 0 1 周辺造成土上層堆積層出土遺物 (1 : 3)	30

図 2-36	土手状遺構護岸際出土遺物 (1:3)	31
図 2-37	土手状遺構周辺出土遺物 (1:3)	32
図 2-38	出島状遺構南側 土手状遺構護岸際出土遺物 (1:3)	32
図 2-39	出島状遺構出土遺物 (1:3)	32
図 2-40	滝 S X 0 2 周辺平面図 (1:60)	35
図 2-41	滝 S X 0 2 立・断面図 (1:60 / 1:100)	36
図 2-42	滝 S X 0 2 立面オルソ画像 (1:60)	37
図 2-43	小祠跡 A 平・断面図 (1:30)	39
図 2-44	小祠跡 A 及び周辺出土遺物 (1:3)	40
図 2-45	石積み S S 0 5・S S 0 6 立・断面図 (1:40)	41
図 2-46	石積み S S 0 5 前面 3 層 (砂礫層) 出土遺物 (1:3)	42
図 2-47	堤状遺構出土遺物 (1:3)	42
図 2-48	堤状遺構・水路遺構平面図 (1:120)	43
図 2-49	堤状遺構・水路遺構断面図 (1:40)	44
図 2-50	水路遺構断面図 (1:40)	45
図 2-51	堤状遺構・水路遺構立面図 (1:60)	46
図 2-52	S W 0 0 3 - 3 立面図 (1:60)	46
図 2-53	広場 S H 0 1 と周辺の遺構 (1:100)	48
図 2-54	広場 S H 0 1 基盤整地層出土遺物 (1:3)	49
図 2-55	排水遺構平・断面図 (1:50)	50
図 2-56	S X 0 3 平・断面図 (1:40)	51
図 2-57	S P 0 1 平・断面図 (1:40)	51
図 2-58	S X 0 3 埋土及び周辺出土遺物 (1:3 / 1:2)	52
図 2-59	S P 0 1 付近出土遺物 (1:3)	52
図 2-60	S W 0 0 3 - 1 トレンチ断面図 (1:40)	53
図 2-61	S W 0 0 3 - 1 トレンチ出土遺物 (1:3)	53
図 2-62	S W 0 0 2 トレンチ位置図 (1:100)	54
図 2-63	S W 0 0 2 トレンチ平・断面図 (1:40)	55
図 2-64	S W 0 0 2 北側トレンチ断面図 (1:40)	55
図 2-65	S W 0 0 2 北側トレンチ出土遺物 (1:3)	56
図 2-66	前 I 期 (プレ等妙寺期) の平坦部 A III 区庭園地区周辺 (1:400)	57
図 2-67	I 期 (開山期 / 14 世紀代) の平坦部 A III 区庭園地区周辺 (1:400)	57
図 2-68	II 期 (革新期 / 15 世紀後半 ~ 16 世紀代) の平坦部 A III 区庭園地区周辺 (1:400)	58
図 2-69	III 区庭園地区表採・出土遺物 土師質土器 1 (1:3)	59
図 2-70	III 区庭園地区表採・出土遺物 土師質土器 2 (1:3)	60
図 2-71	III 区庭園地区表採・出土遺物 土師質土器 3 (1:3)	61
図 2-72	III 区庭園地区表採・出土遺物 土師質土器 4 (1:3)	62
図 2-73	III 区庭園地区表採・出土遺物 土師質土器 5 (1:3)	63
図 2-74	III 区庭園地区表採・出土遺物 土師質土器 6 (1:3)	64

表目次

(第2分冊)

表 2-1	測定試料および処理	89
表 2-2	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	90
表 2-3	測定試料および処理	93
表 2-4	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	94
表 2-5	測定試料および処理	98
表 2-6	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	100
表 2-7	遺構別の樹種同定結果	107
表 2-8	樹種同定結果一覧 (1)	109
表 2-9	樹種同定結果一覧 (2)	110
表 2-10	産出花粉孢子一覧	115
表 2-11	堆積物の特徴	119
表 2-12	堆積土中の珪藻化石算出表	121
表 2-13	S B 0 5 基壇東側前庭部出土遺物観察表	167
表 2-14	池 S G 0 1 周辺出土遺物観察表 (1)	167
表 2-15	池 S G 0 1 周辺出土遺物観察表 (2)	168
表 2-16	池 S G 0 1 旧段階池底上層堆積土出土遺物観察表	168
表 2-17	池 S G 0 1 底部付近出土遺物観察表	169
表 2-18	池 S G 0 1 底面青灰色粘土層出土遺物観察表	169
表 2-19	池 S G 0 1 周辺造成土に伴う遺物観察表	170
表 2-20	池 S G 0 1 周辺造成土上層堆積層出土遺物観察表	170
表 2-21	土手状遺構護岸際出土遺物観察表	171
表 2-22	土手状遺構周辺出土遺物観察表	171
表 2-23	出島状遺構南側 土手状遺構護岸際出土遺物観察表	172
表 2-24	出島状遺構出土遺物観察表	172
表 2-25	小祠跡 A 及び周辺出土遺物観察表	172
表 2-26	石積み S S 0 5 前面 3 層 (砂礫層) 出土遺物観察表	173
表 2-27	堤状遺構出土遺物観察表	173
表 2-28	広場 S H 0 1 基盤整地層出土遺物観察表	173
表 2-29	S X 0 3 埋土及び周辺出土遺物観察表 (1)	173
表 2-30	S X 0 3 埋土及び周辺出土遺物観察表 (2)	174
表 2-31	S P 0 1 付近出土遺物観察表	174
表 2-32	S W 0 0 3 - 1 トレンチ出土遺物観察表	174
表 2-33	S W 0 0 2 北側トレンチ出土遺物観察表	174
表 2-34	Ⅲ区庭園地区表採・出土遺物 土師質土器観察表 (1)	175
表 2-35	Ⅲ区庭園地区表採・出土遺物 土師質土器観察表 (2)	176

表 2-36	Ⅲ区庭園地区表採・出土遺物	土師質土器観察表（3）	177
表 2-37	Ⅲ区庭園地区表採・出土遺物	土師質土器観察表（4）	178
表 2-38	Ⅲ区庭園地区表採・出土遺物	土師質土器観察表（5）	179
表 2-39	Ⅲ区庭園地区表採・出土遺物	土師質土器観察表（6）	180
表 2-40	Ⅲ区庭園地区表採・出土遺物	備前焼観察表	180
表 2-41	Ⅲ区庭園地区表採・出土遺物	貿易陶磁器観察表	181
表 2-42	Ⅲ区庭園地区表採・出土遺物	金属製品・その他観察表（1）	182
表 2-43	Ⅲ区庭園地区表採・出土遺物	金属製品・その他観察表（2）	183
表 2-44	その他の遺物（地区・地点不明）	観察表	184
表 2-45	I区本坊地区の遺物（過去報告）	観察表（1）	185
表 2-46	I区本坊地区の遺物（過去報告）	観察表（2）	186
表 2-47	Ⅱ区本堂地区の遺物（過去報告）	観察表（1）	186
表 2-48	Ⅱ区本堂地区の遺物（過去報告）	観察表（2）	187
表 2-49	Ⅲ区庭園地区の遺物（過去報告）	観察表	187
表 2-50	平坦部A表採・出土の近世遺物	観察表（1）	188
表 2-51	平坦部A表採・出土の近世遺物	観察表（2）	189

写真図版目次

(第2分冊)

写真 2-1	I 区の黄褐色シルトの土塊 (東から)	82
写真 2-2	斜面崩落土下面にて検出された近世陶磁器 (南から)	82
写真 2-3	砂礫土に覆われたⅢ区の様子 (北東から)	84
写真 2-4	砂礫土の下面にて検出された外面青磁碗 (南から)	84
写真 2-5	谷川から取水する水路遺構 (東から)	84
写真 2-6	Ⅲ区の池 S G 0 1 直上にあった大杉の伐株 (西から)	84
写真 2-7	等妙寺旧境内出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真 (1)	111
写真 2-8	等妙寺旧境内出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真 (2)	112
写真 2-9	等妙寺旧境内出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真 (3)	113
写真 2-10	等妙寺旧境内出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真 (4)	114
写真 2-11	産出した花粉化石	118
写真 2-12	堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真	123

巻頭図版 2-1	1 奈良山 (鬼ヶ城連山) と国史跡等妙寺旧境内の位置 (北東上空より)	
	2 九島 (宇和島市) から奈良山 (鬼ヶ城連山) を望む (北西より)	
巻頭図版 2-2	1 国史跡等妙寺旧境内の位置 (上空より、写真上が南)	
	2 国史跡等妙寺旧境内鳥瞰写真 (北西上空より)	
巻頭図版 2-3	1 磐座に坐す旧等妙寺本尊、木造菩薩遊戯坐像 (伝如意輪観音)	
	2 磐座に記された墨書	
巻頭図版 2-4	1 平坦部 A (如意顕院跡) 全景 (北東上空より)	
	2 平坦部 A Ⅲ区庭園地区 (東上空より)	
巻頭図版 2-5	1 平坦部 A Ⅲ区庭園地区 池 S G 0 1、滝 S X 0 2 と観音堂跡 (東より)	
	2 池 S G 0 1 の滞水状況 (南より)	
巻頭図版 2-6	平坦部 A Ⅲ区庭園地区平面オルソ画像 (平成 30 年度作製)	
巻頭図版 2-7	1 平坦部 A Ⅲ区庭園地区土手状遺構護岸際出土 土師質土器杯	
	2 平坦部 A Ⅲ区庭園地区小祠跡 A 及び周辺出土 土師質土器杯・皿	
	3 平坦部 A Ⅱ区本堂地区出土 銅製品 (飾り金具か)	
巻頭図版 2-8	平坦部 A Ⅲ区庭園地区出土 銅製品 (奉納鏡か)	
写真図版 2-1	1 平坦部 A 調査区全景 (北東上空より)	
	2 Ⅲ区庭園地区全景 (1) (北上空より)	
写真図版 2-2	1 Ⅲ区庭園地区全景 (2) (北上空より)	
	2 Ⅲ区庭園地区全景 (東上空より)	
写真図版 2-3	1 Ⅲ区庭園地区トレンチ設定状況 (2017 年撮影、西より)	
	2 Ⅲ区庭園地区全体の調査状況 (2020 年撮影、西より)	

- 写真図版 2-4 1 S B 0 5 前庭部及び周辺 (北東より)
2 S B 0 5 検出状況 (東より)
- 写真図版 2-5 1 S B 0 5 基壇石積み東面 (東より)
2 S B 0 5 基壇石積み角部 (北東より)
3 S B 0 5 基壇石積み北面 (北より)
- 写真図版 2-6 1 S B 0 5 南面の石積み (北東より)
2 塀 S A 0 2 検出状況 (北東より)
- 写真図版 2-7 1 S B 0 4 ・池状遺構 S X 0 1 ・階段状遺構・土手状遺構 (東より)
2 S B 0 4 検出状況 (東より)
- 写真図版 2-8 1 池状遺構 S X 0 1 完掘状況 (南より)
2 池状遺構 S X 0 1 東面の縁石 (西より)
3 池状遺構 S X 0 1 北面の縁石 (南より)
- 写真図版 2-9 1 池状遺構 S X 0 1 西面・S B 0 4 東面の岩盤 (東より)
2 S B 0 4 南面の岩盤 (南より)
3・4 土手状遺構 1 トレンチの土層断面 (南・北面)
- 写真図版 2-10 1 降雨後の池状遺構 S X 0 1 の様子 (南より)
2 S B 0 4 南側の階段状遺構 (東より)
3 階段状遺構南面 (北より)
4 階段状遺構周辺 (東より)
- 写真図版 2-11 1 池 S G 0 1 全景 (南より)
2 池 S G 0 1 の底面に設定した 2 トレンチ調査状況 (南より)
- 写真図版 2-12 土手状遺構 (南より)
- 写真図版 2-13 1 土手状遺構西面の池 S G 0 1 の縁石 (南西より)
2 土手状遺構の護岸縁石下層での土器出土状況 (西より)
3・4 土手状遺構の土層断面 (北・南面)
- 写真図版 2-14 1 出島状遺構 (南より)
2 出島状遺構北面の縁石 (北より)
3 出島状遺構のトレンチ土層断面 (南より)
4 出島状遺構下面にて検出された貼石 (北より)
- 写真図版 2-15 1 石組遺構 (南より)
2 石組遺構と池 S G 0 1 底面との関係 (北より)
3 谷川から石組遺構に連続する石列 (南より)
- 写真図版 2-16 1 水路状遺構 (西より)
2 石組遺構・水路状遺構周辺の土層断面 (西より)
- 写真図版 2-17 1 滝 S X 0 2 と池 S G 0 1 の景観 (東より)
2 降雨時の滝 S X 0 2 の様子 (東より)
- 写真図版 2-18 1・2 滝 S X 0 2 水落からの土器出土状況 (東・北東より)
3・4 滝 S X 0 2 掘肩内からのヒノキ炭化材の検出状況 (南東・南より)

- 写真図版 2-19 1 滝S X 0 2 水落周辺 (南東より)
2 石積みS S 0 5 (東より)
3 石積みS S 0 6 (東より)
- 写真図版 2-20 1 小祠跡A検出状況 (東より)
2 小祠跡A完掘状況 (南より)
- 写真図版 2-21 1 小祠跡B検出状況 (東より)
2 小祠跡B土器と炭の出土状況 (東より)
- 写真図版 2-22 1 谷川と堤状遺構 (北東より)
2 堤状遺構 (東より)
- 写真図版 2-23 1 堤状遺構の土層断面 (北東より)
2 堤状遺構収束部の土層断面 (西より)
- 写真図版 2-24 1 水路遺構 (東より)
2 水路遺構と堤状遺構 (北東より)
- 写真図版 2-25 1 谷川から水路遺構の導水口に敷設された石積みS W 0 0 3 - 3 (南東より)
2 石積みS S 0 0 3 - 3 (西より)
- 写真図版 2-26 1 石積みS W 0 0 3 - 2 (南西より)
2 石積みS W 0 0 3 - 1 (南より)
- 写真図版 2-27 1 広場S H 0 1 (北より)
2 塀S A 0 1 検出状況 (南より)
3 排水遺構と塀S A 0 1 (西より)
4 排水遺構 (南より)
- 写真図版 2-28 1 排水遺構 (東より)
2 S X 0 3 完掘状況 (北より)
- 写真図版 2-29 1 S W 0 0 2 (南より)
2 S W 0 0 2 (北より)
- 写真図版 2-30 1 建物跡S B 0 6 (東より)
2 S B 0 6 礎石と本坊建物正門の礎石 (西より)
- 写真図版 2-31 1・2 平坦部AⅢ区庭園地区 出土遺物 1 (報告番号 545 ~ 550)
- 写真図版 2-32 1・2 平坦部AⅢ区庭園地区 出土遺物 2 (報告番号 551 ~ 568)
- 写真図版 2-33 1・2 平坦部AⅢ区庭園地区 出土遺物 3 (報告番号 569 ~ 578)
- 写真図版 2-34 1・2 平坦部AⅢ区庭園地区 出土遺物 4 (報告番号 580 ~ 586)
- 写真図版 2-35 1・2 平坦部AⅢ区庭園地区 出土遺物 5 (報告番号 587 ~ 595)
- 写真図版 2-36 1 土手状遺構護岸際出土 土師質土器杯 1 (報告番号 587)
2 土手状遺構護岸際出土 土師質土器杯 2 (報告番号 588)
3 土手状遺構護岸際出土 土師質土器杯 3 (報告番号 589)
- 写真図版 2-37 1・2 平坦部AⅢ区庭園地区 出土遺物 6 (報告番号 596 ~ 605)
- 写真図版 2-38 1・2 平坦部AⅢ区庭園地区 出土遺物 7 (報告番号 606 ~ 613)
- 写真図版 2-39 1 小祠跡A及び周辺出土 土師質土器杯・皿 (報告番号 608・609・611・610)
2 小祠跡A検出面出土 瓦質不明品 (報告番号 614)

- 写真図版 2-40 1・2 平坦部AⅢ区庭園地区 出土遺物 8 (報告番号 615～617)
- 写真図版 2-41 1・2 平坦部AⅢ区庭園地区 出土遺物 9 (報告番号 618～626)
- 写真図版 2-42 1・2 平坦部AⅢ区庭園地区 出土遺物 10 (報告番号 627～630)
- 写真図版 2-43 1・2 平坦部AⅢ区庭園地区 表採・出土遺物 1 (報告番号 631～642)
- 写真図版 2-44 1 平坦部AⅢ区庭園地区出土 土師質土器皿 (報告番号 638)
2 平坦部AⅢ区庭園地区出土 土師質土器杯 (報告番号 639)
- 写真図版 2-45 1・2 平坦部AⅢ区庭園地区 表採・出土遺物 2 (報告番号 643～661)
- 写真図版 2-46 1・2 平坦部AⅢ区庭園地区 表採・出土遺物 3 (報告番号 662～671)
- 写真図版 2-47 1・2 平坦部AⅢ区庭園地区 表採・出土遺物 4 (報告番号 672～689)
- 写真図版 2-48 1・2 平坦部AⅢ区庭園地区 表採・出土遺物 5 (報告番号 690～705)
- 写真図版 2-49 1・2 平坦部AⅢ区庭園地区 表採・出土遺物 6 (報告番号 706～721)
- 写真図版 2-50 1・2 平坦部AⅢ区庭園地区 表採・出土遺物 7 (報告番号 722～731)
- 写真図版 2-51 1・2 平坦部AⅢ区庭園地区 表採・出土遺物 8 (報告番号 732～735)
- 写真図版 2-52 1・2 平坦部AⅢ区庭園地区 表採・出土遺物 9 (報告番号 736～738)
- 写真図版 2-53 1・2 平坦部AⅢ区庭園地区 表採・出土遺物 10 (報告番号 739～748)
- 写真図版 2-54 1 平坦部AⅢ区庭園地区 表採・出土遺物 11 (報告番号 749～753)
2 平坦部AⅢ区庭園地区 表採・出土遺物 12 (報告番号 753～770)
- 写真図版 2-55 1 平坦部AⅢ区庭園地区 表採・出土遺物 13 (報告番号 771～787)
2 平坦部AⅢ区庭園地区 表採・出土遺物 14 (報告番号 788～790)
- 写真図版 2-56 1 平坦部AⅢ区庭園地区 表採・出土遺物 詳細 1 (報告番号 787)
2 平坦部AⅢ区庭園地区 表採・出土遺物 詳細 2 (報告番号 789)
- 写真図版 2-57 1 平坦部AⅢ区庭園地区 表採・出土遺物 詳細 3 (報告番号 789)
2 平坦部AⅢ区庭園地区 表採・出土遺物 詳細 4 (報告番号 789)
- 写真図版 2-58 1・2 平坦部AⅢ区庭園地区 表採・出土遺物 15 (報告番号 791～794)
- 写真図版 2-59 平坦部AⅢ区庭園地区 表採・出土遺物 詳細 5 (原寸大) (報告番号 791)
- 写真図版 2-60 1・2 その他の遺物 (地区・地点不明) (報告番号 795～801)
- 写真図版 2-61 1・2 平坦部AⅠ区本坊地区の遺物 1 (過去報告) (報告番号 802～808)
- 写真図版 2-62 1・2 平坦部AⅠ区本坊地区の遺物 2 (過去報告) (報告番号 809～810)
- 写真図版 2-63 1・2 平坦部AⅠ区本坊地区の遺物 3 (過去報告) (報告番号 811～818)
- 写真図版 2-64 1 平坦部AⅠ区本坊地区の遺物 4 (過去報告) (報告番号 819)
2 平坦部AⅠ区本坊地区の遺物 5 (過去報告) (報告番号 820、821、823)
- 写真図版 2-65 1・2 平坦部AⅡ区本堂地区の遺物 1 (過去報告) (報告番号 824～828)
- 写真図版 2-66 1 平坦部AⅡ区本堂地区の遺物 2 (過去報告) (報告番号 829～835)
2 平坦部AⅡ区本堂地区の遺物 3 (過去報告) (報告番号 836)
- 写真図版 2-67 1 平坦部AⅡ区本堂地区の遺物 4 (過去報告) (報告番号 837～839)
2 平坦部AⅢ区庭園地区の遺物 (過去報告) (報告番号 840～842)
- 写真図版 2-68 1・2 平坦部A表採・出土 近世遺物 1 (報告番号 843～847)
- 写真図版 2-69 1・2 平坦部A表採・出土 近世遺物 2 (報告番号 848～862)
- 写真図版 2-70 1・2 平坦部A表採・出土 近世遺物 3 (報告番号 863～878、543、544)

第3章 平坦部A（如意頭院跡）の調査

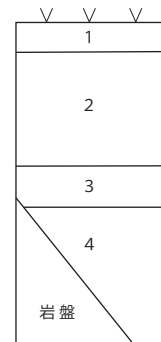
第2節 遺構と遺物

3 Ⅲ区庭園地区

(1) 基本土層

Ⅲ区庭園地区の基本土層は図2-1のように示すことができる。

1層は表土であり、その下層には分級の悪い砂礫層（2層）がみられ、調査区南西部で厚く堆積する。調査区の南方、すぐ脇には谷川が流れており、これのオーバーフローに由来すると考えられる。この層には近世陶磁が含まれており、中世等妙寺廃絶後、幾度かに渡って土石流に見舞われていたことが看取される。3層は自然堆積層と考えられる褐灰色を呈した礫混じり砂質土で、4層上面に安定的に堆積している。調査区東側で顕著にみられる。4層はにぶい黄褐色礫混じり砂質シルトによる造成土であり、池SG01や土手状遺構などは4層上面に形成されている。調査区南西部では基盤である岩盤が露出しており、滝SX02前面の石積みなど岩盤直上に造られているものもある。発掘調査の結果、検出遺構の大部分は等妙寺開山以降の所産であることが判明した。一方で、池SG01周辺の造成土などから採取した炭化材の放射性炭素年代測定では、平安時代中期～鎌倉時代頃の年代が複数得られており、造成の初期段階は開山以前に遡る可能性もある。



1層：砂礫層。表土。
2層：洪水堆積による砂礫層。
3層：褐灰色礫混じり砂質土。自然堆積層。
4層：にぶい黄褐色礫混じり砂質シルト。造成土。

図2-1 基本土層模式図
(縮尺任意)

(2) SB05基壇と前庭部

SB05基壇 (図2-9、2-10)

Ⅱ区本堂地区に接する調査区北部において、西面を除く三方に石積みを廻らした基壇が確認された。基壇の規模は最大5m×6mを測るが、1辺の長さは4～6mとばらつきがある。本書で後述するように、平坦部Aでは建物や諸施設の軸をかなり意識した配置がなされているなかで、SB05基壇の平面形はやや不整形な形状を呈している。しかし、基壇西面を見てみると地形の変換点となっており、岩盤が露出する斜面が迫っていることから、地形的な制約によるのであろう。

北・東・南の三方に廻らされた基壇の石積みは石材を2ないし3段低く積み上げるもので、基底部からの高さは30～40cmを測る。石質は変成岩（ホルンフェルス）である。横長の石の平らな面を表側に向け、横位に据える積み方と、比較的大きい石を立てて用いるいわゆる鏡積みの大きく2種類が認められた。基壇東面の中央部は小振りな石や横長の石を低く1段のみ配していることから、入口を形成しているものと考えられる。石を立てるという意匠は、SB05正面にあたる東面の両端部や基壇の隅部に集中することから、見え方を意識していることが窺える。石積みの基底は基本的に岩盤であるが、高さが不足する部分は造成している。なお、石積みの積み直しなど基壇の改修の痕跡は見受けられなかった。

基壇に伴うSB05は礎石の残存状態が悪いため判然としないが、基壇の状況からして最大梁間方向3m×桁行方向4m程度の規模が想定できよう。平坦部A内では一切瓦が出土しないため、瓦葺とは考えにくく、柿葺きもしくは茅葺である。また、基壇前庭部の塀SA02や平坦部東端で検出された塀SA01との位置関係から、塀によって遮蔽された空間であったと推定される。



図2-2 平坦部Aの調査地区設定

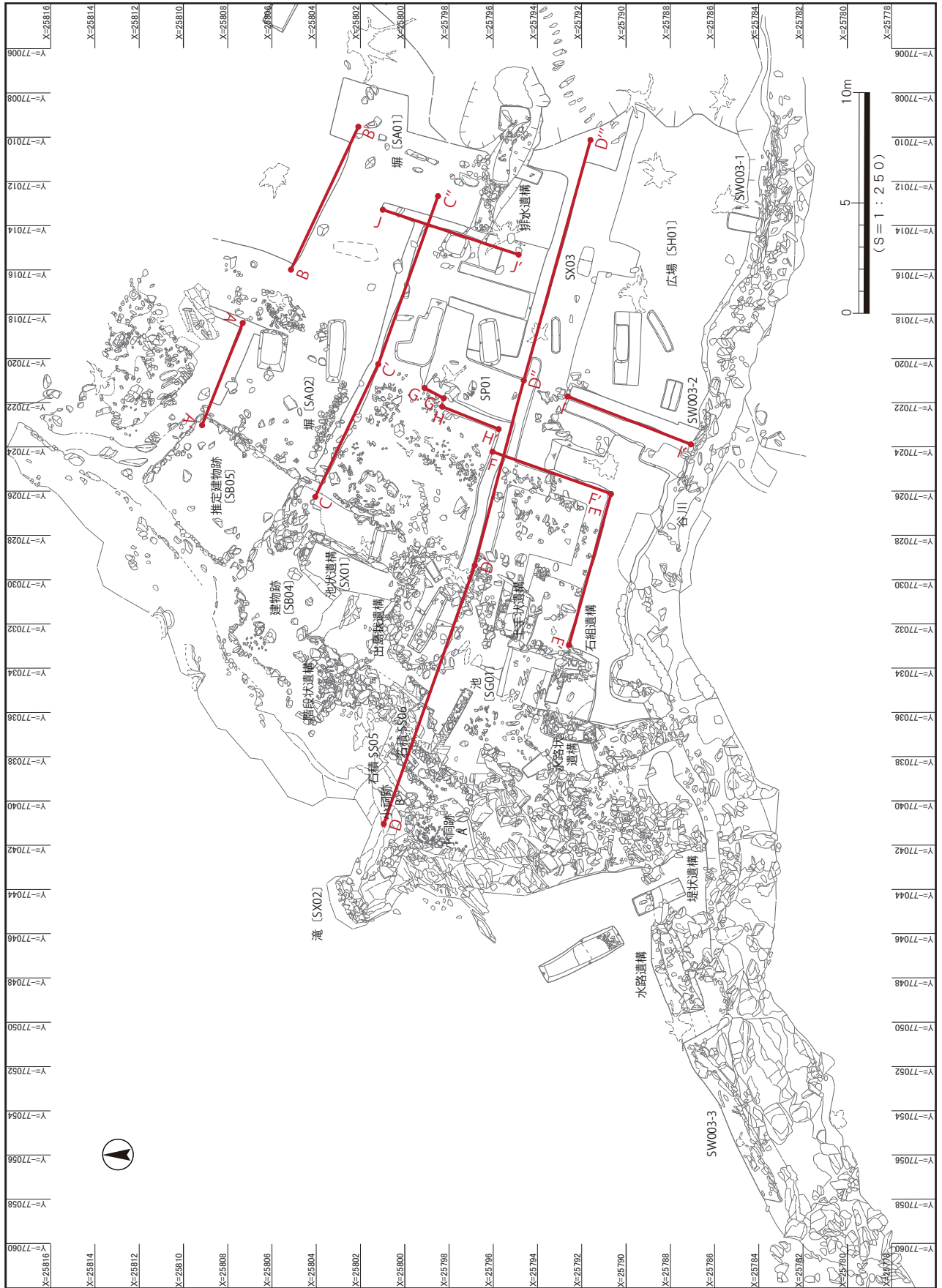


図 2-3 調査区土層図位置

第2節 遺構と遺物

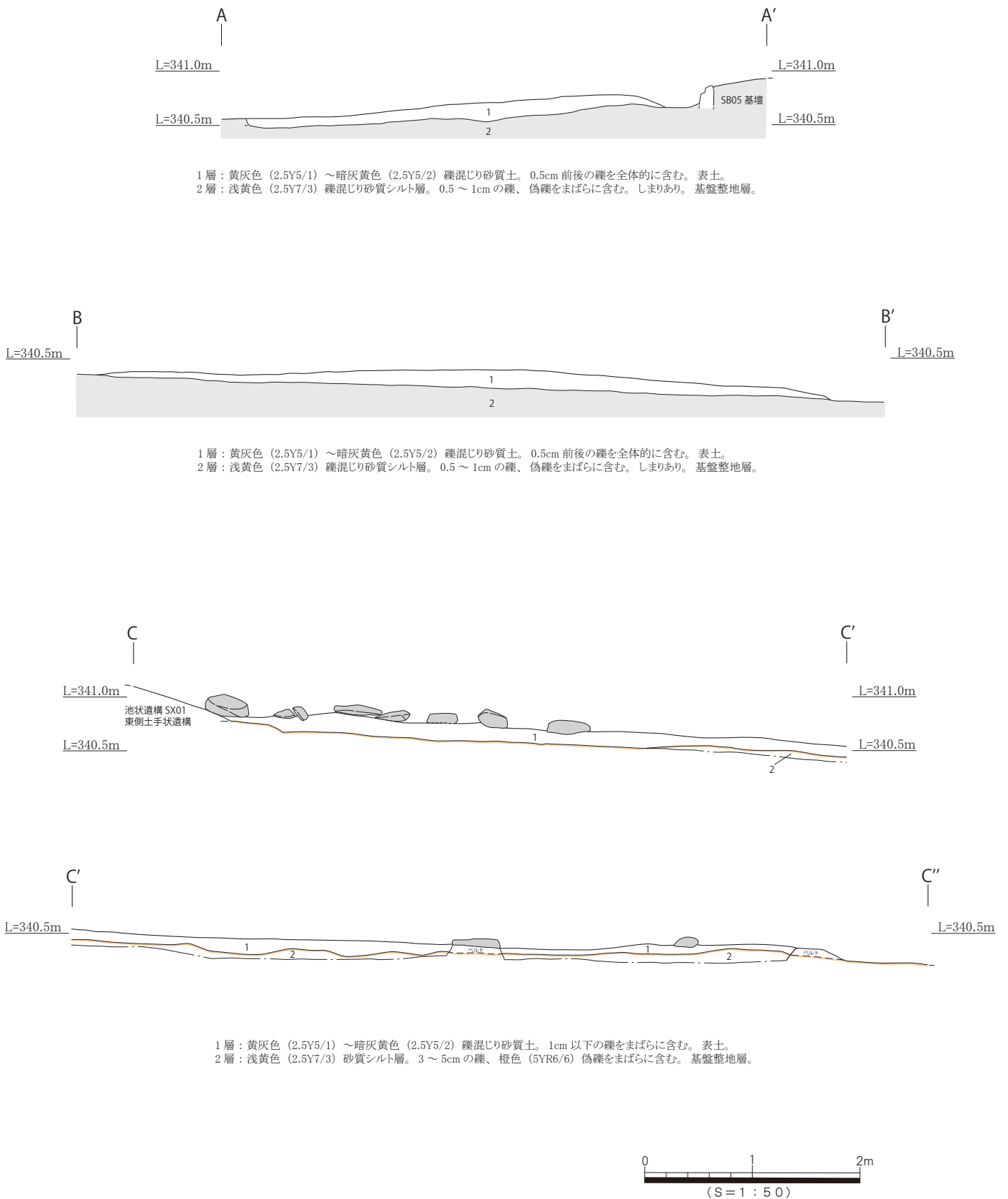
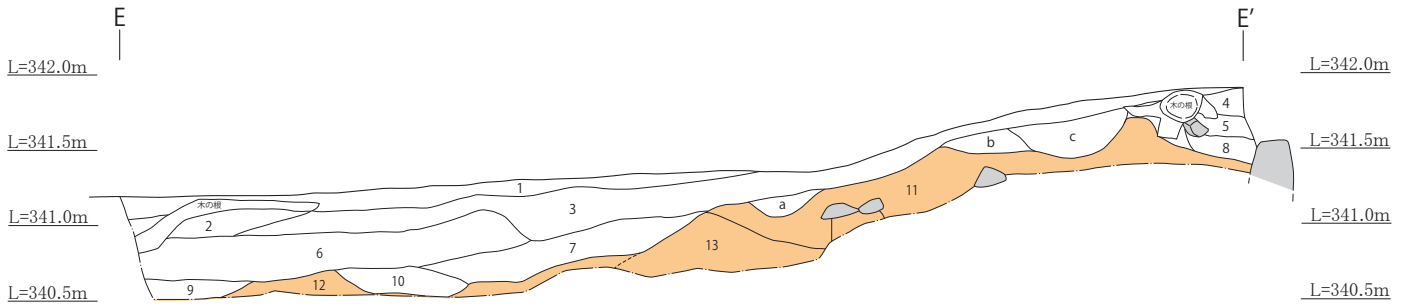
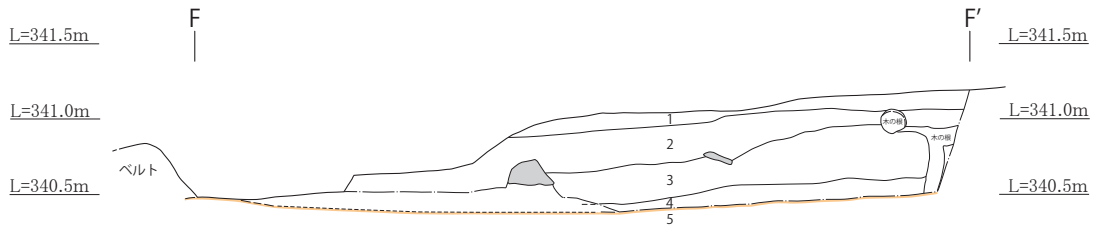
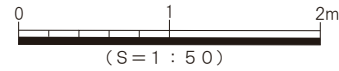


図 2-4 調査区土層 1

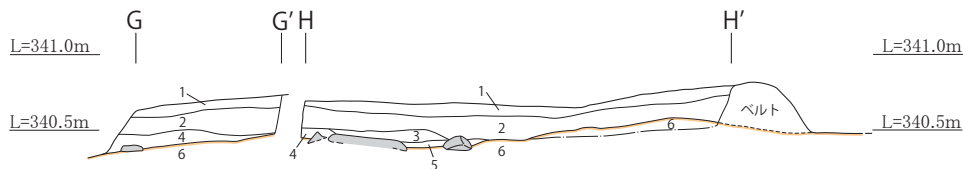
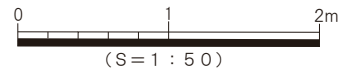
第2節 遺構と遺物



- 1層：褐灰色 (7.5YR4/1) 砂礫層。1cm以下の礫主体。細粒砂混じる。
- 2層：褐灰色 (10YR4/1) 砂礫層。1cm以下の礫主体。3cm前後の礫と続く。洪水堆積層。
- 3層：褐灰色 (5YR4/1) 砂礫層。1cm以下の礫主体。5cm以下の礫をまばらに含む。洪水堆積層。
- 4層：褐灰色 (5YR4/1) 砂礫層。洪水堆積層。
- 5層：褐灰色 (10YR4/1) 砂質粘性土。
- 6層：灰褐色 (7.5YR4/2) 砂礫層。0.5～1cmの礫主体。5cm前後の礫含む。鉄分の沈着あり。洪水堆積層。
- 7層：褐灰色 (5YR4/1) 礫混じり砂質土。0.5～1cmの礫を全体的に含む。5～10cmの礫をまばらに含む。
- 8層：黒褐色 (7.5YR3/1) 礫混じり砂質土。0.5～1cmの礫をまばらに含む。
- 9層：褐灰 (10YR4/1) 砂礫土。
- 10層：黒褐色 (10YR3/1) 炭混じり砂質粘性土。
- 11層：にぶい黄褐色 (10YR5/3) 礫混じり砂質シルト。1cm以下の礫を全体的に含む。しまり強い。
- 12層：にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質シルト。しまり強い。
- 13層：にぶい黄褐色 (10YR4/3) 礫質シルト。5～10cmの礫を多く含む。しまり強い。
- a層：黒褐色 (7.5YR3/1) 砂礫層。0.5cmの礫主体。水流の痕跡か。
- b層：灰黄褐色 (10YR4/2) 砂礫層。1cmの礫を全体的に含む。水流の痕跡か。
- c層：黒褐色 (7.5YR3/1) 砂礫層。1cmの礫主体。水流の痕跡か。



- 1層：灰黄褐色 (10YR5/2) 砂礫層。1～2cmの丸礫主体。しまりなし。
- 2層：灰黄褐色 (10YR4/2) 砂礫層。1～3cmの礫主体。洪水堆積層。
- 3層：にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂礫層。1～3cmの礫主体。洪水堆積層。
- 4層：褐灰色 (10YR4/1) 砂礫土。1cm以下の礫を多く含む。
- 5層：にぶい黄褐色 (10YR5/3) 礫混じり砂質シルト。2cm以下の礫をまばらに含む。



- 1層：灰黄褐色 (10YR5/2) 砂礫層。1cm前後の礫主体。5cm以下の礫をまばらに含む。
- 2層：にぶい黄褐色 (10YR5/3) 礫混じり砂質土。極細粒砂主体。3cm以下の礫をまばらに含む。
- 3層：褐灰色 (10YR5/1) 礫混じり砂質土。粗粒砂～極粗粒砂主体。1～3cmの礫をまばらに含む。炭化物をわずかに含む。
- 4層：にぶい黄褐色 (10YR6/3) 砂質土。3～5cmの礫をまばらに含む。
- 5層：褐灰色 (10YR4/1) ～黒褐色 (10YR3/1) 砂質土。炭化物片を含む。
- 6層：にぶい黄褐色 (10YR5/3) 礫混じり砂質シルト。1～2cmの礫をまばらに含む。しまり強い。基盤整地層。

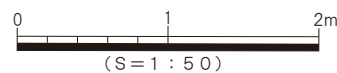


図2-6 調査区土層3

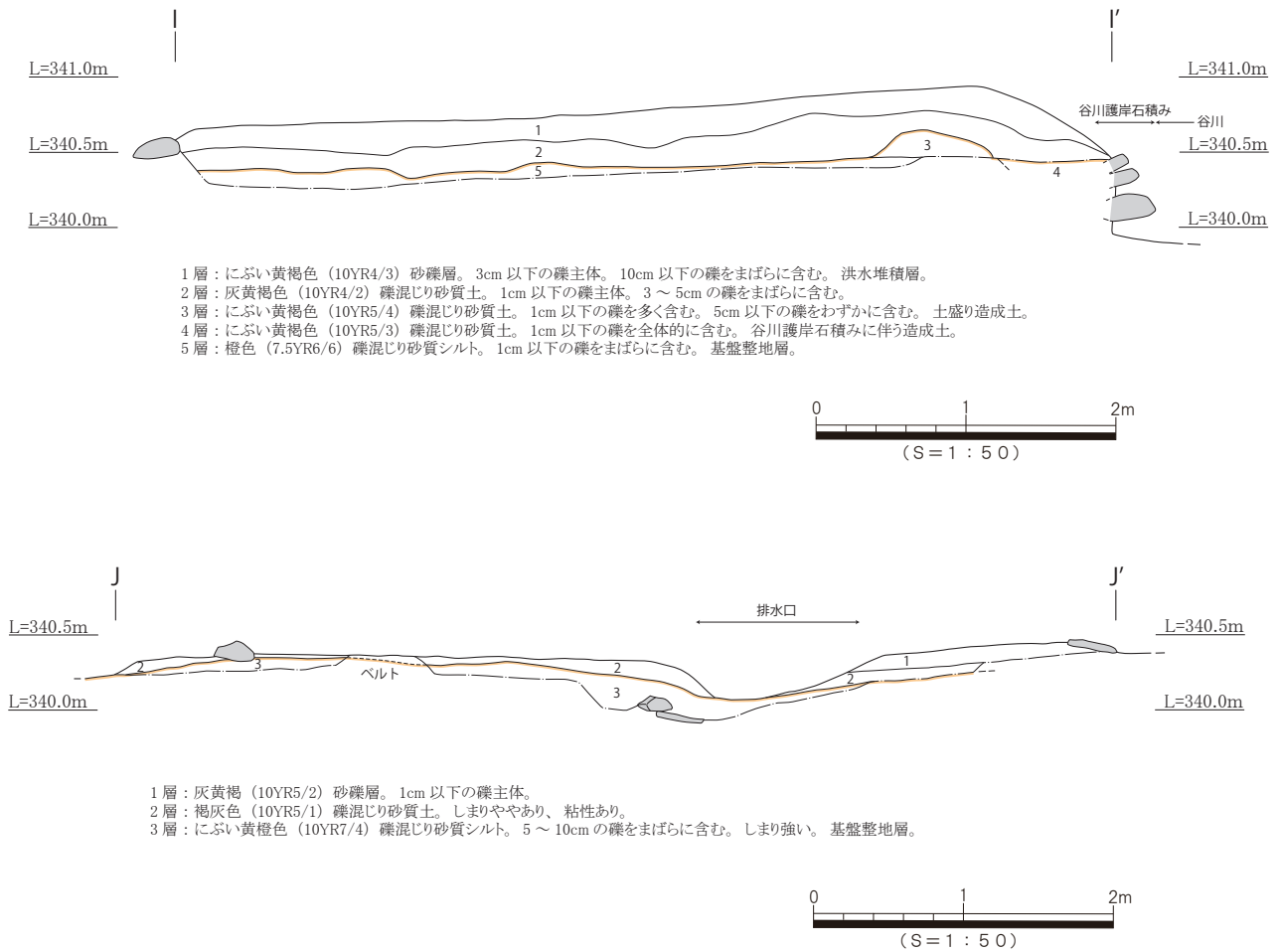


図2-7 調査区土層4

塀SA02（図2-11）

SB05基壇の前庭部において、土塀基礎と想定される石列が検出された。径20～30cm程度の自然石を用いており、長さ3.7m、幅0.4～0.6mを測る。主軸はN64°Wを向いており、II区本堂地区で検出された旧本堂跡SB01の軸線とほぼ一致することから、等妙寺開山段階（I期）の所産と判断している。

SB05基壇前庭部出土遺物（図2-13）

SB05基壇前庭部では土師質土器が出土した。545は皿で、底部から内湾気味に立ち上がる形状を呈する。全体的に器壁が厚く、胎土にもやや砂粒が認められる。546は底部から大きく開く、低平な皿である。外面には弱い回転ナデ痕が看取される。547は底部片で、546と同様なタイプと想定される。ただし、低平な皿は、現状当遺跡ではあまり認められない。損傷が著しく、内外面の表面が剥離している。548は杯もしくは皿の底部片である。549は薄手のつくりの杯と考えられ、径の小さい底部から上方へと立ち上がり、体部中位に屈曲点をもつ。550は底径4cm程度と小さく、極小サイズの皿と考えられる。底部内面の表面には、化粧がけの痕跡と思われる薄い膜が認められ、摩滅によりひび割れている。底部切り離しは545、547は不明であるが、そのほかは回転糸切りである。

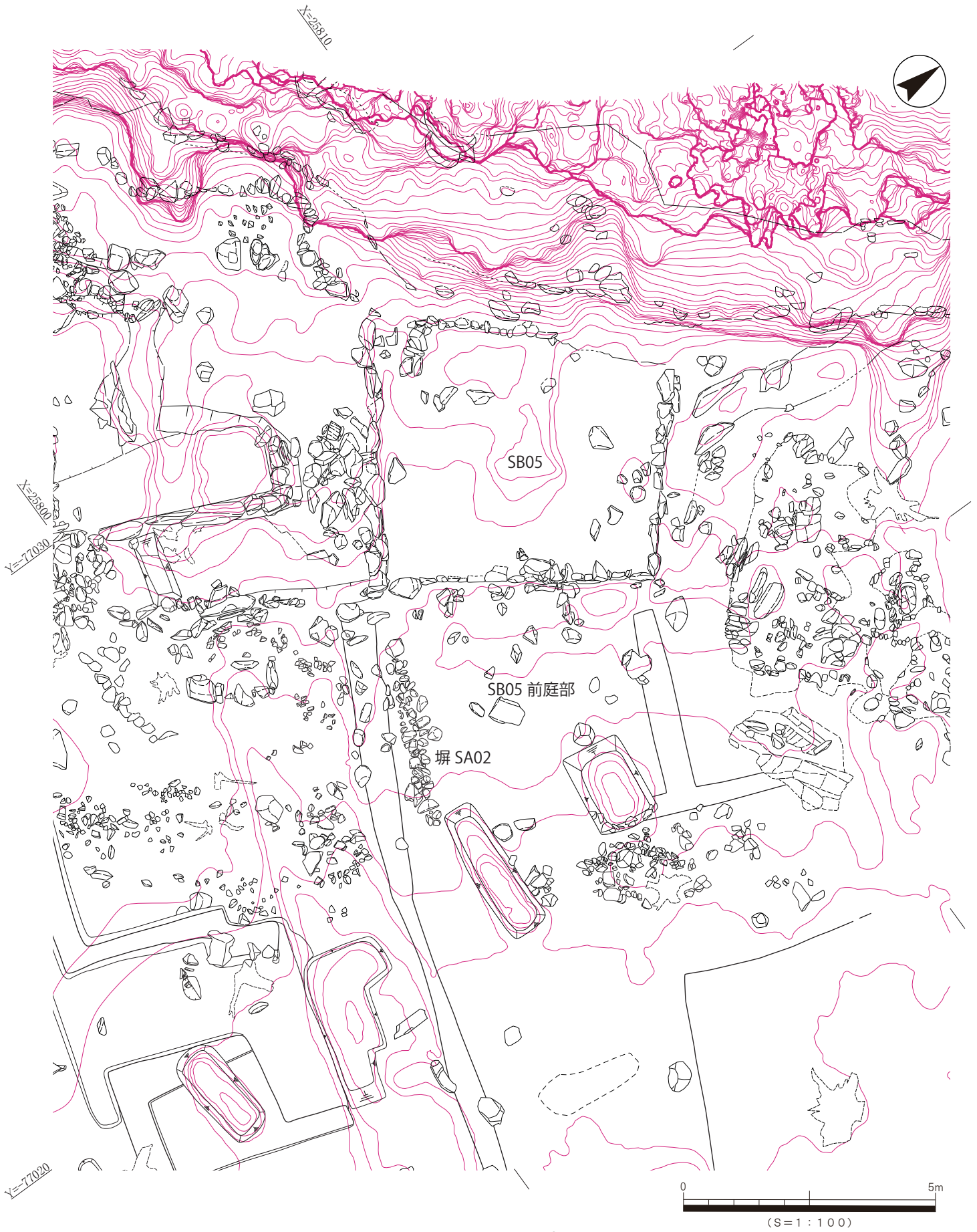


図 2-8 SB05と前庭部



図 2-9 SB05 平・断面図（北・東面）

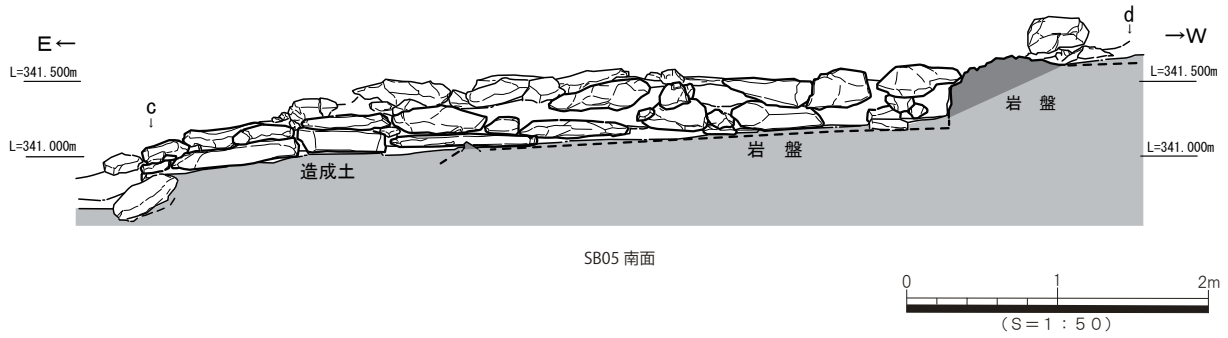


図 2-10 SB05 断面図 (南面)

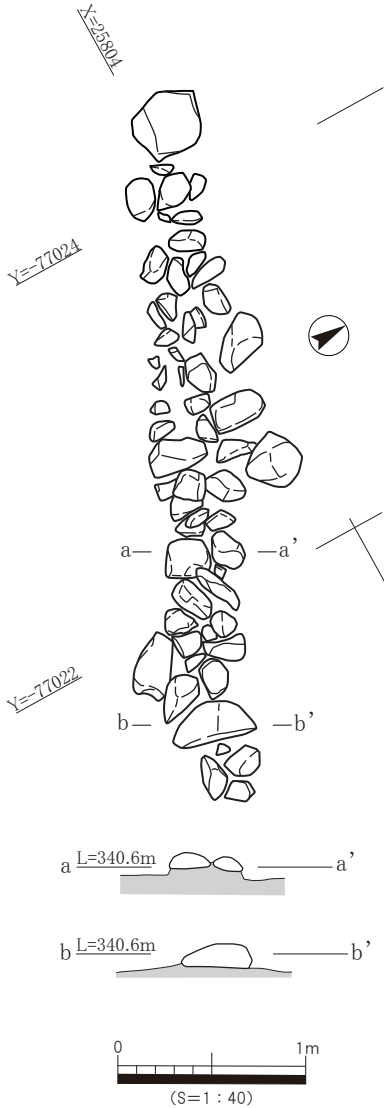


図 2-11 塀 SA02 平・断面図

(3) 池SG01と周辺の遺構

SB04 (図 2-14)

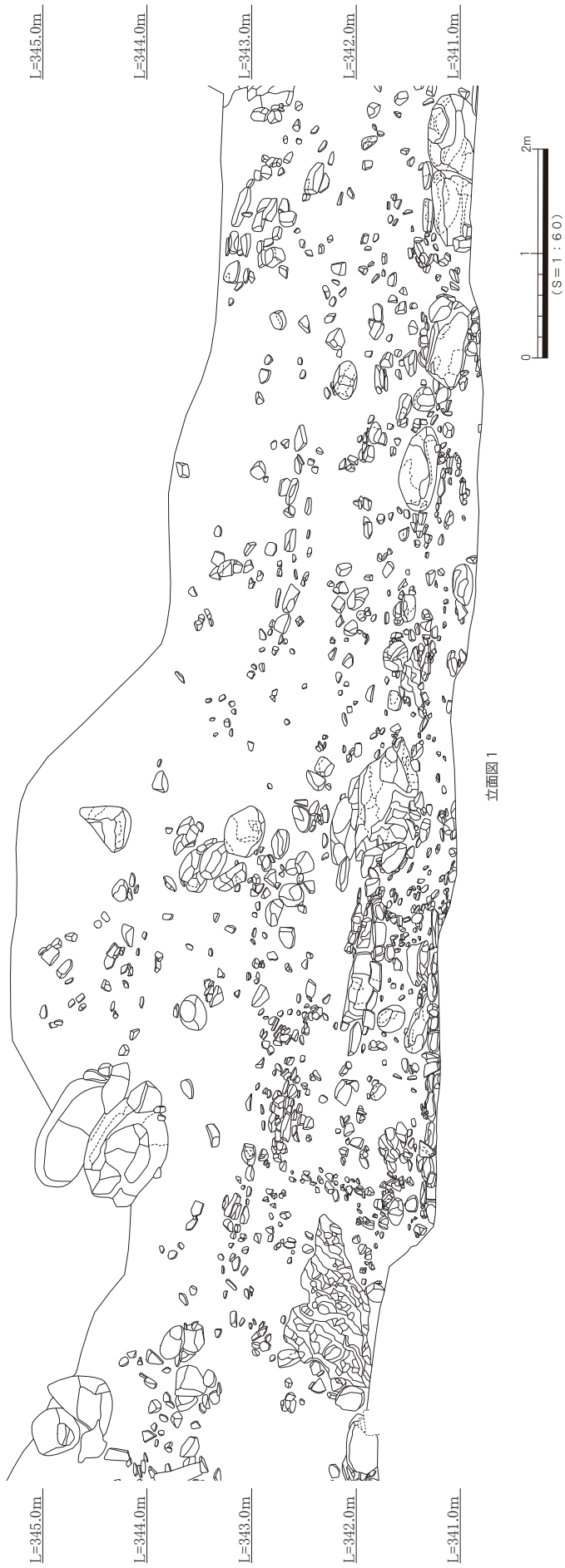
SB05 基壇の西南部で、礎石建物跡 SB04 を検出した。残存する礎石の配列から一辺 2.8 m 程度の 1 間四方の建物で、西面を除く三方に縁が廻る構造が想定される。SB04 東面南部のみ礎石が検出されていない。池状遺構 SX01 西面を兼ねる SB04 東面は、岩盤が露出しているため、岩盤に直接柱を据えていた可能性もあろう。また、SB04 西側には SB04 に添うように石列が認められ、この間を通路としていたと考えられる。SB04 に伴う遺物は出土していないが、建物軸は N 55° W で、II 区本堂地区で検出された新本堂跡 SB02 の軸線とほぼ一致することから、新本堂建立以後 (II 期) の所産と判断している。

池状遺構 SX01 (図 2-14)

SB04 の東面に接して、池状遺構 SX01 が検出された。長軸約 3.6 m、短軸約 1.8 m を測り、平面形はコの字状を呈する。南面から水を取り入れる構造で、池 SG01 と接続している。西面及び池底は岩盤を削り出すことにより形成する一方で、北面及び東面には L 字状に縁石を廻らし、護岸とする。石材はホルンフェルスで、扁平な広い面をもつものを立てて用いている (図 2-15)。

池状遺構 SX01 と池 SG01 接続部付近の底面堆積土 (土 A / 分析 No. 1) と池状遺構内部の底面堆積土 (土 B / 分析 No. 2) の珪藻化石分析を実施した。その結果、前者の方が安定して水が供給されていたと考えられ、後者は前者に比して乾燥化が進んでいた可能性が高いことが判明した (第 4 章第 4 節参照)。

さらに池状遺構 SX01 の東面立石に並行して、土手状の高まりが確認された。これを東西方向に割る形で 1 トレンチを設定したところ、基底となる岩盤が東方向にかけて段差を成して傾斜、その上に人為的に土を盛り、立石の裏を補強している状況が認められた (図 2-17)。土手状遺構は池状遺構



立面図1

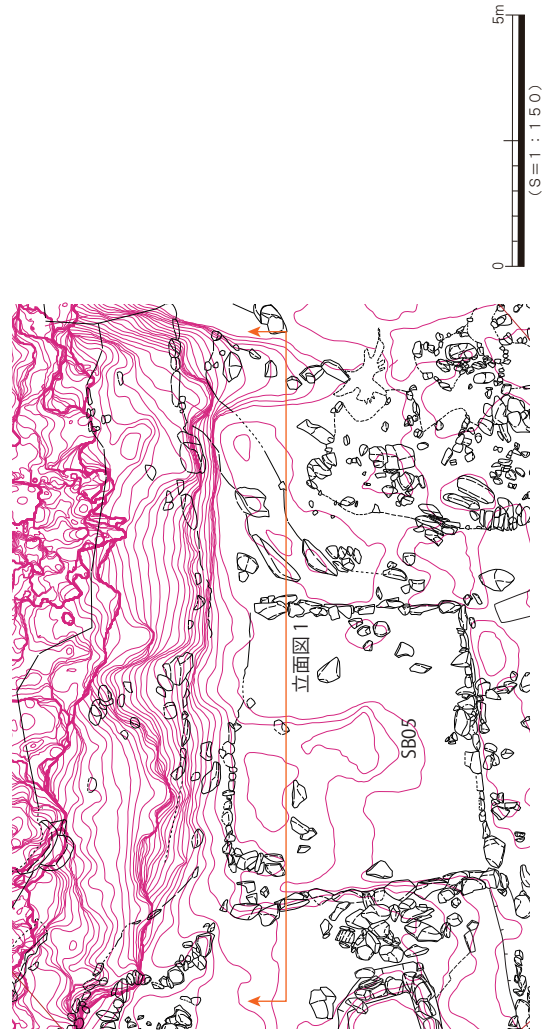


図2-12 SB05基壇西面立面図

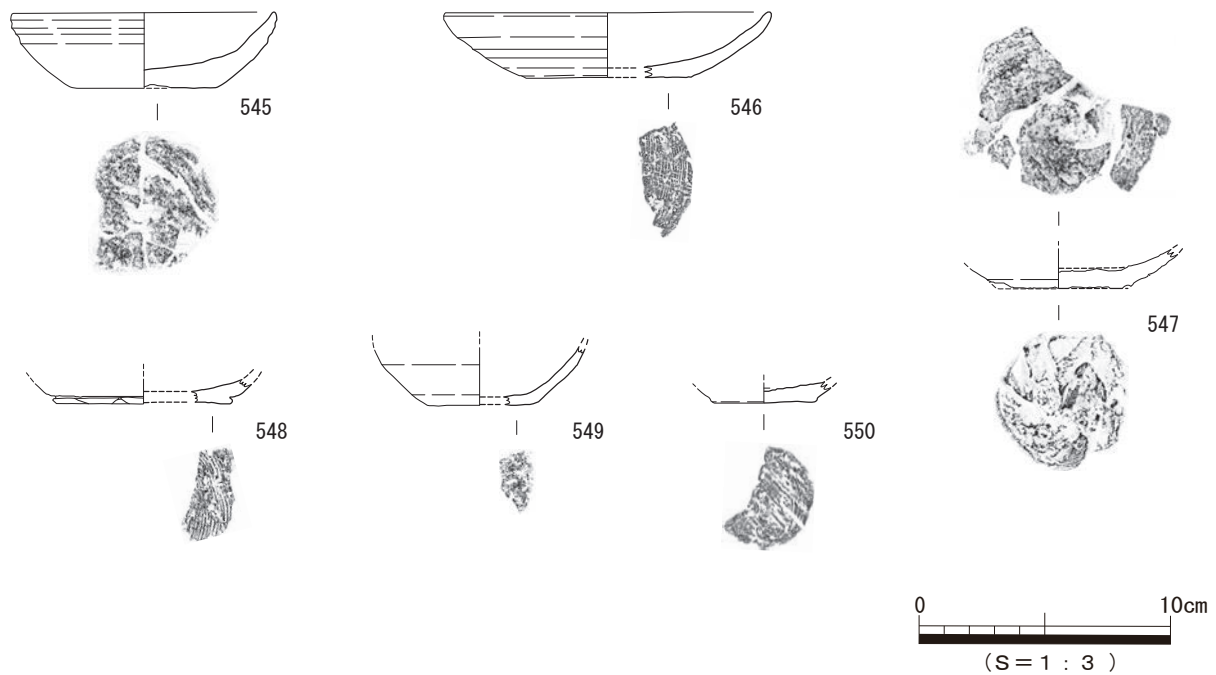


図 2-13 SB05基壇 東側前庭部出土遺物

SX01 と同時期に形成されたものと判断できよう。池状遺構 SX01 の長軸は N 27° E で、旧本堂跡 SB01 の軸線とほぼ一致することから、等妙寺開山段階（I 期）の所産と考えられる。

階段状遺構（図 2-18）

SB04 南側で確認された。さらにその南側には露出岩盤が張り出しているが、これに沿うように大きく長い石が直線的に配されており、階段状遺構を限る意識が窺える。階段状遺構の中央部には大小の石を配した、横幅約 1.2 m の階段が 3 段認められた。周囲の造成と一連で形成されたものと考えられる。階段状遺構は、SB04 礎石が据えられた面から、比高差約 60cm ある池 SG01 内部へのアプローチを意図して造られたことは明らかで、閼伽水の汲み取りなどで利用されたと想定される。

池 SG01（図 2-19）

調査区南西部に位置する、Ⅲ区庭園地区を代表する遺構の一つである。南北約 8 m、東西約 6 m を測る。池 SG01 の西側では石積み SS06 が、東側では土手状遺構が護岸を成している。北側に形成された出島状遺構やその対岸に露出する岩盤を含め、直線的であり、池 SG01 の平面形は方形を組み合わせたような規格的な形状を呈している。

調査の結果、池 SG01 周辺では遺構の廃絶以後、幾度かに渡って土石流に被られていたことが判明し、洪水堆積による砂礫層は深いところで約 1 m 確認された。加えて調査当初には、出島状遺構の南側、石積み SS06 と土手状遺構に挟まれた池 SG01 内部に幹径 2 m を超える巨大な杉の木の根が存在していたため、遺構の検出に時間を要した。年輪を数えたところ中世期にまで遡るものではなかったが、絶えず水が供給されていたために、著しく成長したらしい。根は広範囲に伸びており、一部遺構への影響も確認された。

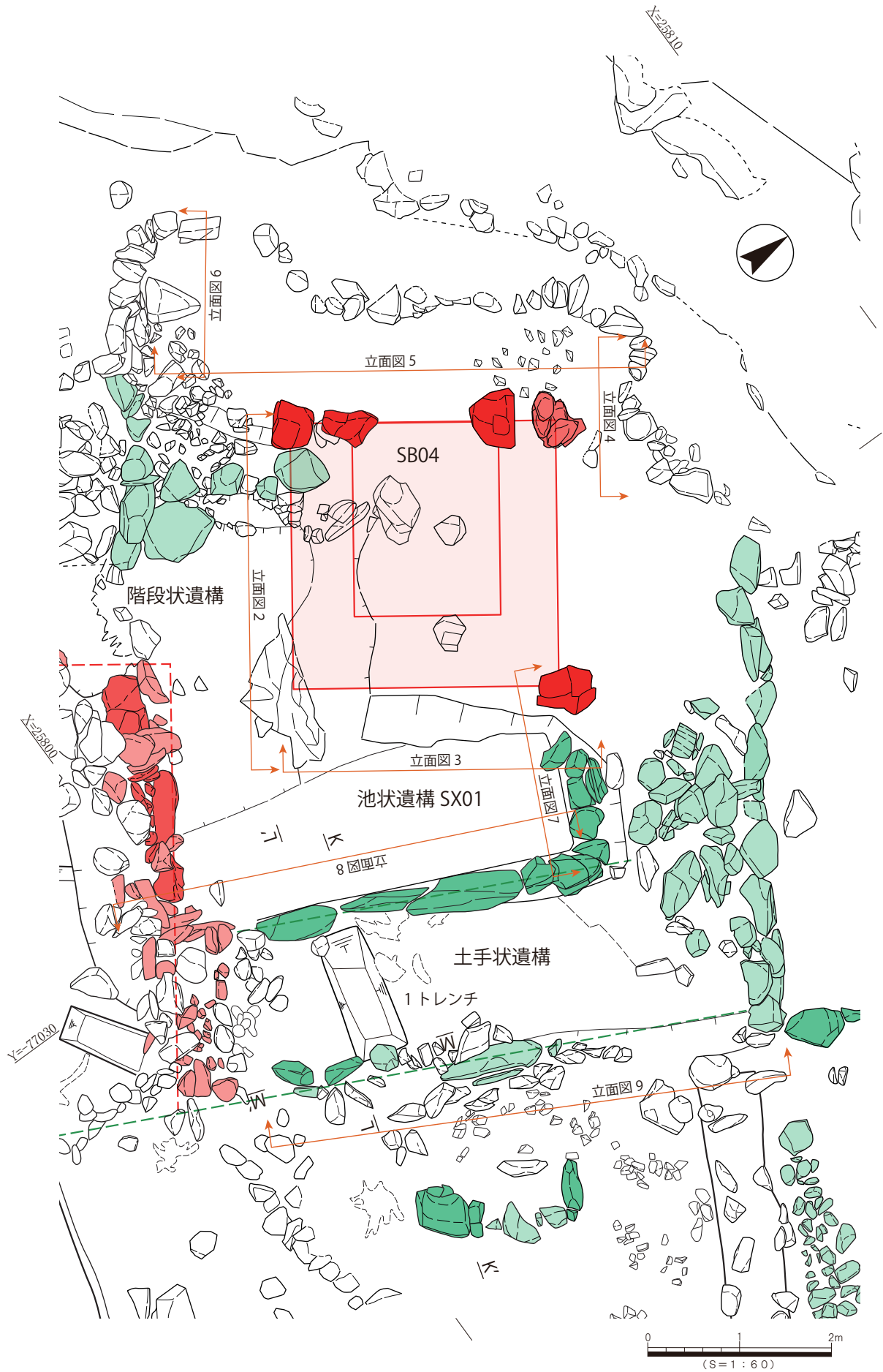
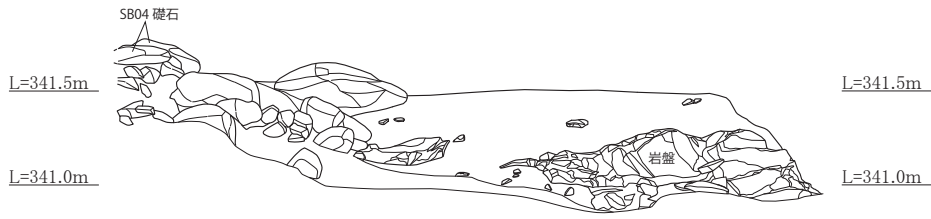
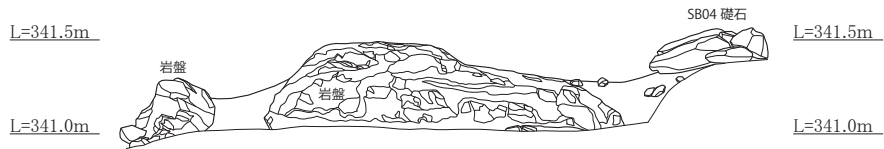


図2-14 SB04・池状遺構SX01・階段状遺構平面図

第2節 遺構と遺物



立面図2 SB04 南面



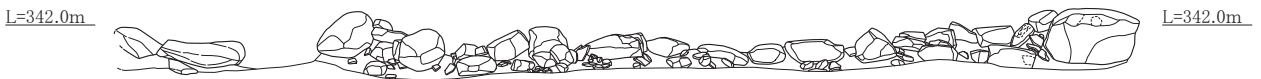
立面図3 SB04 東面及び池状遺構SX01 西面



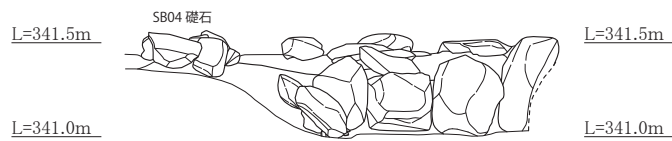
立面図4 SB04 北側石列



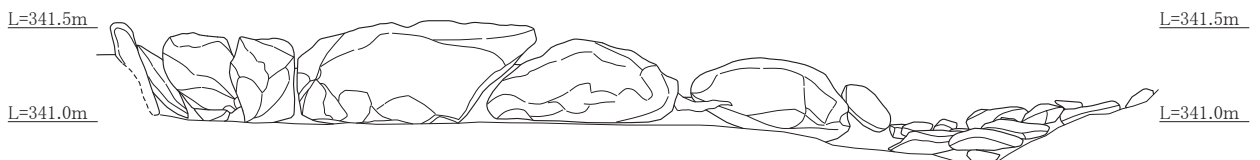
立面図6 SB04 南側石列



立面図5 SB04 西側石列



立面図7 池状遺構SX01 北面



立面図8 池状遺構SX01 東面

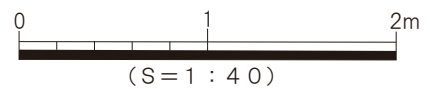


図2-15 SB04・池状遺構SX01 立面図1



立面図9 SB05 基壇東面南側延長

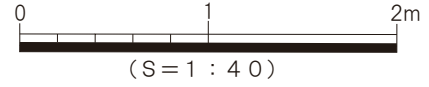
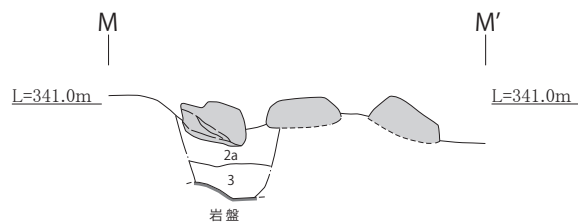
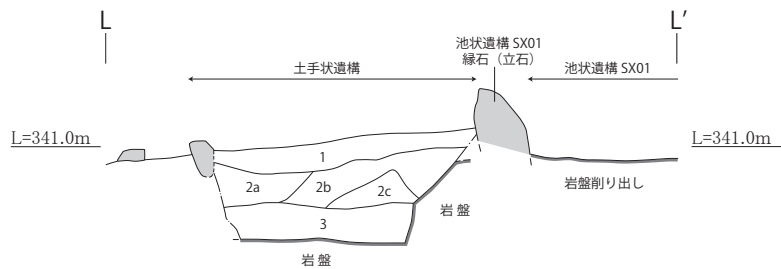
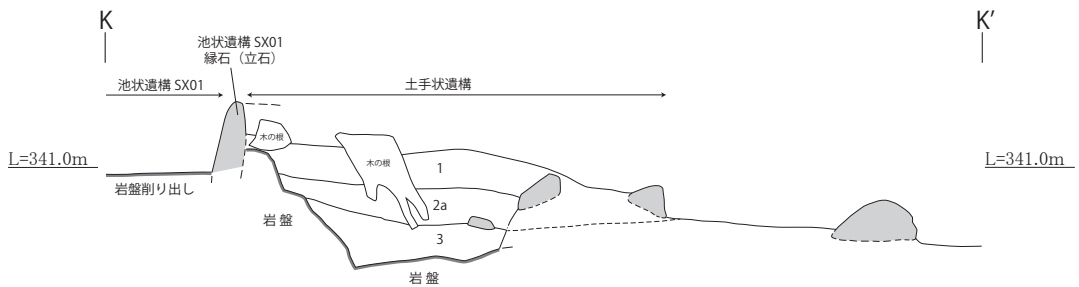


図2-16 SB04・池状遺構SX01立面図2



- 1層：にぶい黄色 (2.5Y6/3) 砂礫層。粗粒砂主体。0.5～1cmの礫を全体的に含む。
- 2a層：浅黄色 (2.5Y7/3) 礫混じり砂質シルト。シルト岩由来の細粒砂～中粒砂を多く含む。3～5cmの礫をまばらに含む。
- 2b層：浅黄色 (2.5Y7/4) わずかに礫混じり砂質シルト。2aよりも礫が少ない。
- 2c層：黄褐色 (2.5Y5/3) 礫混じり砂質シルト。1～3cmの礫を多く含む。
- 3層：にぶい黄色 (2.5Y6/2) 岩碎礫層。風化岩の破碎礫主体。

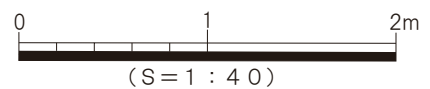
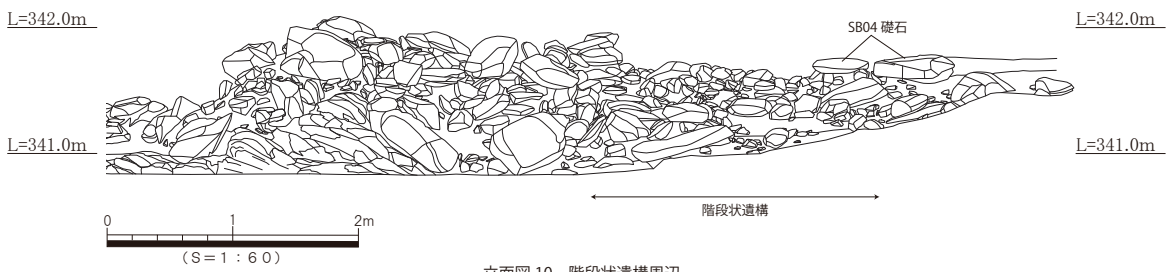
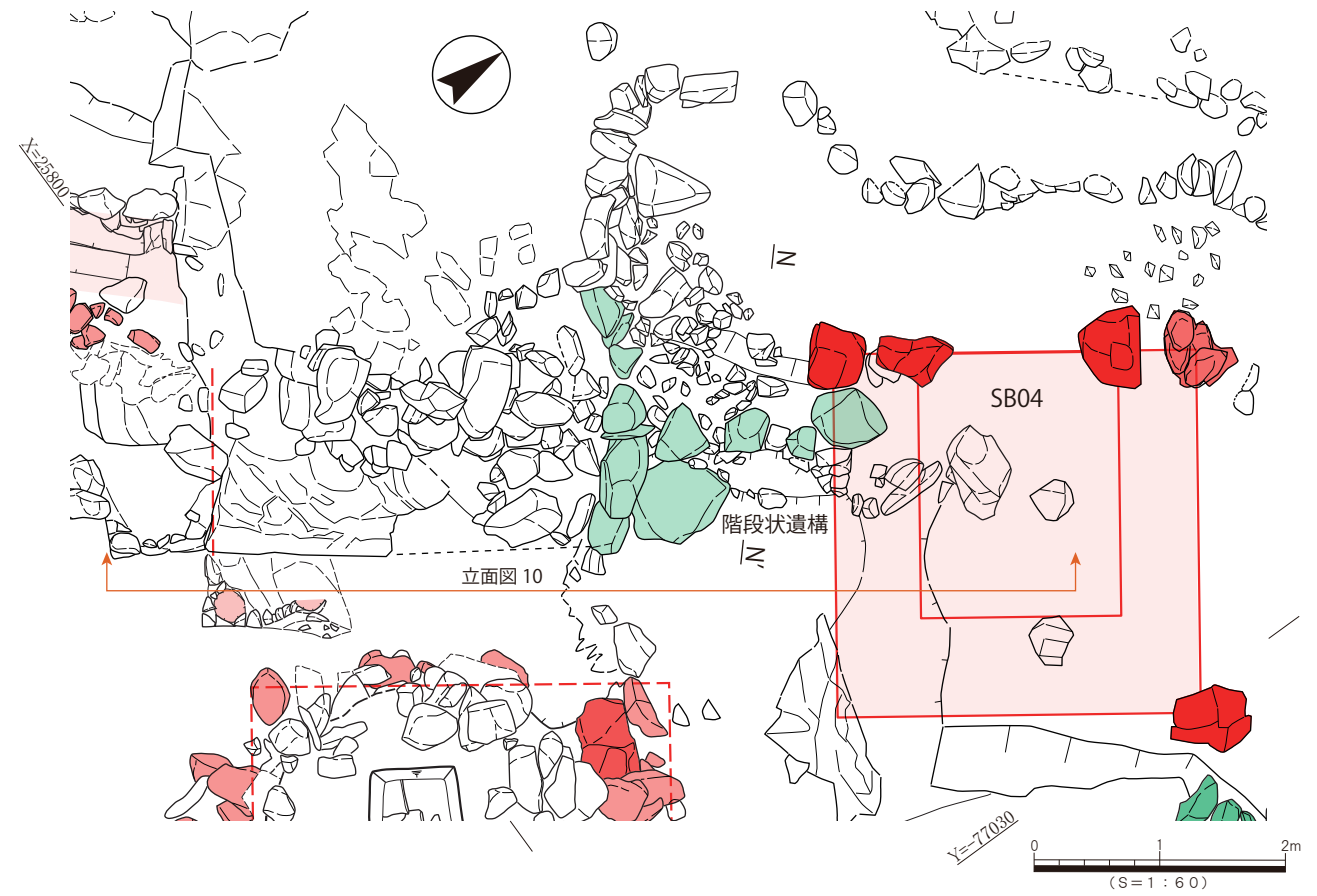


図2-17 1トレンチ断面図



立面图 10 階段状遺構周辺

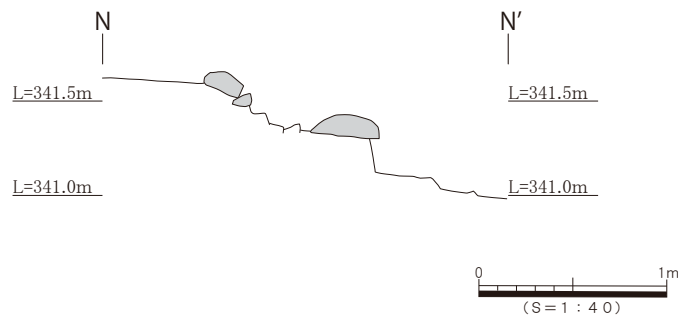
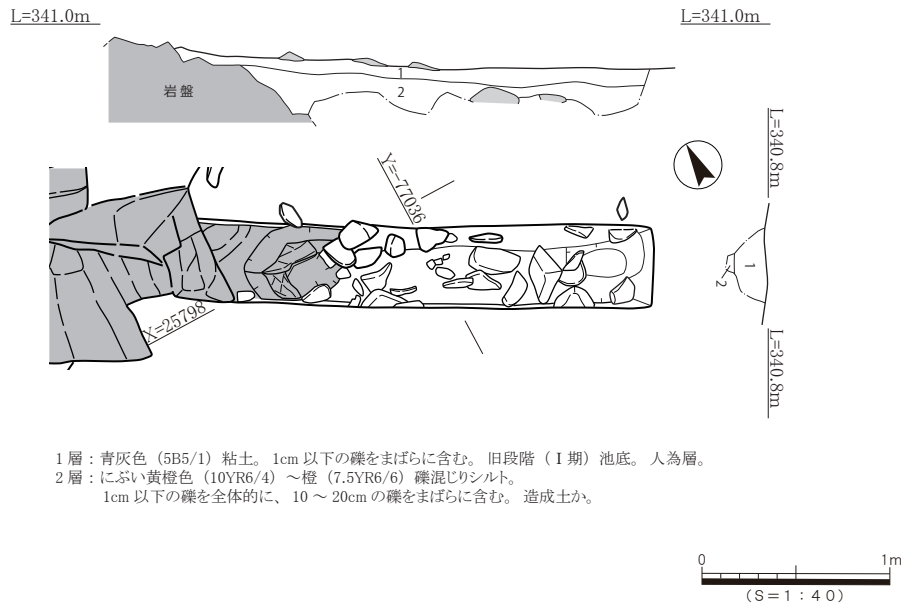


图 2-18 階段状遺構平面・断面・立面图



図 2-19 池 SG01 周辺平面図



1層：青灰色(5B5/1)粘土。1cm以下の礫をまばらに含む。旧段階（Ⅰ期）池底。人為層。
2層：にぶい黄橙色(10YR6/4)～橙(7.5YR6/6)礫混じりシルト。
1cm以下の礫を全体的に、10～20cmの礫をまばらに含む。造成土か。

図 2-20 2 トレンチ平・断面図

池SG01への導水は4箇所確認している。滝SX02、土手状遺構南側の石組遺構のほか、SW003-3から谷川の水を引き入れていることが判明した。ただし現在は、造成以前の旧地形に由来すると考えられる池SG01西側からの湧水にほぼ限られている。

池SG01底面の状況を確認するために、石積みSS06前面の岩盤に直行する形で東西方向に2トレンチを設定した(図2-20)。厚く堆積した砂礫層を除去すると、還元により青灰色を呈した粘土が検出された。部分的に径15～20cm程度の扁平な礫を伴っており、粘土とともに池底に貼ったものと考えられる。その下層、基盤となる岩盤上には礫をまばらに含むシルト層が堆積しており、造成土とみられる。青灰色粘土は土手状遺構の護岸付近では検出されないことから、池中央部のみに施されたようである。後述するように池SG01を構成する周辺遺構の調査の結果、大きく2～3段階の変遷を想定している。

土手状遺構 (図 2-21)

池SG01の東側護岸を成す南北方向に延びる遺構である。池SG01との関係や構造を確認するため、部分的に東西方向に横断するトレンチを設定し、土層断面の観察を行った。その結果、土手状遺構護岸石との関係から池底と考えられる面が2面検出され、2段階の変遷が想定された。旧段階をⅠ期、新段階をⅡ期として報告する。

Ⅰ期の池底はしまりの強い黄褐色の礫混じり砂質シルトによる造成土であり、土手状遺構はこの池底から連続して立ち上がり形成されている(図2-22)。先に述べた2トレンチで検出された青灰色粘土はここでは検出されていないが、池SG01中心部ではこの層の上面に貼られていることになる。Ⅰ期の土手状遺構護岸付近から残存状態の良い土師質土器杯が出土した(図2-23)。検討を要するが14世紀代の所産と想定される。現況で土手状遺構西側南半分で確認される護岸石は、Ⅰ期池底の上層に堆積した礫混じり砂質土(自然堆積層)に対応する形で据えられていることから、Ⅰ期池底との間に時期差が看取された。Ⅱ期の池底は、Ⅰ期池底上層の堆積土検出面と考えられる。

土手状遺構西側北半分は樹根の攪乱が著しいため、護岸石の有無は判然としない。しかしながら、



図 2-21 土手状遺構・出島状遺構周辺平面図

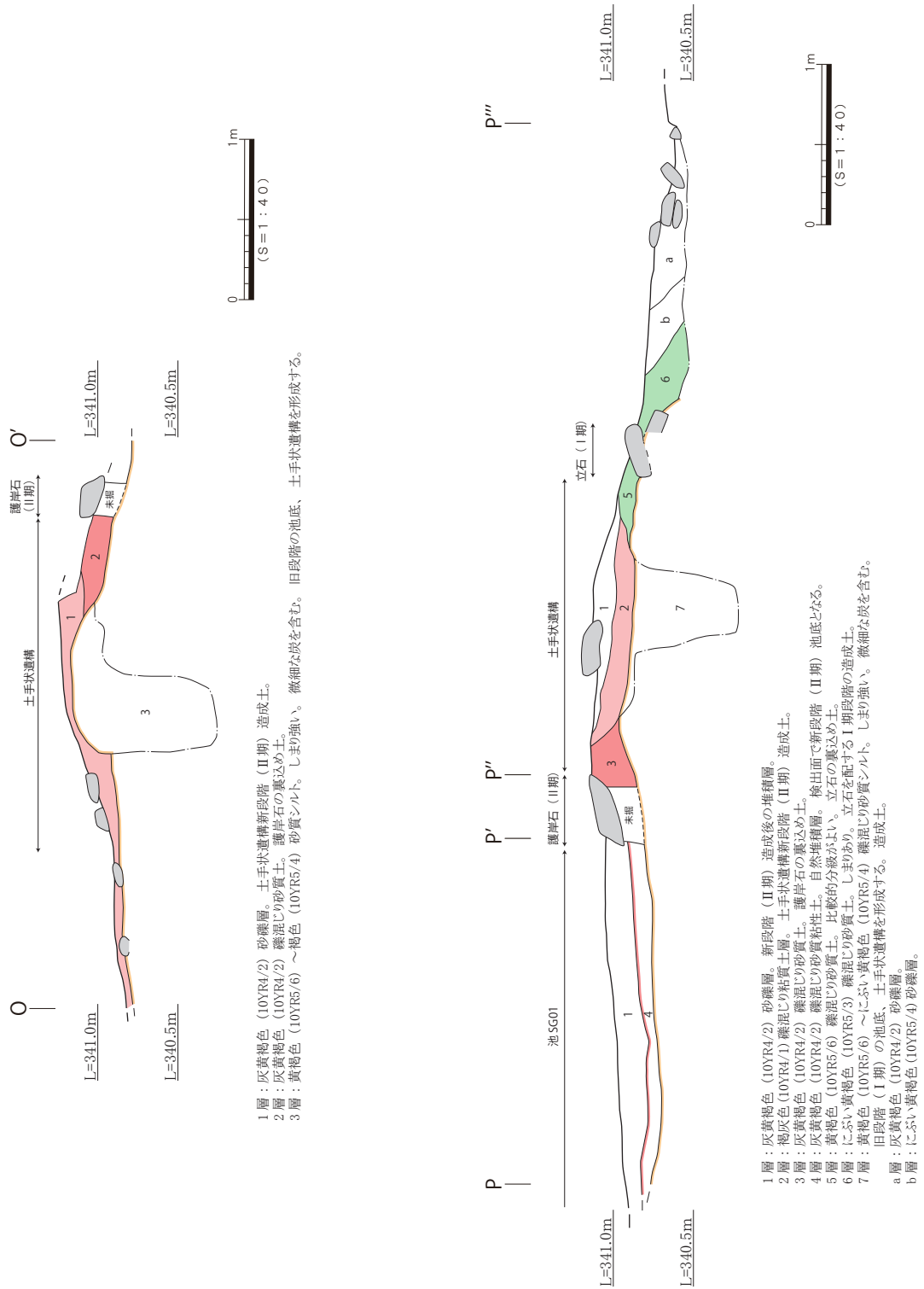
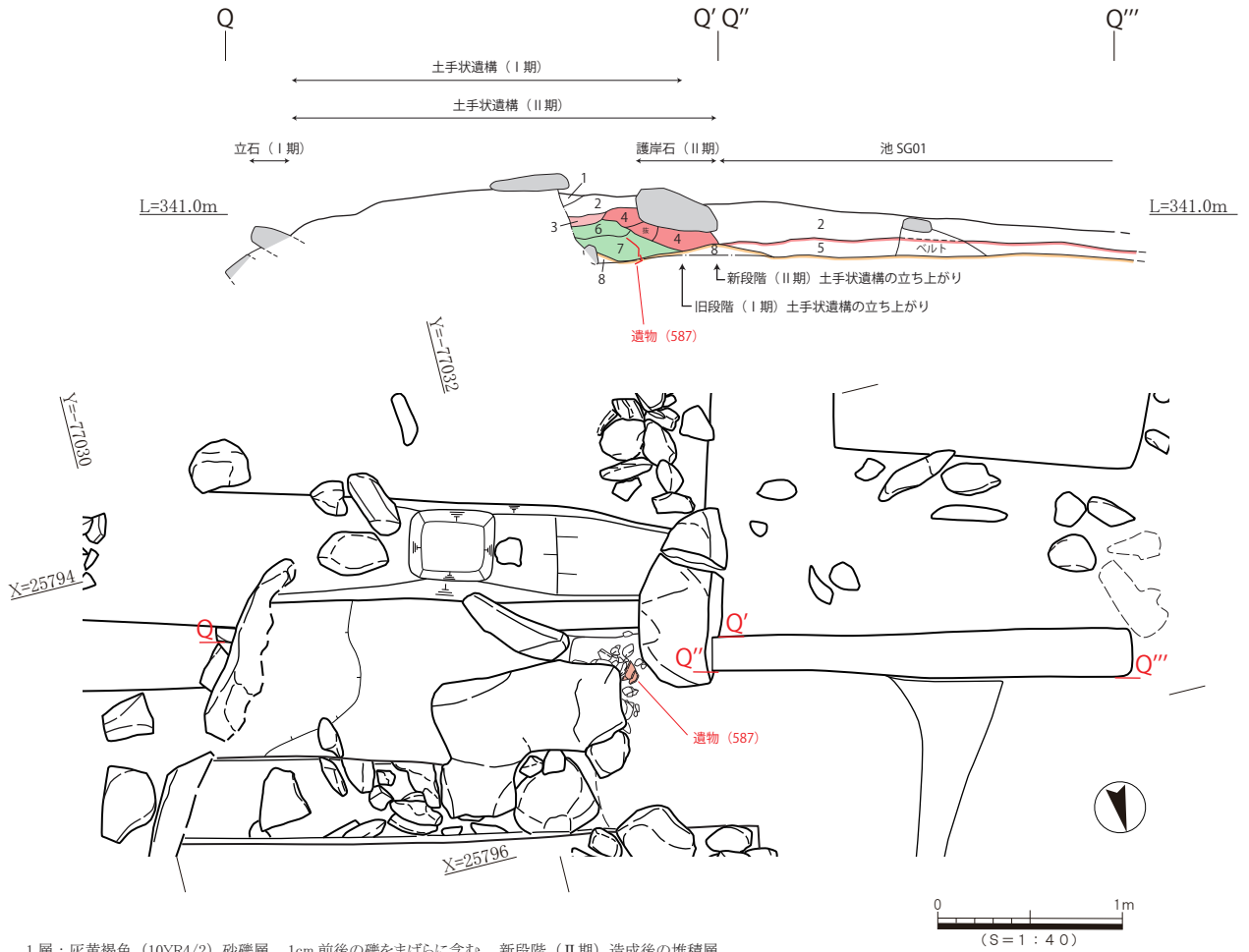
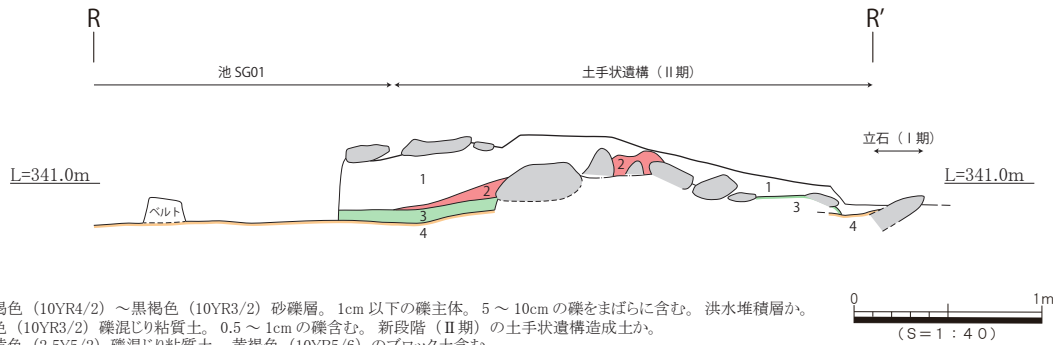


図 2-22 池SG01・土手状遺構断面図 1



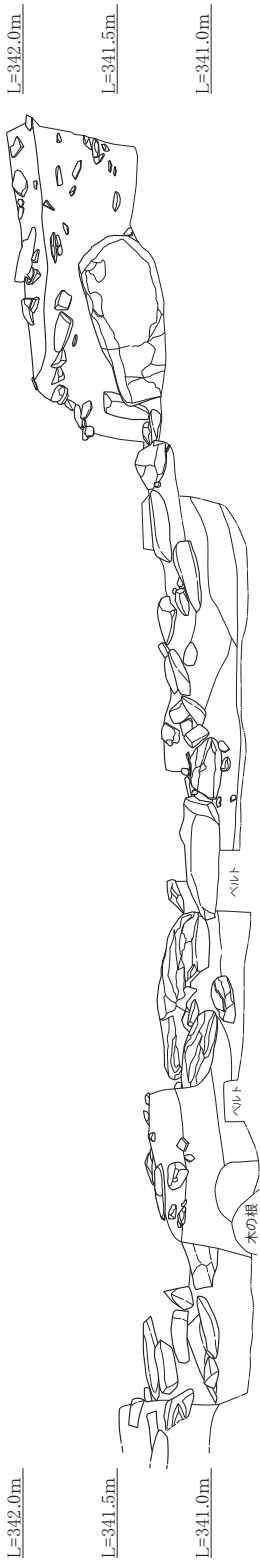
- 1層：灰黄褐色（10YR4/2）砂礫層。1cm 前後の礫をまばらに含む。新段階（II期）造成後の堆積層。
- 2層：灰黄褐色（10YR4/2）砂礫層。0.5cm 前後の礫主体、新段階（II期）造成後の堆積層。
- 3層：黒褐色（7.5YR3/1）礫混じり粘質土。1cm 以下の礫をまばらに含む。土手状遺構新段階（II期）造成土。
- 4層：灰黄褐色（10YR4/2）礫混じり砂質土。護岸石の裏込め土。
- 5層：灰黄褐色（10YR4/2）礫混じり砂質粘性土。自然堆積層。新段階（II期）池底となる。
- 6層：黄褐色（10YR5/6）～にぶい黄褐色（10YR5/4）礫混じり砂質シルト。シルト岩由来の礫を多く含む。土手状遺構旧段階（I期）造成土。
- 7層：灰黄褐色（10YR4/2）～黒褐色（2.5Y3/2）礫混じり砂質粘性土。土手状遺構旧段階（I期）造成土。
- 8層：黄褐色（10YR5/6）～にぶい黄褐色（10YR5/4）礫混じり砂質シルト。微細な炭を含む。旧段階（I期）の池底、土手状遺構を形成する。造成土。

図 2-23 池SG01・土手状遺構平・断面図2

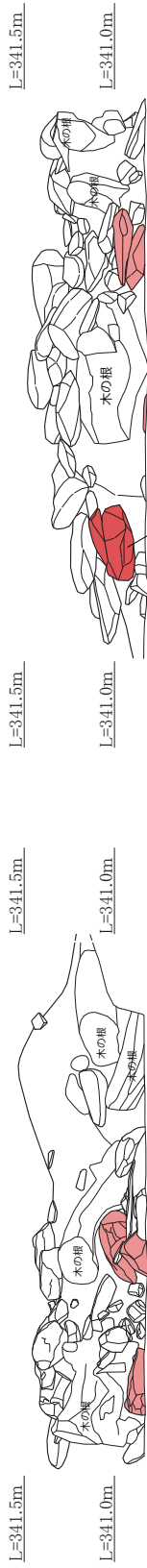


- 1層：灰黄褐色（10YR4/2）～黒褐色（10YR3/2）砂礫層。1cm 以下の礫主体。5～10cm の礫をまばらに含む。洪水堆積層か。
- 2層：黒褐色（10YR3/2）礫混じり粘質土。0.5～1cm の礫含む。新段階（II期）の土手状遺構造成土か。
- 3層：暗灰黄色（2.5Y5/2）礫混じり粘質土。黄褐色（10YR5/6）のブロック土含む。
- 4層：にぶい黄褐色（10YR4/3）～褐色（10YR4/4）礫混じり砂質シルト。5cm 以下の礫をわずかに含む。しりあり。旧段階（I期）の池底、土手状遺構を形成する。造成土。

図 2-24 池SG01・土手状遺構断面図3



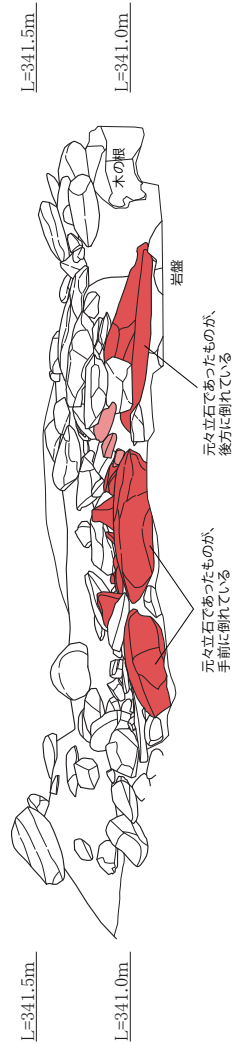
立面図 11 土手状遺構西面



立面図 12 出島状遺構南面



立面図 13 出島状遺構西面



立面図 14 出島状遺構北面

【凡例】
 出島状遺構の緑石
 出島状遺構の緑石のうち、立ち、もしくはその可能性があるもの



図 2-25 土手状遺構・出島状遺構立面図

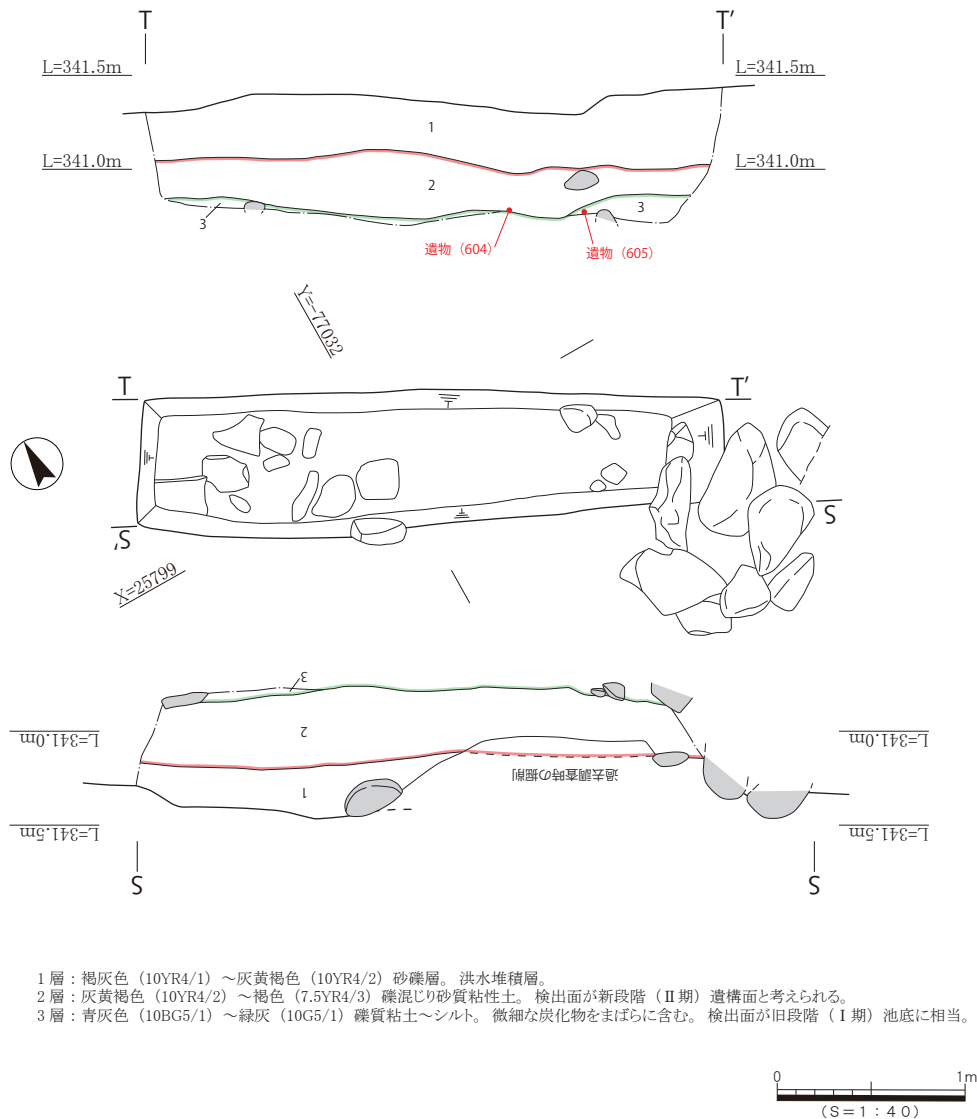


図 2-26 出島状遺構トレンチ平・断面図

南半分に残存する護岸石とベルト土層断面で確認された土手状遺構立ち上がりの痕跡から、土手状遺構西側ラインの復元想定は可能である（図 2-21）。一方の土手状遺構東側にも縁石が認められ、中央やや南よりにて薄く平らな石が東側に傾いた状態で検出された。元は立てて据えられていたものが、西から東へと流れる谷川オーバーフローによる洪水の影響を受け、傾いたものと判断される。部分的に残る縁石をもとに土手状遺構東側のラインを復元すると主軸はN 27° Eを向き、池状遺構 S X 0 1 の主軸と並行、つまり旧本堂跡 S B 0 1 建物軸とほぼ一致する。

以上を整理すると、等妙寺開山期と考えられるⅠ期には、旧本堂 S B 0 1 建物軸や池状遺構 S X 0 1 縁石と並行する形で築かれていたと想定される。その後、Ⅱ期には西側に護岸石が配され、西側へやや拡張される。後述する出島状遺構の付設と一連の可能性が高い。

出島状遺構（図 2-21）

出島状遺構は池 S G 0 1 北部にて確認された西側に大きく張り出した遺構で、東側は土手状遺構と

接続している。池SGO1と接する三方は石積みにより護岸が形成されていたと考えられるが、木の根の影響を大きく受けており、南面と西面については基底に据えられた石をわずかに残すのみとなっている。北面は基底となる岩盤上に、幅広い石が3石横倒しになっている状況が看取され、元々は立てて据えられていたと考えられる(図2-25)。西面と接する隅部の石は残存しておらず、不明である。北面西側の石は後方に、残りは手前側に倒れている。また、3石の背後には小振りの石が立てて据えられており、立石の安定を図ったものと思われる。同様の石の用い方は、土手状遺構南側で検出された石組遺構でも認められた。

出島状遺構の時期や内部構造を確認するために、中央部に東西方向のトレンチを設定した(図2-26)。表面には後世の洪水堆積層(1層)が厚く堆積しており、その下層には礫混じり砂質粘性土(2層)がみられた。これらを除くと、部分的に貼石を伴う青灰色礫質粘土(3層)が検出され、東側では土手状遺構の立ち上がりも確認された。貼石は西側に集中している。3層の貼石を伴う青灰色礫質粘土は、先に検出された池SGO1の池底と共通する様相であったことから、元々池底であったところに後から出島状の張り出しを付け加えたということが判明した。その時期はトレンチ底面です出た土師質土器の年代観から15世紀後半頃と想定される。

3層上層で確認された礫混じり砂質粘性土が出島状遺構の造成土ということになるが、円礫を多く含み粗雑な印象を受ける。出島状遺構造成前に洪水が発生し、その堆積土を用いて出島状遺構を形成した可能性も考えられよう。なお、出島状遺構の主軸はN55°Wを向いており、新本堂跡SBO2とほぼ並行する。

石組遺構(図2-27)

土手状遺構の南側で検出され、2つの立石が南北方向に約50cmの間隔で据えられている。谷川と接することから導水路として機能したと想定される。谷川を堰き止めるなどして池SGO1へ導水したのだろう。西側の立石の外側には小振りな石が立てて据えられており、立石の安定を図っている。石組遺構に伴うにぶい黄褐色造成土からは、14世紀代に遡り得る土師質土器が出土していることから、等妙寺開山期の所産と考えられる。主軸はN25°Eを向いており、北方向の延長線上には池状遺構SXO1の東面立石が存在する。旧本堂跡SBO1の建物軸とほぼ共通する。

水路状遺構(図2-27)

14世紀代と想定されるにぶい黄橙色造成土層下より、一部石列を検出した。上部遺構の保存を優先し、部分的な検出に留めたが、西から東へと導水する水路と思われる。周辺より採取された炭化材の放射性炭素年代測定結果が平安中期～鎌倉時代の年代を示すことをも鑑みると、本遺構は等妙寺開山以前に遡る可能性もあろう。

池SGO1周辺出土遺物(図2-30)

551～567は土師質土器の杯もしくは皿である。褐色系のもの(551～561)と白色系のもの(562～567)に大別できる。558の見込みには化粧土と思われる光沢をもつ薄い膜が認められる。564は見込みにヘラ状工具による回転ナデの痕跡が顕著に残る。568は青磁碗の体部片で、被熱を受けており、釉薬がわずかに発泡している。いずれも池SGO1検出面より上層で出土したもので、周辺からの流れ込みと考えられる。



図 2-27 石組遺構周辺平面図

第2節 遺構と遺物

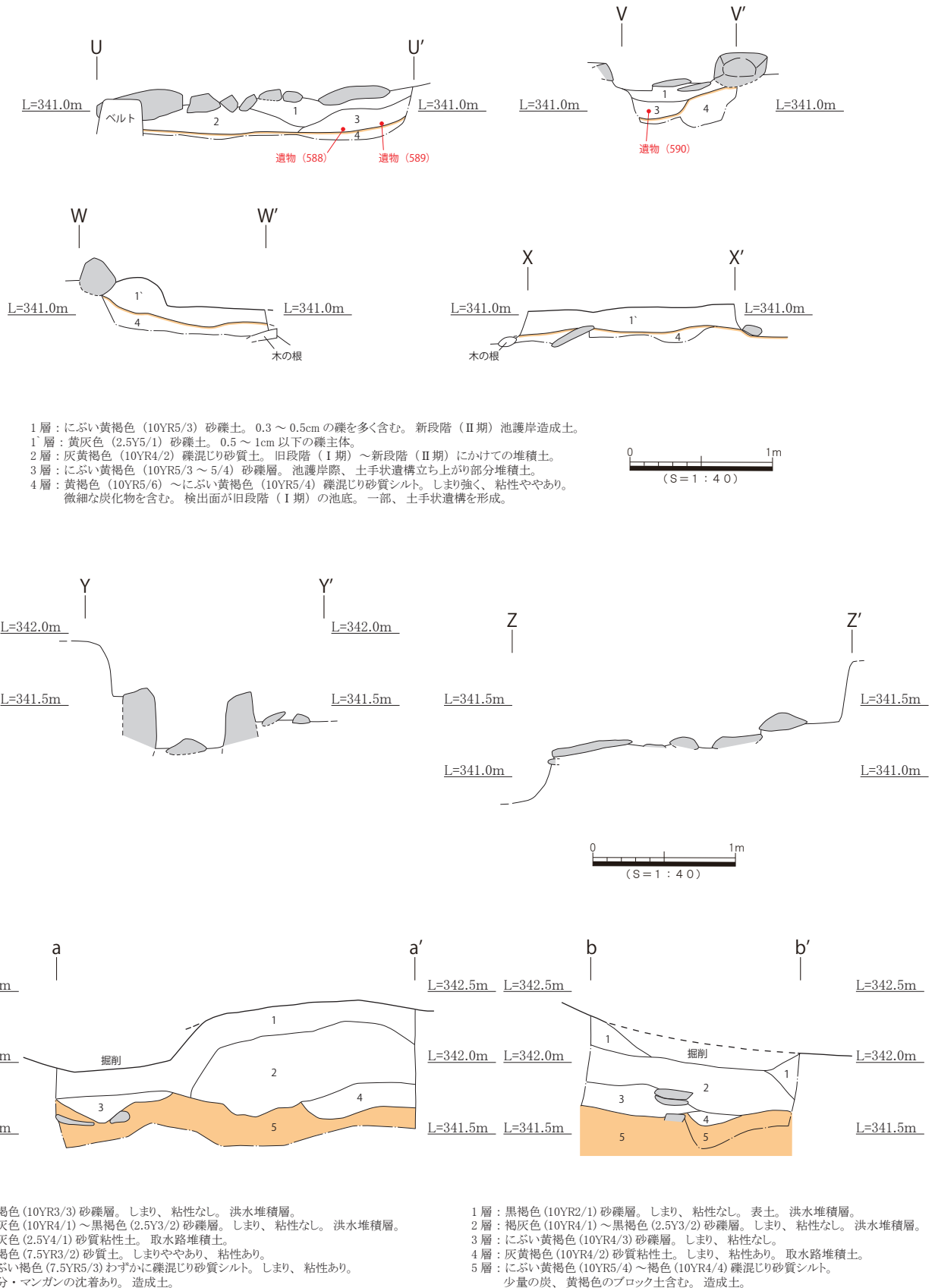
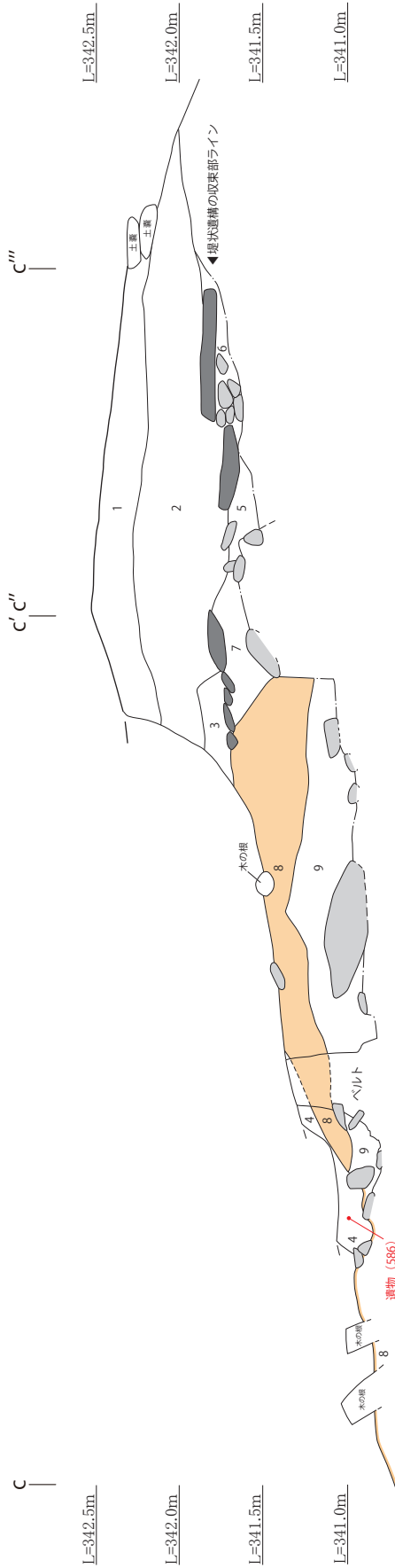
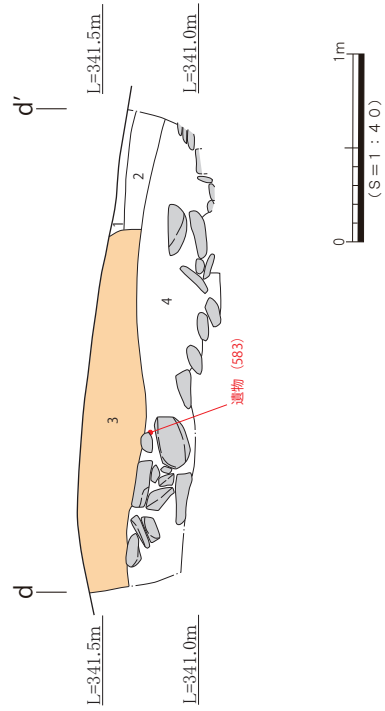


図2-28 土手状遺構・石組遺構周辺断面図1



- 1層：褐灰色 (7.5YR4/1) 砂礫層。表土、洪水堆積層。
- 2層：灰褐色 (7.5YR4/2) 礫層。洪水堆積層。
- 3層：黒褐色 (7.5YR3/2) 砂質土。やましまりあり。
- 4層：灰褐色 (7.5YR5/2) ～褐灰色 (7.5YR4/1) 砂礫層。0.5cm以下の礫主体。しまり弱い。
- 5層：灰褐色 (7.5YR3/2) 砂礫層。水性堆積による砂利層。
- 6層：灰褐色 (7.5YR4/2) 礫層。10～15cmの礫主体。堆状遺構の取壊部を形成。
- 7層：にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂礫土。しまり、粘性ややあり。
- 8層：にぶい黄褐色 (10YR6/4) ～明黄褐色 (10YR6/6) 礫混じり砂質シルト。微細な炭化物片混じる。しまり、粘り強い、造成土。
- 9層：灰 (10Y5/1) ～灰黄褐色 (10YR4/2) 砂礫層。1～5cmの礫主体、20cm大の礫を多く含む。8層による造成段階以前。



- 1層：黄灰色 (2.5Y5/1) 砂礫層。0.5～1cmの礫を多く含む。
- 2層：にぶい黄褐色 (10YR6/3) 砂礫土。1～2cmの礫を全体的に含む。
- 3層：にぶい黄褐色 (10YR7/4) ～明黄褐色 (10YR7/6) 礫混じり砂質シルト。1cm前後の礫をまばらに。炭化物片を含む。しまり、粘性あり。造成土。
- 4層：灰黄褐色 (10YR5/2) 砂混じり礫層。10～20cmの礫を多く含む。

図 2-29 土手状遺構・石組遺構周辺断面図 2

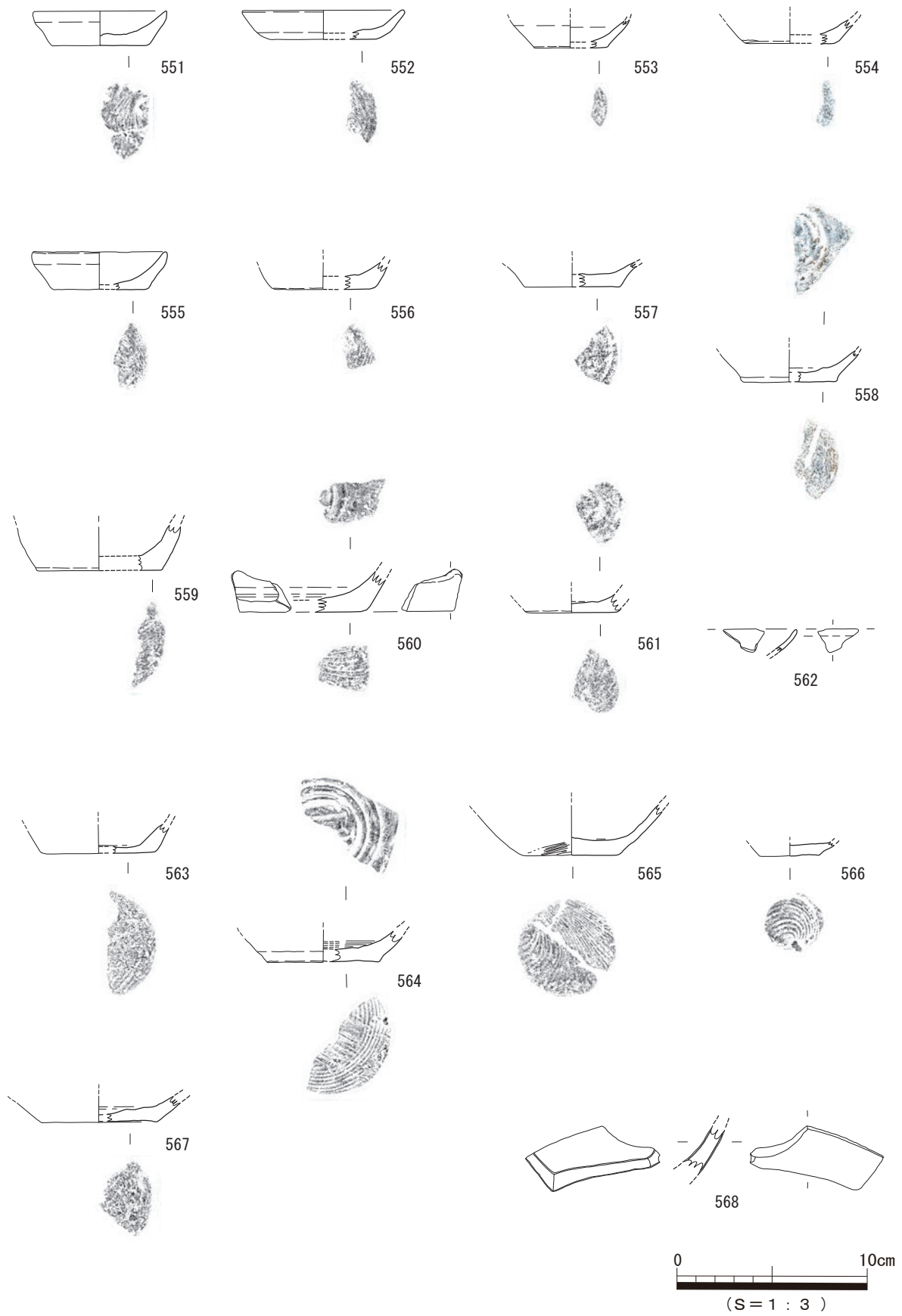


图 2-30 池SGO1周边出土遺物

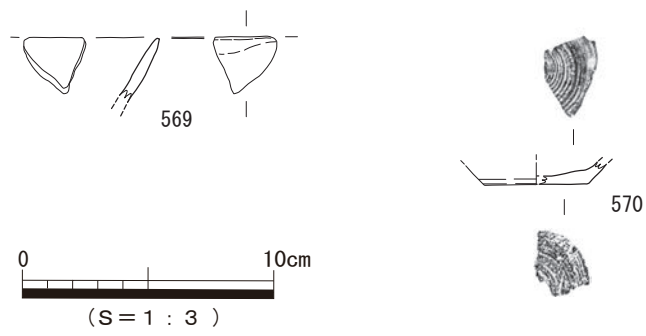


図2-31 池SGO1旧段階池底上層堆積土出土遺物

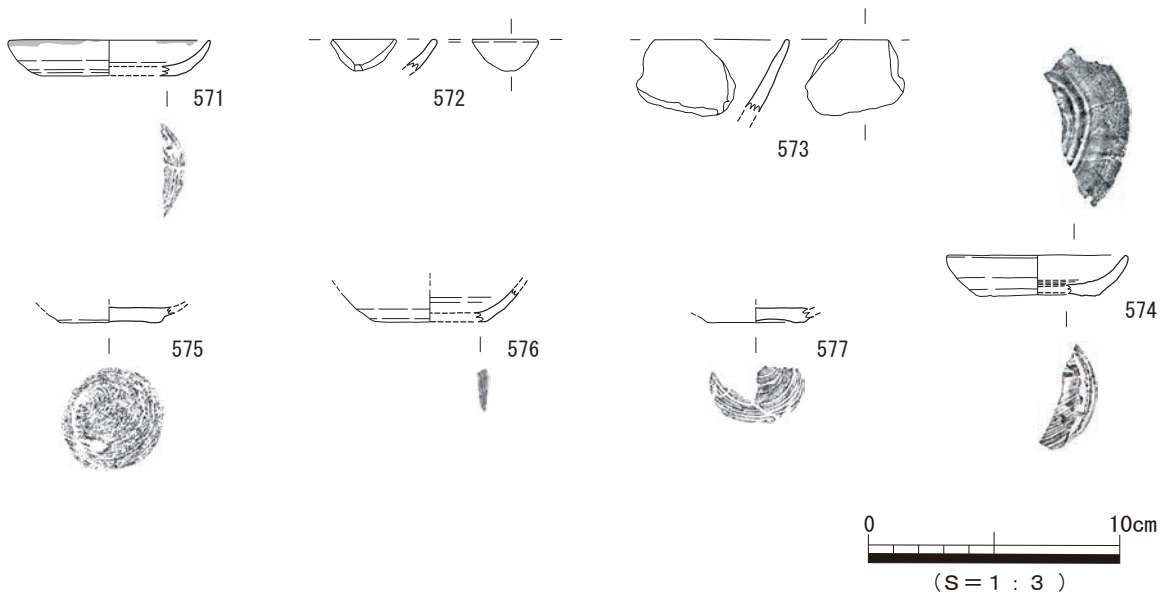


図2-32 池SGO1底部付近出土遺物

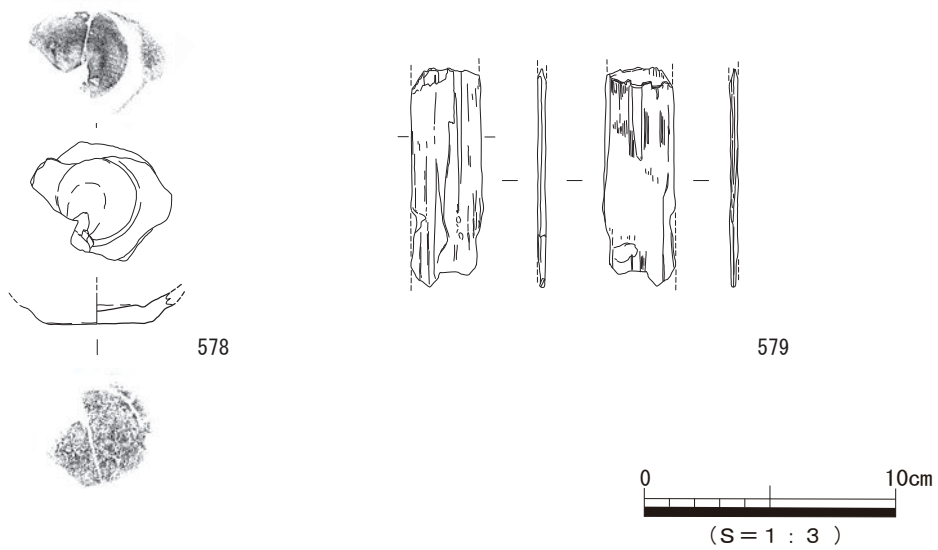


図2-33 池SGO1底面青灰色粘土層出土遺物

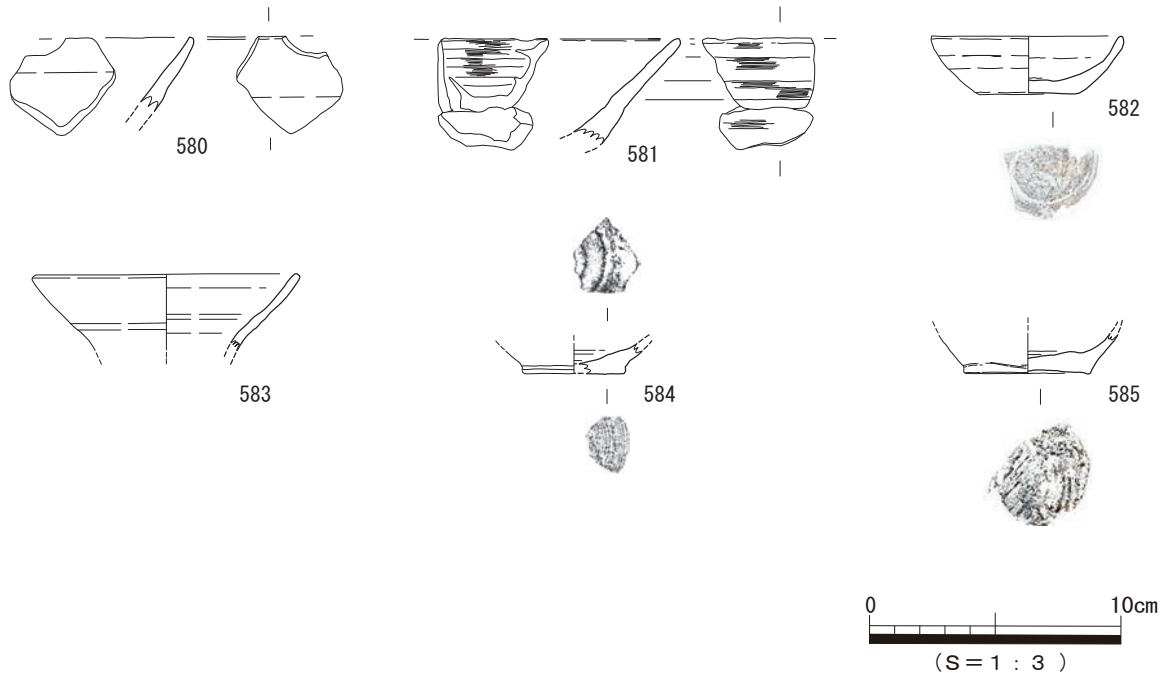


図2-34 池SG01周辺造成土に伴う遺物

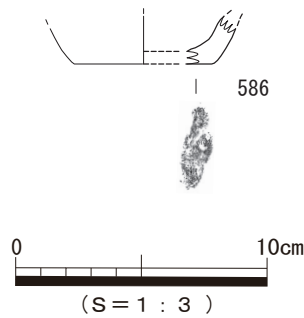


図2-35 池SG01周辺造成土上層堆積層出土遺物

池SG01旧段階池底上層堆積土出土遺物 (図2-31)

旧段階池底と新段階池底の間層から出土した土師質土器片である。569は口縁部片で端部を尖り気味におさめる。570は底径の小さなもので、見込みには細かな単位の回転ナデ痕が残されている。いずれも薄手のつくりで、白色系である。

池SG01底部付近出土遺物 (図2-32)

571は小皿で、口縁端部に煤及びタール状物質の付着が認められる。572、573は口縁部片である。572は内湾気味に立ち上がり、丸くおさめるが、573は直線的で、端部は尖る。575や577は4cmに満たない底部径で、極小サイズの皿であろう。

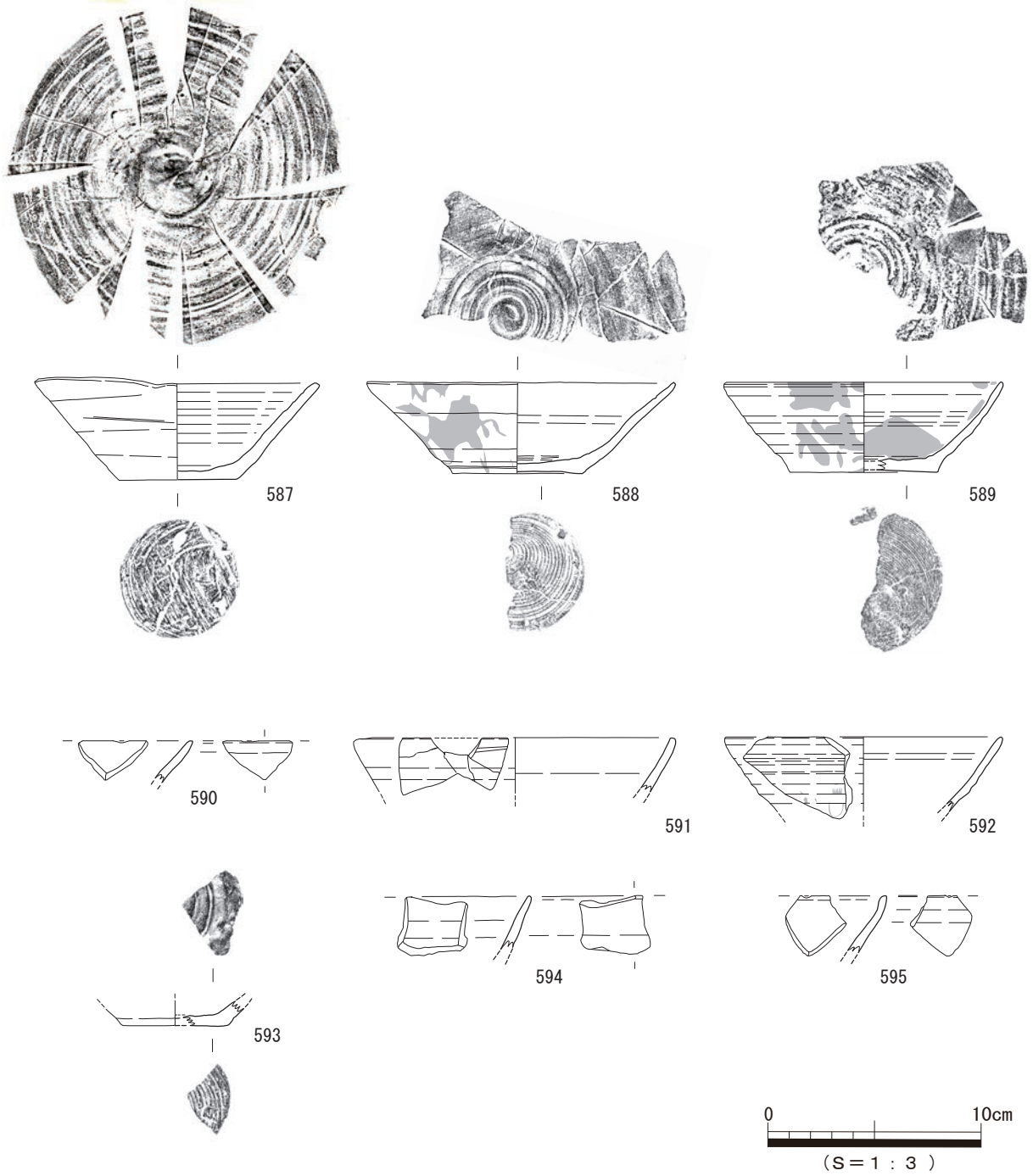


図 2-36 土手状遺構護岸際出土遺物

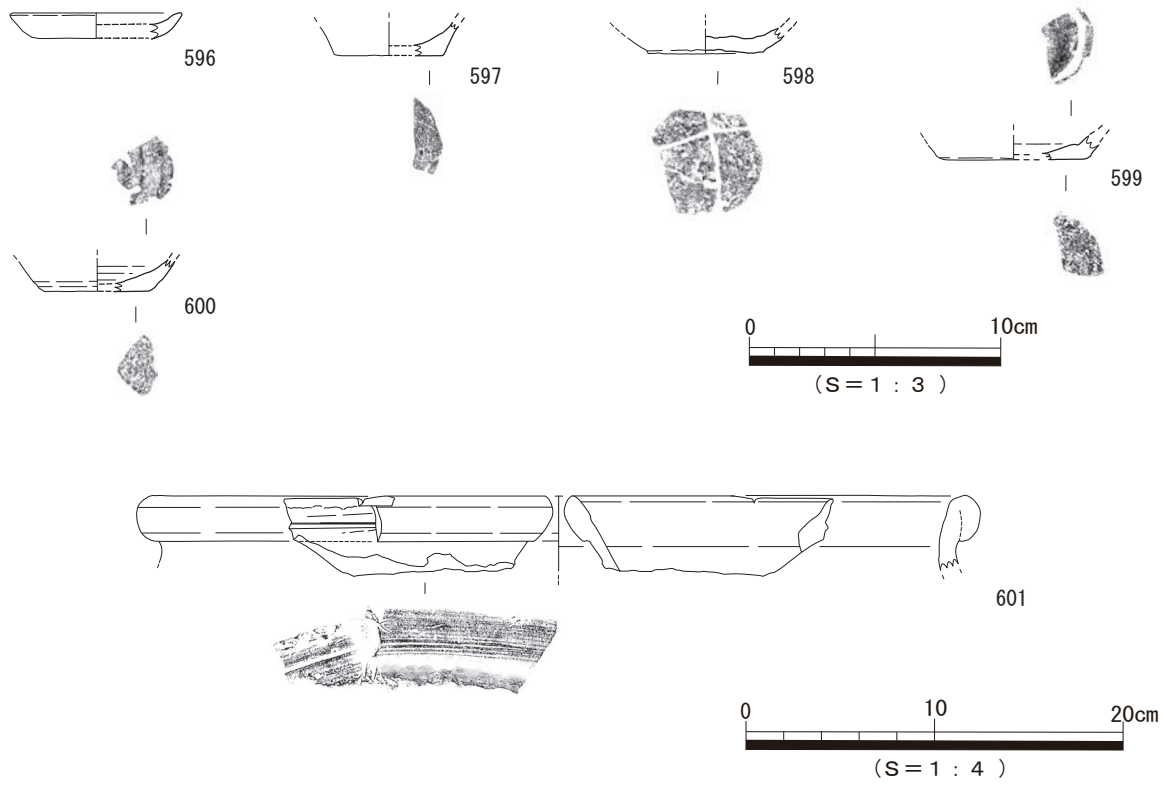


图 2-37 土手状遺構周辺出土遺物

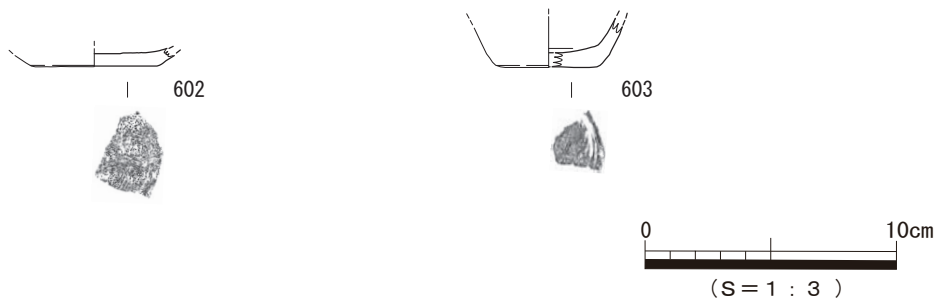


图 2-38 出島状遺構南側 土手状遺構護岸際出土遺物

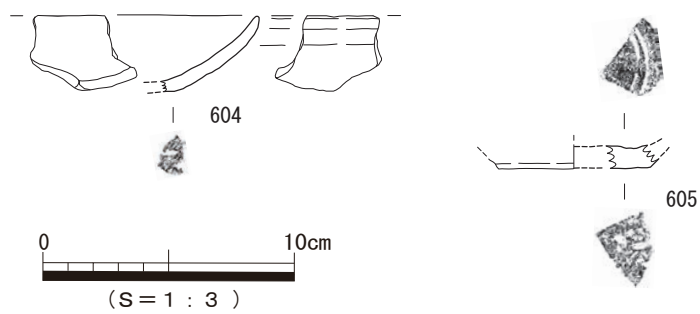


图 2-39 出島状遺構出土遺物

池SGO1底面青灰色粘土層出土遺物（図2-33）

578は土師質土器の皿と考えられる。見込み外縁はナデにより窪み、中央部は若干凹む。にぶい橙色を呈する。579は表皮付近の板状木片である。

池SGO1周辺造成土に伴う遺物（図2-34）

580、581、583は土師質土器杯の口縁部片である。580は内面のナデにより口縁端部に向かって器壁が薄くなり、尖り気味におさめる。石組遺構に伴うにぶい黄橙色造成土より出土した。581はほぼ直線的に口縁部へといたる。端部外側にわずかに面をもつ。土手状遺構南側で確認された池底から連続するにぶい黄褐色造成土中より出土した。583は体部中位で大きく変換し、内湾しながら口縁部へいたる形状で、杯B類〔鬼北町教育委員会編2005、以下の分類名はこれに準ずる〕に該当する。石組遺構に伴うにぶい黄橙色造成土直下より出土した。582は小皿で、内面には光沢をもつ滑らかな部分があり、化粧がけによるものと思われる。585は底部片で、小さな底径からややきつい角度で立ち上がる。582と585は石組遺構の南側に設定した調査区で検出された、にぶい黄橙色造成土中より出土した。584は底部片で、内面に回転ナデの痕跡がみられる。にぶい黄橙色造成土直上の造成土中より出土した。色調は総じて白色～浅黄橙色を呈しており、薄手のものが多い。既存の分類に照らせば杯A類、B類に相当し、14世紀を中心とする年代が与えられる。

池SGO1周辺造成土上層堆積層出土遺物（図2-35）

586は土師質土器杯である。底部からきつい角度で立ち上がる。器壁はやや厚く、全体的に砂粒感がある。

土手状遺構護岸際出土遺物（図2-36）

587～595は土師質土器の杯で、残存状態が良好なものが出土した。587～589は、口径に比して底径が小さく、器高が高いという特徴をもち、逆台形状を呈する。587は接合によりほぼ完形となるもので、体部内面に工具を使用した回転ナデを施したのち、見込みは指ナデにより器面調整されている。588は先端が鋭い工具によって、見込みに渦巻き状のナデが施されている。内外面には煤が斑に付着している。589は外面及び見込みにヘラ状工具による回転ナデ痕が残る。体部内面の調整痕はそれほど目立たない。内外面に煤が付着するが、内面見込み部分が特に顕著である。590は588と、592は589とそれぞれ同一個体の可能性があり、591は588と胎土がよく似ている。593は底部片である。595は口縁部片で、端部下で屈曲し、上方に立ち上がる。

以上は、これまでの調査で出土しているタイプとはやや異なり、既存の分類に安易に当てはめることはできないが、器高が高く、口径に比して底径が小さい逆台形状を呈することなどから、杯F類や杯B類との共通性が窺える。よって、現状では14世紀代、つまり等妙寺開山期頃の所産と位置づけておきたい。

土手状遺構周辺出土遺物（図2-37）

596～600は土師質土器の杯もしくは皿で、598を除いて小片である。598の見込みには約0.7cm幅の回転ナデ痕が認められる。601は備前焼甕である。断面玉縁状の折り曲げ口縁をもつ。596、597は土手状遺構を覆う砂礫層中、そのほかは土手状遺構東側より出土した。

出島状遺構南側 土手状遺構護岸際出土遺物 (図 2-38)

602、603 は土師質土器の杯もしくは皿の底部片である。602 の底部を除く外面には、煤及びタール状物質が付着している。603 は小振りのもので、底部からきつい角度で立ち上がる。いずれも白色系の発色である。

出島状遺構出土遺物 (図 2-39)

604 は内湾して大きく開く形状の皿である。内外面は平滑に回転ナデ調整が施され、胎土中の金雲母が目立つ。605 は杯もしくは皿の底部片である。見込み外縁に先端がやや細い工具による回転ナデの痕跡が看取され、見込みの中央部はわずかに肥厚する。摩滅によりややくすんだ色調だが、元々の発色は橙色と思われる。ともに出島状遺構の中央部東西方向に設定したトレンチ底面で検出された、青灰色礫質粘土層上面から出土した。604、605 は I 区本坊地区で検出された鍛冶工房跡に伴う土器群（後掲の本書検討では B 群とした）と似た特徴をもつことから、15 世紀後半頃に位置づけておく。

滝 S X O 2 (図 2-40 ～ 2-42)

滝 S X O 2 は池 S G O 1 の背後にあたる西側に位置し、その正面両サイドには巖崖と呼ぶに相応しい岩盤が露出している。すぐ上方には観音堂跡と伝わる平坦部 A-2 が立地し、一帯は独特の景観が造り出されている。

滝 S X O 2 の水落（水流の落下点）から滝口の石積み天端まで高さ約 4 m、幅は約 2.4 m を測る。滝口の石積みは水落から高さ約 2.7 m 付近より 5 段程度積まれている。最下段に積まれた石は幅約 80cm と大きいのが、上段へいくにつれて大型から小型、丸型から扁平な石へと変化する。石材の尖り面を表側に向けて据えられているものが多く、史跡内に数ある石積みとの共通性が窺える。水落から高さ約 1.6 m 付近にも石が集中しているが、多くは前面に向かって斜めに傾いた状態で検出され、原位置を保っていない可能性が高い。水流を制御する目的で配されていた石が流出したものと判断された。滝 S X O 2 は現在、通常時は枯渇しているが大雨時には復活し、往時の情景をみることができる。石積み 1 段目と 2 段目の間、2 段目と 3 段目の間からの出水を確認している。

滝を正面に立つと南北（左右）で岩質が異なることに気が付く。南側は硬質な変成岩系、一方の北側は風化したシルト岩系である。つまり滝 S X O 2 は異なる岩脈の境界に位置しており、元々出水があるところを選んで形成されたのかもしれない。滝 S X O 2 北側に露出したシルト岩の水落付近は人為的な開削により平らに面を成している状況が認められ、これに貼り付くように炭化材が出土した。放射性炭素年代測定では平安時代中期の年代が示されている。滝 S X O 2 は滝口の石積みの技法などから大部分は等妙寺開山期の形成と考えられるが、岩盤の開削など開山以前にも手が加えられていた可能性がある。

小祠跡 A・B (図 2-40、2-43)

滝 S X O 2 水落の両側で 2 棟の小祠跡が検出された。南側で検出されたものを小祠跡 A、北側を B とする。小祠跡 A では西面及び南面において炭化した柱材が残存しており、1 辺が 72cm 前後の小規模な方形建物跡と判明した。柱材の直上や直下など小祠跡 A に伴う状態のほか、同一面上において 16 世紀代の土師質土器が出土していることから中世等妙寺最終段階まで機能していたとみられ、1588 年の火災で焼失した可能性が高い。建物軸は、N 61° W を向く。

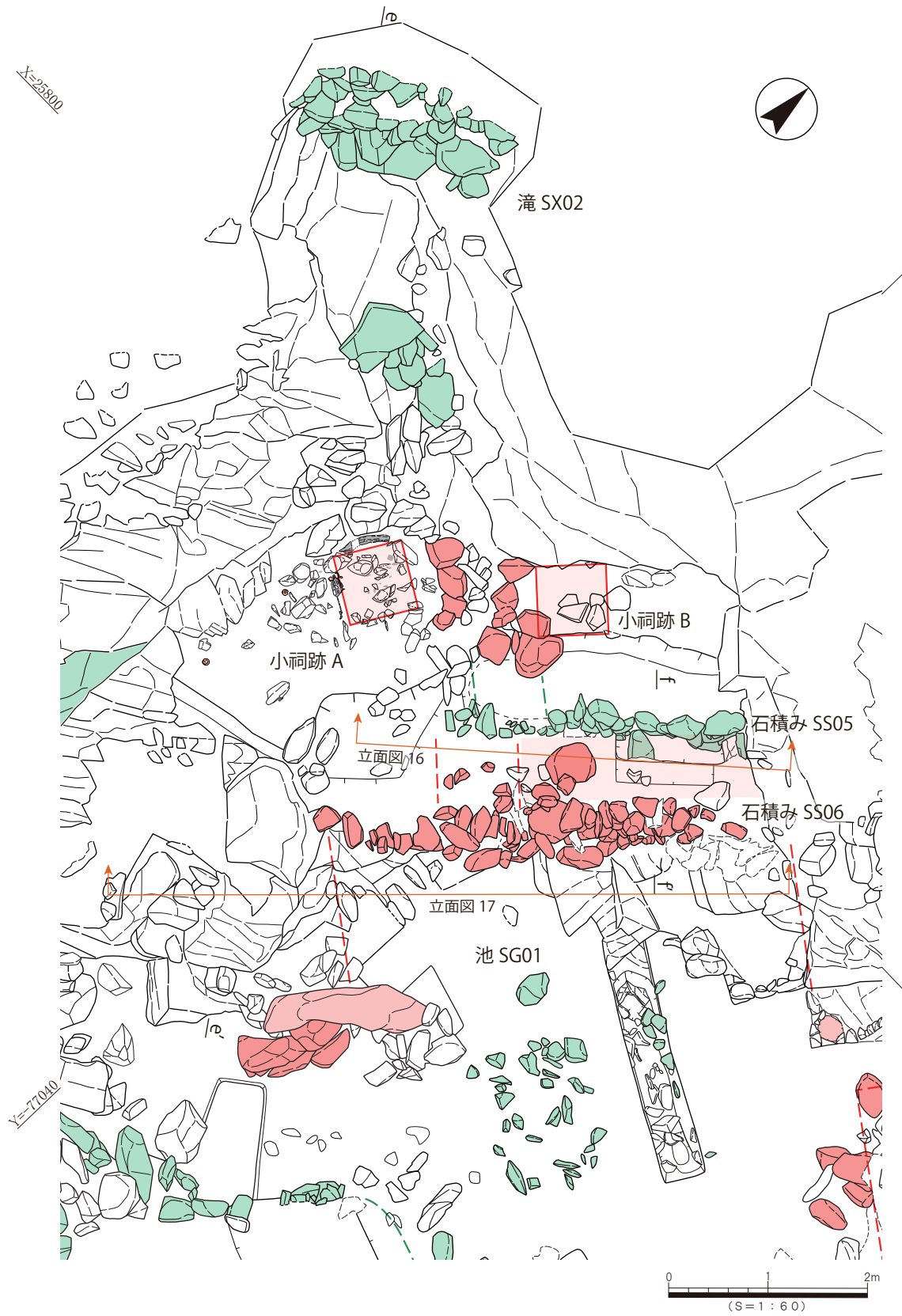


図 2-40 滝 SX02 周辺平面図



図 2-41 滝 S X O 2 立・断面図



立面図 15

図 2-42 滝 S X O 2 立面オルソ画像

小祠跡Bについても炭化物の検出状況から、小祠跡Aと同規模の建物跡と判断される。周辺では16世紀代と考えられる土師質土器の散布も確認された。建物線は、N 49° Wである。

小祠跡A及び周辺出土遺物（図2-44）

606～613は土師質土器の杯、小皿である。総じて色調は橙色を呈し、胎土中の砂粒が目立つ。器壁はやや厚く、粗雑なつくりである。外面の回転ナデにより体部中程で外反気味に立ち上がるもの（607、608）や口縁下が肥厚傾向にあるもの（606、608、609、610、611）などが認められ、見込みには単位の幅広な渦巻き状ナデが施されている。底部切り離しは不明なもの（606）を除いて、すべて静止糸切りである。諸特徴から16世紀代の所産と判断できる。614は瓦質不明品である。外面のみ灰黄～灰色を呈しており、瓦質と考えられるが焼成はあまい。ヘラを用いて成型されており、外面は滑らかに器面調整されている。底部と思われる平らな面をもつ。内部は中空になるようで、ナデの痕跡を荒々しく残している。606、607は小祠跡の炭化柱材直上、608、609は柱材直下、612、613はその周辺からの出土である。そのほかは小祠跡A検出面と同一面上から出土した。

石積みSS05・SS06（図2-45）

滝SX02及び小祠跡の東側で2列の石積みが並行して検出された。奥（西側）の石積みをSS05、手前（東側）の石積みをSS06とする。

石積みSS05はSS06の背後で埋没していたため、その前面を部分的に掘削した。まず、SS05の天端付近にまで堆積した砂礫層を除去すると、礫混じり砂質土が確認された。この上面は非常に固くしまっており、硬化面を形成している。この下層には砂礫層があり、これを除去すると岩盤に到達した。SS05は岩盤を基底とし、径15～20cmの小振りな石を横位に5～7段積んでいる状況が看取された。石材の尖り面を表側に向けており、滝SX02滝口の石積みなどと共通性が窺える。また、SS05を平面観察すると石材を小口積みしている部分が認められ、その間が滝から供給される水の流路と判断された。一方のSS06は、主に平らな面を表に向ける積み方である。木の根の影響を受けており、石の抜けや浮石も散見されるが、全体的に荒々しい造りでSS05との違いが顕著である。SS06の中程にも小口積みが集中しており、滝からの流路を形成している。SS05の流路より中心軸が35cm程度南へ付け替えられている。

以上のことから、等妙寺開山当初は石積みSS05のみ存在し、池SG01の西側護岸を成していたものと考えられる。そして次の段階では石積みSS06が築かれ、SS05との間は通路として利用された可能性がある。合わせて滝からの流路も付け替えられた。SS06の形成時期は、池SG01周辺遺構の変遷と連動するものと考え、15世紀後半～16世紀頃を想定しておきたい。

石積みSS05前面3層（砂礫層）出土遺物（図2-46）

615は土師質土器杯の口縁部である。薄手のつくりで、口縁端部を尖り気味におさめている。

堤状遺構（図2-48）

堤状遺構は調査区南西部に位置する。調査区南西から東へと流れる谷川が弧を描く水流の外側、急流を成す位置に土盛り状に構築されており、水の流入を防ぐ性格が見て取れる。長さ約15m、最大幅約3.2mを測る。構造を把握するために東側の収束部付近を一部断ち割り、土層断面の観察を行っ

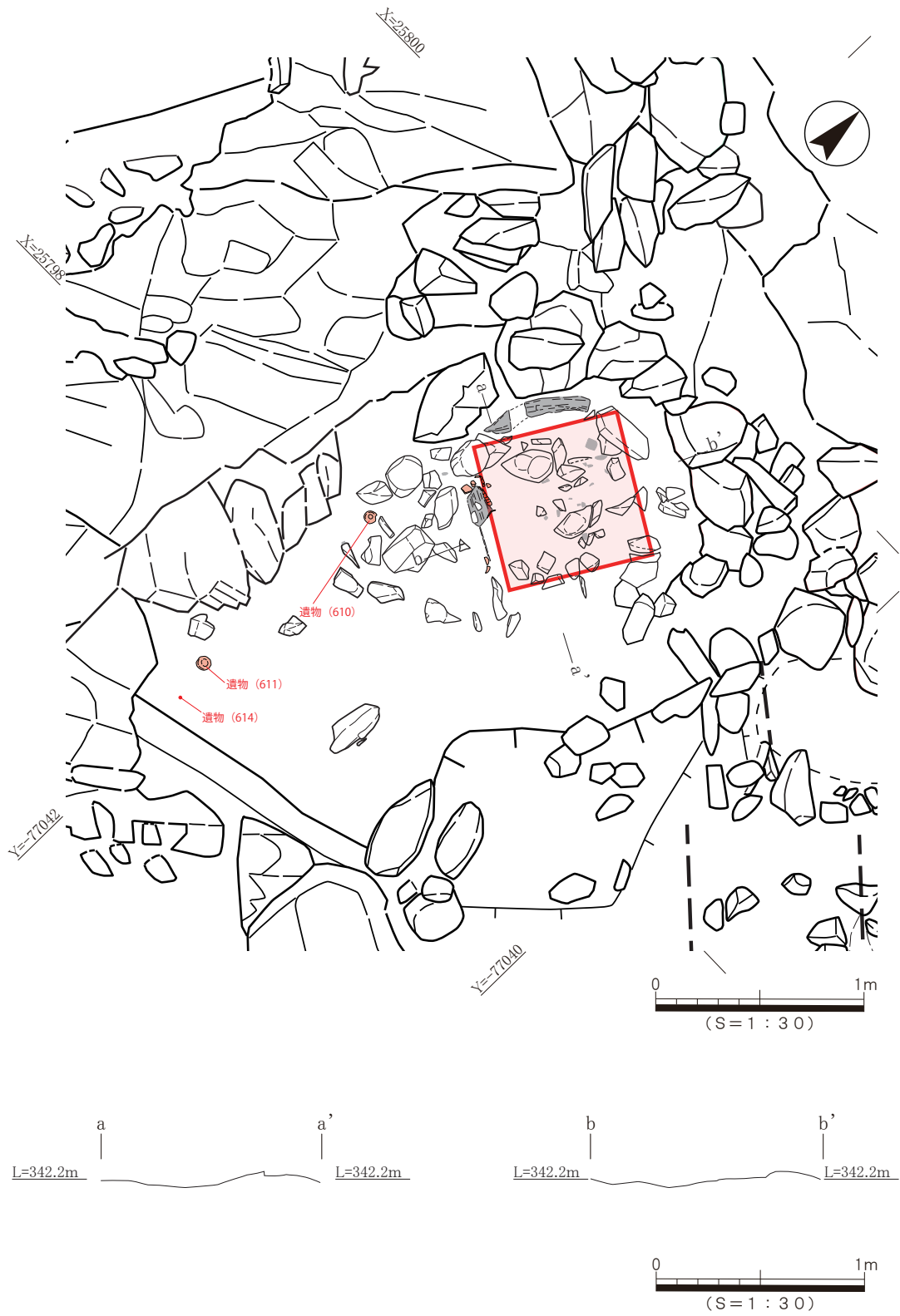


図 2-43 小祠跡A平・断面図

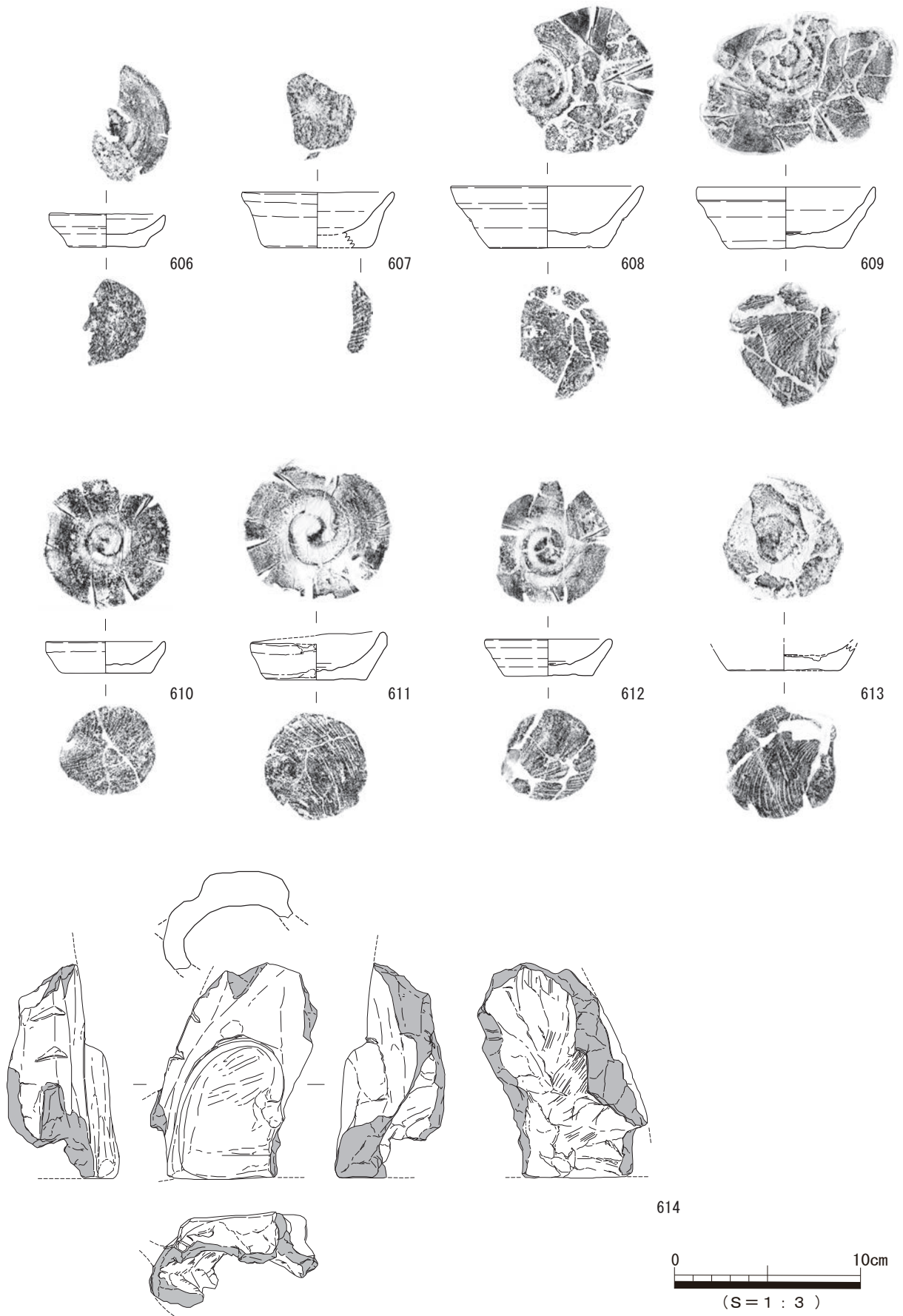
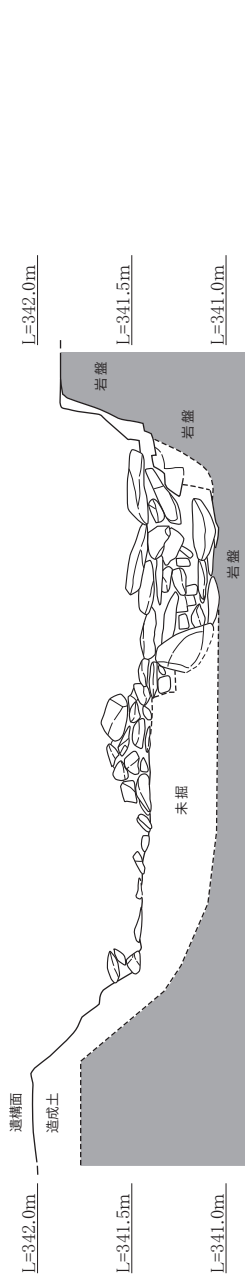
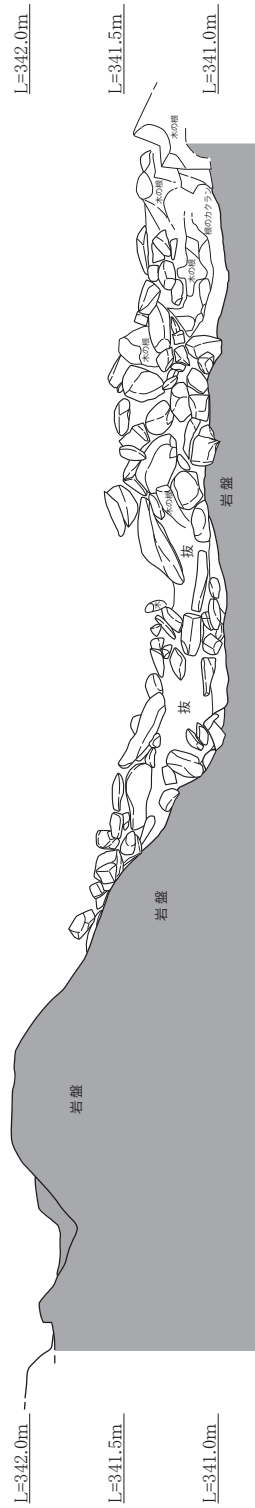


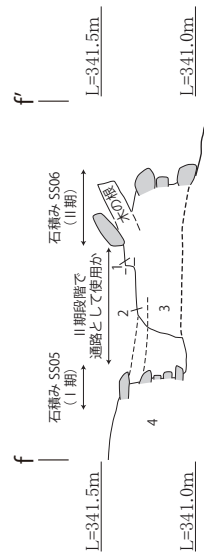
图 2-44 小祠跡 A 及び周辺出土遺物



立面図 16 石積み SS05



立面図 17 石積み SS06



1層：にぶい黄褐色（10YR6/3）砂礫層。0.5～1cmの礫主体。しまりなし。崩れやすい。
 2層：にぶい黄褐色（10YR6/4）礫混じり砂質土。上面で面を形成。しまり強い。
 3層：灰黄褐色（10YR5/2）砂礫層。粗粒砂～極粗粒砂主体。5～10cmの礫を多く含む。
 4層：にぶい黄褐色（10YR5/3）砂礫層。1～2cmの礫主体。しまりなし。崩れやすい。



図 2-45 石積み SS05・SS06 立・断面図

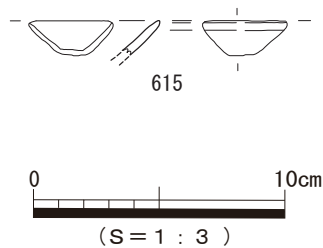


図 2-46 石積み S S O 5 前面 3 層 (砂礫層) 出土遺物

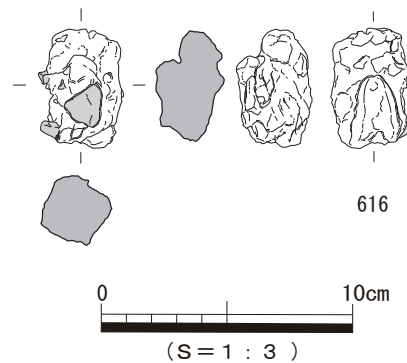


図 2-47 堤状遺構出土遺物

たところ、堤状遺構の土盛りは大きく 2 層に分層され、上下で土質が異なることが判明した (図 2-49)。下層は 10 ~ 20cm の礫を多く含んだ砂礫層であるのに対し、上層では 15cm 以下の礫をまばらに含む砂礫層である。いずれもしまりのない土質のため、全体的に崩れが生じている。谷川水流の影響を絶えず受けるため、改修されながら存続したものと想定される。対面する壁面では堤状遺構の収束部と考えられる石列が確認された (図 2-29)。また、堤状遺構土層断面の北側では 2 時期の水路堆積と思われる土層が認められ、このうち下層では両側に石を配し、水路護岸を形成している様相が看取された。

堤状遺構出土遺物 (図 2-47)

616 は着磁性が認められる鉄塊系遺物である。全体が赤錆で覆われている。内部は溶脱しており、空洞に近い。表面の一部に 4 ~ 17 mm 程の礫が付着している。重量は 39.8g である。旧段階 (I 期) と考えられる水路護岸石付近から出土した。

水路遺構 (図 2-48)

堤状遺構の北面に沿って築かれている。水路遺構の西側に存在する S W O 0 3 - 3 では、谷川に沿った石積み配列の途中で北へ約 20° 角度を変えており、水路遺構へ谷川の水を引き入れている状況が看取された。水路幅は約 60 ~ 70cm を測る。水路遺構北面は上部の堆積土が軟弱で判然としないが、水路底部付近には基底を成すと考えられる比較的大きな石が集中している (図 2-51)。南面は堤状遺構となるが、崩れた様相を見せている。水路遺構底面付近で近世陶磁器 (859、871、872) が採取されており、中世等妙寺廃絶後も機能していた可能性がある。なお、S W O 0 3 - 3 は基底となる岩盤上に石材を横位に 1 ~ 4 段積むもので、表側には石材の尖り面と平らな面が混在している。石材の横幅は約 90cm と巨大なものを用い、頑強に築かれている (図 2-52)。

(4) 広場 S H O 1 と周辺の遺構

広場 S H O 1 (図 2-53)

広場 S H O 1 はⅢ区平坦部の東端に位置する。洪水堆積による表層、自然堆積層である褐灰色砂質土を除去すると、平坦な造成面が広がる。調査区南西部の池 S G O 1 付近と比べると、洪水堆積層は薄く、谷川オーバーフローの影響は少ないと考えられるが、明確な遺構は希薄であることから、元々広場的な空間が広がっていたものと想定される。

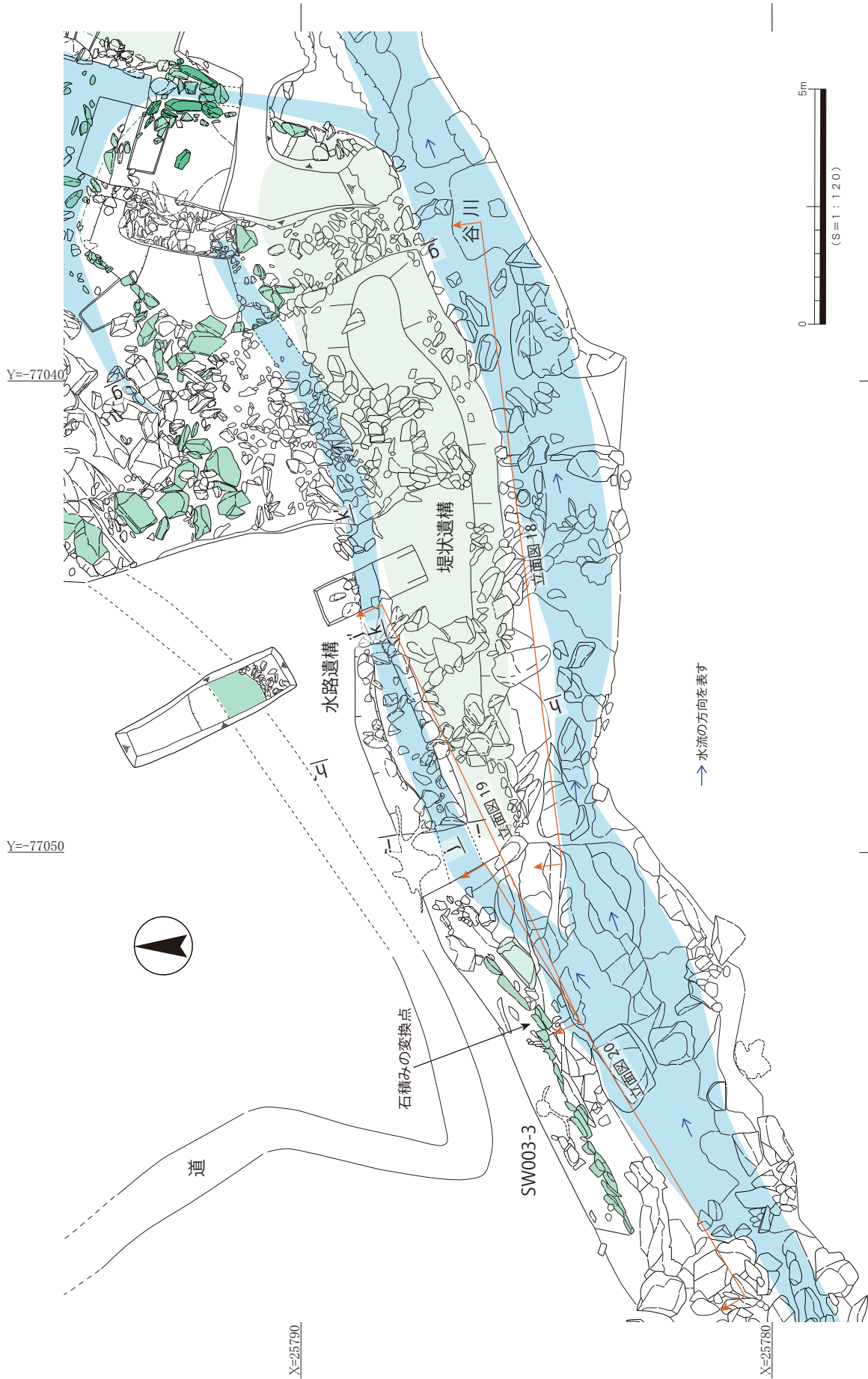


図2-48 堤状遺構・水路遺構平面図

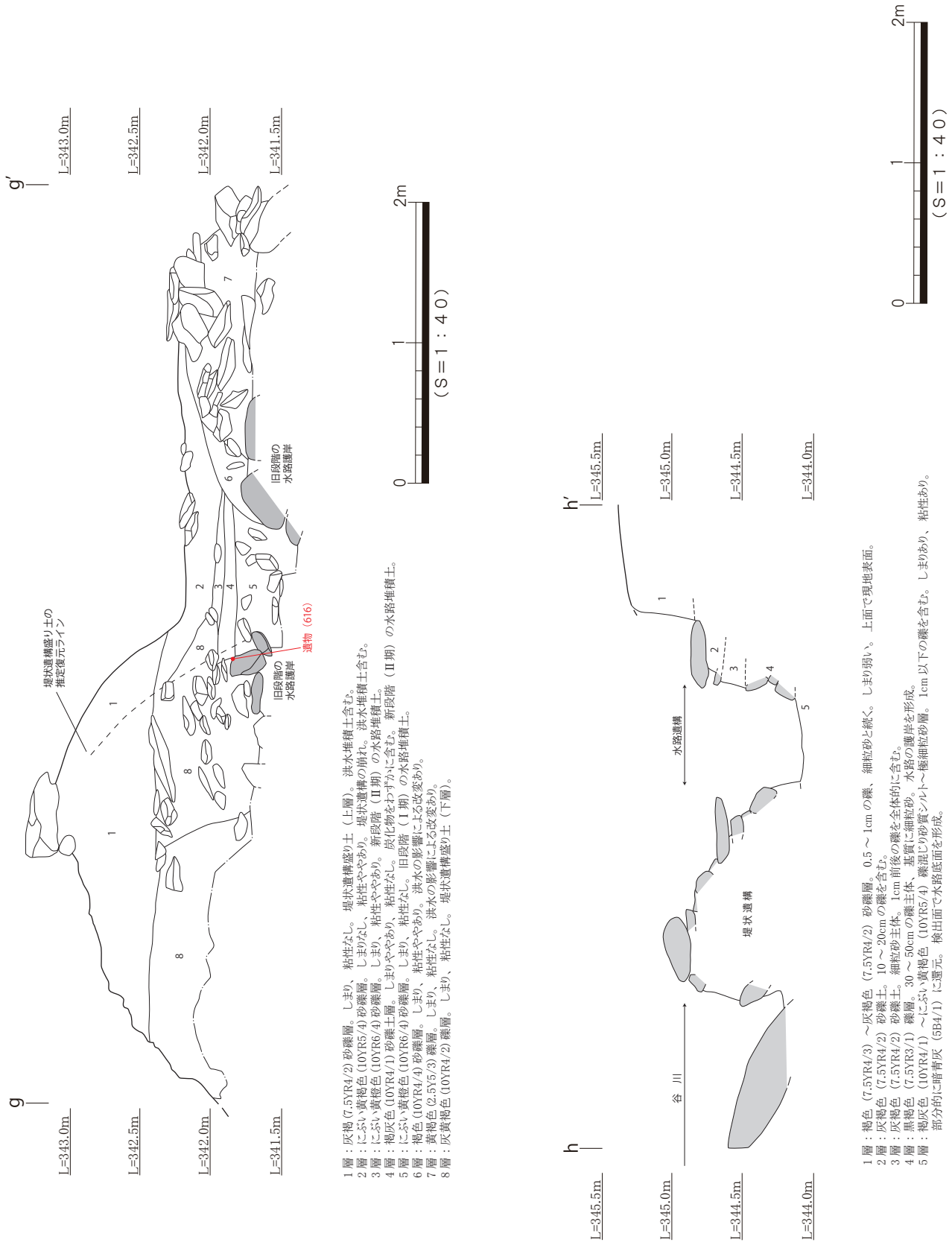


図 2-49 堤状遺構・水路遺構断面図



図 2-50 水路遺構断面図



立面図 18 堤状遺構南面 (陰影図)



立面図 19 水路遺構北面 (陰影図)

図 2-51 堤状遺構・水路遺構立面図



立面図 20 SW003-3 (陰影図)

図 2-52 SW003-3 立面図

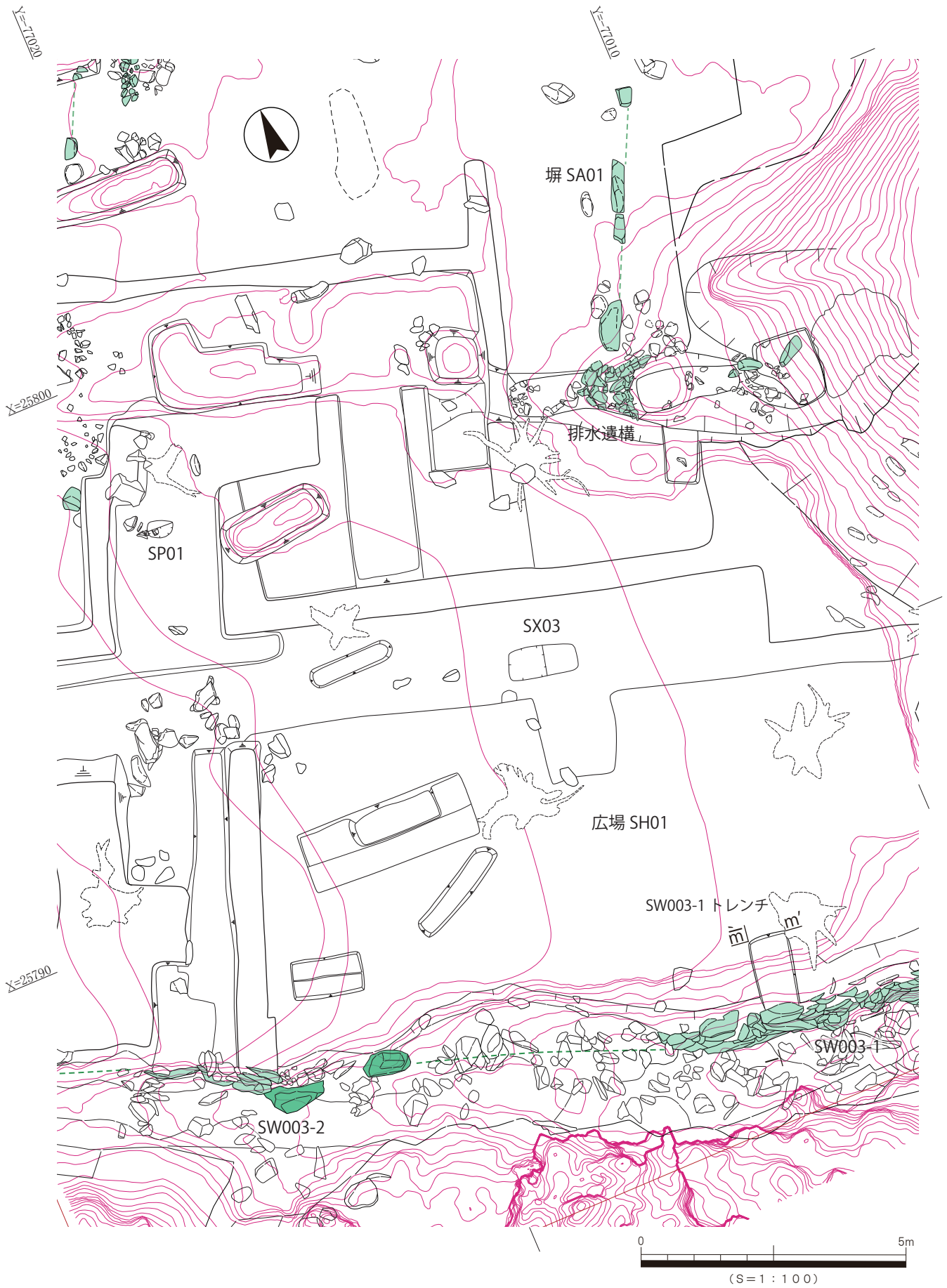


図 2-53 広場 SH01 と周辺の遺構

広場SHO1基盤整地層出土遺物（図2-54）

617は土師質土器の杯で、底部からややきつい角度で立ち上がる。胎土は灰白色系で、内面はへら状工具による回転ナデが施されたのち、見込みに2条の指ナデ痕を残す。底部切り離しは回転糸切りである。

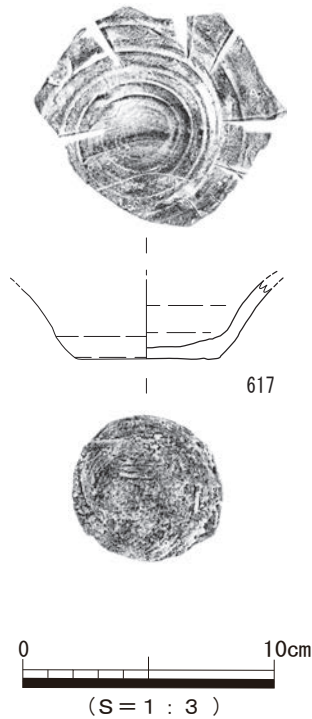


図2-54 広場SHO1基盤整地層出土遺物

塀SAO1（図2-53）

Ⅲ区平坦部東端の中央部付近で検出された。長い石の平らな面を上にして据えられている。長さ約5m、幅約0.2～0.35mを測る。主軸はN25°Eを向いており、日本堂SB01建物軸とほぼ並行する。

排水遺構（図2-55）

塀SAO1南側で確認された遺構で、平坦部の端部約6m×2mの範囲に及ぶ。上段・中段・下段の3段構造となっており、上段と下段の比高差は約1.3mである。上段には径20～30cm大の礫が集中しているが、造成土の中に強固に埋め込まれていることから、平坦部の造成と同時に形成されたものと考えられる。

SXO3（図2-56）

調査区南東部、塀SAO1、排水遺構の南側で検出された。長方形を呈した長軸約1.2m×短軸約0.6m規模の浅い土坑状遺構で、基盤整地層を掘り込んで形成されている。埋土は炭が混じる暗灰色砂質土で、鉄滓が出土したことから鍛冶に関連した性格を想定している。

SXO3埋土及び周辺出土遺物（図2-58）

618、619は土師質土器の杯もしくは皿の口縁部である。618は薄手のつくりで、直線的に端部へといたる。620は碗形鍛冶滓である。表面は滑らかで中央がやや窪んでおり、赤錆が付着する。下面は炉底鉄化状態を示す凹凸が見られ、炭も含まれている。炉底の土砂の付着は見られない。重量は145.5gを量る。全体的に着磁性が認められる。621は薄い板状の鍛冶滓で、一部に発泡痕跡が残る。部分的に礫や土が付着している。重量は3.3gである。622は平面不整形の鉄塊系遺物である。一部赤錆に覆われており、表面に細かい凹凸と礫、炭の付着が見られる。全体的に着磁性がある。重量は10.2gを量る。以上はSXO3の埋土から出土した。

623は白磁皿の口縁部である。いわゆる端反りの形状であるが、胎土、釉調は灰色を呈している。景德鎮窯の可能性もある。624は土師質土器の極小皿で、底径が4cmにも満たないものである。625は発泡ガラス質滓で、表面は黒色ガラス質化し、光沢をもつ。気孔が多く、軽量である。626は鉄製和釘である。折釘で、頭部の一部と足下端を欠く。頭部は逆L字状に突出している。残存長3.8cm、足部の最大幅は0.6cmを測る。623はSXO3検出面より上層の堆積層中、624及び626はSXO3検出面、625は周辺からの出土である。

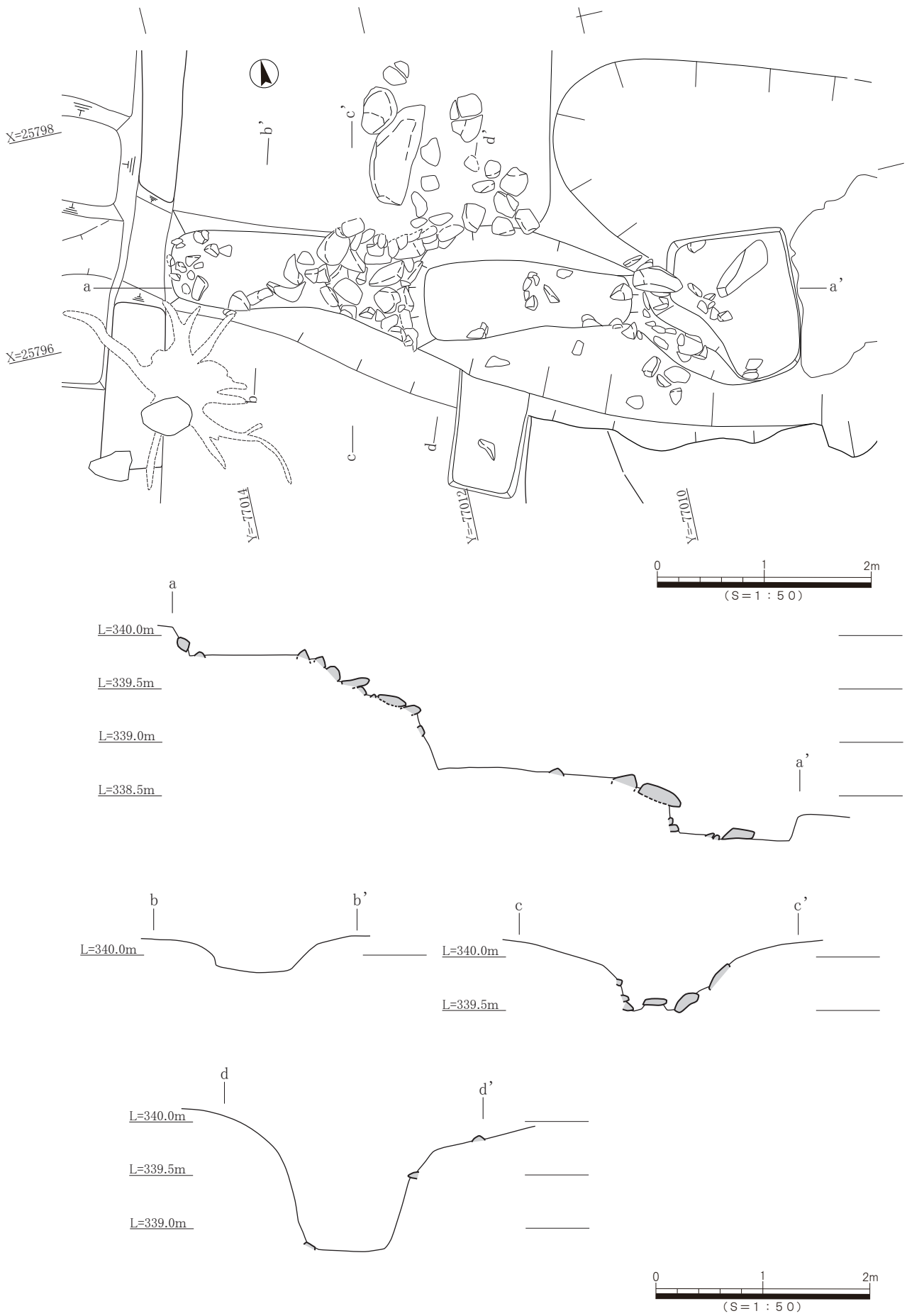


图 2-55 排水遺構平・断面図

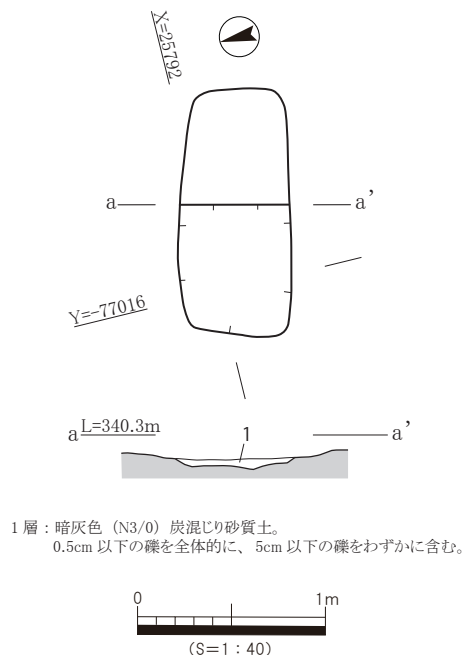


図 2-56 SX03平・断面図

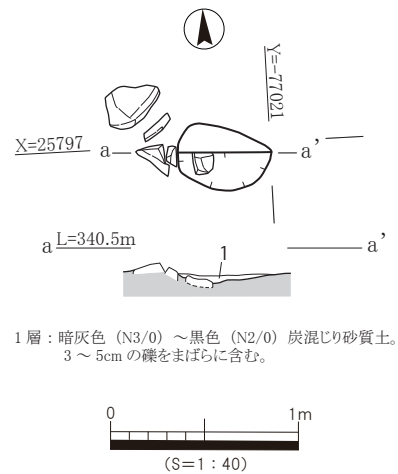


図 2-57 SP01平・断面図

SP01（図 2-57）

調査区中央部付近で検出された。平面円形で、径 32～48cm 程度の浅い窪み状遺構である。基盤整地層を掘りこんで形成されており、埋土は暗灰色～黒色の炭混じり砂質土であった。

SP01 付近出土遺物（図 2-59）

627 は SP01 付近の基盤整地層上面から出土した土師質土器杯の口縁部片である。灰白～浅黄橙色を呈する。

SW003-1 トレンチ（図 2-53、2-60）

SW003-1 と造成の関係を把握するためにトレンチを設定した。薄く堆積した砂質土を除去すると基盤整地層の上面が検出された。さらに SW003-1 石積み天端付近まで掘削し、調査を終了した。一般的に石積みを普請する際には、基底部から石を積んでいくために、法面部を掘削する工程がある。これを根切りといい、石積みの天端付近で石積みと並行するように根切りのラインが検出されることがある。今回トレンチを設定した SW003-1 では、根切りのラインが検出されなかったため、根切りの工程を行っていないものと判断でき、平坦部の造成と同時に石積みが形成されたと考えられる。

SW003-1 トレンチ出土遺物（図 2-61）

628 は造成土中から出土した土師質土器杯もしくは皿の底部片である。器壁は薄く、にぶい橙色を呈する。

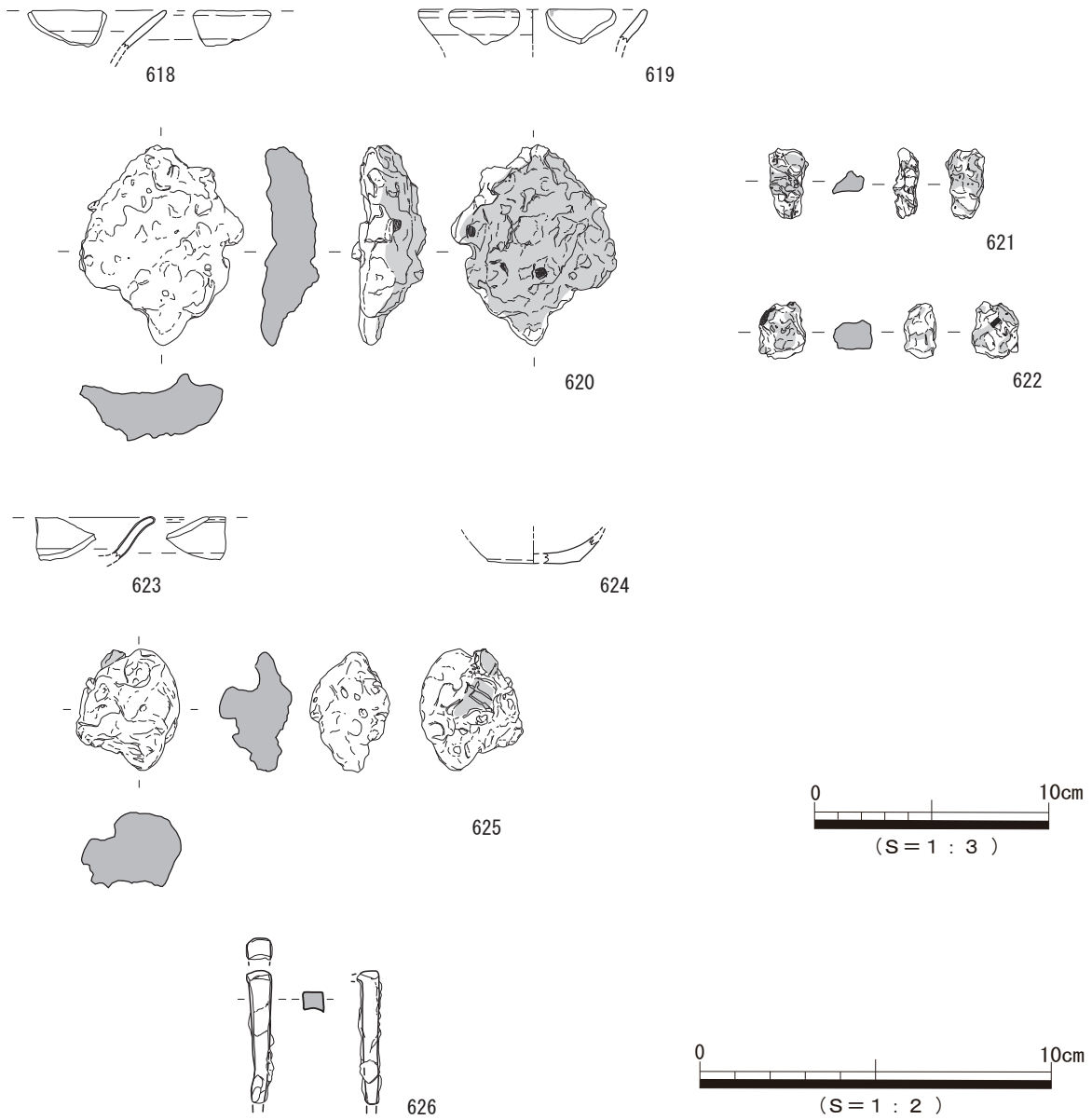


図 2-58 S X O 3 埋土及び周辺出土遺物

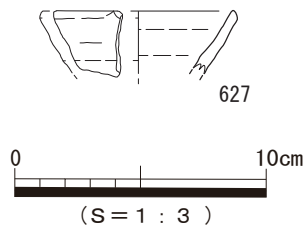
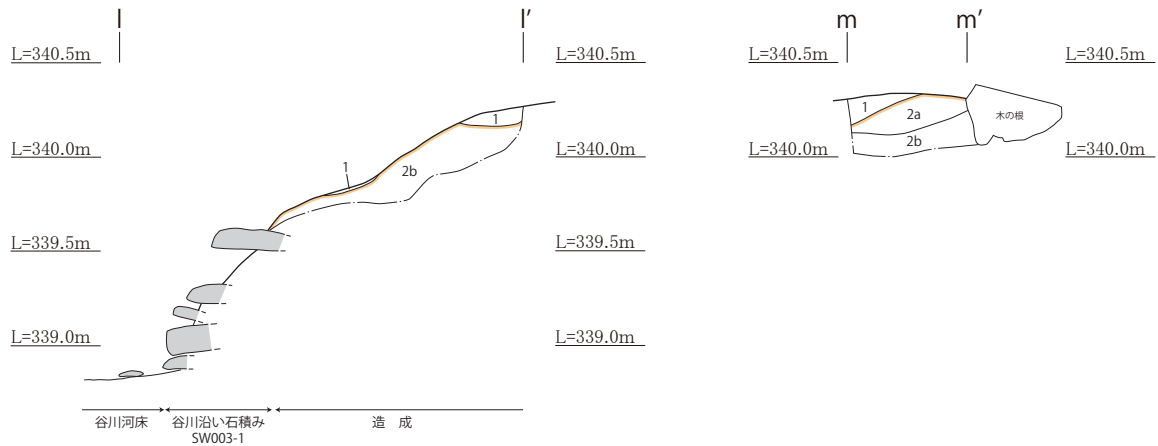


図 2-59 S P O 1 付近出土遺物



1層：黄灰色（2.5Y4/1）砂質土。1cm以下の礫を多く含む。自然堆積層。
 2a層：にぶい黄橙色（10YR6/4）礫混じり砂質シルト。1cm以下の礫を多く含む。しまりあり。基盤整地に伴う造成土。
 2b層：にぶい黄橙色（10YR6/4）礫混じり砂質シルト。0.5～1cmの礫を含む。しまり強い。基盤整地に伴う造成土。



図 2-60 SW003-1 トレンチ断面図

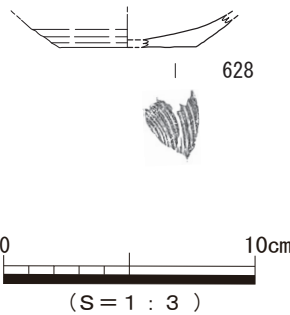


図 2-61 SW003-1 トレンチ出土遺物

SW002 トレンチ（図 2-62、2-63）

Ⅲ区の北東部、Ⅱ区との境界付近に位置するSW002上面に設定したトレンチである。SW002と造成の状況や、塀等の遺構の有無を確認する目的で調査を行った。その結果、SW002天端付近の基盤整地層検出面で石積みに伴う根切りの痕跡が確認された。石積みの造成に伴う2層は、基盤整地層である3層とほぼ同質であることから、2層は基盤整地層根切り後の残土と考えられる。遺物の出土はなかった。

SW002 北側トレンチ（図 2-62、2-64）

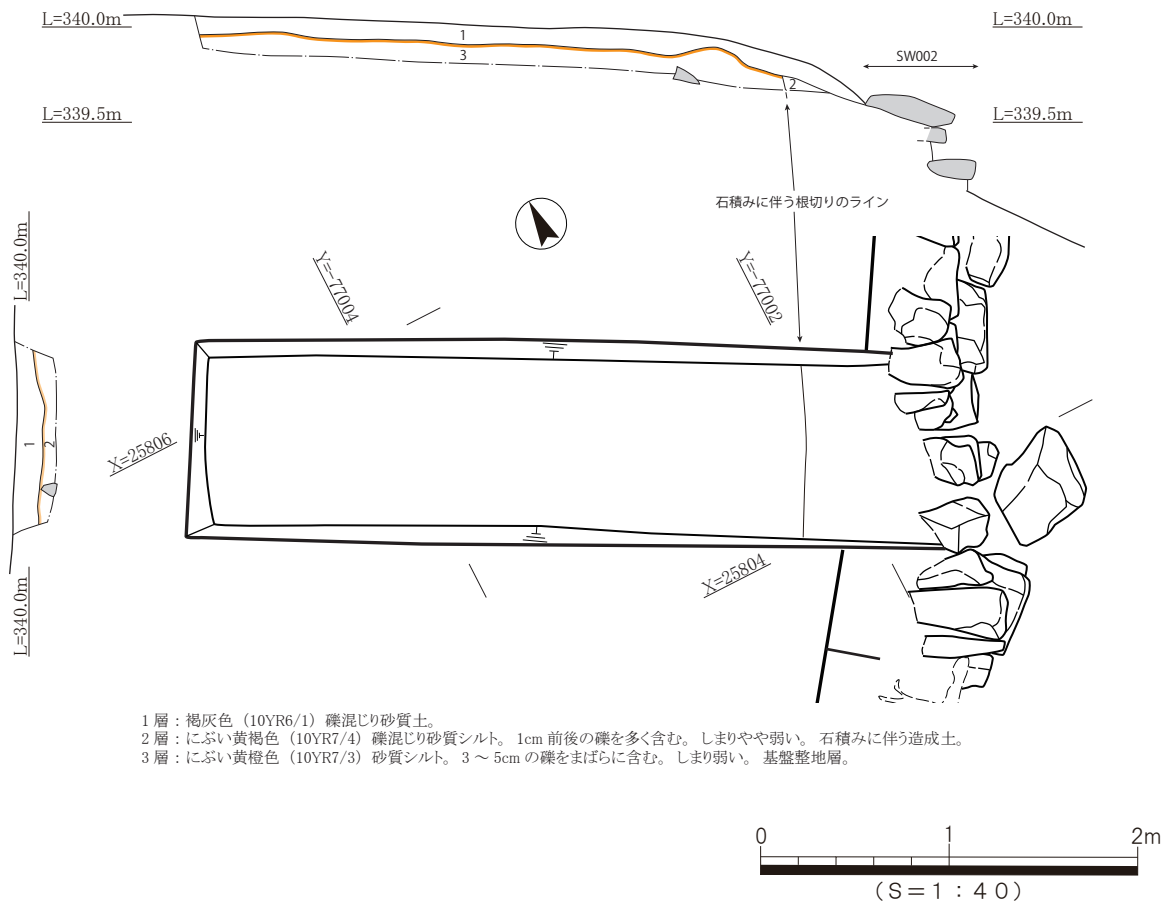
SW002 トレンチのさらに北側にトレンチを設定したが、遺構は検出されなかった。

SW002 北側トレンチ出土遺物（図 2-65）

629 は中国産天目茶碗の口縁部片である。緻密で硬質な胎土をもつ。630 は青磁瓶の一部と考えられる。いずれも基盤整地層上面からの出土であるが、トレンチとの位置関係から元々はⅡ区本堂地区に伴っていた可能性がある。

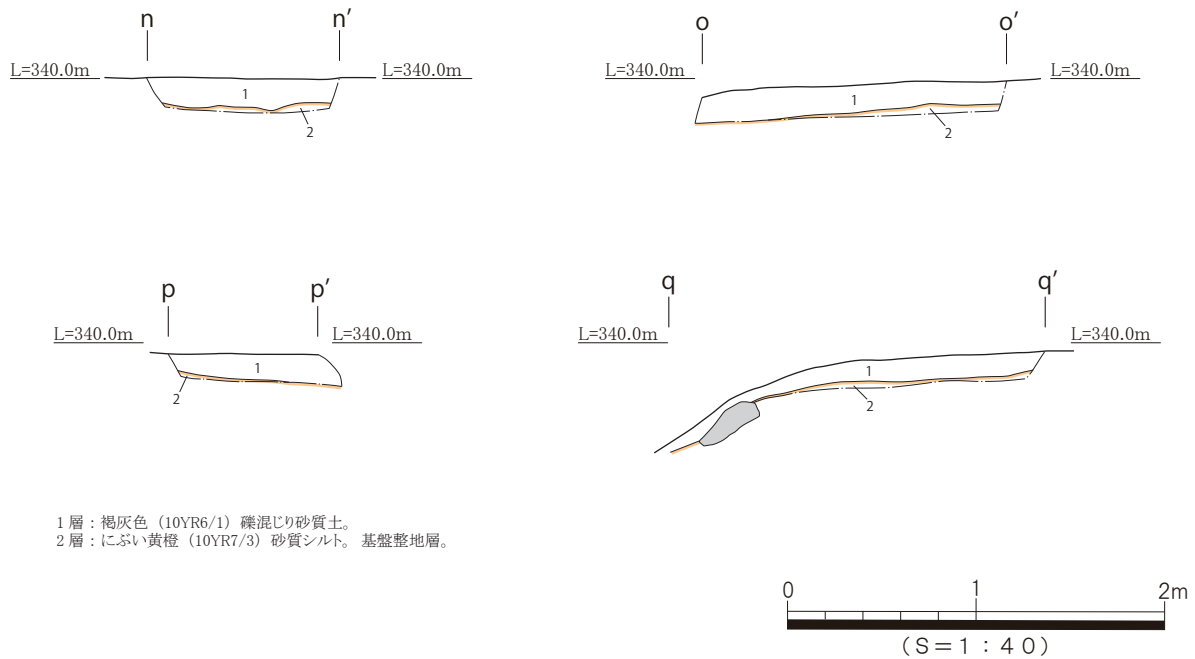


図 2-62 SW002 トレンチ位置図



- 1層：褐灰色（10YR6/1）礫混じり砂質土。
- 2層：にぶい黄褐色（10YR7/4）礫混じり砂質シルト。1cm 前後の礫を多く含む。しまりやや弱い。石積みに伴う造成土。
- 3層：にぶい黄褐色（10YR7/3）砂質シルト。3～5cm の礫をまばらに含む。しまり弱い。基盤整地層。

図 2-63 SW002 トレンチ平・断面図



- 1層：褐灰色（10YR6/1）礫混じり砂質土。
- 2層：にぶい黄橙（10YR7/3）砂質シルト。基盤整地層。

図 2-64 SW002 北側トレンチ断面図

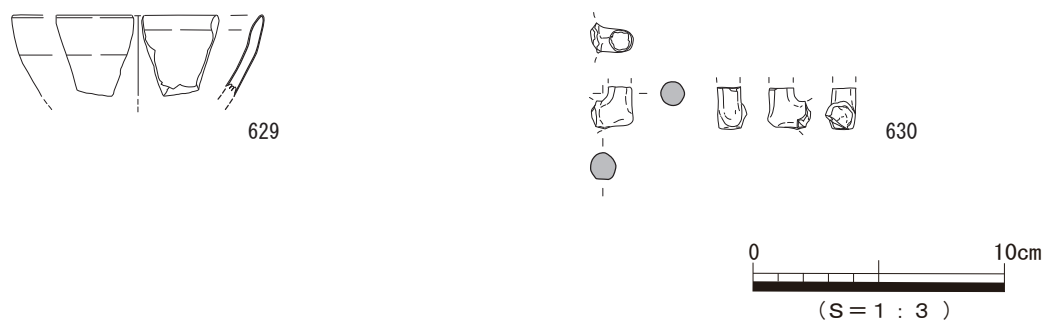


図2-65 SW002北側トレンチ出土遺物

(5) III区庭園地区の遺構変遷

ここまで個別に報告してきた平坦部AIII区の遺構について、現在発掘調査中の観音堂跡（平坦部A-2）の所見も一部交えてその変遷を確認しておく。等妙寺開山期をI期とすると以下のように大きく3段階に整理できる。

①前I期（プレ等妙寺期）

等妙寺開山以前の段階である。堂宇伽藍などの建物跡は未検出であるが、14世紀代の土器が伴うにぶい黄褐色造成土層下より検出された水路状遺構が該当する（図2-66）。池SG01周辺や滝SX02水落付近岩盤で採取された炭化材の放射性炭素年代測定では、平安時代中期～鎌倉時代という古い年代観が複数示されている（第4章参照）。当該期の遺物が得られていないことに注意を払う必要はあるものの、池や滝の造成など周辺での活動が等妙寺開山を遡る可能性に示唆的である。

加えて、現在発掘調査中の観音堂跡（平坦部A-2）にて検出された、護摩跡と考えられる炭・焼土集中遺構（平坦部A-2のSX01・02）の炭化材は総じて鎌倉時代の年代を示し、同一面に伴う礎石も1石検出されている。本書後掲の附論で久保智康氏が指摘するように、池SG01や滝SX02、巖崖、観音堂周辺が等妙寺開山以前にすでに信仰空間として成立していたのかもしれない。

②I期（等妙寺開山期／14世紀代）

等妙寺開山段階で、主に14世紀代と考えられる。池SG01、池状遺構SX01、滝SX02、石積みSS05、土手状遺構、石組遺構、堤状遺構、水路遺構、階段状遺構、SB05、塀SA01・02、広場SH、排水遺構などが該当し、基本的にはII区本堂地区で検出された旧本堂跡（SB01）建物軸に沿った施設配置がなされる（図2-67）。観音堂跡（平坦部A-2）で検出された礎石建物跡もこれと共通する軸線で築かれており、同時期の可能性が高い。

また当期は石組遺構周辺でみられるにぶい黄褐色礫混じり砂質シルトによる造成や、石積みSS05など比較的丁寧な普請が特徴である。池状遺構SX01縁石のような石を立てる技法も多用されている。

③II期（等妙寺革新期／15世紀後半～16世紀代）

II期はI・II区の本坊建物跡（SB03）や新本堂跡（SB02）の整備と時期を同じくする、15世紀後半～16世紀と考えられる。前段階からの施設を用いながらも、SB04や出島状遺構などII

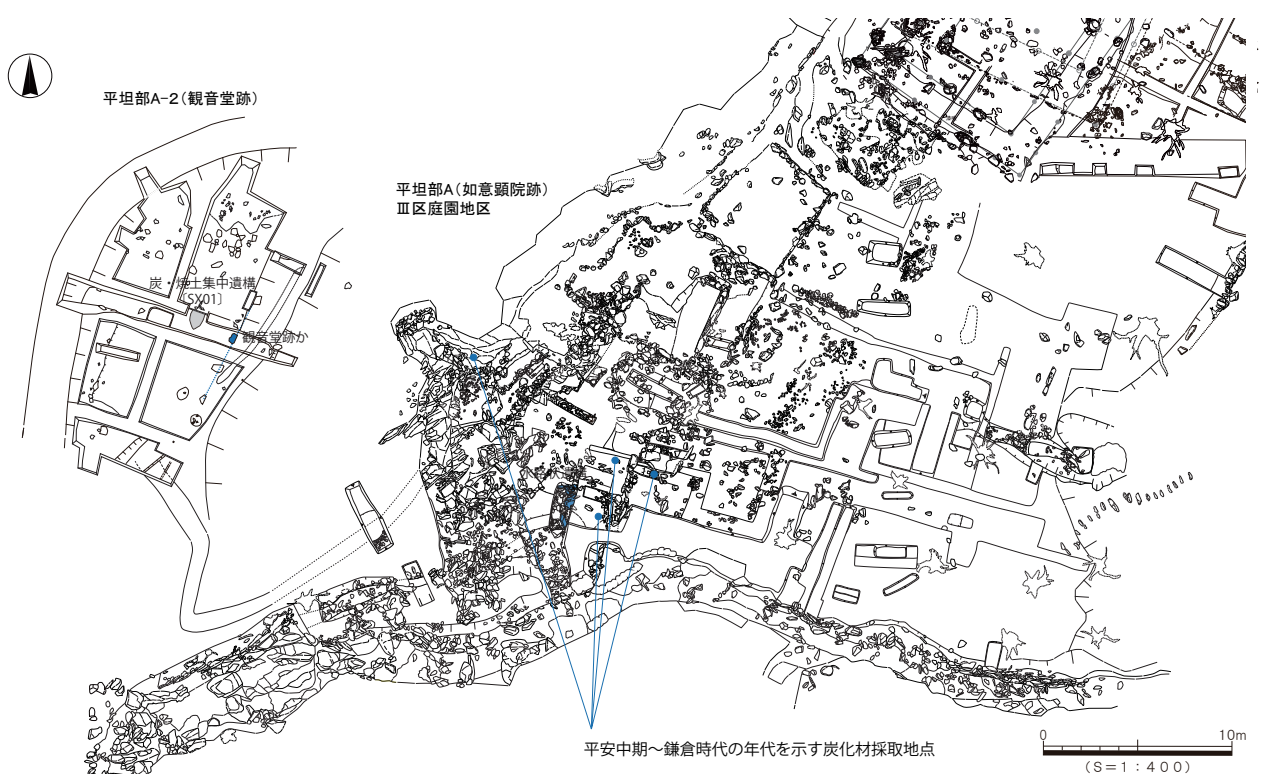


図 2-66 前 I 期（プレ等妙寺期）の平坦部A Ⅲ区庭園地区周辺

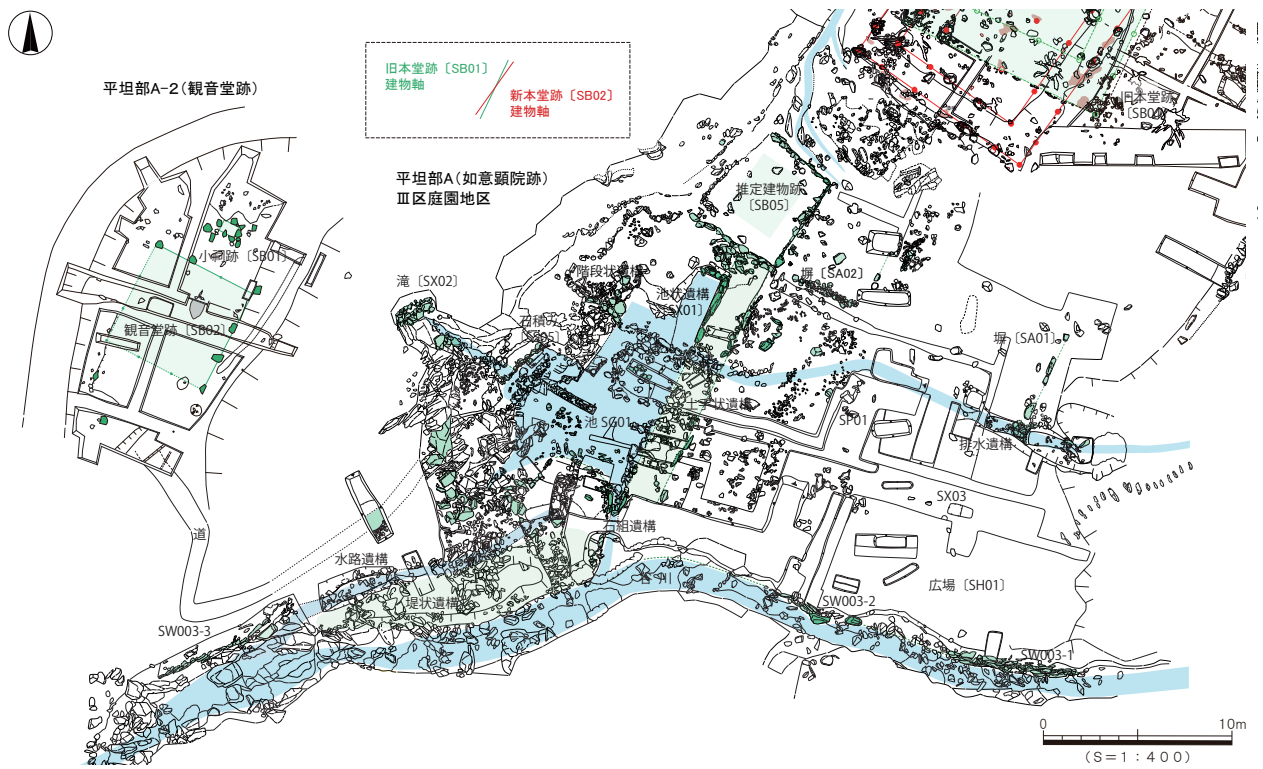


図 2-67 I 期（開山期／14 世紀代）の平坦部A Ⅲ区庭園地区周辺

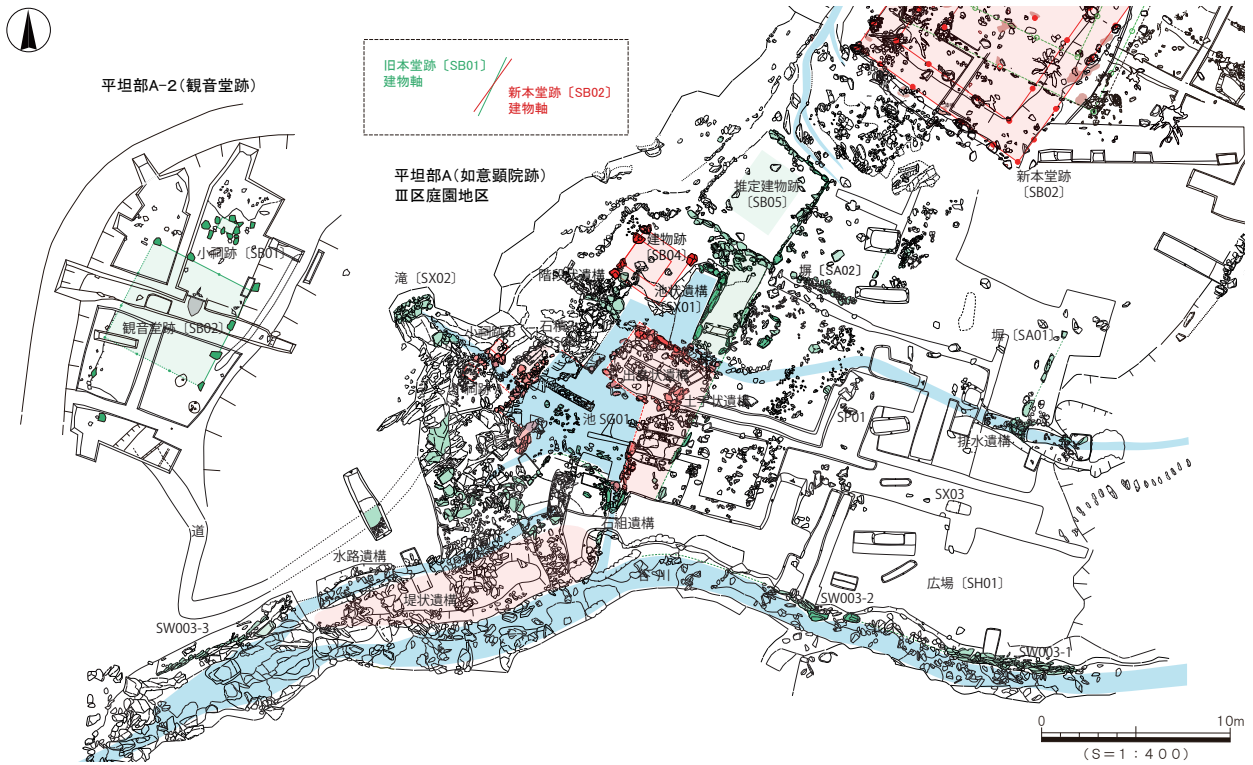


図2-68 II期(革新期/15世紀後半～16世紀代)の平坦部A III区庭園地区周辺

区本堂地区検出の新本堂跡 (SB02) 建物軸に沿った施設が新たに整備される (図2-68)。そのほか小祠跡A・B、石積みSS06が当期に該当し、堤状遺構も改修された可能性がある。土手状遺構は前段階よりも西方向に拡幅されている。特に石積みSS06や出島状遺構などI期に比して粗雑な造成が目立つ。出島状遺構の造成土は円礫を含む砂質粘性土であることから、I～II期の間 (II期整備直前か) に発生した洪水堆積土を用いた可能性も考え得る。

(6) III区庭園地区表採及び出土遺物

土師質土器 (図2-69～2-74)

631～661はIII区表採・出土遺物の土師質土器杯・皿のうち、橙色の発色で、器壁が比較的ぶ厚いものである。胎土は砂粒が目立つものも多く、時期は16世紀代を中心とする年代が与えられる。638は小皿で、外面には単位の細かいヘラ状工具による回転ナデ痕が認められる。639は接合によりほぼ完形となる杯で、見込み中央部が突出しており、肥厚化が顕著である。内外面のナデ痕はそれほど目立たない。651～661は全体形状は不明ながらも、底部からの立ち上がりがきつい。底部切り離しは可能性のあるものを含めて、静止糸切りが多くみられる (631～634、640、646～648、650、652、653、655～658、660、661)。631、632、635、637～639、643、645、648、652、656、657は滝SX02裾部やその周辺にて採集・出土したもので、元は小祠跡A・Bに伴っていたものと思われる。

662～671は杯で、灰色～浅黄橙色を呈した白色系のものである。器壁は薄いものが多い。662は箱型に近い形状で、664、665は逆台形状になると思われる。666のように外反気味に口縁部にいたるものもある。668は見込みに単位の大きいナデが施され、中央部が小さく突出している。670は見込

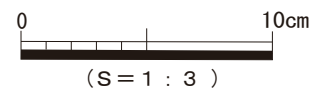
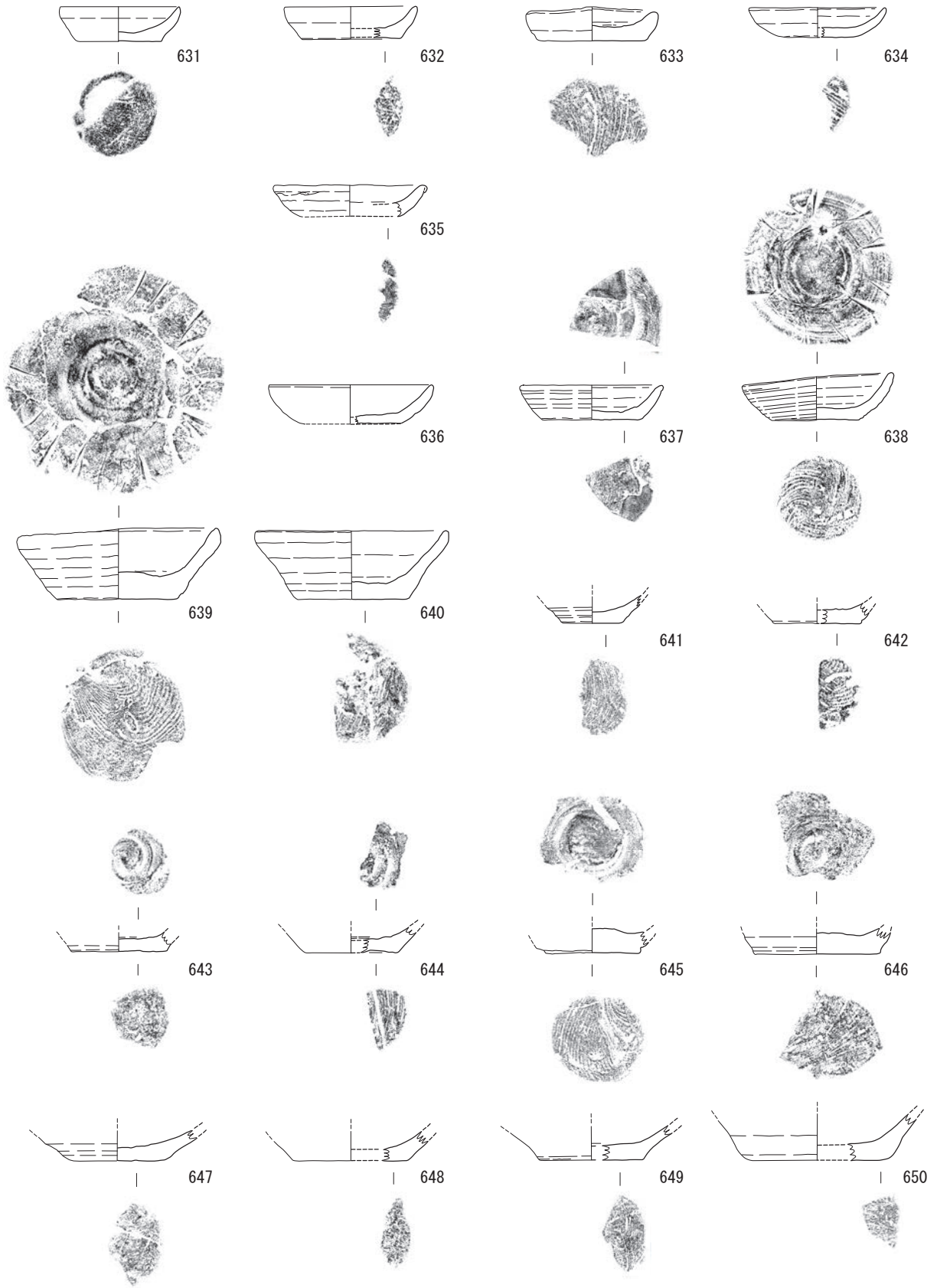


图 2-69 III区庭園地区表採・出土遺物 土師質土器 1

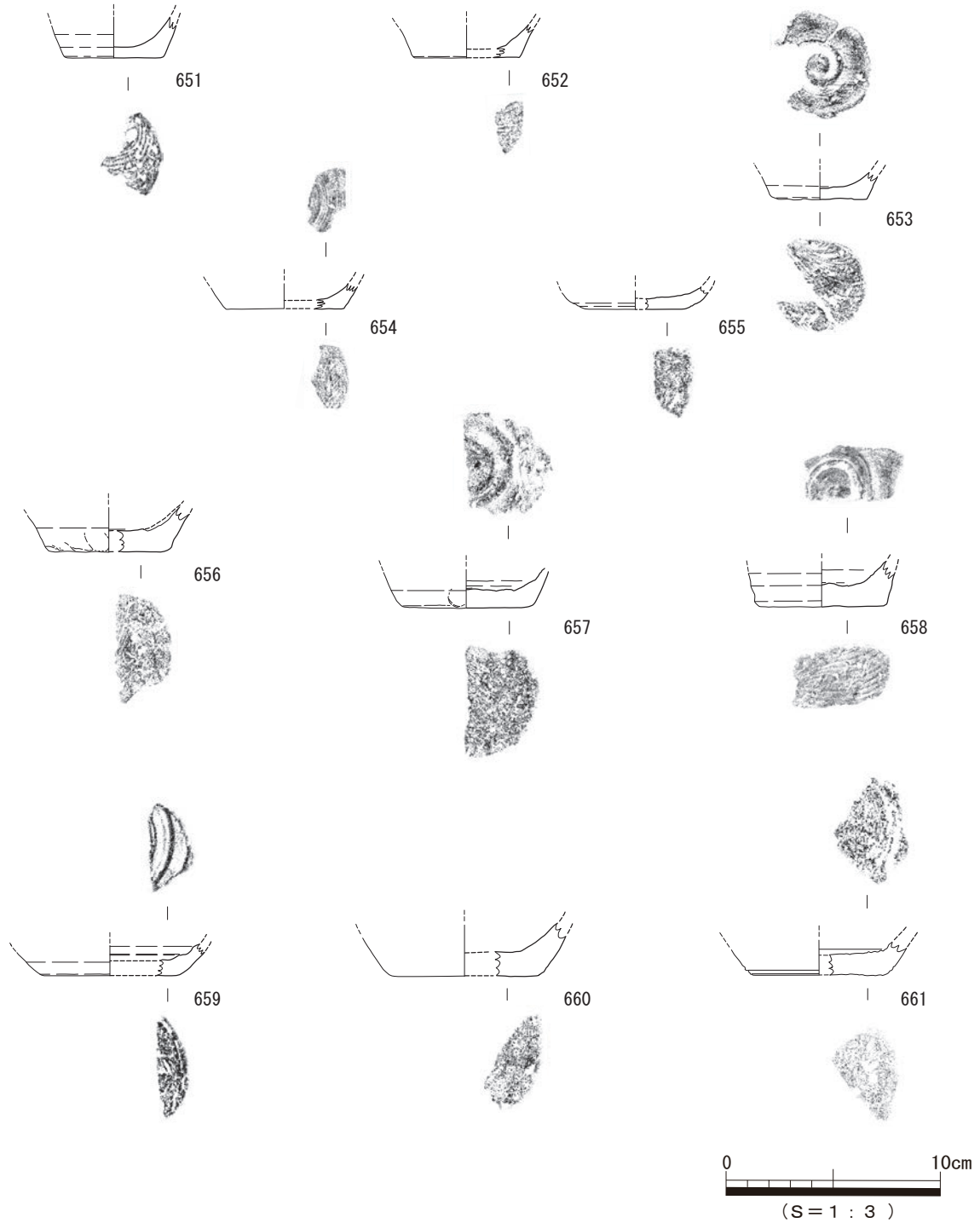


图 2-70 Ⅲ区庭園地区表採・出土遺物 土師質土器 2

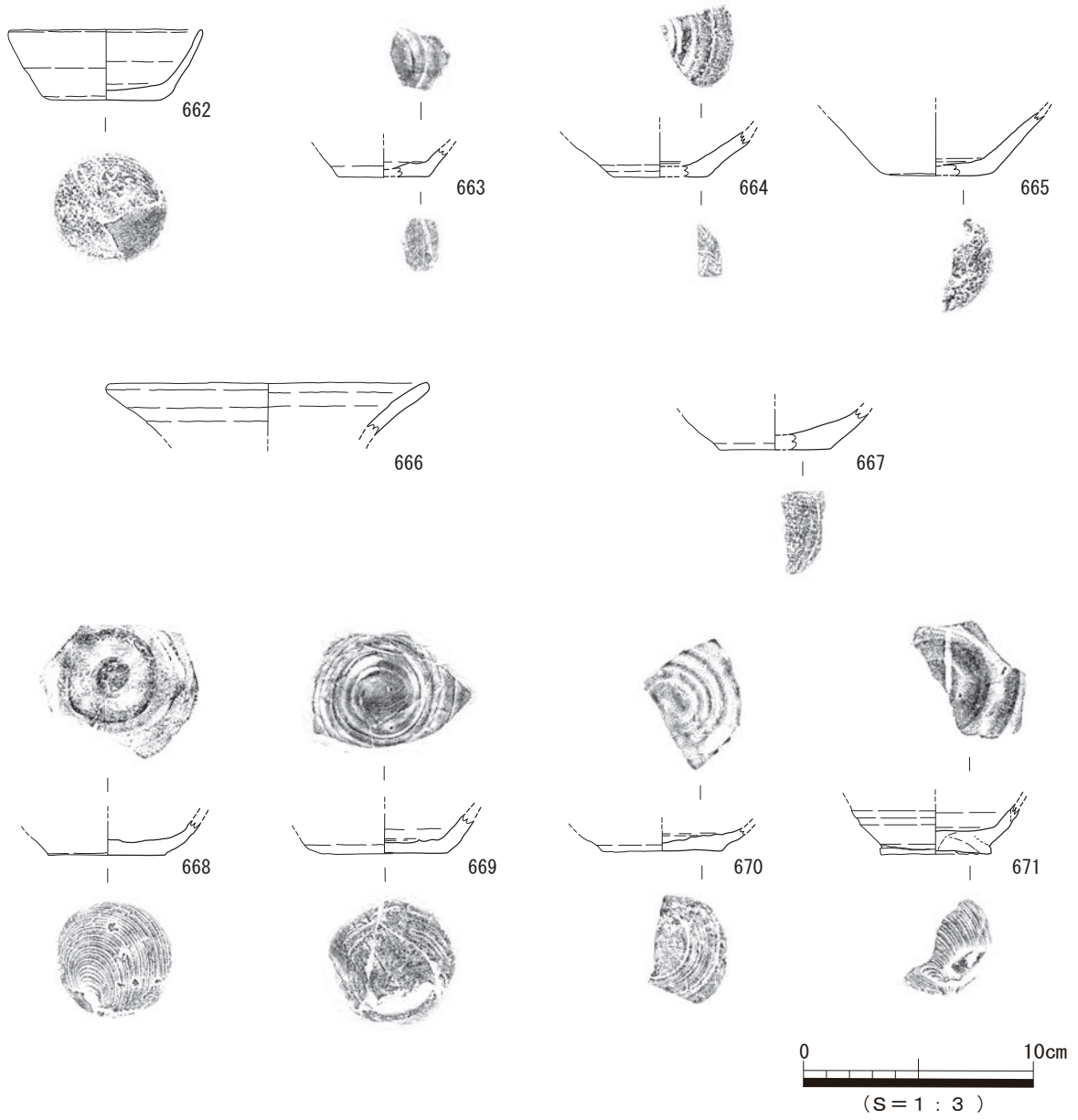


図 2-71 Ⅲ区庭園地区表採・出土遺物 土師質土器 3

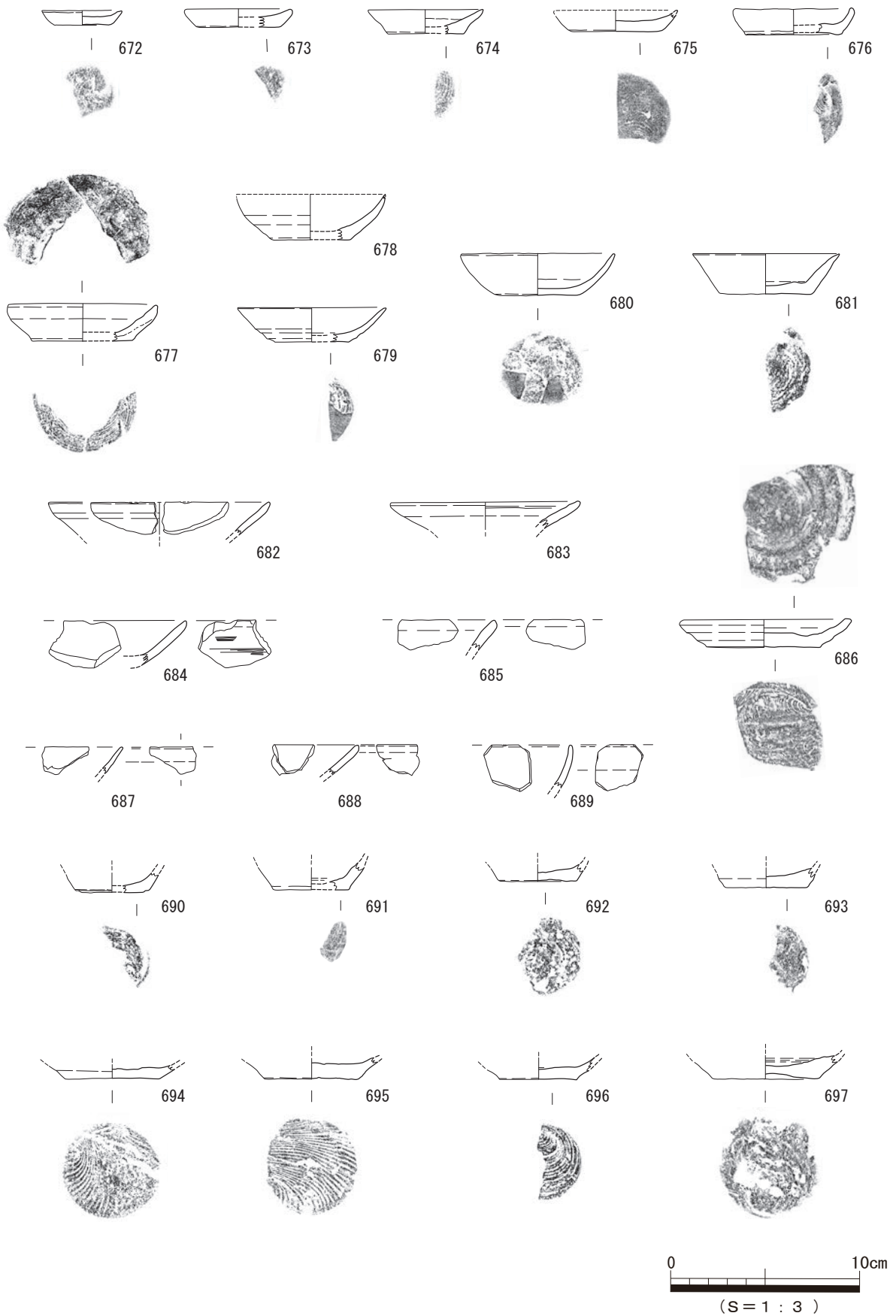


图 2-72 Ⅲ区庭園地区表採・出土遺物 土師質土器 4

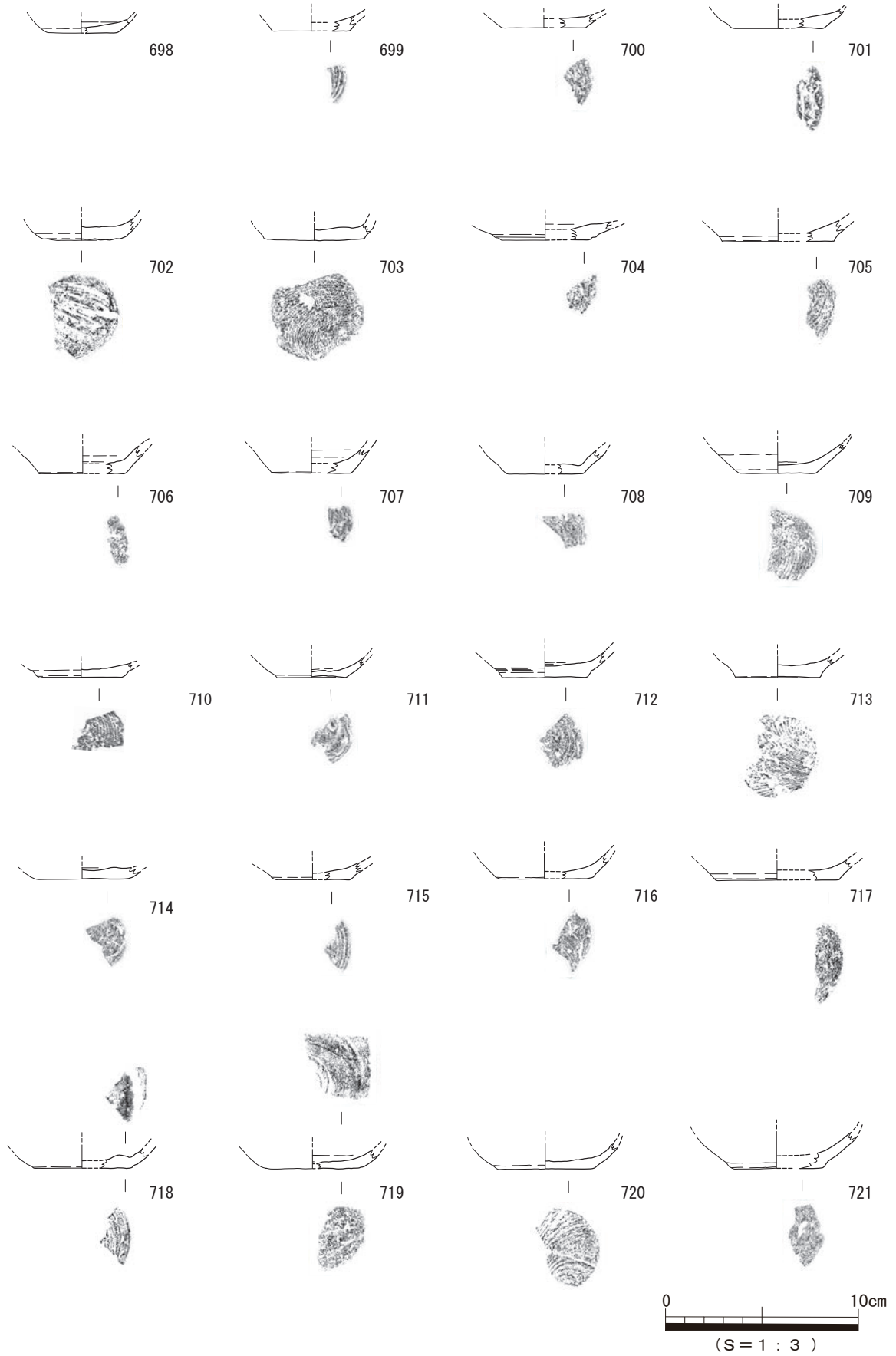


图 2-73 Ⅲ区庭園地区表採・出土遺物 土師質土器 5

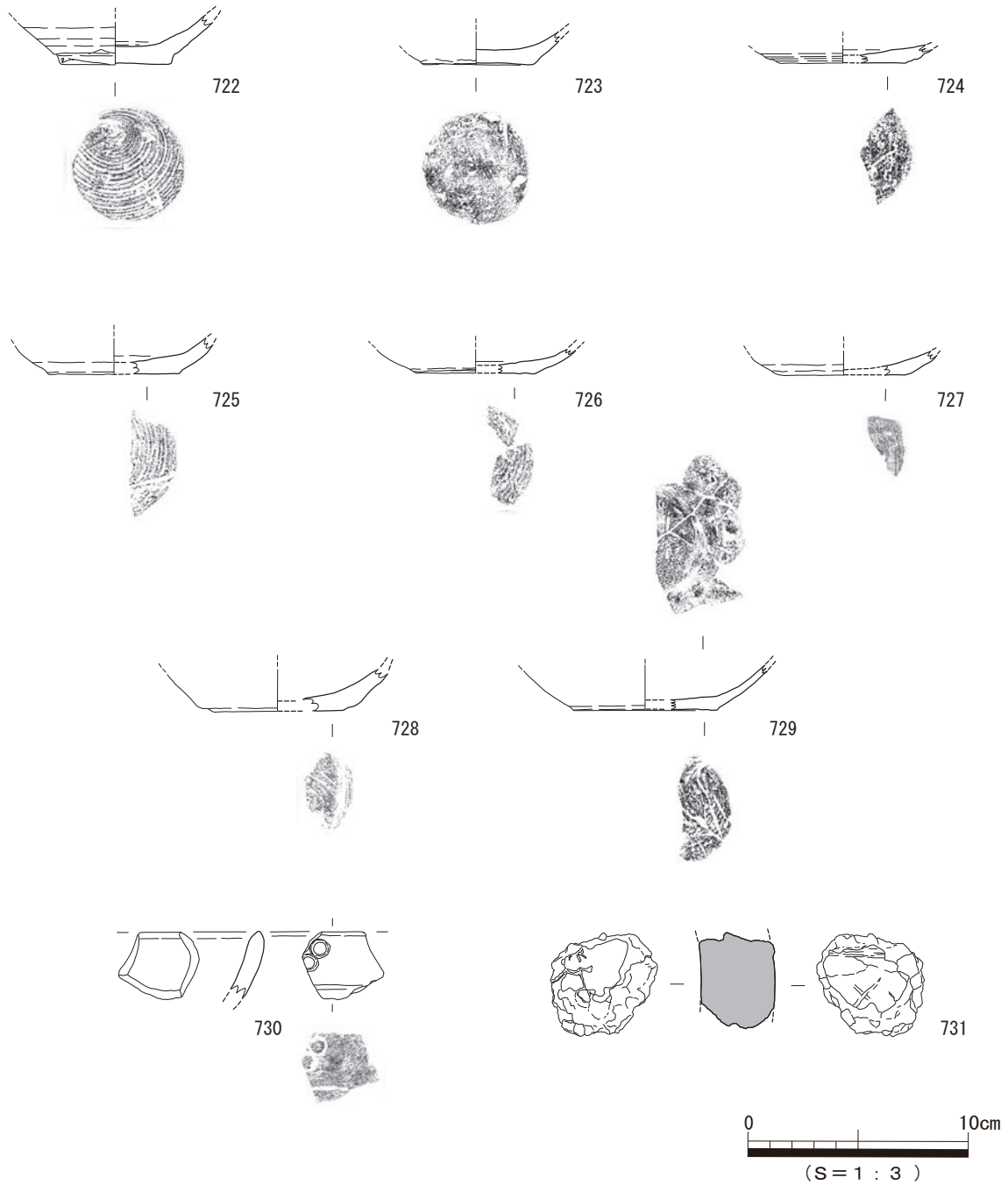


图 2-74 Ⅲ区庭園地区表採・出土遺物 土師質土器 6

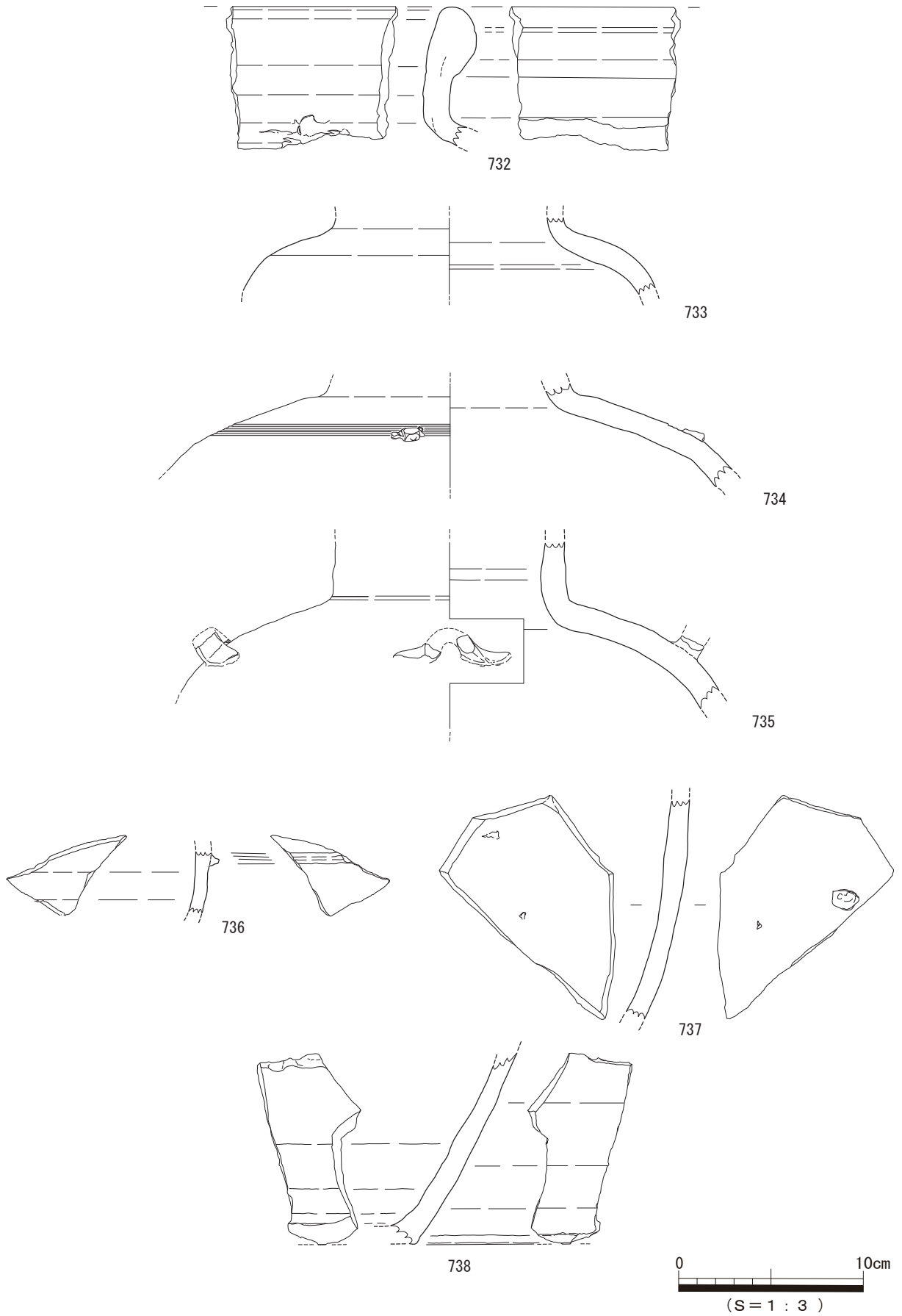


図 2-75 Ⅲ区庭園地区表採・出土遺物 備前焼

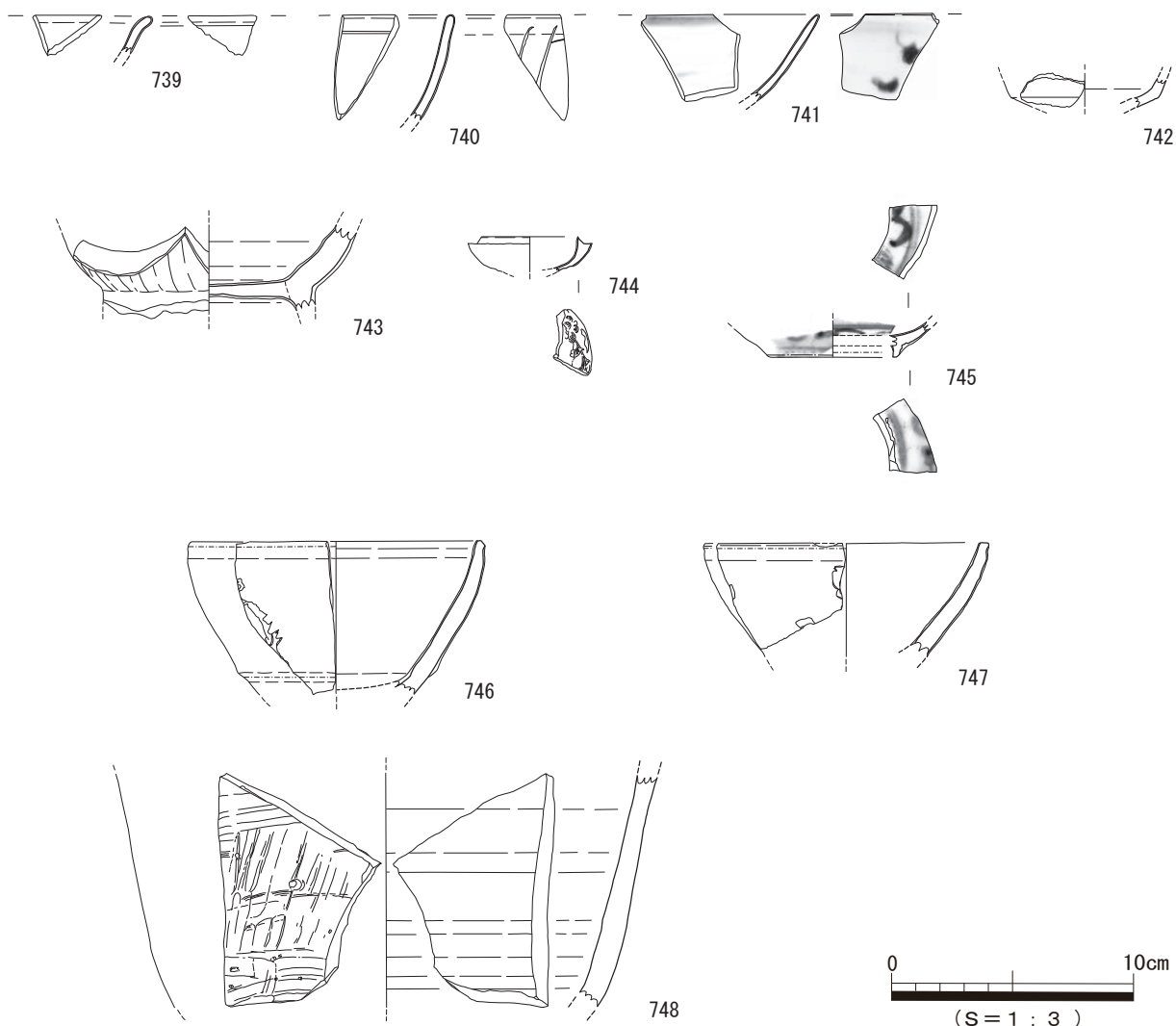


図 2-76 Ⅲ区庭園地区表探・出土遺物 貿易陶磁器

みにヘラ状工具による回転ナデ痕を残し、煤が付着している。底部切り離しは 664 が不明のほかは、すべて回転糸切りである。

672～676 は小皿である。677～681、686 は皿で、686 の見込み中央部は膨らみをもつ。682～685、687～689 は杯の口縁部で、687 は極めて薄い。689 は口縁下で変換し、上方へ立ち上がる。690～729 は皿もしくは杯の底部片である。690～693 は底部からの立ち上がりがややきつい。694、695 は底部から大きく開く形状で、橙色を帯び、底部切り離しは静止糸切りによる。709 は見込み中央部に、化粧土と思いき薄い膜状の光沢をもつ。722 は浅黄橙色を呈する杯で、底部を円盤高台状に突出させている。円盤高台であれば 13 世紀代まで遡り得るが、既存の分類で杯 D 類や杯 C 類とする資料中にも底部をわずかに突出させるものがあり、断定はできない。なお、672～729 の底部切り離しは大方が回転糸切りである。

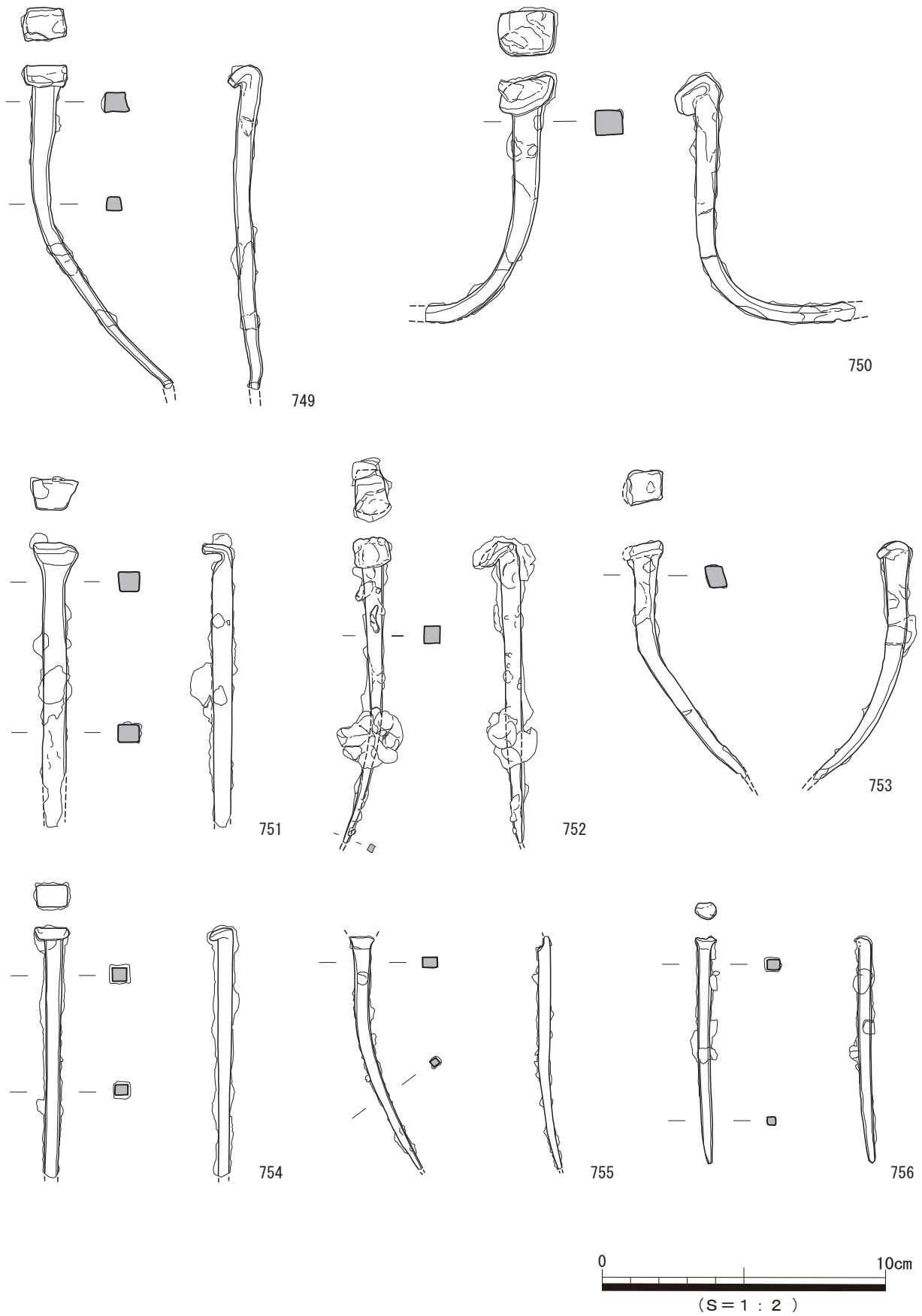


图 2-77 Ⅲ区庭園地区表採・出土遺物 金属製品 1

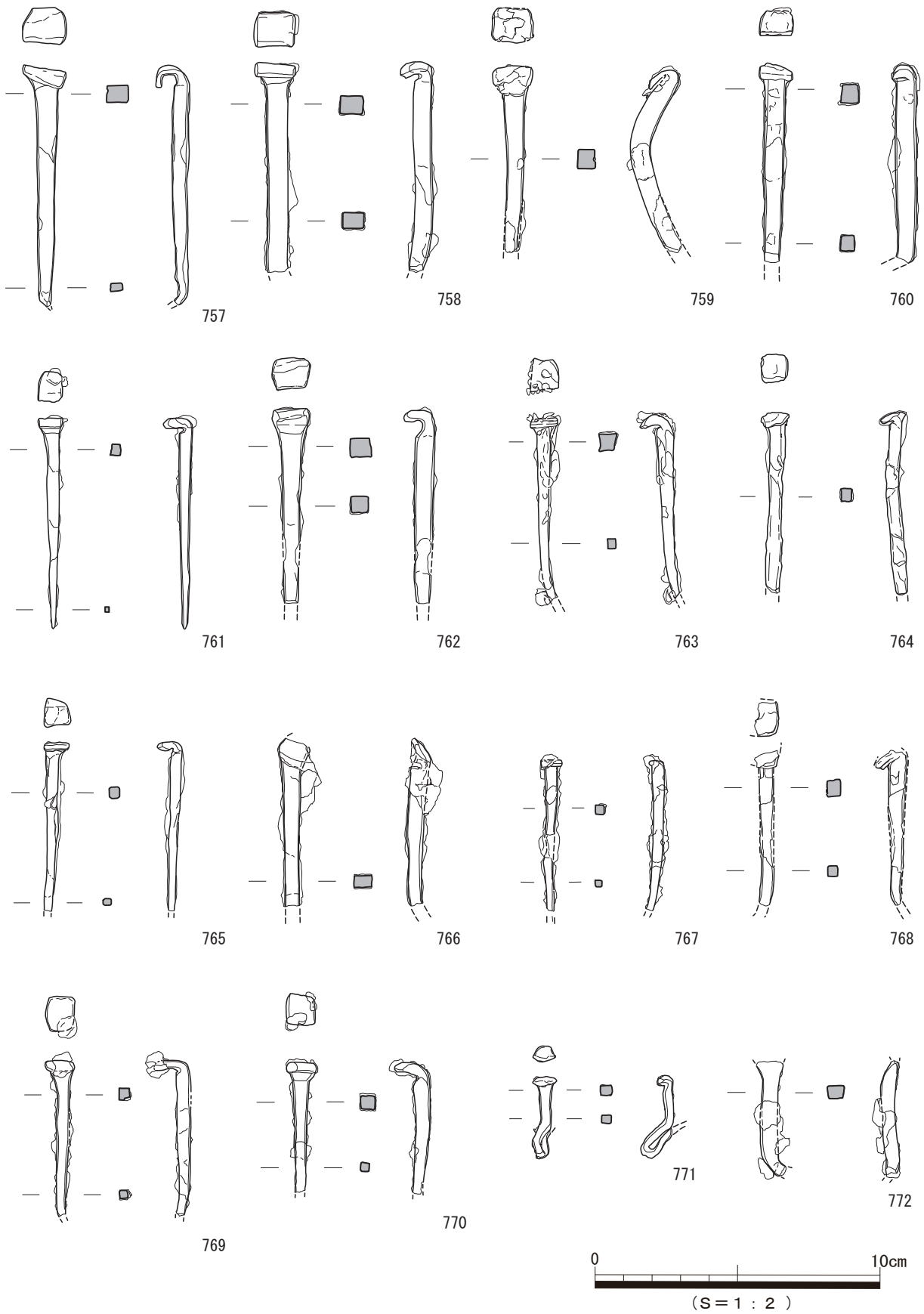


图 2-78 Ⅲ区庭園地区表採・出土遺物 金属製品 2

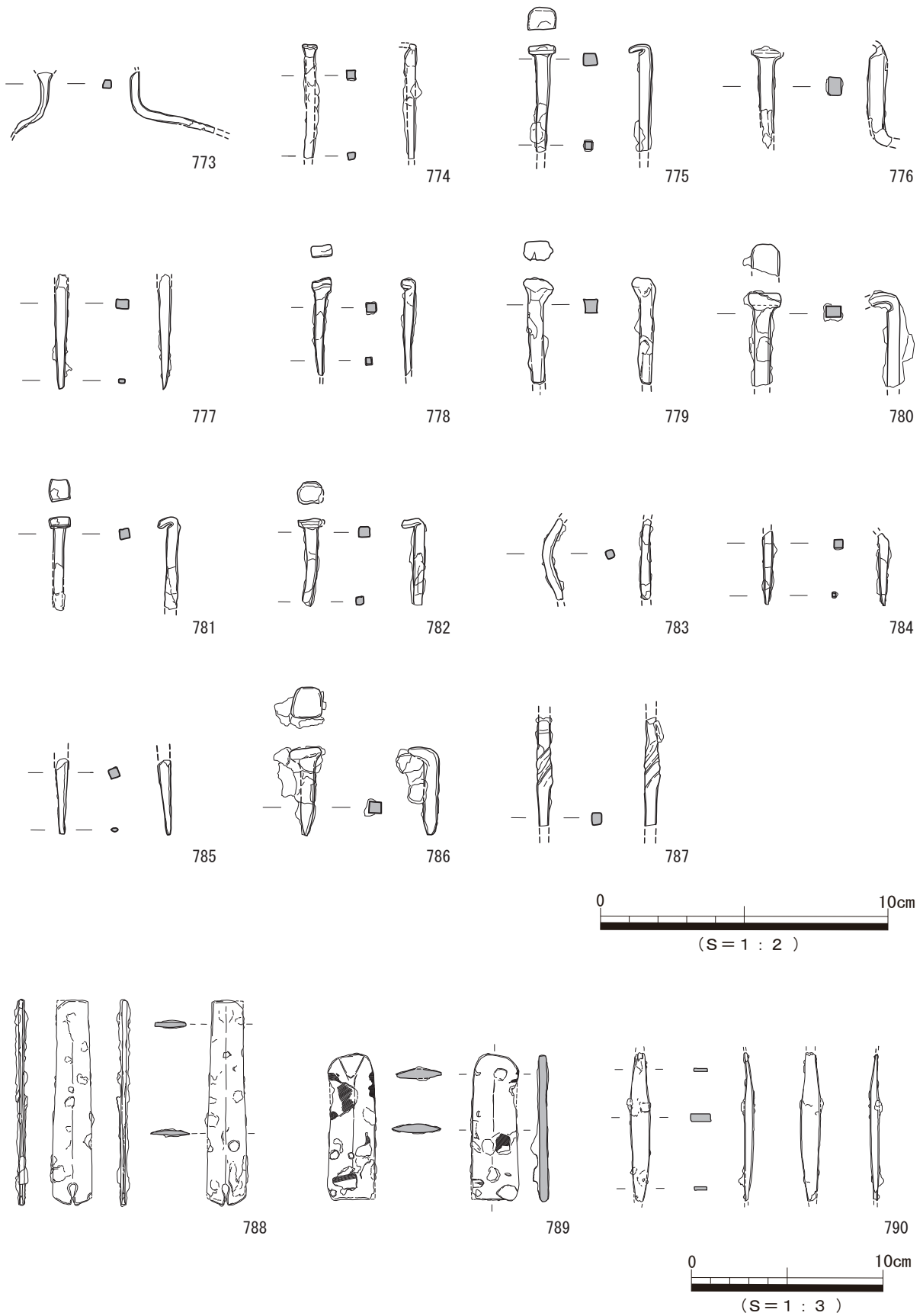


图 2-79 Ⅲ区庭園地区表採・出土遺物 金属製品 3

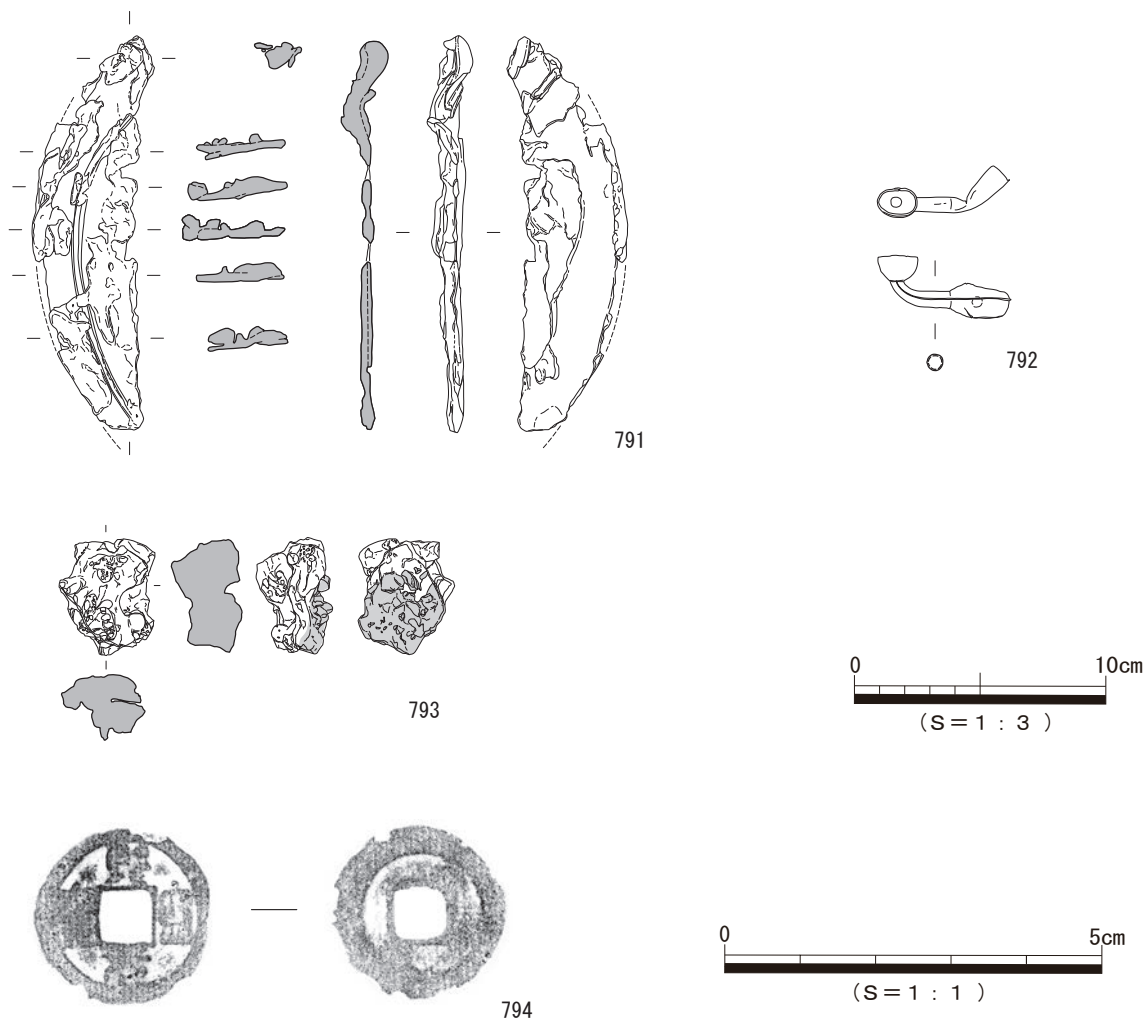


図2-80 Ⅲ区庭園地区表採・出土遺物 金属製品4

瓦質土器・土製品 (図2-74)

730は瓦質土器の火鉢で、焼成があまく橙色を呈している。外面には竹管により円形のスタンプ文が施されている。731はナデにより調整された面をもつことから、大型の土製品と思われる。被熱により赤化している。

備前焼 (図2-75)

732は甕で、断面長楕円形の玉縁口縁をもつ。723～725は壺の肩部付近の破片である。723にはぶい褐色を呈し、外面には明オリーブ灰色の自然釉がみえる。734は灰白色を呈した須恵器質な焼成で、外面には5条の櫛描き平行線が帯状に廻らされていることから、間壁Ⅲ期後半(14世紀代)に該当しよう。735は粘土紐を貼りつけた横耳をもつ、四耳壺あるいは三耳壺である。胎土はやや砂粒が目立ち、自然釉が斑状にかかっている。736は1条の突帯が貼りつけられており、水屋甕と考えられる。737、738は壺もしくは甕で、灰黄色～灰色を呈す。737は自然釉により表面が銀化している。

貿易陶磁器（図2-76）

739、740、743は青磁である。739は無文外反碗で、オリーブ灰色を呈したガラス質の釉薬が薄くかかる。740は直口碗で、外面に線描文が施されている。743は瓶と考えられ、外面には幅の広い丸ノミ状工具で蓮弁文が施されている。全体に明緑色の良質な釉がかかるが、内面は外面に比して薄い。胎土は緻密で灰白色を呈する。底部は別つくりで、あとから底板を貼り付けている。742は福建省邵武四都窰産とされる腰折れ器形の白磁杯で、内外面に細かな貫入が認められる。745は青白磁合子である。薄作りで、型によって細かな浮文が施されている。受口部及び畳付は露胎で、畳付の施釉された部分との境は赤色味を帯びている。741、745は青花磁である。741はいわゆる蓮子碗で、外面に唐草文と思しき文様、内外面口縁下に2重圏線が施されている。745は端反り器形の皿で、外面唐草文、見込みに玉取獅子文の一部がみられる。高台畳付の釉は剥ぎ取られている。746、747は中国産天目茶碗である。白色粒を多く含む黒く硬質な素地に、黒く厚いガラス質の釉がかかる。748は中国産と考えられる褐釉壺である。焼成があまく、橙色～にぶい橙色を呈している。

金属製品（図2-77～2-80）

749～787はすべて折釘であり、頭部を薄く延ばして折り曲げられている。長さ10cm前後の大型（749～753）、5～8cm程度の中型（754～770）、4cm以下の小型（771～787）に大別される。749や750は足部の厚みの差が顕著で、頭部付近は厚く、先端部にかけて鋭く尖る。787はねじりが認められ、錐刃の可能性もある。

788は短剣状の鉄製品である。諸刃をもち、中央には鎬が走る。先端部は欠損している。基部は丸くおさめ、抉り込んで目釘孔をつくっているが、機能は不明である。789はヤスリであり、788と同様に諸刃をもち、中央に鎬をもつ。表面は赤錆に覆われているが、一部に擦り目がみられ、鎬と斜行する。その目は0.9cmに15本観察される。裏面の擦り目は表と反対の向きである。790は折り曲げる前の銚と考えられる。両端は薄く尖り気味に延ばされており、先端部は欠損している。

791、792は銅製品である。791は復元径22.0cmを測る大型品である。外縁に界圏が廻り、何らかの文様が施されている。奉納鏡の可能性も考えられるが、強く被熱を受け熔解しており断定できない。池SGO1にほど近い、土手状遺構東側から出土した。792は煙管で、雁首の膨らんだ部分が潰れ、折れ曲がっている。近世以降の所産であろう。

鉄滓（図2-80）

793は鍛冶滓である。ガラス質滓で、ほとんどがガラス分であり、粘土中の珪酸分が溶結したものである。破面には発泡痕跡が観察される。下面には1～7mmの小礫が多く付着している。重量は23.9gを量る。

銭貨（図2-80）

794は熙寧元寶である。縁の一部が欠けている。

4 その他の遺物（地区・地点不明）（図 2-81）

平坦部Aで表採・出土した遺物のうち、地点が不明なものを報告する。795は土師質土器の皿か杯である。橙色の発色で、薄くつくられており、底部は回転切り離しによる。796、797は備前焼播鉢である。796は口縁部内側に稜をもち、端部が上方へ拡張されている。797は内面に斜め方向のスリメが観察される。797は青花磁の外反皿である。799は白磁皿で、体部下半は露胎である。釉には全体的に細かな貫入が認められる。800は中国産褐釉陶器壺である。外面には褐色の釉薬が薄くかかり、光沢をもつ。801は折釘で、足の先端が欠損している。残存長4.5cmを測る。

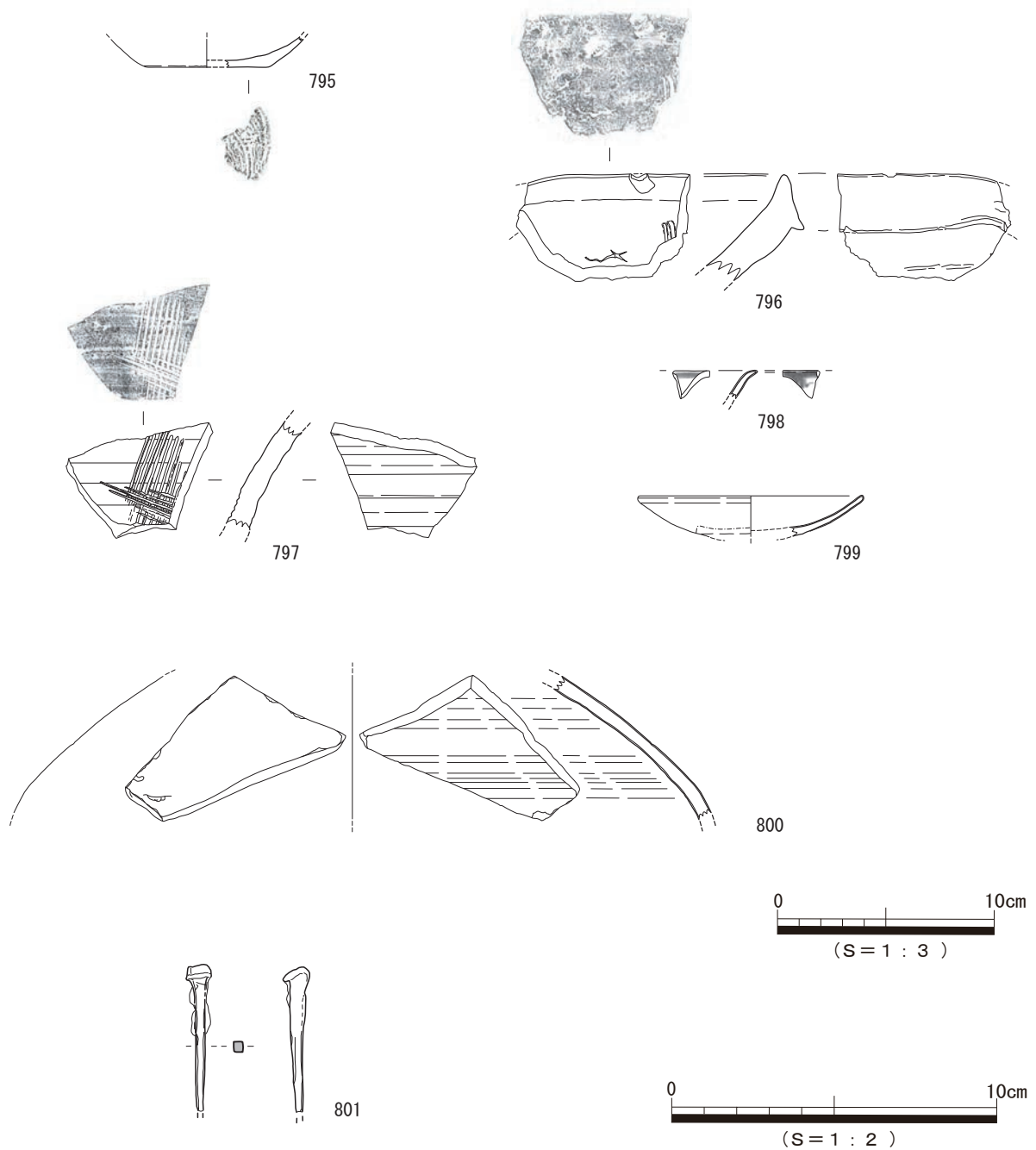


図 2-81 その他の遺物（地区・地点不明）

5 過去報告の遺物

平成10年（1998）度及び平成16年（2004）年度刊行の報告書において既報告の平坦部A表採・出土遺物についても、本報告書の地区割に基づき、改めて掲載する。

（1）平坦部A I 区本坊地区の遺物（図2-82～2-83）

802～805は土師質土器である。802は小皿で全体的に器壁が厚い。803は皿で、口縁部下にわずかな変換点を持ち、端部は尖り気味に仕上げる。にぶい橙色～浅黄橙色を呈した精良な胎土をもつ。804は皿である。橙色の発色で、ヘラ状工具による回転ナデ痕が残る。見込み中央部が突出している。805は杯の底部と考えられ、見込みに回転ナデの痕跡が観察される。外面はやや赤みを帯びており、2次被熱の可能性がある。底部切り離しは803が回転ヘラ切りで、そのほかは静止糸切りである。

806は瓦質土器甕の頸部から肩部にかけての破片である。頸部外面には縦方向のハケメが、肩部には格子タタキが認められる。焼成はあまく軟質で、亀山系の可能性がある。807は瓦質土器風炉の底部片である。上下2本の沈線内にスタンプによる雷文もしくは重画文が施されており、上部には蓮弁文がみえる。808、809は瓦質土器火鉢である。808は方形浅鉢状を呈したもので、板状の脚部を有する。体部内面及び底面には粗いハケメ状の擦痕が看取される。胎土中に白色粒が目立ち、焼成はあまくにぶい黄橙色を呈している。809は浅鉢で、底部からやや内湾気味に立ち上がり、外面には大型単体スタンプにより菊花文が施されている。口縁部には丁寧なヨコナデ、内面体部には縦方向のナデにより器面調整されている。砂粒が目立たない精良な胎土で、色調は燻しにより褐灰色～にぶい黄橙色で、断面は灰白色を呈している。

810は備前焼播鉢である。直線的な体部を持ち、口縁部は均一な厚さで上方に大きく拡張され、下端が突出している。胎土は砂粒を含まず、肌理細かい。

811は青磁腰折れの稜花皿で、内外面体部には唐草風の文様が施されている。灰色で硬質な胎土に、濃緑色の釉が厚くかかる。外底は釉剥ぎされている。812は明オリーブ灰色の釉がかかる碗の口縁部で、青磁と考えられる。内湾器形で、口縁端部はやや肥厚している。外面口縁帯には沈線文がみえ、波状文とみられる。胎土は白色～灰色で、細かな黒色粒が観察される。813、813は青磁直口碗で、線描の雷文帯が施されている。814は明黄褐色を呈しており、胎土はやや軟質である。815は直口器形の小振りな青磁碗で、外面には櫛描蓮弁文がみえる。816は青磁筒形香炉である。口縁部が内外に引き出され、上面はナデにより窪み、外面には片切り彫りによる沈線が廻る。817、818は青花磁である。817は碁笥底の皿で、畳付の釉は削られている。外面は無文であるが、見込みには海藻文、中央部には鉄分の多い土をおき、魚文を表現している。818は見込み部分がゆるやかに盛り上がる饅頭心碗で、内外面に花文が描かれている。外底には「宣徳年製」と字款が書かれている。819は水晶製の数珠玉である。

820は全長5.8cmの折釘である。821は断面が長方形の楔状金具で頭に切れ込みがある。822は錆が著しく明瞭ではないが、断面がほぼ方形の鉄棒を曲げて毛抜状を呈している。鉄棒の幅は最大0.6cm、先端は0.45cmであった。何に使用されたものかは不明である。823は鎚である。長さ6.3cm、幅1.5cmを測る。

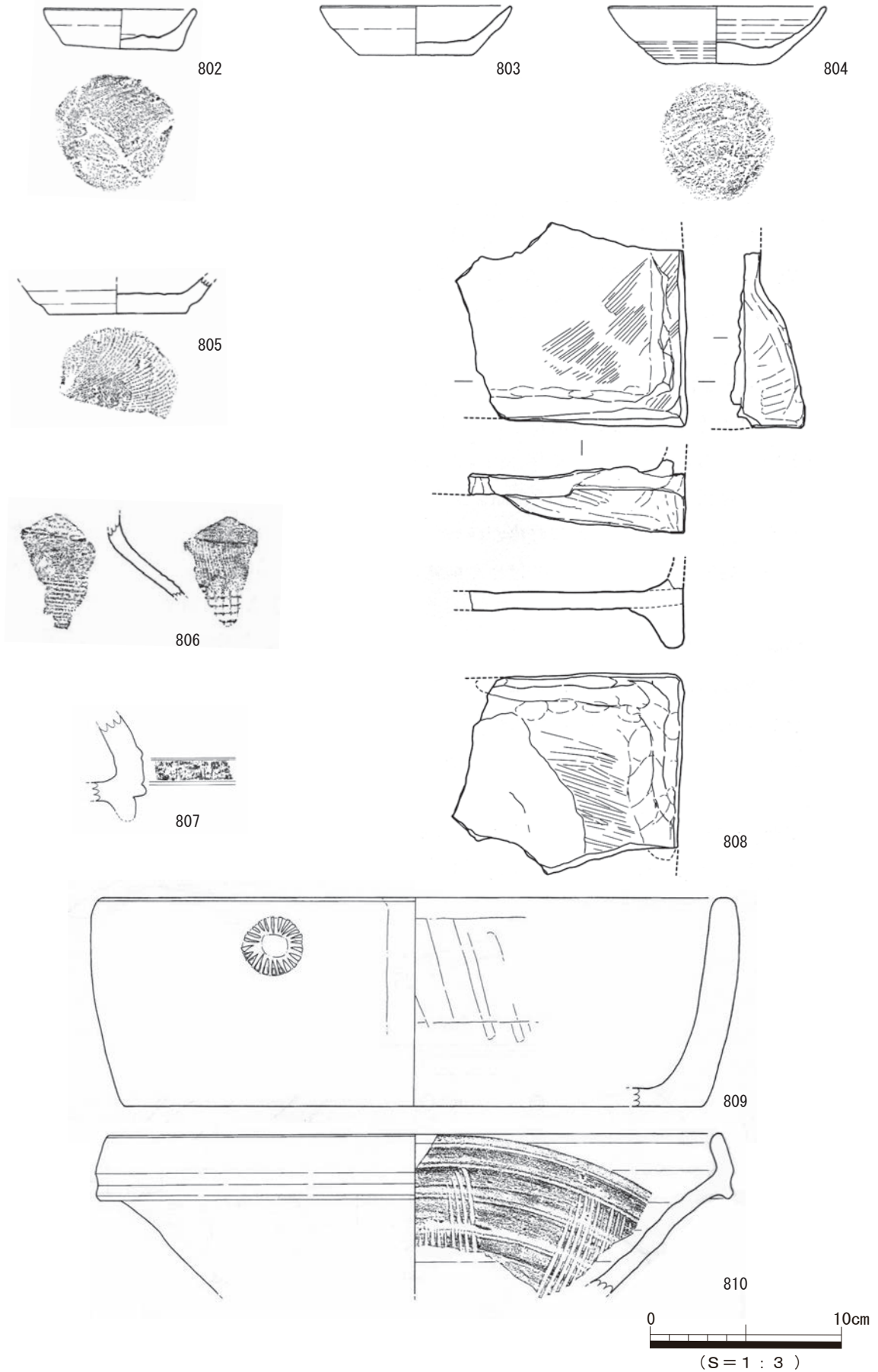


図2-82 平坦部A I区本坊地区の遺物1 (過去報告)

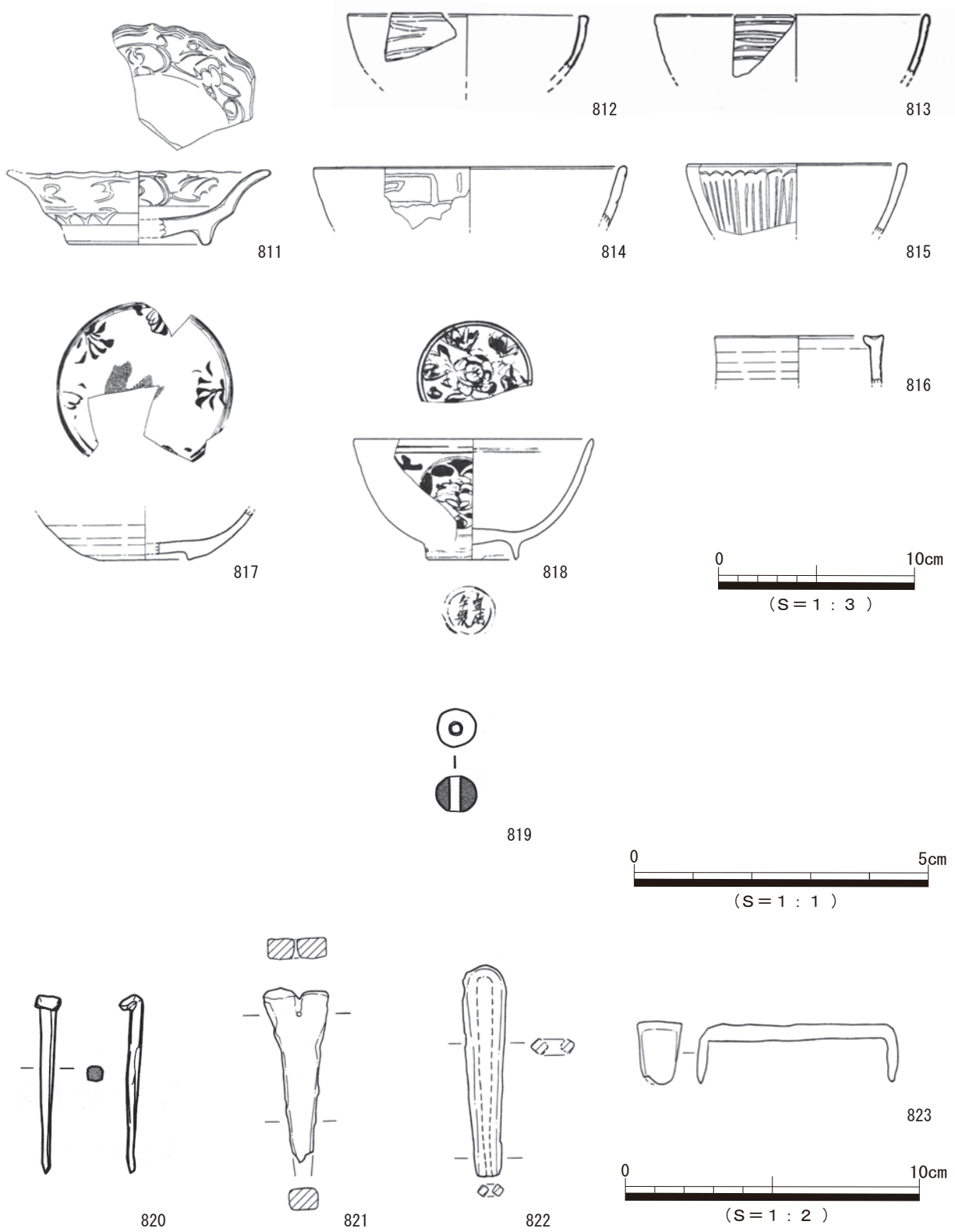


図 2-83 平坦部 A I 区本坊地区の遺物 2（過去報告）

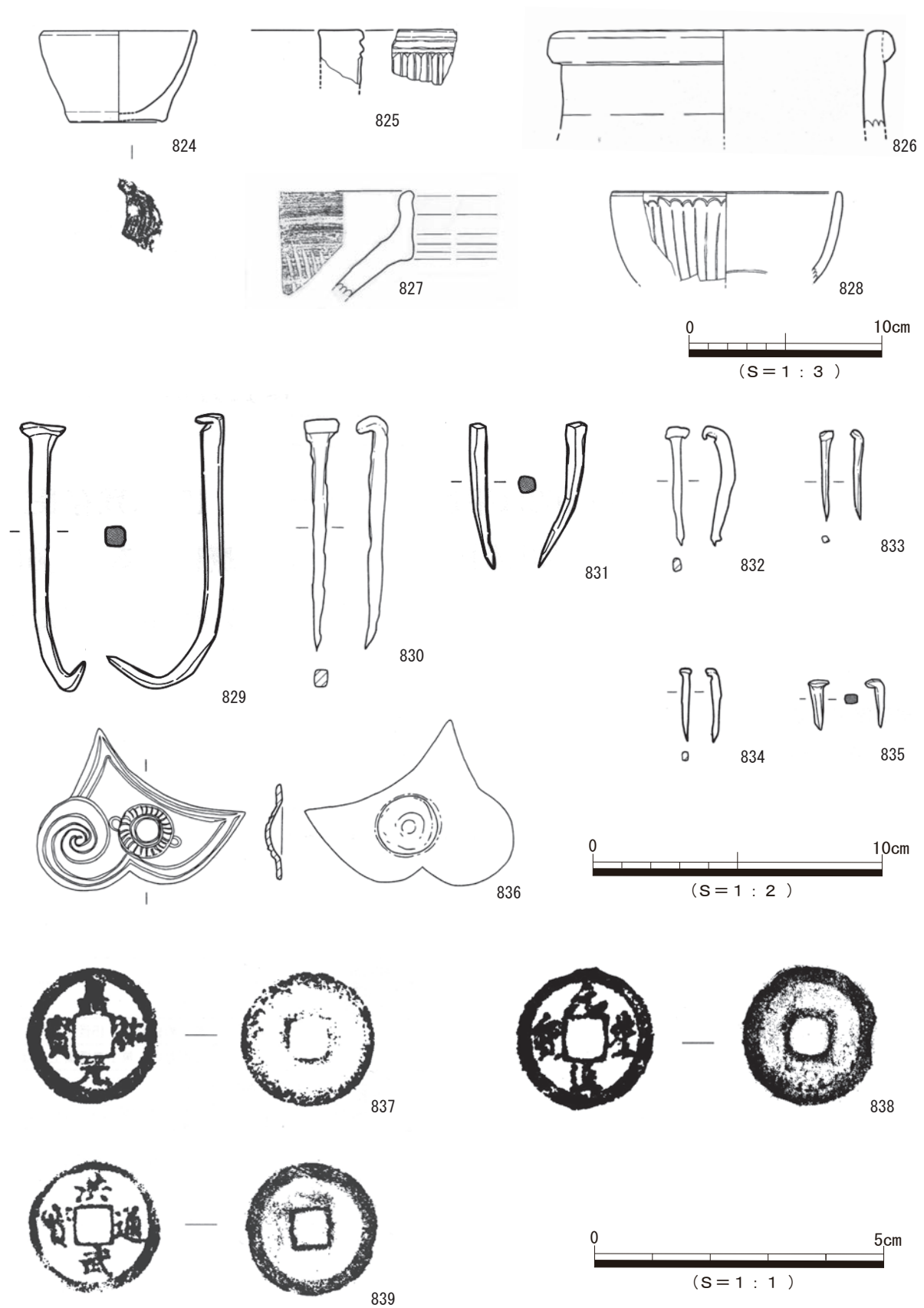


図2-84 平坦部AⅡ区本堂地区の遺物（過去報告）

(2) 平坦部AⅡ区本堂地区の遺物 (図2-84)

824は土師質土器杯である。口径と底径の差が小さく、底部からきつい角度で立ち上がり、コップ状を呈する。底部は回転糸切りによる。825は瓦質土器風炉の口縁部片である。上面を水平にとる方頭で、頸部にかけて連子文が施されている。826、827は備前焼である。826は壺で、口縁は断面円形の玉縁状を呈している。827は播鉢で、口縁端部は大きく上方へ拡張し、外側もやや突出している。828は青磁直口碗で、外面には線描き蓮弁文が施される。細線と剣頭とが蓮弁としての単位を意識して描かれている。

829は829から835は折釘である。829は復元長9.1cmと大型品である。830は全長7.9cmである。831は頭部を欠損しており、残存長は5.0cmである。832は足が湾曲しており、復元長は4.1cmである。833～835は1.7～3.0cmの小型の釘である。

836は線刻による模様が施された金具である。最大長5.7cm、最大幅7.2cmで、中央の円形模様部分は裏面からドーム状に浮き出させ、立体的に作られている。表面と裏面には金箔が張られている。飾り金具の可能性はある。837は嘉祐元寶、838は元豊通寶、839は洪武通寶である。

(3) 平坦部AⅢ区庭園地区の遺物 (図2-85)

840は砥石である。京都鳴滝石系の仕上砥と考えられ、側面にはノコ状工具によって挽かれた痕跡が看取される。841は火打ち金でねじり部は欠失している。842は中央に鑄があり、諸刃をもつ。3区788に似ている。わずかに斜方向の擦目のような溝が見え、ヤスリの可能性はある。残存長7.9cm、幅2.4cmを測る。

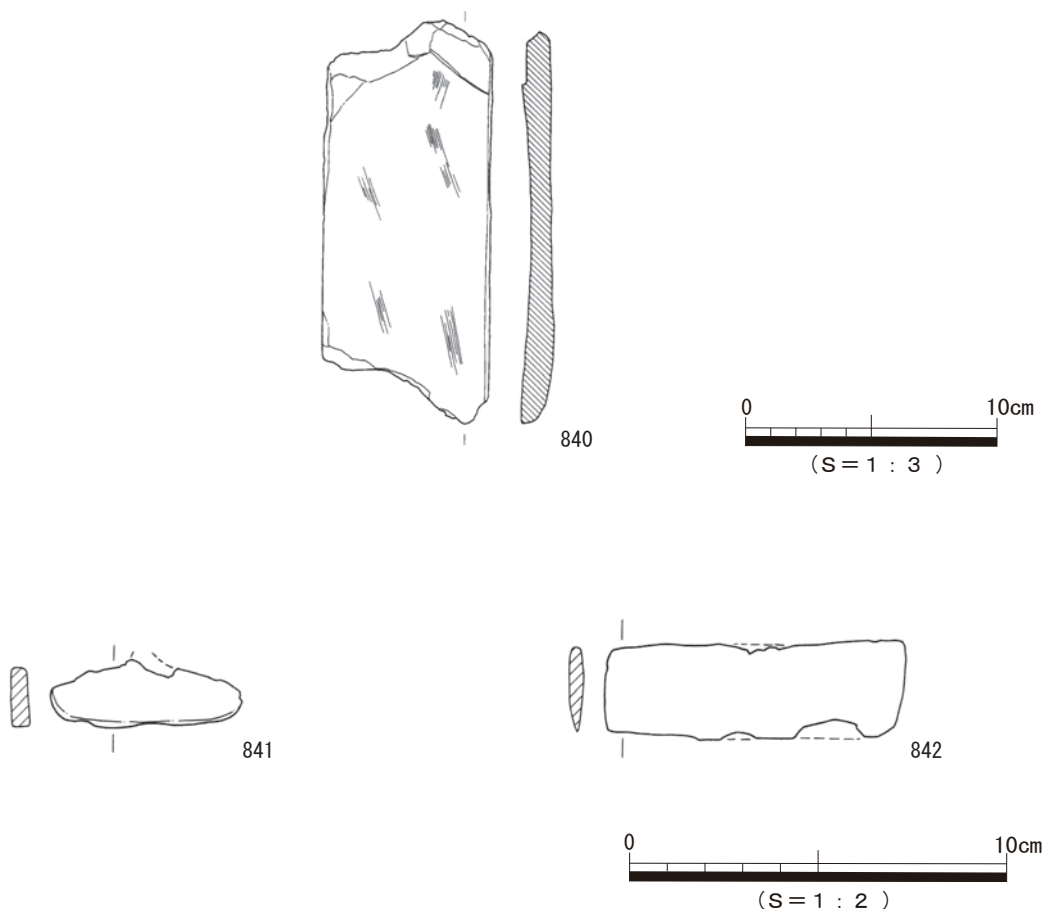


図2-85 平坦部AⅢ区庭園地区の遺物 (過去報告)

6 近世の遺構と遺物

(1) SB06 (図2-86、図2-87、図版2-30)

平坦部Aのほぼ中央、Ⅱ区本堂地区の北側にて確認された礎石建物跡で、本坊建物SB03の客殿正門（1間四方）を構成する礎石列と重なる位置にあたる。SB06の礎石は2基確認され、各々の礎石の天端の高さは揃えられている。芯々の距離は約200cmを測る。およそ1間半先南側には礎石の可能性のある石材の散布が認められ、原位置を保ってはいないと見られるが、南隅の礎石に該当する可能性があり、西隅にあたる礎石は欠落している。周囲の状況からみて、最大でも南北1間半程度の建物である。SB06の礎石配列は本坊建物跡の礎石列と平行した配置をとるが、南北の軸からは若干外れ、礎石基底面は本坊建物の礎石が据えられた基盤層の上面に置かれているため、本坊建物跡の後のものである。本坊建物の礎石を転用した可能性も考慮される。時期を示すような遺物の出土はなかった。

建物の位置関係からは、明らかに本坊建物を意識して建てられたものと見受けられる。本坊建物が焼失、廃絶した後に建てられた近世の所産であることは間違いないが、往時の記憶が残る近世初期頃の可能性があるものと考えられる。

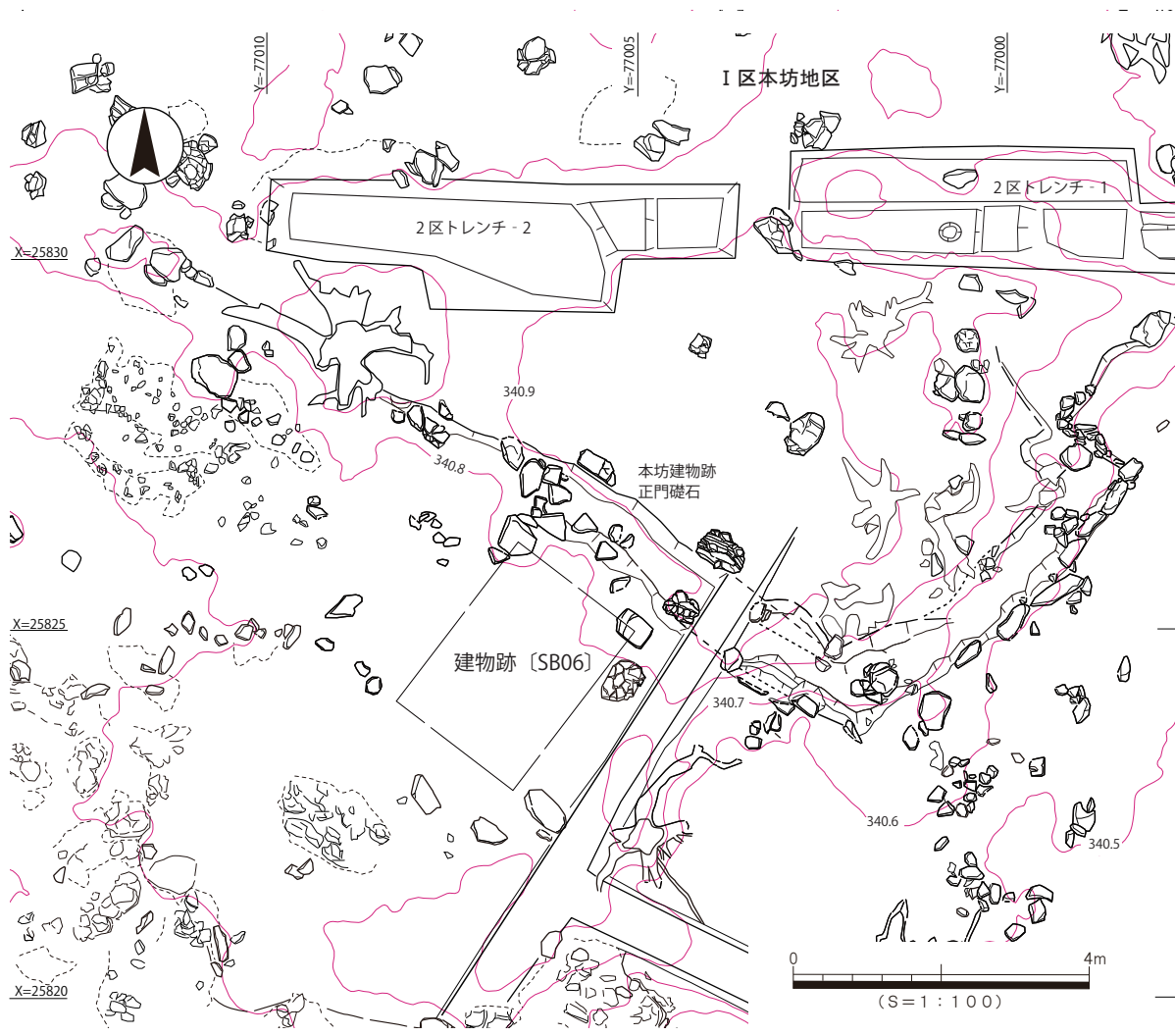


図2-86 SB06の位置

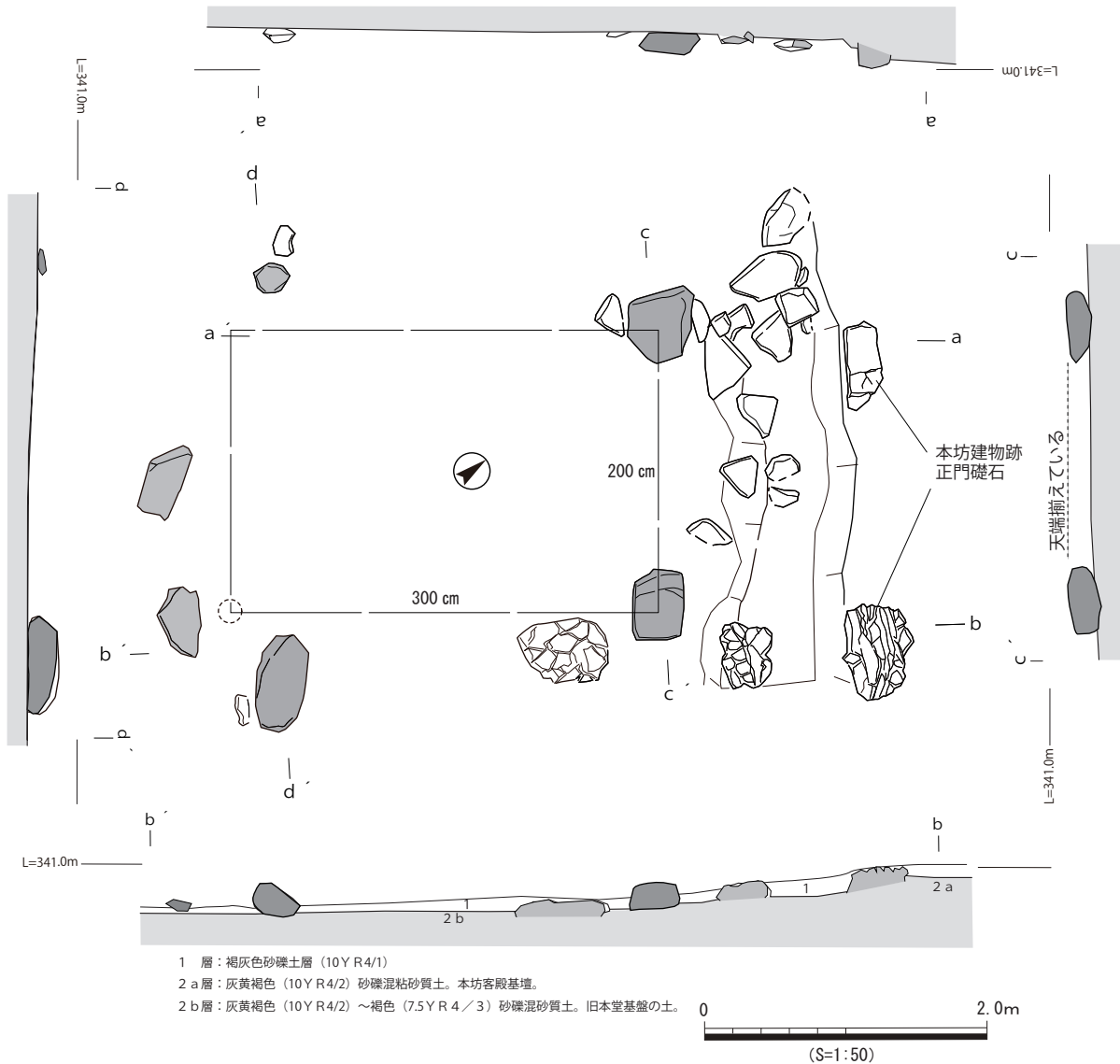


図 2-87 SB06 平・断面図

(2) 平坦部A表採・出土の近世遺物 (図 2-88、図 2-89、図版 2-68～2-70)

843、844 は端反の碗で、843 は肥前系である。外面には格子文様、内面は口縁に圈線が 2 条、見込みには圈線と F 字状の文字が入る。外面は白濁しており、文様は不鮮明である。18 世紀末から 19 世紀前半、砥部焼の可能性が高い。844 は、外面は圈線と扇状の文様を描く。口縁内面には 7 条の多重圈線が施されている。青色が鮮明で化学コバルトを使用したものと見られる。19 世紀後半、明治期頃のものと思われる。I 区本坊地区の斜面崩落土下面にて出土した。

845 は肥前系の外面青磁碗である。内面は口縁付近に四方襷文、見込みに 2 条の圈線とコンニャク印判による五弁花文を施す。高台内銘款は崩れた渦「福」銘である。846 は肥前系の蓋付小鉢である。口縁部内面 5 mm を釉剥ぎする。外面に染付で龍・宝珠・雲などが描かれる。18 世紀末から 19 世紀前半である。847 は端反碗で、844 同様、内面に多重圈線が施され、底部内面には重ね焼きの痕跡が残る。I 区本坊地区の斜面崩落土下面にて出土した。

848 は外面青磁碗と見られる。口縁内面に 2 条の圈線を施す。849 は 843 と同一個体の可能性がある。850 は肥前系碗の口縁部片である。外面に雪輪梅樹文が描かれる。851 は碗口縁部片である。外面には、

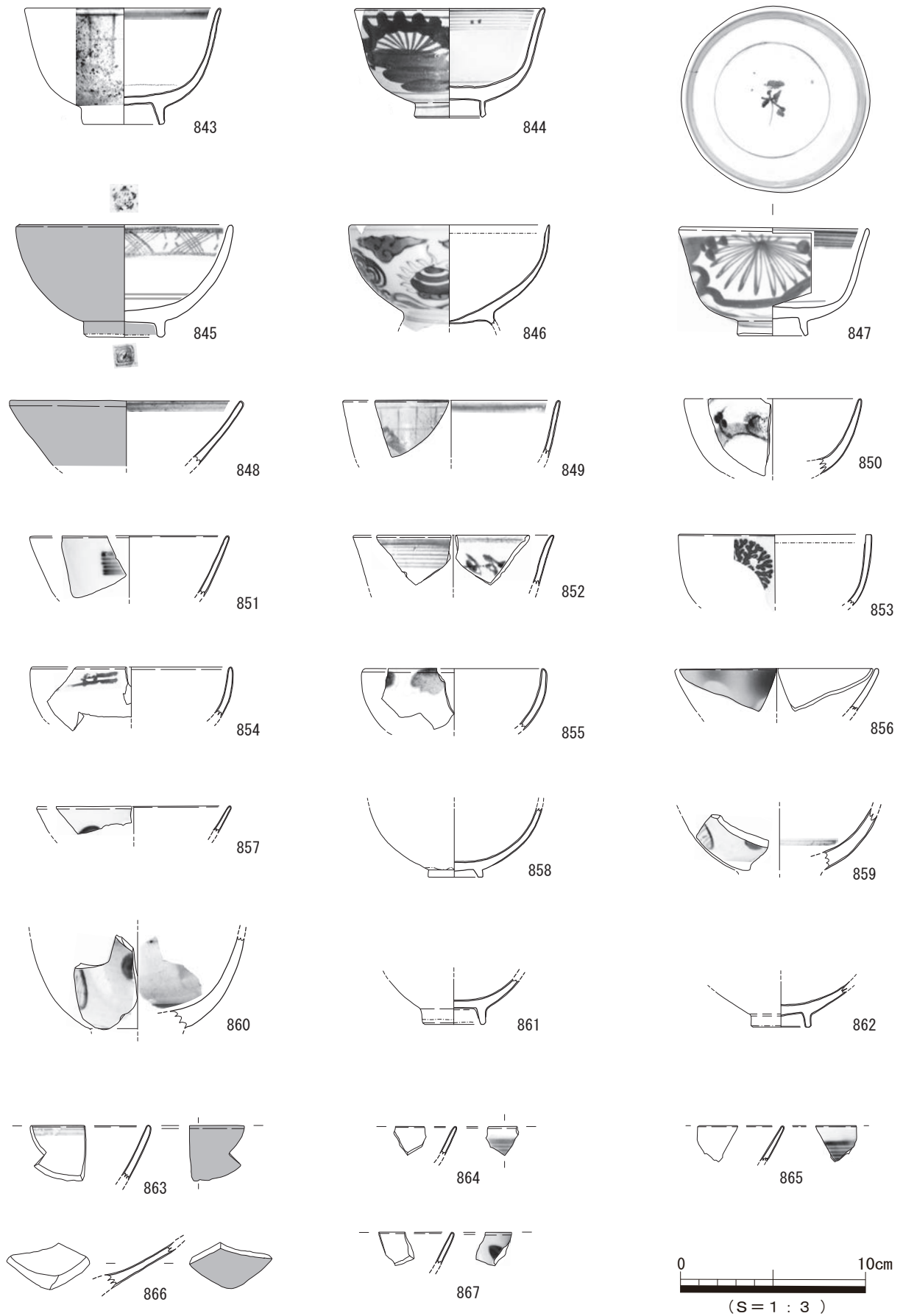


図2-88 平坦部A表採・出土の近世遺物1

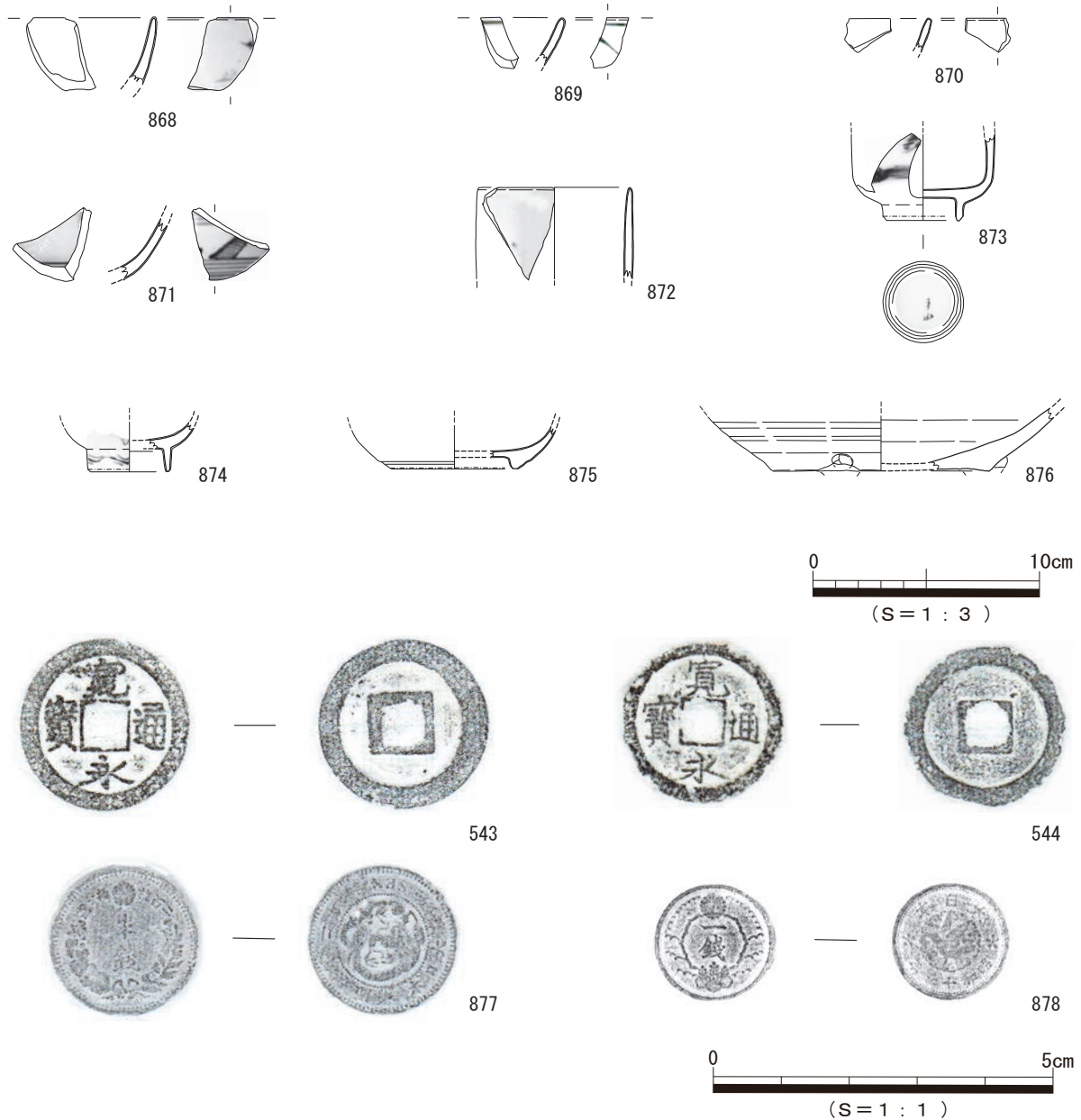


図2-89 平坦部A表採・出土の近世遺物2

7条の楡描状の文様が染付けられる。852は肥前系陶磁の端反碗の口縁部片で、外面多重圏線、内面2条圏線と文字風の文様が染付けられる。19世紀前半頃のもので、砥部焼の可能性はある。

853は碗口縁部片である。口縁端部は平滑、端部から内部約5mmは釉剥ぎが施されており、蓋付きかと思われる。文様は銅版転写か。

854、855は関西系陶器の碗の口縁部片である。854は外面に赤い鉄絵かと思われる井桁状の文様を施す。18世紀後半から19世紀代と見られる。855は外面に雲状の文様を描くが、発色がなく、焼成不良か。18世紀後半から19世紀初め頃のものである。

856は化学コバルト様の青色と紫色で月空のような文様を描く。19世紀以降のものか。857は碗口縁部片で、外面に丸文を染付ける。867と同一個体の可能性がある。858は関西系陶器の小碗である。底部に釉は施されない。18世紀後半から19世紀前半のものである。859、860は外面丸文を染付ける。861、862は肥前系小碗の底部片である。大橋康二氏の教示によれば、お歯黒などの化粧道具に使用

されるという。18世紀後半から19世紀前半のものである。

863、866は外面青磁碗である。863は口縁部片で、848と同様、内面の口縁部直下には2条の圏線が施される。18世紀後半のものである。Ⅲ区庭園地区では、外面青磁の出土が特徴的に見られた。

864、865、867、868～870は口縁部の小片である。864、865は外面に多重圏線が描かれている。867、868は文様の種類は特定できないが、外面に染付が見られる。869は内外面の口縁直下に圏線がめぐる。870は小片で破片部分に施文は見られない。871は外面に多重圏線と内面見込みに圏線が施されており、砥部焼と見られる。19世紀前半から幕末頃のものである。

872、873は小碗である。872は口縁部片、873は底部片で、外面に化学コバルトを使用した文様が描かれ、高台内銘に縦に「寺カ」「山」と記す。874は肥前系小杯の底部片で、外面に染付を有する。19世紀前半から幕末頃のものである。875は基筈底の底部で、876は急須の底部片と見られる。

543、544は寛永通宝で、いずれも本堂跡S B O 2の表層で出土した。543は字体から見て古寛永の可能性はある。544は新寛永である。

877は明治12年(カ)の半銭、878は昭和15年の一銭硬貨である。

このほか、図2-80に掲載した792の煙管が確認されている。

(3) 近世遺物の出土・分布状況 (図2-90)

平坦部Aでは近世から近現代の遺物が確認されたが、その出土・分布状況について見ておきたい。

採取された遺物はその大半が江戸時代の後半にあたる18世紀後半以降のもので、19世紀前半から幕末・明治期の碗類が多い。江戸時代前半の資料は、本堂跡S B O 2の表層で出土した寛永通宝のみで人が入った形跡がほとんど認められず、大きく変化した様子は見られない。

出土状況で注目されるのは、Ⅰ区本坊地区の斜面崩落土下面にて検出された844、847の資料で、斜面崩落土を掘り下げ中に本坊建物の坪庭の南側に接して南北約5m、東西2mの範囲に、高さ1mほどの黄褐色シルト土単純から成る土塊が確認され、調査当初は築山などの遺構ではないかとも考えられたが、その土塊を含む斜面崩落土の下からこの碗が検出された(写真2-1、2-2)。この斜面崩落土は経年により徐々に崩落・堆積したものではなく、斜面上部からの円弧状の表層崩壊によってある時期一気に引き起こされ、埋積したものであることが判ったが、その時期は明治以降であることが判明した。

Ⅲ区庭園地区では、池S G O 1やその西側の堤となっていた土手状遺構などを覆う、谷川に端を發する氾濫性の厚い砂礫土の堆積が見られた。18世紀後半の外面青磁碗などは、この土砂の下層から出土した(写真2-3、2-4)。また、谷川から池S G O 1へと水を引き入れる水路遺構が確認されてい



写真 2-1 I 区の黄褐色シルトの土塊 (東から)



写真 2-2 斜面崩落土下面にて検出された近世陶磁器 (南から)

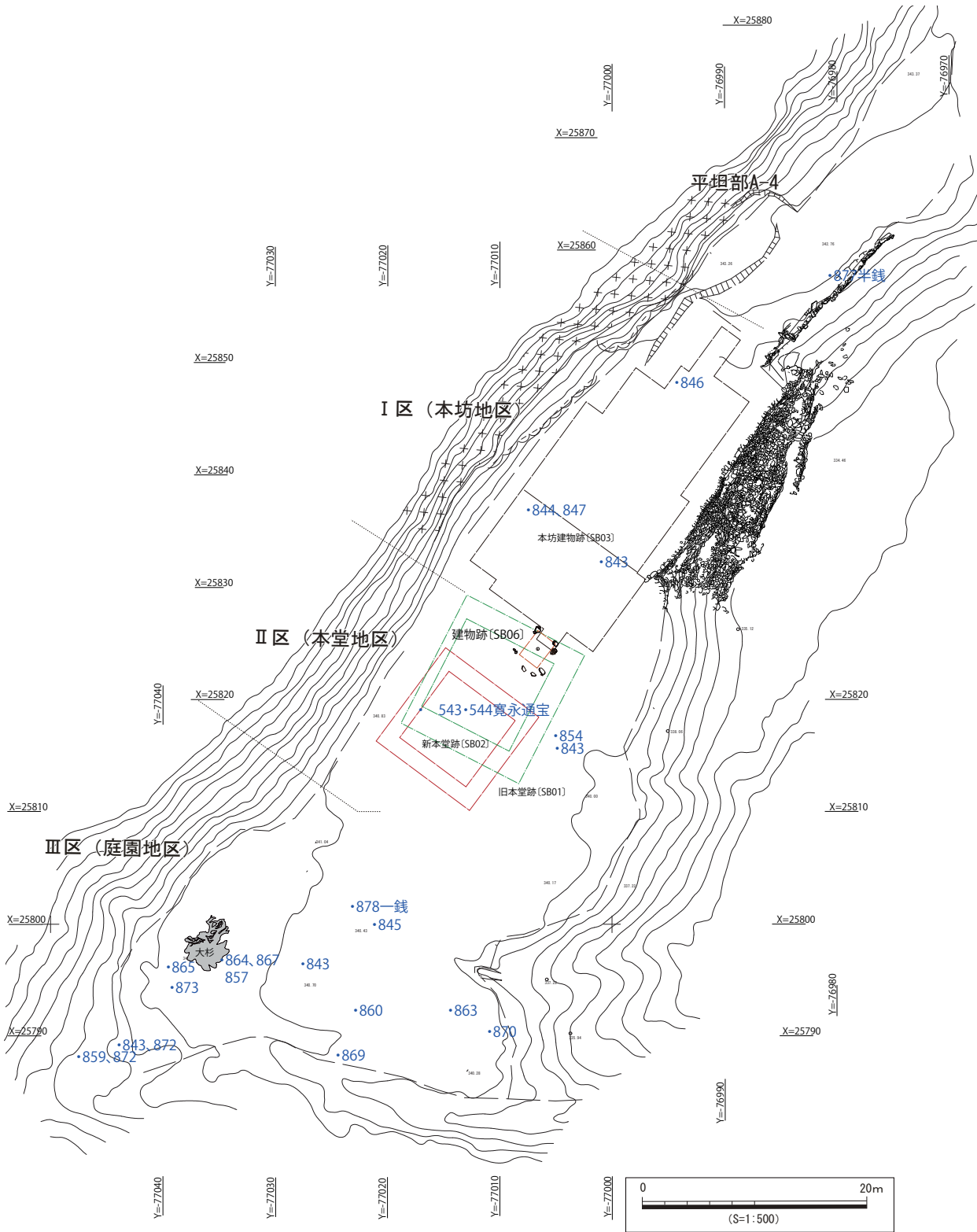


図 2-90 近世遺物の出土・採集位置



写真 2-3 砂礫土に覆われたⅢ区の様子（北東から）

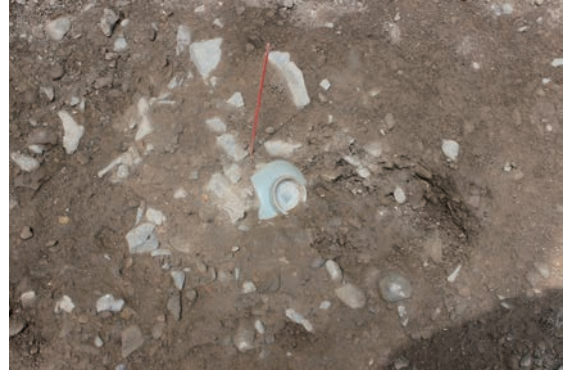


写真 2-4 砂礫土の下層にて検出された外青磁碗（南から）



写真 2-5 谷川から取水する水路遺構（東から）



写真 2-6 Ⅲ区の池SG01直上にあった大杉の伐株（西から）

る（写真 2-5）が、その底面で 872 などが採取されている。このことは、18 世紀後半以降に起こった水害によって庭園地区の遺構は大きく損壊したが、それ以前までは往時の姿形をかなり留めていたものと推測される。遺物の種類では、化粧道具かという小碗もあるが、概ね碗類や急須であり、山師の作業に伴う器々かと思われる。また、池 SG 0 1 の直上の位置に大杉の伐株（写真 2-6）があったが、その周囲から近世陶磁が多く採取され、煙管も見つかっている。大杉の木陰が山師の休息場となっていたのではないだろうか。

（4）平坦部 A の近世以降の利用状況

最後に平坦部 A の利用状況と近世等妙寺との関係について見ておきたい。

平坦部 A のほぼ中央にて確認された SB 0 6 は、本坊建物の正門と一部重複しつつ、平行に建てられており、瓦などの出土はなく、天正 16 年（1588）の本坊焼失後、あまり時間を置かずして建てられた、往時を偲ぶ祠のようなものではなかったかと推測される。本堂跡にて検出された寛永通宝は、賽銭として置かれた可能性が考えられよう。

「宇和旧記」によれば、等妙寺は豊臣大名の戸田勝隆の入部後、その乱暴行為や天火による焼失、寺領没収によって衰退し、天正 18 年（1590）に芝村の鎌田正秀という有徳人の尽力によって山下の現在地（靈光庵跡と記される）へ移ったという。戸田勝隆の暴政に関しては検討の余地がある、との指摘⁽¹⁾もあるが、このとき寺領及び寺室についてはその多くを没収されたものと見られる。その後、宇和島藩伊達氏の治世となり、寛文年中（1661 - 1673）に宇和島藩二代藩主宗利が巡察したとき、



(正面・全景)



(左側面)



(右側面下)

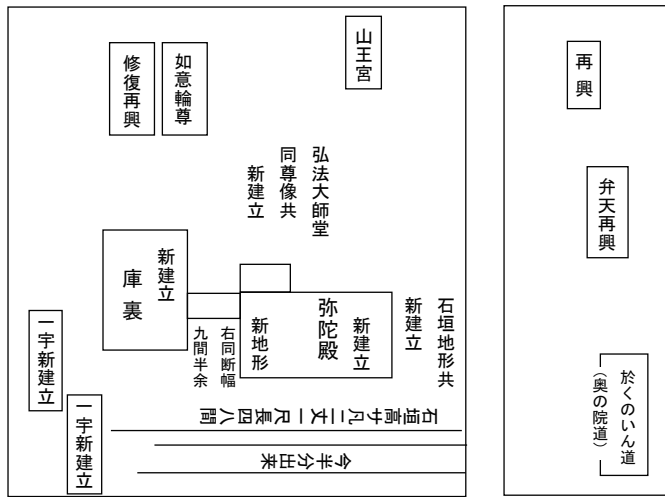
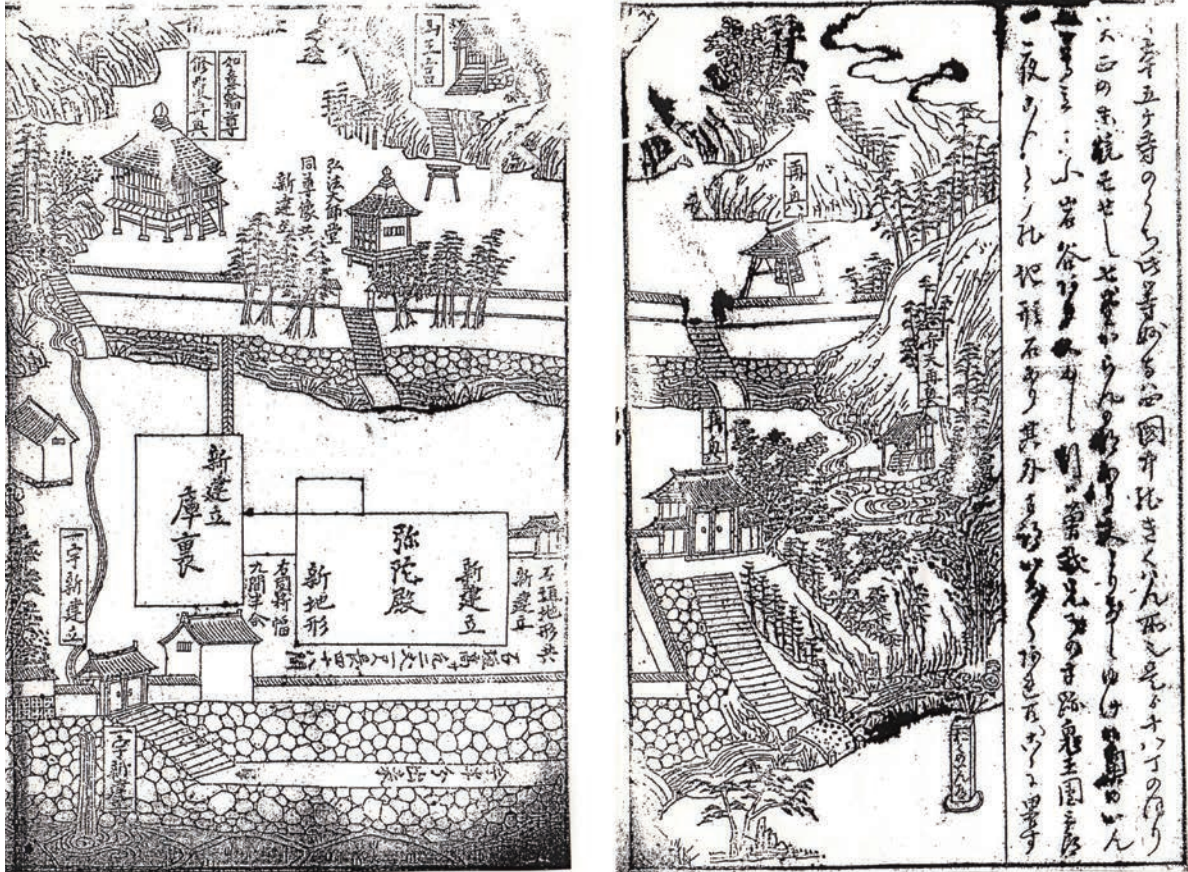
天明年銘石碑
 (正面) 「天明年辛丑年 同六丙午歳迄
 杉苗九千本左之処々江植付置
 清水谷 智光院 本寺谷 檜尾 墓尾
 地獄谷 不動院 惣堂院 御春屋 カラツコ谷」
 (左側面) 「天明六丙午年
 御材木小屋造立
 但三間梁拾三間」
 (右側面下) 「御船奉行 山下興右衛門
 目附役 尾川半左衛門
 山方役 宮本惣右衛門
 同下役 中山浅之進
 同 土居幸右衛門」

図 2-91 麓の清水谷入口に置かれた天明年銘石碑

等妙寺で「等妙寺縁起」を閲覧して等妙寺山に登り、その後に寺宝の品々を集めさせている（「宇和島領寺院帳」愛媛県立図書館蔵）。「宇和旧記」では、これを伊達宗利ではなく宗時の行為と記すが、いずれにしてもこのときに登った等妙寺山⁽²⁾とは、本堂・本坊のあった平坦部Aの可能性が高い。

等妙寺山は、寺領を没収されてのち宇和島藩の管理する御立山^{みたてやま}（御用木林）となった⁽³⁾が、天保6年（1835）の調査による「宇和島領寺院帳」や伊達家文書「記録書抜」に江戸時代における等妙寺の堂舎の造営・再建、修理等の記載がある。旧等妙寺本尊の如意輪観音を納める観音堂については、等妙寺30世恵海の時藩に対して宝永2年（1705）3月17日に建立願いが提出され、奈良山の木が下賜されたが、恵海の転住にともない延び延びになり、宝暦5年（1755）に至って等妙寺32世真覚院湛瑞の代に再建されている。この「奈良山」とは、奈良村奥の山ということで等妙寺山とは区別されていたのかもしれないが、堂舎の造営などの元木の入手に関しても藩の管理下にあった。

江戸期後半には人が入った痕跡を認めるが、18世紀後半で思い当たるのは、すぐ麓の清水谷旧参道の入口に立てられた天明年銘の石碑である（図2-91）。この石碑には、宇和島藩が天明年（1781）から天明6年（1786）にかけて杉苗9千本を「清水谷、智光院、本寺谷、檜尾、^{はかのお}墓尾、地獄谷、不動院、惣堂院、^{おつきや}御春屋、カラツコ谷」に植樹し、梁間3間、桁行13間の材木小屋を建てたことが記される。ここに示されている地名から推測される範囲は、等妙寺旧境内の中心域の範囲にほぼ該当している。推定享保年間（1716-1736）原図とされる「等妙寺旧跡古図」には、大杉の位置と高さ・幹周りが記され、石碑にある地名ともよく一致している。あるいはこうした山の管理のうえで作製された可能性が高いのではないだろうか。等妙寺山は明治16年（1883）に国有林となり、石碑のある地点には営林署の官舎が置かれていたと聞く。宇和島藩が置いた材木小屋は、その前身とみられる。国有林の頃は立ち入り禁止の看板が立てられ、一般の立ち入りを厳しく制限されたというが、その後、昭和32年（1957）



『建立勸化帳』冒頭
 「本五箇寺のうち、この等妙寺は四国中の祈願所也。是より十八丁登り天正の末焼亡せし七堂伽藍の跡あり。それより少し行けば奥の院□□□といふ岩谷（岩屋）あり。又、少し行けば曾我兄弟の古跡鬼王團三郎一夜建立の地形石あり。その外、古跡いろいろあれ共ここに略す。」
 奥書 「文政二己卯年春二月日
 伊豫宇和島奈良山等妙寺 令湛」

図 2-92 「建立勸化帳」に記された等妙寺

に国の払い下げにより町の所有となった（『広見町誌』）。17世紀初めに宇和島藩が等妙寺山を管理するようになり、18世紀後半に至って山の事業が本格化したものと見られる。

江戸時代後半の等妙寺の堂舎の造営・再建に関して記された文献としては、文政2年（1819）2月に等妙寺住職令湛が板刻して刷り立てた「建立勸化帳」がある（図2-92）。版木は現存しないが、原本の複写を当町で保管している。その趣旨を要約すると、「かつての等妙寺の本尊（如意輪観音）が現在の寺地（靈光庵跡）へ飛来して以来、小庵のごとき仮屋が数百年の星霜を送る間に風雨を防ぐのも難くなったので、前住職から数えて六代以前から建立の志を持ちながら、資力不足で実現しなかつ

た。この度、広く旦那を募り、一紙半銭の信施を受けて堂宇を建立したいと願っている。」という
ことで、建立を計画する堂舎等が境内図に描かれる。

この図は造営にあたっての計画図ということになるが、現在の等妙寺の堂舎の配置とほぼ一致した
状況を見る。この図で注目される点はいくつかあるが、ここでは図の右下に記された「於くのいん道
（奥の院道）」の記載に着目してみたい。

この図に示された石柱の位置は現在確認されている旧参道の入口と一致しており、奥の院に至る道
として認識されていたことが判る。また、この道を辿れば、七堂伽藍の跡や奥の院、「等妙寺縁起」
に記される等妙寺の開基譚に登場する曾我兄弟とその従者鬼王・段三郎にまつわる旧跡に至るとあり、
これら一帯が等妙寺の聖地として認識されていたことが窺われる。平坦部Aに置かれた建物跡S
B06はそのことを示すために建てられた可能性もあり、あるいはこの頃の等妙寺の「奥の院」とさ
れていたのかもしれない。

最後に、昭和7年から50年余りに亘って等妙寺檀家総代を務めた松浦繁雄氏が編者となり、昭和
60年に発行された「奈良山等妙寺史」⁽⁴⁾によれば、「此の山（等妙寺山）は樹齢数百年と思われる
杉桧の巨木ばかりであり周囲の山林と判つきり区別が出来た」、「大正7、8年頃宇和島営林署は此山
を皆伐し、専用軌道を布設」とあり、また、昭和32年の町への払下げ後には、「俗称ホンジガナロ」（平
坦部Aのこと）には営林署も記念木として残していた「大杉二本があった」が、町が伐採してしまっ
た、と記されている。

近世から近現代にかけて、聖地であった等妙寺山は、記憶の風化とともに昭和30年代で樹齢数百
年の巨木はすべて伐採されてしまった。さらに古い歴史を持つこの史跡については、その記憶を風化
させることなく、適切に保護を図り、後世へと継承していかなければならない。

【註】

(1) 石野弥栄氏は以下の論考で、戸田勝隆の暴政を記す「清良記」の記述については要検討と指摘している。

石野弥栄 2006 『清良記』の成立と素材について『伊予史談』339号

(2) 等妙寺山については、平成23年度に行った故・石野弥栄氏との文献調査により、貞享元年(1684)の「式墅截 上」
(近代史文庫編)に戸田勝隆の伐採という大杉の伐株のこと、薪・鍛冶炭の林産資源のこと、芝村半百姓久三郎が
山番人役を勤めることなどの記載があることや、宇和島・吉田両藩の山境争論に関連して作成された建徳寺文書(松
野町所蔵、目黒ふるさと館保管)のうちにも「等妙寺火道畔筋文縮牒」、「古等妙寺分縮帳」などの史料に等妙寺山
に関する記述があり、「桜田家所蔵記録 下」には奈良山から目黒山にかけての絵図の記載、等妙寺縁起を参考にし
た記事等が記されていることを確認した。以上の文献についても今後再度調査を行っていく必要がある。

(3) 江戸時代の等妙寺領は、「宇和島領寺院帳」に仏田4反5畝25歩、元禄8年(1695)2月の「う豫州宇和郡之
内芝村田畑内検高付帳」(愛媛県立図書館蔵)によれば、「ついちノ下」に麦田1反3歩、「とうノ下」に新田1畝2歩、
同所に畑8畝18歩、田5畝6歩、同所西に麦田1反6畝6歩、同所下に田7畝20歩、「かみや」に田3畝4歩が計
測されている。石野弥栄氏との調査による。

(4) 松浦繁雄編 1985 『奈良山等妙寺史』P 8・9

【参考・引用文献】

- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 江上智恵 2020 「大陸系山林寺院首羅山遺跡の庭園状遺構についての一考察」『九州考古学』95 九州考古学会
- 小野正敏 1982 「14～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 鬼北町教育委員会編 2005 『等妙寺跡—平成11年～平成16年度学術調査に伴う埋蔵文化財調査報告書 第7集—』
- 重根弘和 2003 「中世備前焼に関する考察—形態と変遷と年代について—」『山口大学考古論集 近藤喬一先生退官記念論文集』近藤喬一先生退官記念事業会
- 重根弘和 2016 「中世備前焼の分類と分布」『中近世陶磁器の考古学』第四巻 雄山閣
- 柴田圭子 2001 「16世紀中葉の輸入陶磁器の再評価—中国・四国地方の遺跡を中心に—」『中世土器研究論集—中世土器研究会 20周年記念論集—』中世土器研究会
- 柴田圭子 2016 「愛媛県南予地域における陶磁の流通」『中近世陶磁器の考古学』第二巻 雄山閣
- 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2007 「沖縄における貿易陶磁研究」『沖縄埋文研究』5 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 瀬戸哲也 2015 「14・15世紀における沖縄出土中国産青磁について」『貿易陶磁研究』35 日本貿易陶磁研究会
- 太宰府市教育委員会編 2000 『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』
- 日本貿易陶磁研究会編 2002 『中世後期における貿易陶磁器の様相』日本貿易陶磁研究会中国大会資料集 日本貿易陶磁研究会
- 幡上敬一 2005 「第2節 遺物」『等妙寺跡—平成11年～平成16年度学術調査に伴う埋蔵文化財調査報告書 第7集—』 鬼北町教育委員会
- 久山町教育委員会編 2020 『首羅山遺跡Ⅱ発掘調査報告書』久山町文化財調査報告 22
- 広見町誌編さん委員会 1985 『広見町誌』 広見町
- 間壁忠彦 1991 『考古学ライブラリー 60 備前焼』ニュー・サイエンス社
- 水澤幸一 2009 「第3章 中世後期の貿易陶磁器」『日本海流通の考古学 中世武士団の消費生活』高志書院
- 森田勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会

第4章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

1 平坦部A I 区本坊地区出土炭化材の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林絢一

Zaur Lomtavidze・黒沼保子

(1) はじめに

鬼北町に位置する等妙寺旧境内から出土した炭化材について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。同一試料を用いて樹種同定も行われている。

(2) 試料と方法

試料は、I 区本坊地区から出土した炭化材 1 点である（試料 No. 8 : PLD-31232）。直径 1 cm の丸木で年輪数は 8 年輪であり、最終形成年輪が残存していた。等妙寺旧境内は、天正 16 年（1588）に焼失している。

測定試料の情報、調製データは表 2-1 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表 2-1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-31232	調査区：1区 遺構：本坊跡 試料No. 8 遺物No. 36 形状：丸木（直径1cm、年輪数8年輪）	種類：炭化材（イスノキ） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸： 1.2N）

(3) 結果

表 2-2 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、図 2-93 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過

去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.2(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表 2-2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ ¹³ C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-31232	-26.52 ± 0.32	323 ± 19	325 ± 20	1518-1530 cal AD (9.5%)	1492-1603 cal AD (76.1%) 1614-1643 cal AD (19.3%)
				1539-1594 cal AD (45.3%)	
				1619-1635 cal AD (13.5%)	

(4) 考察

I区本坊地区から出土した炭化材（試料No. 8 : PLD-31232）は、2σ 暦年代範囲（確率95.4%）で1492-1603 cal AD (76.1%) および1614-1643 cal AD (19.3%)であった。これは15世紀末～17世紀前半で、室町時代～江戸時代前期に相当する。記録によると本坊は1588年に焼失しており、焼失年代を含む整合的な結果であった。

木材は最終形成年輪部分を測定すると伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料は最終形成年輪が残存しており、得られた最終形成年輪の年代は木材が伐採された年代か、もしくは本坊周辺に生育しており建物と一緒に焼失した年代を示していると考えられる。

最終形成年輪が存存していて年輪数の多い試料があれば、ウィグルマッチングを行うことにより、より年代の絞り込みが行えると考えられる。

【引用・参考文献】

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

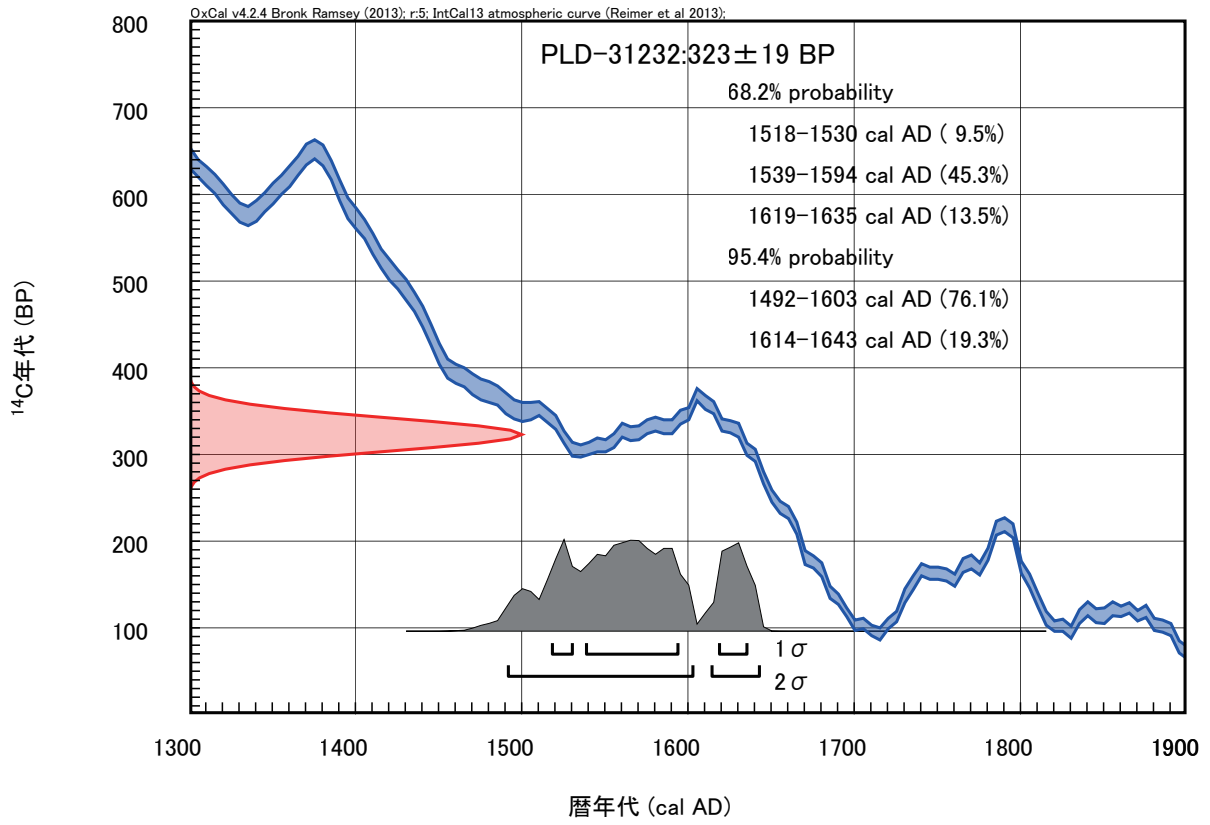


图 2-93 曆年較正結果

2 平坦部A I・II区出土炭化材の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadze・黒沼保子

(1) はじめに

北宇和郡鬼北町に位置する等妙寺旧境内から出土した炭化材7点について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

平坦部A I区本坊地区の試料は、北側で出土した分析No. 8の炭化材（PLD-31232）と、1号鍛冶炉周辺から出土した炭化材（PLD-34183）、3号鍛冶炉の炉底から出土した炭化材（PLD-34184）、鍛冶工房建物跡S B 0 7の柱穴S P 0 3から出土した柱痕の炭化材（PLD-34185）、S P 1 1から出土した柱痕の炭化材（PLD-34186）、鍛冶工房建屋以前の埋土内から出土した炭化材（PLD-36359）、II区本堂地区の試料は、旧本堂S B 0 1基壇基盤面から出土した炭化材（PLD-34187）である。I区本坊跡の分析No. 8の試料（PLD-31232）とS P 0 3の試料（PLD-34185）は最終形成年輪が残存していたが、それ以外の試料は最終形成年輪が残存しておらず、部位不明であった。なお、等妙寺旧境内の伽藍は1320年から約10年かけて創建され、1588年に焼失している。

測定試料の情報、調製データは表2-3のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

(3) 結果

表2-4に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、暦年較正結果を、図2-94に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730 \pm 40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正には0xCal14.3（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、0xCal1の確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、

表 2-3 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-31232	調査区：平坦部A I 区本坊地区 区域：北側 遺物No. 36 分析No. 8	種類：炭化材（イスノキ） 試料の性状：最終形成年輪 形状：丸木（直径1cm、8年輪残存） 採取部位：外側2年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-34183	調査区：平坦部A I 区本坊地区 採取位置：1号鍛冶炉周辺 分析No. 62	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 形状：破片（5mm角、2年輪残存？） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-34184	調査区：平坦部A I 区本坊地区 遺構：3号鍛冶炉炉底 分析No. 63	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 形状：破片（5mm角、年輪数不明） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N） 処理備考：状態悪い
PLD-34185	調査区：平坦部A I 区本坊地区 遺構：SP03 分析No. 64	種類：炭化材（針葉樹） 試料の性状：最終形成年輪 形状：みかん割り状（半径1.5cm、17年輪） 採取部位：外側2年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-34186	調査区：平坦部A I 区本坊地区 遺構：SP11 分析No. 65	種類：炭化材（スギ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 形状：みかん割り状（半径3cm、12年輪残存） 採取部位：外側2年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-34187	調査区：平坦部A II 区本堂地区 採取位置：旧本堂SB01基壇基盤面 分析No. 66	種類：炭化材（針葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 形状：破片（8mm角、1年輪残存） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-36359	調査区：平坦部A I 区本坊地区 遺構：鍛冶工房建屋以前の埋土内 分析No. 67	種類：炭化材（スダジイ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 形状：不明（残存径：0.5cm角、2年輪残存） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

(4) 考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち 2σ 暦年代範囲（確率 95.4%）に着目して、調査区ごとに年代の古い順に結果を整理する。なお、木材の場合は、最終形成年輪部分を測定すると伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。

I 区本坊地区の分析 No. 8 の炭化材（PLD-31232）と鍛冶工房建物跡 S B 0 7 の柱穴 S P 0 3 から出土した柱痕の炭化材（PLD-34185）は最終形成年輪が残存しており、得られた最終形成年輪の年代は木材が伐採された年代を示していると考えられる。それ以外の、I 区本坊地区の 1 号鍛冶炉周辺の炭化材（PLD-34183）、3 号鍛冶炉炉底の炭化材（PLD-34184）、S P 1 1 柱痕の炭化材（PLD-34186）、鍛冶工房建屋以前の遺構の炭化材（PLD-36359）、II 区本堂地区の旧本堂地覆基盤面の炭化材（PLD-

表 2-4 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-31232 試料No. 8	-26.52 \pm 0.32	323 \pm 19	325 \pm 20	1518-1530 cal AD (9.5%) 1539-1594 cal AD (45.3%) 1619-1635 cal AD (13.5%)	1492-1603 cal AD (76.1%) 1614-1643 cal AD (19.3%)
PLD-34183 分析No. 62	-27.64 \pm 0.24	465 \pm 19	465 \pm 20	1430-1445 cal AD (68.2%)	1420-1450 cal AD (95.4%)
PLD-34184 分析No. 63	-28.95 \pm 0.24	510 \pm 19	510 \pm 20	1414-1430 cal AD (68.2%)	1405-1440 cal AD (95.4%)
PLD-34185 分析No. 64	-24.93 \pm 0.24	359 \pm 19	360 \pm 20	1470-1520 cal AD (43.8%) 1593-1619 cal AD (24.4%)	1457-1524 cal AD (51.2%) 1558-1632 cal AD (44.2%)
PLD-34186 分析No. 65	-25.18 \pm 0.24	348 \pm 20	350 \pm 20	1485-1523 cal AD (28.6%) 1572-1630 cal AD (39.6%)	1465-1529 cal AD (40.4%) 1543-1635 cal AD (55.0%)
PLD-34187 分析No. 66	-26.40 \pm 0.24	624 \pm 20	625 \pm 20	1299-1319 cal AD (27.8%) 1351-1370 cal AD (26.1%) 1380-1391 cal AD (14.2%)	1292-1329 cal AD (37.7%) 1340-1397 cal AD (57.7%)
PLD-36359 分析No. 67	-28.14 \pm 0.22	583 \pm 19	585 \pm 20	1320-1350 cal AD (50.3%) 1392-1403 cal AD (17.9%)	1309-1362 cal AD (66.9%) 1386-1410 cal AD (28.5%)

34187) は、最終形成年輪を欠く部位不明の炭化材である。したがって、年代測定の結果が古木効果の影響を受け、木材が枯死もしくは伐採された年代よりもやや古い年代を示している可能性がある。

I 区本坊地区の試料のうち、3号鍛冶炉炉底から出土した炭化材 (PLD-34184) は、1405-1440 cal AD (95.4%) で、15世紀初頭～前半の暦年代を示した。また、1号鍛冶炉周辺から出土した炭化材 (PLD-34183) は、1420-1450 cal AD (95.4%) で15世紀前半～中頃の暦年代を示した。この2点の年代は、室町時代に相当する。

同じく I 区本坊地区の鍛冶工房建物跡 S B O 7 の柱穴 S P O 3 から出土した柱痕の炭化材 (PLD-34185) は、1457-1524 cal AD (51.2%) および 1558-1632 cal AD (44.2%) で、15世紀中頃～17世紀前半の暦年代を示した。また、S P 1 1 から出土した柱痕の炭化材 (PLD-34186) は、1465-1529 cal AD (40.4%) および 1543-1635 cal AD (55.0%) で、15世紀後半～17世紀前半の暦年代を示した。さらに、I 区本坊地区の北側で出土した分析 No. 8 の炭化材 (PLD-31232) は、1492-1603 cal AD (76.1%) および 1614-1643 cal AD (19.3%) で、15世紀末～17世紀前半の暦年代を示した。この3点の年代は、室町時代～江戸時代前期に相当する。同じく I 区本坊地区の鍛冶工房建屋以前の埋土内から出土した炭化材 (PLD-36359) は 1309-1362 cal AD (66.9%) および 1386-1410 cal AD (28.5%) の暦年代を示した。これは14世紀初頭～15世紀初頭で、鎌倉時代～室町時代に相当する。

II 区本堂地区の旧本堂 S B O 1 基壇基盤面から出土した炭化材 (PLD-34187) は、1292-1329 cal AD (37.7%) および 1340-1397 cal AD (57.7%) の暦年代を示した。これは13世紀末～14世紀末で、鎌倉時代～室町時代に相当する。

記録によると、旧境内の伽藍は1320年に創建が開始され、1588年に焼失している。I 区本坊地区から出土した試料5点 (PLD-31232、34183～34186) は、いずれも旧境内が使用されていた時期および焼失年代を含む年代であった。一方、II 区本堂地区の旧本堂 S B O 1 基壇基盤面から出土した炭化材 (PLD-34187) と II 区の鍛冶工房建屋以前の埋土内から出土した炭化材 (PLD-36359) は、創建年代

および旧境内が使用されていた時期を含む年代であった。

【引用・参考文献】

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliðason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

第 1 節 放射性炭素年代測定

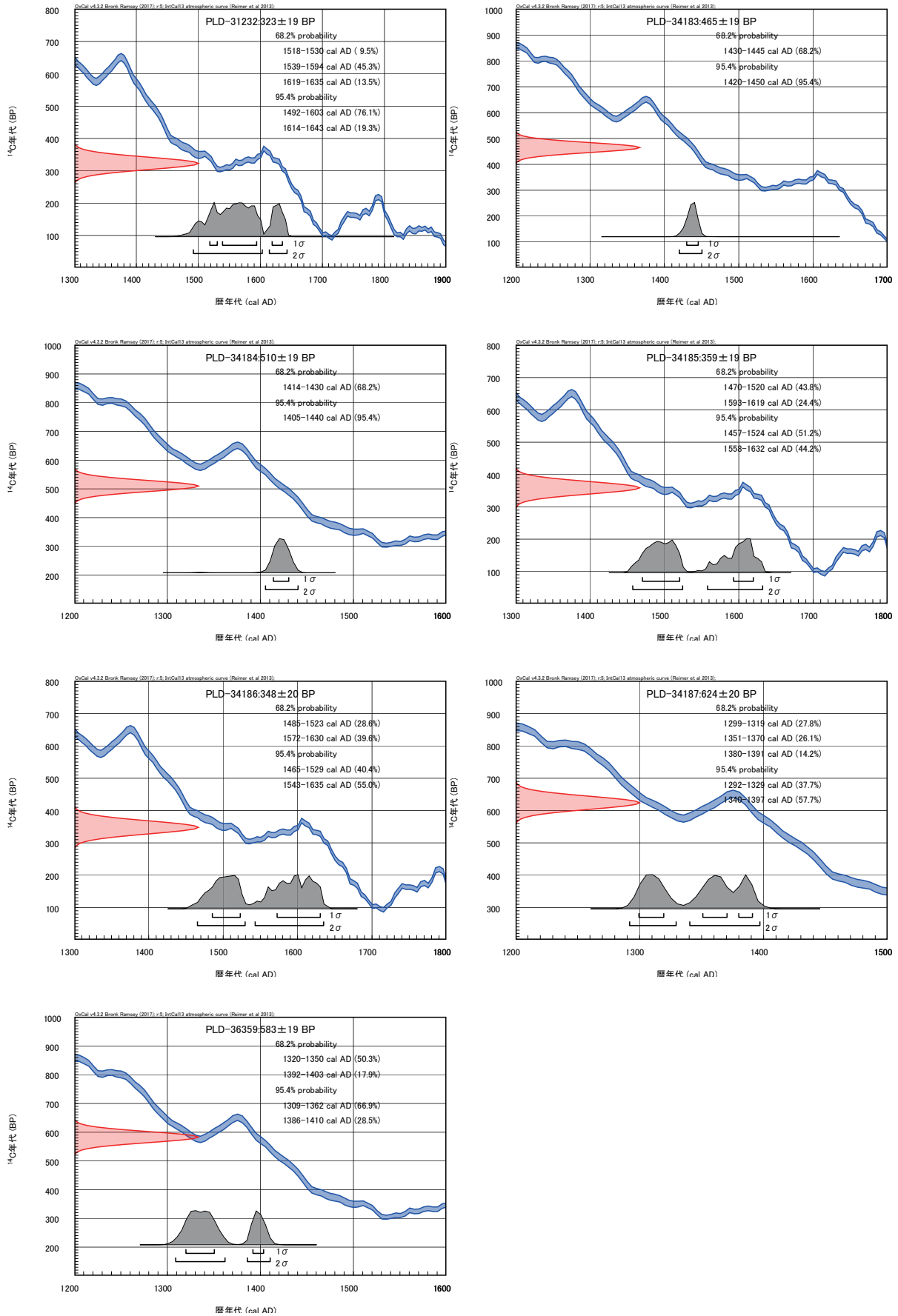


圖 2-94 曆年較正結果

3 平坦部AⅢ区及び平坦部A-2出土炭化材の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・黒沼保子

(1) はじめに

鬼北町の等妙寺旧境内から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

試料は炭化材 12 点である。平坦部AのⅢ区庭園地区では、滝S X O 2 水落付近岩盤採取の部位不明の炭化材（PLD-36360）、池S G O 1 底面付近の部位不明の炭化材（PLD-38398）、石組遺構（取水路）の硬化面中の部位不明の炭化材（PLD-38399）、土手状遺構の断ち割り深掘部下層から出土した部位不明の炭化材（PLD-40995）の 4 点である。平坦部A-2（観音堂跡）では 1 区遺構面上から出土した部位不明の炭化材（PLD-40996）と同じく 1 区東側拡張トレンチの発掘停止面付近から出土した、最終形成年輪が残存する炭化材（試料 No. 3 : PLD-40997）、平坦部A-2 の S X O 1 直上から出土した樹皮（試料 No. 4 : PLD-40998）、S X O 1 の埋土から出土した、最終形成年輪が残存する炭化材（PLD-40999）の 4 点である。同じく平坦部A-2 からは、S X O 1 埋土の炭化材（PLD-43043）と底面付近の炭化材（PLD-43044）、S X O 2 埋土の炭化材 2 点（PLD-43045、43046）の 4 点で、いずれも最終形成年輪が残存していた。なお、等妙寺旧境内の伽藍は 1320 年から 10 年かけて造営され、1588 年に焼失している。池は、開山の時期を遡る可能性も考えられている。

測定試料の情報、調製データは表 2-5 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

(3) 結果

表 2-6 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、図 2-95 と 2-96 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

表 2-5 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-36360	調査区：TM17 平坦部AⅢ区 遺構：滝SX02水落付近岩盤 分析No. 8	種類：炭化材（ヒノキ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 形状：丸木？（残存半径2.5cm、17年輪残存） 採取部位：外側2年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-38398	調査区：TM18 平坦部AⅢ区 遺構：SG01 位置：底面付近 試料No. 3	種類：炭化材（散孔材） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 形状：破片（残存径1.3cm角、23年輪残存） 採取部位：外側5年輪採取 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-38399	調査区：TM18 平坦部AⅢ区 遺構：石組遺構（取水路） 位置：硬化面中 試料No. 4	種類：炭化材（散孔材） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 形状：破片（残存径1.0cm角、15年輪残存） 採取部位：外側5年輪採取 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N） グラ化備考：ガラス片混
PLD-40995	調査区：TM19 平坦部AⅢ区 遺構：土手状遺構 位置：断ち割り深掘部下層 試料No. 1	種類：炭化材（散孔材） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 形状：破片（残存径0.5cm角、残存年輪数不明） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-40996	調査区：TM19 平坦部A-2 遺構：1区遺構面上 試料No. 2	種類：炭化材（散孔材） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 形状：破片（残存径0.5cm角、残存年輪数不明） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-40997	調査区：TM19 平坦部A-2 位置：発掘停止面付近 遺構：1区東側拡張Tr 試料No. 3	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪 形状：みかん割り状（残存半径1.3cm、残存年輪数不明） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-40998	調査区：TM19 平坦部A-2 遺構：SX01直上 試料No. 4	種類：炭化材（樹皮） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-40999	調査区：TM19 平坦部A-2 遺構：SX01埋土 試料No. 5	種類：炭化材（ツバキ属） 試料の性状：最終形成年輪 形状：みかん割り状（残存径半1.5cm、残存年輪数不明） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-43043	調査区：TM20 平坦部A-2 遺構：SX01 位置：埋土 試料No. 1	種類：炭化材（ツバキ属） 試料の性状：最終形成年輪 形状：みかん割り状（残存径1.2cm、残存年輪数不明） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

¹⁴C年代の暦年較正には 0xCal14.4 (較正曲線データ: IntCal20) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、0xCal の確率法を使用して算出された ¹⁴C年代誤差に相当する 68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

(4) 考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち 2 σ 暦年代範囲 (確率 95.45%) に着目して結果を整理する。

TM 17 平坦部 A III 区滝 S X O 2 水落付近岩盤採取の炭化材 (PLD-36360) は、991-1032 cal AD (95.45%) の暦年代を示した。これは 10 世紀末～11 世紀前半で、平安時代中期に相当する。

TM 18 平坦部 A III 区の池 S G O 1 底面付近から出土した炭化材 (PLD-38398) は、1039-1175 cal AD (94.28%) および 1195-1199 (1.17%) であった。これは 11 世紀前半～12 世紀末で、平安時代中期～後期に相当する。

TM 18 平坦部 A III 区の石組遺構 (取水路) の硬化面中から出土した炭化材 (PLD-38399) は、1053-1076 cal AD (7.90%) および 1156-1219 cal AD (87.55%) の暦年代を示した。これは 11 世紀中頃～13 世紀前半で、平安時代中期～鎌倉時代に相当する。

TM 19 平坦部 A III 区の土手状遺構の断ち割り深掘部下層の炭化材 (PLD-40995) は、1281-1317 cal AD (50.85%) および 1360-1388 cal AD (44.60%) の暦年代を示した。これは 13 世紀後半～14 世紀後半で、鎌倉時代～室町時代に相当する。平坦部 A-2 の 1 区遺構面上の炭化材 (PLD-40996) は、1229-1245 cal AD (6.71%) および 1255-1292 cal AD (88.74%) の暦年代を示した。これは 13 世紀前半～末で、鎌倉時代に相当する。平坦部 A-2 の 1 区東側拡張トレンチ発掘停止面付近の炭化材 (PLD-40997) は、1321-1358 cal AD (58.38%) および 1390-1418 cal AD (37.07%) の暦年代を示した。これは 14 世紀前半～15 世紀前半で、鎌倉時代～室町時代に相当する。平坦部 A-2 の S X O 1 直上の炭化材 (PLD-40998) は 1230-1243 cal AD (5.12%) および 1258-1293 cal AD (90.33%)、S X O 1 埋土の炭化材 (PLD-40999) は 1267-1298 cal AD (95.45%) の暦年代を示した。どちらも 13 世紀代で、鎌倉時代に相当する。

TM 20 の平坦部 A-2 の S X O 1 埋土の炭化材 (PLD-43043) は、1051-1079 cal AD (17.33%) および 1155-1217 cal AD (78.12%) の暦年代を示した。これは 11 世紀中頃～13 世紀前半で、平安時代中期～鎌倉時代に相当する。S X O 1 の底面付近の炭化材 (PLD-43044) は、1271-1298 cal AD (95.45%) の暦年代を示した。これは 13 世紀後半で、鎌倉時代に相当する。S X O 2 埋土の炭化材 (PLD-43045) は、1290-1321 cal AD (39.52%) および 1357-1390 cal AD (55.93%) の暦年代を示した。これは 13 世紀後半～14 世紀後半で、鎌倉時代～室町時代に相当する。同じく S X O 2 埋土の炭化材 (PLD-43046) は、1226-1276 cal AD (95.45%) の暦年代を示した。これは 13 世紀代で、鎌倉時代に相当する。

木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、内側であるほど古い年代が得られる (古木効果)。TM 19 平坦部 A-2 の 1 区東側拡張トレンチ発掘停止面付近の炭化材 (PLD-40997) と S X O 1 埋土の炭化材 (PLD-40999)、TM 20 平坦部 A-2 の S X O 1 埋土の炭化材 (PLD-43043) と底面付近の炭化材 (PLD-43044)、S X O 2 埋土の炭化材 2 点 (PLD-43045、43046) は、最終形成年輪が残存しており、得られた最終形成年輪の年代は木材が伐採もしくは枯死した年代を示していると考えられる。一方、それ以外の部位不明の試料 5 点は、

表 2-6 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-36360	-24.01 \pm 0.25	1035 \pm 21	1035 \pm 20	994-1007 cal AD (35.97%) 1011-1023 cal AD (32.30%)	991-1032 cal AD (95.45%)
PLD-38398	-29.15 \pm 0.23	921 \pm 20	920 \pm 20	1047-1083 cal AD (38.72%) 1095-1102 cal AD (4.66%) 1125-1141 cal AD (11.33%) 1148-1163 cal AD (13.56%)	1039-1175 cal AD (94.28%) 1195-1199 cal AD (1.17%)
PLD-38399	-26.64 \pm 0.22	881 \pm 19	880 \pm 20	1163-1181 cal AD (28.89%) 1187-1212 cal AD (39.38%)	1053-1076 cal AD (7.90%) 1156-1219 cal AD (87.55%)
PLD-40995	-30.19 \pm 0.17	668 \pm 19	670 \pm 20	1287-1303 cal AD (36.15%) 1367-1380 cal AD (32.12%)	1281-1317 cal AD (50.85%) 1360-1388 cal AD (44.60%)
PLD-40996	-28.04 \pm 0.19	744 \pm 21	745 \pm 20	1267-1281 cal AD (68.27%)	1229-1245 cal AD (6.71%) 1255-1292 cal AD (88.74%)
PLD-40997	-28.16 \pm 0.19	570 \pm 20	570 \pm 20	1327-1350 cal AD (43.64%) 1395-1406 cal AD (24.63%)	1321-1358 cal AD (58.38%) 1390-1418 cal AD (37.07%)
PLD-40998	-30.00 \pm 0.16	742 \pm 21	740 \pm 20	1268-1281 cal AD (68.27%)	1230-1243 cal AD (5.12%) 1258-1293 cal AD (90.33%)
PLD-40999	-29.86 \pm 0.21	722 \pm 20	720 \pm 20	1274-1288 cal AD (68.27%)	1267-1298 cal AD (95.45%)
PLD-43043	-24.87 \pm 0.23	891 \pm 17	890 \pm 15	1055-1056 cal AD (1.38%) 1158-1180 cal AD (36.29%) 1188-1210 cal AD (30.59%)	1051-1079 cal AD (17.33%) 1155-1217 cal AD (78.12%)
PLD-43044	-24.19 \pm 0.18	716 \pm 17	715 \pm 15	1276-1288 cal AD (68.27%)	1271-1298 cal AD (95.45%)
PLD-43045	-26.08 \pm 0.24	650 \pm 17	650 \pm 15	1297-1308 cal AD (20.28%) 1362-1387 cal AD (47.98%)	1290-1321 cal AD (39.52%) 1357-1390 cal AD (55.93%)
PLD-43046	-27.64 \pm 0.19	778 \pm 17	780 \pm 15	1230-1243 cal AD (25.55%) 1258-1274 cal AD (42.72%)	1226-1276 cal AD (95.45%)

最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木材が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。また、TM 19 平坦部 A-2 の S X 0 1 直上の炭化材 (PLD-40998) は樹皮であり、枯死もしくは伐採された年代に近い年代を示していると考えられる。

【参考文献】

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

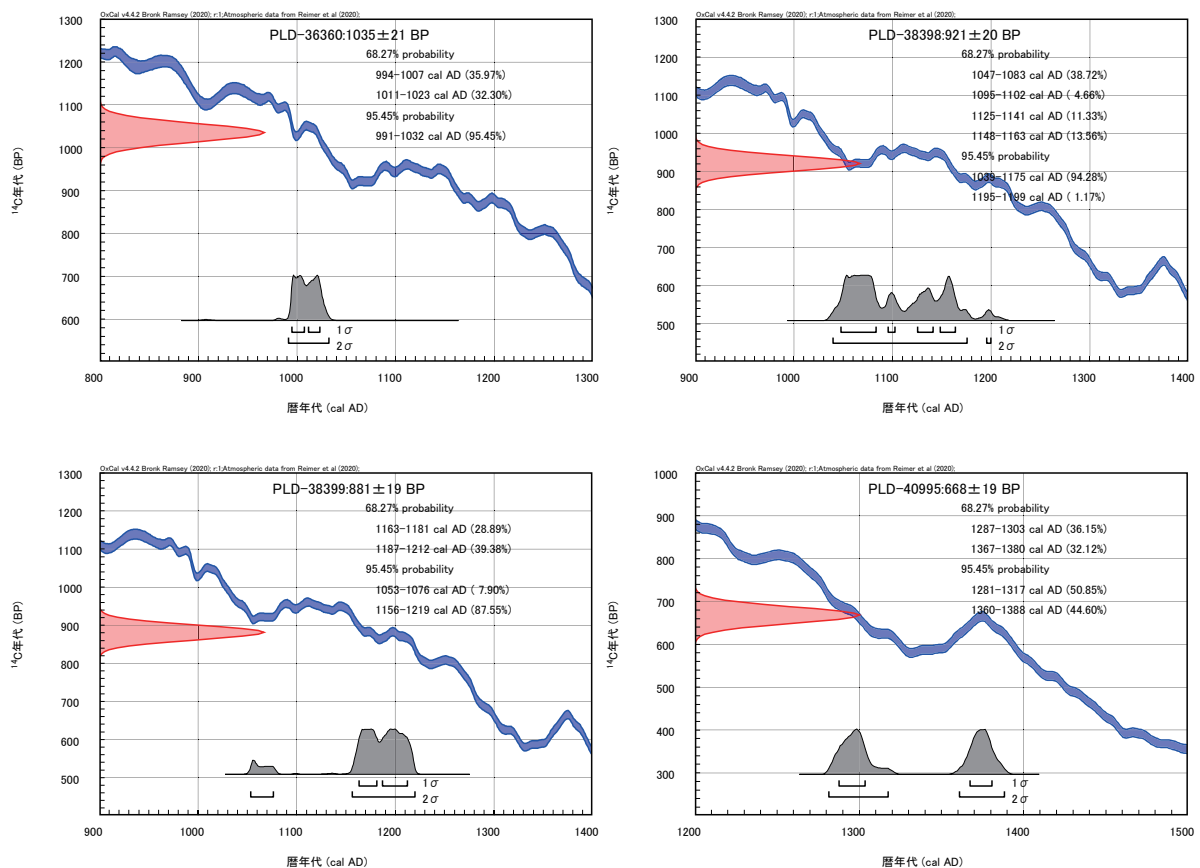


図 2-95 暦年較正結果 (1)

第 1 節 放射性炭素年代測定

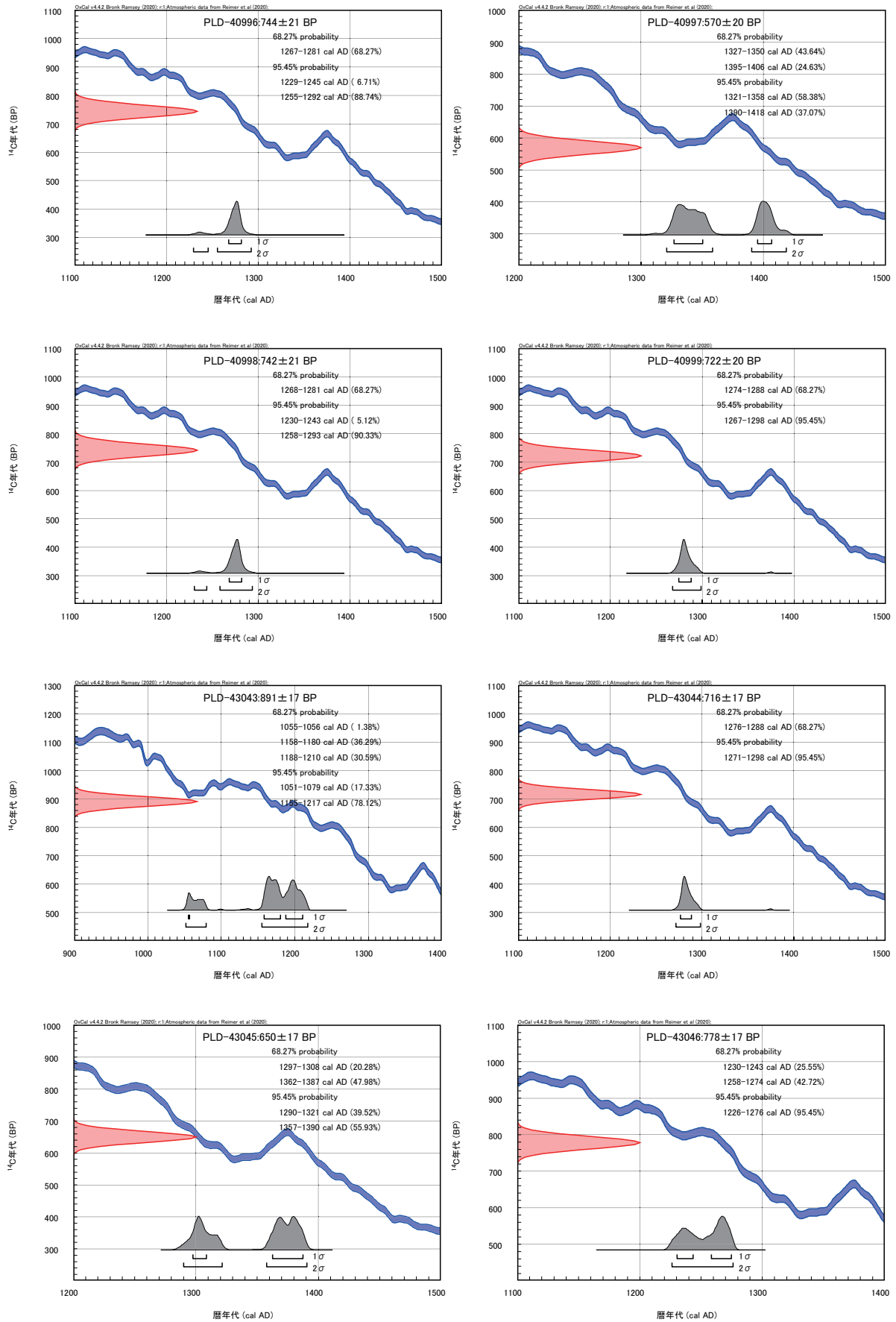


圖 2-96 曆年較正結果 (2)

第2節 樹種同定

平坦部A出土炭化材の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

（1）はじめに

北宇和郡鬼北町に所在する等妙寺旧境内は、鬼ヶ城連山の郭公岳北麓の標高約 340 m の場所に位置する。ここでは、平坦部Aから検出された建物などの遺構に伴う炭化材について、樹種同定を行った。なお、一部の試料については、放射性炭素年代測定も行われている。

（2）試料と方法

試料はI区本坊地区のトレンチと北側の焼土・炭層（II層）及び斜面Bトレンチ（H11年度調査）の炭層、鍛冶工房建物跡S B 0 7に伴う柱穴S P 0 3・S P 1 1の柱痕、1号鍛冶炉の周辺、3号鍛冶炉の炉底、鍛冶工房建屋以前の埋土内、トレンチ2の第1遺構面（本坊建物基盤層下面）、II区本堂地区の本堂前庭部表層と新本堂跡S B 0 2北西隅焼土面及び表層、旧本堂S B 0 1基壇基盤面、III区庭園地区の池状遺構S X 0 1周辺と表層、滝S X 0 2水落付近岩盤、Hトレンチ（H11年度調査）から出土した炭化材である。多くは1試料内に複数の樹種が混在しており、総計140点となった。

炭化材の樹種同定は、まず肉眼観察による形状の確認と残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、実体顕微鏡観察で大まかな分類群に分け、カミソリまたは手で3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、直径1 cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定した。イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VE-9800）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。なお、年代測定を優先した試料については、実体顕微鏡観察のみを行った。残りの試料は、鬼北町教育委員会に保管されている。

（3）結果

樹種同定の結果、針葉樹はモミ属とマツ属複雑管束亜属、ヒノキ、スギ、アスナロ、ヒノキ科の6分類群、広葉樹はシキミとクスノキ科、イスノキ、カツラ、ユズリハ属、エノキ属、スダジイ、コナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属）、コナラ属コナラ節（以下、コナラ節）、クマシデ属イヌシデ節（以下、イヌシデ節）、サカキ、ツバキ属、ハイノキ属ハイノキ節（以下、ハイノキ節）、アセビ、ムラサキシキブ属、モチノキ属の16分類群、その他に単子葉類のタケ亜科があり、計23分類群が確認された。遺構別の樹種同定結果を表2-7に、結果の一覧を表2-8、2-9に示す。実体顕微鏡観察のみを行った試料の樹種は、括弧内に示した。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を写真2-7～2-10に示す。

（1）モミ属 *Abies* マツ科 写真2-7 1a-1c (No.11-3)

仮道管および放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射組織でじゅず状末端壁がみられる。分野壁孔はスギ型で、1分野に1～4個存在する。

モミ属は暖帯から温帯の山地に生育する常緑高木で、ウラジロモミやシラベ、トドマツなど約5種

がある。材は柔軟で加工容易であるが、割れや狂いが出やすく、保存性が低い。

(2) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxyton* マツ科 写真 2-7 2a-2c (No.15-1)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側向きに鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、韌性は大である。

(3) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 写真 2-7 3a-3c (No.31-1)

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に2個存在する。

ヒノキは福島県以南の温帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は加工容易で割裂性は大きく、耐朽性および耐湿性は著しく高く、狂いが少ない。

(4) スギ *Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don スギ科 写真 2-7 4a-4c (No.6-1)

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に通常2個並ぶ。

スギは暖帯から温帯下部に生育する常緑高木である。材は比較的軽軟で、切削加工は容易であり、割裂性は大きい。

(5) アスナロ *Thujaopsis dolabrata* Sieb. et Zucc. ヒノキ科 写真 2-7 5a-5c (No.37-1)

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材部から晩材部への移行は比較的緩やかである。樹脂細胞は晩材部に散在し、放射組織内にも豊富に樹脂を含む。分野壁孔は小型のスギ型～ヒノキ型で、1分野に不揃いに3～4個存在する。

アスナロは温帯に分布する常緑高木である。材は、加工性や割裂性は中庸だが、耐朽性および保存性が高い。

(6) ヒノキ科 *Cupressaceae*

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は小型で、1分野に1～3個存在する。試料の状態が悪く、分野壁孔の型が不明瞭であるため、ヒノキ科までの同定に留めた。

(7) シキミ *Illicium religiosum* Siebold et Zucc. シキミ科 写真 2-7、2-8 6a-6c (No.11-1)

小型で角張った道管がほぼ単独で分布する散孔材で、年輪のはじめに道管が1列に配列する傾向がある。道管の穿孔は40段以上の階段状である。放射組織は1～3列幅で、異性である。

シキミは暖帯に分布する常緑の小高木もしくは低木である。材はやや重硬で、粘り気がある。

(8) クスノキ科 *Lauraceae* 写真 2-8 7a-7c (No.15-6)

やや小型の道管が、単独ないし2～4個複合してまばらに分布する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状～翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で、1～3列幅である。

クスノキ科は熱帯から温帯に分布する常緑または落葉の高木もしくは低木である。ニッケイ属やタブノキ属、クロモジ属など8属がある。

(9) イスノキ *Distylium racemosum* Siebold et Zucc. マンサク科 写真 2-8 8a-8c (No.8)

小型で角張った道管が、単独あるいは数個複合して均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は

20 段程度の階段状である。軸方向柔組織は散在もしくは帯状～線状にいびつに配列する。放射組織は 1～3 列幅の異性で、細胞中に結晶を含む。

イスノキは関東以西の暖帯に分布する常緑高木である。材はきわめて重硬で、切削加工および割裂は困難である。

(10) カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Siebold et Zucc. ex Hoffm. et Schult. カツラ科 写真 2-8 9a-9c (No. 22-3)

小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。道管の穿孔は階段状で、30 段程度となる。放射組織は 1～3 列幅で、平伏細胞と方形細胞からなる異性である。

カツラは温帯から暖帯に分布する落葉高木である。材は軽軟で靱性があり、加工は容易である。

(11) ユズリハ属 *Daphniphyllum* ユズリハ科 写真 2-8 10a-10c (No. 20-3)

小型で角張った道管が、ほぼ単独で均等に分布する散孔材である。年輪界はやや不明瞭である。道管の穿孔は 20～40 段程度の階段状となる。軸方向柔組織は短接線状となる。放射組織は異性で、1～3 列幅である。

ユズリハ属は温帯～亜熱帯に生育する常緑の高木または低木で、ユズリハやエゾユズリハ、ヒメユズリハなどがある。材はやや重硬である。

(12) エノキ属 *Celtis* ニレ科 写真 2-8、2-9 11a-11c (No. 12-2)

大型の道管が年輪のはじめに配列し、晩材部では径を減じた薄壁の小道管が集団をなして接線から斜めに配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状～翼状となる。道管の穿孔は単一である。小道管の内壁にらせん肥厚がみられる。放射組織は 3～8 列幅の異性で、鞘細胞がある。接線断面において放射組織と軸方向柔組織が層界状に配列する。

エノキ属は温帯から熱帯に分布する落葉性の小高木から高木で、日本列島にはエノキなど 4 種がある。材は比較的硬いが、強度や耐朽性は低く、狂いが出やすい。

(13) スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T. Yamaz. et Mashiba ブナ科 写真 2-9 12a-12c (No. 11-4)

環孔性の放射孔材で、年輪のはじめの道管は単独でやや大きいが、接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火炎状に配列する。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。放射組織は単列同性である。

スダジイは福島県と新潟県佐渡以南の暖帯に生育する常緑高木である。材はやや重硬で、割裂性や耐朽性は中庸だが、狂いが出やすい。

(14) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 写真 2-9 13a-13c (No. 1)

円形でやや大型の道管が、単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織がある。

アカガシ亜属は主に暖帯に分布する常緑高木で、日本列島にはアカガシやシラカシ、ツクバネガシ、アラカシなど 8 種がある。イチイガシとシリブカガシマテバシイ以外は木材組織からは識別困難なため、イチイガシとシリブカガシマテバシイを除いたアカガシ亜属とする。材は、きわめて堅硬および強靱で、水湿に強い。

(15) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 写真 2-9 14a-14c (No. 39-3)

大型の道管が年輪のはじめに 1 列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、

単列と広放射組織の2種類がある。

コナラ節は温帯下部および暖帯に分布する落葉高木で、日本列島にはカシワとミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は全体的に重硬で、加工困難である。

(16)クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus* sect. *Eucarpinus* カバノキ科 写真2-9 15a-15c (No.13-3)

やや小型から中型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して分布する散孔材である。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織は晩材部で1列幅の接線状となる。放射組織は同性で1～3列幅、集合放射組織がみられる。

イヌシデ節は温帯から暖帯の低山地に分布する落葉中高木で、日本列島にはイヌシデとイワシデ、アカシデがある。材は重硬で靱性が大きく、割裂しにくい。

(17) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 写真2-9 16a-16c (No.15-3)

小径で角張った道管が、ほぼ単独で均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は30段程度の階段状である。放射組織は異性で、ほぼ1列である。

サカキは暖帯から亜熱帯に分布する常緑の小高木である。材は硬く強靱で、割裂は困難である。

(18) ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 写真2-10 17a-17c (No.19)

小径の道管がほぼ単独で密に分布する散孔材で、晩材に向けてやや径を減じる。道管の穿孔は10段程度の横棒からなる階段状である。放射組織は方形もしくは直立細胞が上下に2～4細胞連なる異性で、1～3列幅程度、多列部が単列部と同じ大きさである。円形に著しくふくれた大型の結晶が単列部に認められる。

ツバキ属は温帯から暖帯に生育する常緑高木もしくは低木である。ヤブツバキやサザンカ、チャノキなどがある。材は重硬および緻密で、切削加工および割裂は困難であるが、強靱で、耐朽性は大きい。

(19) ハイノキ属ハイノキ節 *Symplocos* sect. *Lodhra* ハイノキ科 写真2-10 18a-18c (No.41-3)

小型で角張った道管が、単独で分布する散孔材である。道管の穿孔は30段程度の階段状で、道管壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は1～5列幅程度で、上下に方形もしくは直立細胞が数個連なる異性である。

ハイノキ節は主に暖帯から熱帯に分布する常緑の低木または高木で、ハイノキやクロキ、シロバイなど17種がある。材は緻密で、やや堅硬である。

(20) アセビ *Pieris japonica* D. Don ex G. Don subsp. *japonica* ツツジ科 写真2-10 19a-19c (No.18-4)

小型で角張った道管が、接線方向もしくは斜線状に配列する散孔材である。道管の穿孔は、単一のものと同段階状の2種類が存在する。道管のらせん肥厚が明瞭である。放射組織は1～3列幅で、異性である。

アセビは温帯から暖帯の山地に分布する常緑低木である。材は重硬および緻密である。

(21) ムラサキシキブ属 *Callicarpa* クマツヅラ科 写真2-10 20a-20c (No.49)

小型の道管が、単独もしくは数個複合して分布する散孔材である。軸方向柔組織は随伴散在状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で、1～4列幅である。

ムラサキシキブ属は熱帯から温帯にかけて分布する落葉または常緑の低木または小高木で、日本列島にはヤブムラサキやムラサキシキブなど11種がある。

(22) モチノキ属 *Ilex* モチノキ科 写真2-10 21a-21c (No.39-6)

小型の道管が、放射方向に数個複合して分布する散孔材である。道管の穿孔は20～40段程度の階

段状で、道管にはらせん肥厚が明瞭である。放射組織は多列で、ほぼ同性である。

モチノキ属は熱帯から温帯に分布する常緑または落葉の高木または低木である。日本列島には23種があるが、大きく常緑性のモチノキ亜属と落葉性のウメモドキ亜属に分けられる。材は、全体的に重硬および強靱である。

(23) タケ亜科 Subfam. Bambusoideae イネ科 写真2-10 22a (No.13-2)

柔細胞と維管束で構成される単子葉類で、維管束は柔細胞中に散在する。維管束は一对の道管とそれと直行する原生木部間隙と師部で形成され、その周囲を厚膜組織からなる維管束鞘が取り囲む。

タケ・ササの仲間では日本列島では12属が含まれるが、稈の組織のみから属や種を識別するのは難しい。割裂性が非常に大きい。

表2-7 遺構別の樹種同定結果

表1 遺構別の樹種同定結果

樹種	I 区本坊地区										II 区本堂地区			III 区庭園地区				計		
	トレンチ 焼土・炭層		北側 焼土・炭層		1号 鍛冶炉 周辺	3号 鍛冶炉 炉底	SP03 柱痕	SP11 柱痕	トレンチ2 第1 遺構面		斜面Bト レンチ	北西隅 焼土面	本堂 前庭部	旧本堂 基壇 基盤面	滝SX02 水落付 近岩盤	H トレン チ奥部	池状遺構SX01周辺			
	II層	-	II層	II層	-	-	-	-	-	炭層	-	表層	-	-	-	-	表層		トレンチ	
モミ属			1	1															2	
マツ属複維管束亜属	6		1	2	1														10	
ヒノキ			1	4	1										1	1	4	1	1	15
スギ	1		2	2	1	1		1				1	1						10	
アスナロ					1														1	
ヒノキ科 (針葉樹)	1		1	1															2	
シキミ	1		1	1	2									1					5	
クスノキ科			1																1	
イスノキ	3		1	6															10	
カツラ				1															1	
ユズリハ属				1															1	
エノキ属			1																1	
スダジイ			2	1															3	
コナラ属アカガシ亜属 (コナラ属アカガシ亜属)	6		6	15	2	9				1									39	
コナラ属コナラ節	1						1	1											2	
クマシデ属イヌシデ節			2	1	1				1										5	
サカキ			4	8															12	
ツバキ属				1															1	
ハイノキ属ハイノキ節	1																		1	
アセビ				1															1	
ムラサキシキブ属													1						1	
モチノキ属	1		1																2	
タケ亜科			1	6	1														8	
総計	21		25	52	4	#	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	4	1	1	140

(4) 考察

全体ではアカガシ亜属（実体顕微鏡観察のみによる同定試料を含む）が41点で最も多く、ヒノキが15点、サカキが12点、マツ属複維管束亜属とスギ、イスノキが10点、それ以外は10点未満であった。試料の約9割がI区本坊地区から出土した炭化材であり、本坊建物の建築部材、および調度品や器具材であった可能性がある。広葉樹で多くみられたアカガシ亜属やイスノキは非常に重硬な材であり、その他のイヌシデ節とスダジイ、コナラ節、エノキ属、シキミ、ツバキ属、サカキ、ユズリハ、アセビも比較的重硬な材である（平井，1996）。また、確認された広葉樹の中ではカツラのみが軽軟な材である（平井，1996）。針葉樹ではマツ属複維管束亜属がやや重硬な部類であるが、その他のモミ属とヒノキ、スギ、アスナロ、ヒノキ科は軽軟で加工容易な材である。したがって、これらの炭化材が建築部材であった場合、重硬な広葉樹が選択的に利用されていた可能性があり、部材を使う場所によっては軽軟な針葉樹も利用していたと推測される。

また、1号鍛冶炉の周辺や3号鍛冶炉の炉底から出土した炭化材はアカガシ亜属であり、燃料材と考えられる。鍛冶工房建物跡SB07に伴う柱穴SP03から出土した柱痕の炭化材は針葉樹、SP11から出土した柱痕の炭化材はスギであった。

なお、Ⅰ区本坊地区では北側から出土した炭化材（イスノキ）と1号鍛冶炉の周辺から出土した炭化材（アカガシ亜属）、3号鍛冶炉の炉底から出土した炭化材（アカガシ亜属）、鍛冶工房建物跡S B 0 7に伴う柱穴S P 0 3から出土した柱痕の炭化材（針葉樹）、S P 1 1から出土した柱痕の炭化材（スギ）の年代測定結果は、室町時代もしくは室町時代～江戸時代前期に相当する暦年代であった。いずれも旧境内が使用されていた時期および焼失年代を含む年代であるため、旧境内が使用されていた当時の植生や木材利用傾向を示していると考えられる。

Ⅱ区本堂地区の本堂前庭部ではスギとムラサキシキブ属、旧本堂S B 0 1基壇基盤面では針葉樹、北西隅焼土面や表層の炭化材もスギやヒノキ科で、ほぼ針葉樹で構成されていた。Ⅲ区庭園地区の池状遺構S X 0 1周辺ではヒノキ、滝S X 0 2水落付近ではヒノキが確認された。これらの炭化材の用途は不明であるが、未炭化の部位が残っていた試料も多く、小径の丸木もみられた。

年代測定では、Ⅱ区本堂地区の旧本堂S B 0 1基壇基盤面から出土した炭化材（針葉樹）は、鎌倉～室町時代に相当する暦年代で、創建年代および旧境内が使用されていた時期を含む年代であった。したがって、旧境内が使用されていた時期の庭木などの可能性も考えられる。一方、Ⅲ区の滝S X 0 2水落付近岩盤で採取された炭化材（ヒノキ）は平安時代中期に相当する暦年代で、創建年代よりも古い年代を示したため、等妙寺開山期以前の試料であると考えられる。

トレンチの試料では、Ⅰ区本坊地区の斜面Bトレンチでアカガシ亜属、採取位置不明の炭化材はスギであった。トレンチ2の第1遺構面ではイヌシデ節が確認された。Ⅲ区庭園地区のHトレンチの奥部ではヒノキが確認された。

今回の分析で確認された樹種は、いずれも常緑広葉樹林帯に生育し、遺跡周辺を分布域にもつ樹種である（平井，1996）。したがって、周辺の山林から木材を調達していた可能性が考えられる。愛媛県内では、喜多郡内子町の太田城跡の鎌倉時代～江戸時代初期の建築部材でスギとアカガシ亜属が確認されている。時期が異なる遺跡の例になるが、西条市の久枝Ⅱ遺跡で弥生時代中期の建築材にヒノキ、松山市の釜ノ口遺跡で弥生時代後期～古墳時代初頭の建築材にアカガシ亜属が多用されていた（伊東・山田編，2012）。等妙寺旧境内の周辺ではこれまでに中世の建築材を分析した事例がなく、四国地域内でも100点を超える炭化材の樹種同定は初めてである。今回の試料はいずれも用途不明であるが、今後、分析事例が増加すれば、周辺地域の木材利用傾向がより明らかになるとと思われる。

【引用文献】

平井信二（1996）木の大自然．394p，朝倉書店．

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品用材データベース—．449p，海青社．

表 2-8 樹種同定結果一覧 (1)

分析No.	区	区域・遺構	層	番号	樹種	形状	残存径	残存 年輪数	年代測定 番号	分析年度
1	I 区本坊地区	-	II層	No.9	コナラ属アカガシ亜属	破片	<2cm角	不明	-	2015
2	I 区本坊地区	-	II層	No.11	コナラ属アカガシ亜属	破片	1.5×1.3cm	不明	-	
3	I 区本坊地区	-	-	No.20	コナラ属アカガシ亜属	みかん割り状	3×2×2.5cm	不明	-	
4	I 区本坊地区	-	-	No.24	コナラ属アカガシ亜属	破片	<1cm角	不明	-	
5	I 区本坊地区	-	-	No.27	コナラ属アカガシ亜属	破片	<1.5cm角	不明	-	
6-1	I 区本坊地区	-	-	No.29	スギ	破片	1.5×1.5cm	5	-	
6-2					コナラ属アカガシ亜属	破片	<1.5cm角	不明	-	
7	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層(II層)	-	No.5	ヒノキ	破片	<2cm角	<7	-	
8	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	-	No.36	イスノキ	丸木	直径1cm	8	PLD-31232	
9	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	-	No.37	コナラ属アカガシ亜属	破片	1.3×1.3cm	不明	-	
10	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	-	No.38	コナラ属アカガシ亜属	みかん割り状	半径2cm	不明	-	
11-1	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	-	No.39	シキミ	破片	<3cm角	<17	-	
11-2					コナラ属アカガシ亜属	破片	<2cm角	不明	-	
11-3					モミ属	丸木?	直径3cm	19	-	
11-4					スダジイ	破片	0.5×0.88cm	4	-	
12-1					スギ	半割状	直径4cm (一部未炭化)	20	-	
12-2	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	-	No.40	エノキ属	破片	1×1.5cm	23	-	
12-3					サカキ	破片	<1.5cm角	不明	-	
13-1	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	-	No.43	スギ	破片	<2cm角	3	-	
13-2					タク亜科	破片	1.5×0.5	-	-	
13-3					クマシデ属イヌシデ節	破片	<2.5cm角	<40	-	
13-4					サカキ	芯去削出?	直径0.7cm	不明	-	
13-5					コナラ属アカガシ亜属	破片	0.8×1.2cm	不明	-	
14					I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	-	No.45	サカキ	
15-1	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	-	No.46	マツ属複雑管束亜属	破片	<3cm角	<15	-	
15-2					コナラ属アカガシ亜属	破片	<2.5cm角	11?	-	
15-3					サカキ	破片	<1.5cm角	20	-	
15-4					モチノキ属	丸木	直径1.2cm	7	-	
15-5					クマシデ属イヌシデ節	破片	1.2×0.5cm	14	-	
15-6					クスノキ科	破片	1.8×1cm	21	-	
15-7				スダジイ	破片	0.3×0.5cm	3	-		
16	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	-	No.48	コナラ属アカガシ亜属	破片	<2cm角	不明	-	
17-1	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	II層	-	サカキ	破片	<1cm角	15	-	
17-2					コナラ属アカガシ亜属	破片	0.5×1.5cm	不明	-	
18-1	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	II層	-	サカキ	破片	<1cm角	<17	-	
18-2					ヒノキ	破片	<1cm角	<5	-	
18-3					コナラ属アカガシ亜属	破片	0.5×0.3cm	不明	-	
18-4					アセビ	破片	0.7×0.5cm	不明	-	
18-5					タク亜科	破片	0.3×0.3cm	-	-	
19					I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	II層	-	ツバキ属	
20-1					スギ	破片	<1cm角	<9	-	
20-2	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	II層	-	コナラ属アカガシ亜属	破片	<0.5cm角	不明	-	
20-3					ユズリハ属	破片	0.3×0.3cm	5	-	
20-5					タク亜科	破片	0.3×0.2cm	-	-	
21-1	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	II層	-	イスノキ	丸木	直径1.7cm	14	-	
21-3					タク亜科	破片	1×0.2cm	-	-	
21-4					コナラ属アカガシ亜属	破片	<1cm角	不明	-	
21-5					ヒノキ科	破片	<1cm角	<2	-	
22-1					コナラ属アカガシ亜属	破片	<1cm角	不明	-	
22-2	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	II層	-	サカキ	破片	<1cm角	<25	-	
22-3					カツラ	破片	0.7×0.4cm	不明	-	
22-4					イスノキ	破片	0.8×0.3cm	5	-	
22-5					マツ属複雑管束亜属	破片	<1cm角	<5	-	
23-1					コナラ属アカガシ亜属	破片	<1cm角	不明	-	
23-2					スダジイ	破片	<1cm角	2	-	
23-3	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	II層	-	タク亜科	破片	<1cm角	-	-	
23-4					マツ属複雑管束亜属	破片	<1cm角	1	-	
23-5					イスノキ	破片	<1cm角	6	-	
23-6					サカキ	破片	<1cm角	7	-	
24-1					コナラ属アカガシ亜属	破片	<1cm角	不明	-	
24-2	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	II層	-	タク亜科	破片	<1cm角	-	-	
24-3					スギ	破片	<1cm角	3	-	
24-4					イスノキ	破片	<1cm角	4	-	
25-1					コナラ属アカガシ亜属	破片	<0.5cm角	不明	-	
25-2	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	II層	-	モミ属	破片	<1.5cm角	3	-	
25-3					イスノキ	破片	<0.5cm角	3	-	
26					I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	II層	-	サカキ	破片
27-1	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	II層	-	サカキ	破片	<1.5cm角	8	-	
27-2					コナラ属アカガシ亜属	破片	<1.5cm角	不明	-	
28	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	II層	-	コナラ属アカガシ亜属	破片	<1cm角	不明	-	
29-1	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	II層	-	コナラ属アカガシ亜属	破片	<1cm角	不明	-	
29-2					イスノキ	丸木・破片	直径1cm、破片<1cm角	5	-	
30-1	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	II層	-	コナラ属アカガシ亜属	破片	<1cm角	不明	-	
30-2					サカキ	破片	<1.5cm角	<20	-	
30-3					クマシデ属イヌシデ節	破片	<1cm角	不明	-	
31-1	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	II層	-	ヒノキ	破片	<1.5cm角	2	-	
31-2					コナラ属アカガシ亜属	破片	<1cm角	不明	-	
32-1	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	II層	-	コナラ属アカガシ亜属	破片	<1cm角	不明	-	
32-2					シキミ	丸木	直径1.3cm	5	-	
32-3					ヒノキ	破片	<0.5cm角	3	-	
33-1					サカキ	丸木・破片	直径1.2cm	5	-	
33-2					コナラ属アカガシ亜属	破片	<1.5cm角	不明	-	
33-3	I 区本坊地区	北側 焼土・炭層	II層	-	タク亜科	破片	<2cm角	-	-	
33-4					ヒノキ	破片	<1.5cm角	2	-	

付表 2-9 樹種同定結果一覧 (2)

分析No.	区	区域・遺構	層	番号	樹種	形状	残存径	残存年輪数	年代測定番号	分析年度	
34	I 区本坊地区	-	-	No. 66	コナラ属アカガシ亜属	破片	<3cm角	不明	-	2015	
35-1	I 区本坊地区	-	-	No. 69	シキミ	丸木・破片	直径0.8cm	7	-		
35-2	I 区本坊地区	-	-	No. 69	マツ属複雑管束亜属	破片	<2cm角	8	-		
35-3	I 区本坊地区	-	-	No. 69	ヒノキ	破片	<1cm角	3	-		
35-4	I 区本坊地区	-	-	No. 69	コナラ属アカガシ亜属	破片	<1.5cm角	不明	-		
36-1	I 区本坊地区	-	-	No. 70	コナラ属アカガシ亜属	破片	<3cm角	不明	-		
36-2	I 区本坊地区	-	-	No. 70	タケ亜科	破片	<2cm角	-	-		
37-1	I 区本坊地区	-	-	No. 74	アスナロ	丸木	直径1.8cm	15	-		
37-2	I 区本坊地区	-	-	No. 74	コナラ属アカガシ亜属	破片	<2cm角	不明	-		
37-3	I 区本坊地区	-	-	No. 74	クマシデ属イヌシデ節	破片	<2.5cm角	<10	-		
38-1	I 区本坊地区	-	-	No. 78	コナラ属アカガシ亜属	破片	<2cm角	不明	-		
38-2	I 区本坊地区	-	-	No. 78	シキミ	破片	<2cm角	不明	-		
39-1	I 区本坊地区	トレンチ 焼土・炭層	II層	-	スギ	丸木・破片	直径0.5cm	5	-		
39-2	I 区本坊地区			-	No. 78	コナラ属アカガシ亜属	破片	<1cm角	不明		-
39-3	I 区本坊地区			-	No. 78	コナラ属コナラ節	破片	<1cm角	2		-
39-4	I 区本坊地区			-	No. 78	マツ属複雑管束亜属	破片	<0.5cm角	3		-
39-5	I 区本坊地区			-	No. 78	イヌノキ	破片	<0.5cm角	不明		-
39-6	I 区本坊地区			-	No. 78	モチノキ属	破片	<0.5cm角	3		-
40-1	I 区本坊地区	トレンチ 焼土・炭層	II層	-	イヌノキ	破片	<1cm角	<10	-		
40-2	I 区本坊地区			-	No. 78	コナラ属アカガシ亜属	破片	<0.5cm角	不明		-
40-3	I 区本坊地区	トレンチ 焼土・炭層	II層	-	マツ属複雑管束亜属	破片	<0.5cm角	2	-		
41-1	I 区本坊地区			-	No. 78	マツ属複雑管束亜属	破片	<0.5cm角	4		-
41-2	I 区本坊地区			-	No. 78	コナラ属アカガシ亜属	破片	<1.5cm角	不明		-
41-3	I 区本坊地区	トレンチ 焼土・炭層	II層	-	ハイノキ属ハイノキ節	破片	<1cm角	不明	-		
42-1	I 区本坊地区			-	No. 78	コナラ属アカガシ亜属	破片	<1.5cm角	不明		-
42-2	I 区本坊地区			-	No. 78	シキミ	破片	<0.5cm角	2		-
42-3	I 区本坊地区			-	No. 78	マツ属複雑管束亜属	破片	<0.5cm角	1		-
42-4	I 区本坊地区	トレンチ 焼土・炭層	II層	-	ヒノキ科	破片	<1cm角	2	-		
43-1	I 区本坊地区			-	No. 78	コナラ属アカガシ亜属	破片	<1.5cm角	不明		-
43-2	I 区本坊地区			-	No. 78	マツ属複雑管束亜属	破片	<1.5cm角	1		-
44-1	I 区本坊地区	トレンチ 焼土・炭層	II層	-	マツ属複雑管束亜属	破片	<1.5cm角	2	-		
44-2	I 区本坊地区			-	No. 78	コナラ属アカガシ亜属	破片	<1.5cm角	不明		-
44-3	I 区本坊地区	-	No. 78	イヌノキ	破片	<0.5cm角	不明	-			
45	III区庭園地区	池状遺構SX01周辺	-	No. 17	ヒノキ科	丸木	直径1.5~2cm (一部未炭化)	10	-		2016
46	III区庭園地区	池状遺構SX01周辺	-	No. 18	ヒノキ科	丸木	直径0.8cm (一部未炭化)	6	-		
47	II区本堂地区	表層	-	No. 19	ヒノキ科	丸木	直径1.2cm (一部未炭化)	8	-		
48	II区本堂地区	本堂前庭部	表層	No. 4	スギ	割材?	2×0.5×6cm (一部未炭化)	11	-		
49	II区本堂地区	本堂前庭部	表層	No. 5	ムラサキシキブ属	破片	<2cm	12	-		
50	II区本堂地区	北西隅焼土面	-	-	スギ	破片	<2cm	8	-		
51	III区庭園地区	池状遺構SX01周辺	-	No. 14	ヒノキ	破片	<2cm (一部未炭化)	6	-		
52	III区庭園地区	池状遺構SX02周辺	-	No. 15	ヒノキ	破片	<4cm角 (一部未炭化)	<10	-		
53	III区庭園地区	池状遺構SX03周辺	-	No. 16	ヒノキ	破片	<4cm角 (一部未炭化)	<5	-		
54	III区庭園地区	池状遺構SX04周辺	-	No. 17	ヒノキ	破片	<4cm角 (一部未炭化)	<5	-		
55	III区庭園地区	-	-	No. 2	ヒノキ	丸木	直径1cm (一部未炭化)	5	-		
56	III区庭園地区	池状遺構周辺 (トレンチ)	-	No. 11	ヒノキ	破片	<5cm (一部未炭化)	7	-		
57	III区庭園地区	池状遺構SX01周辺	表層	-	ヒノキ	破片	<3cm角 (一部未炭化)	<5	-		
58	I 区本坊地区	斜面Bトレンチ	-	-	コナラ属アカガシ亜属	破片	2×3×1.5cm	不明	-		
59	I 区本坊地区	トレンチ2第1遺構面	-	-	クマシデ属イヌシデ節	破片	<1.5cm角	8	-		
60	I 区本坊地区	斜面Bトレンチ	-	-	スギ	破片	2×2×8cm	18	-		
61	III区庭園地区	Hトレンチ奥部	-	No. 12	ヒノキ	破片	<1cm角	<5	-		
62	I 区本坊地区	1号鍛冶炉周辺	-	-	(コナラ属アカガシ亜属)	破片	<0.5cm角	2?	PLD-34183		
63	I 区本坊地区	3号鍛冶炉炉底	-	-	(コナラ属アカガシ亜属)	破片	<0.5cm角	不明	PLD-34184		
64	I 区本坊地区	SP03 柱痕	-	-	(針葉樹)	みかん割り状	半径1.5cm	17	PLD-34185		
65	I 区本坊地区	SP11 柱痕	-	-	スギ	みかん割り状	半径3cm	12	PLD-34186		
66	II区本堂地区	日本堂SB01基壇基盤面	-	-	(針葉樹)	破片	<0.8cm角	1	PLD-34187		
67	I 区本坊地区	鍛冶工房建屋以前の埋土F	-	-	スダジイ	不明破片	0.5cm角	2	PLD-36359		
68	III区庭園地区	滝SX02水落付近岩盤	-	-	ヒノキ	丸木?	半径2.5cm	17	PLD-36360		

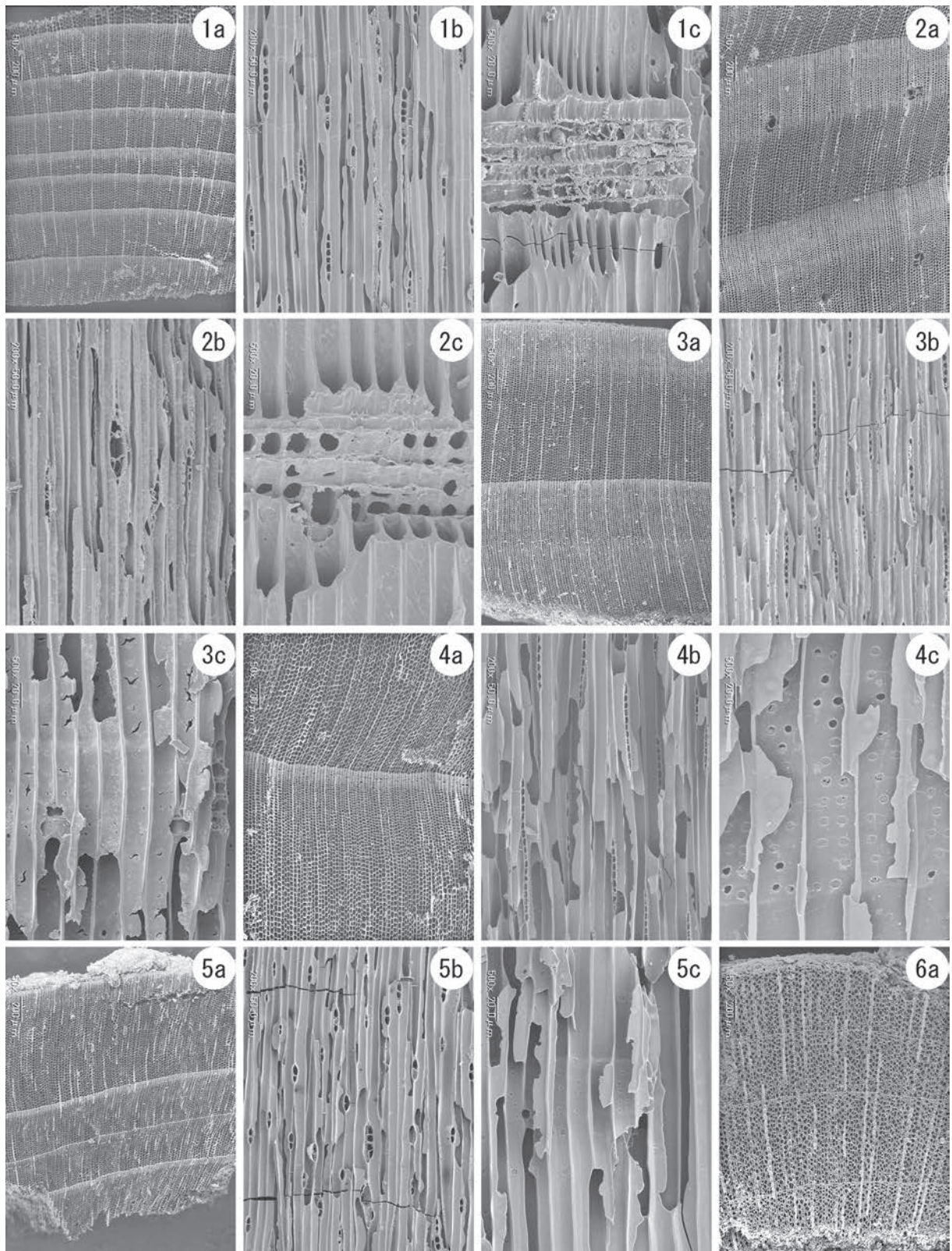


写真 2-7 等妙寺旧境内出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真（1）

1a-1c. モミ属 (No. 11-3) 、2a-2c. マツ属複維管束亜属 (No. 15-1) 、3a-3c. ヒノキ (No. 31-1) 、
4a-4c. スギ (No. 6-1) 、5a-5c. アスナロ (No. 37-1) 、6a. シキミ (No. 11-1)

a : 横断面、b : 接線断面、c : 放射断面

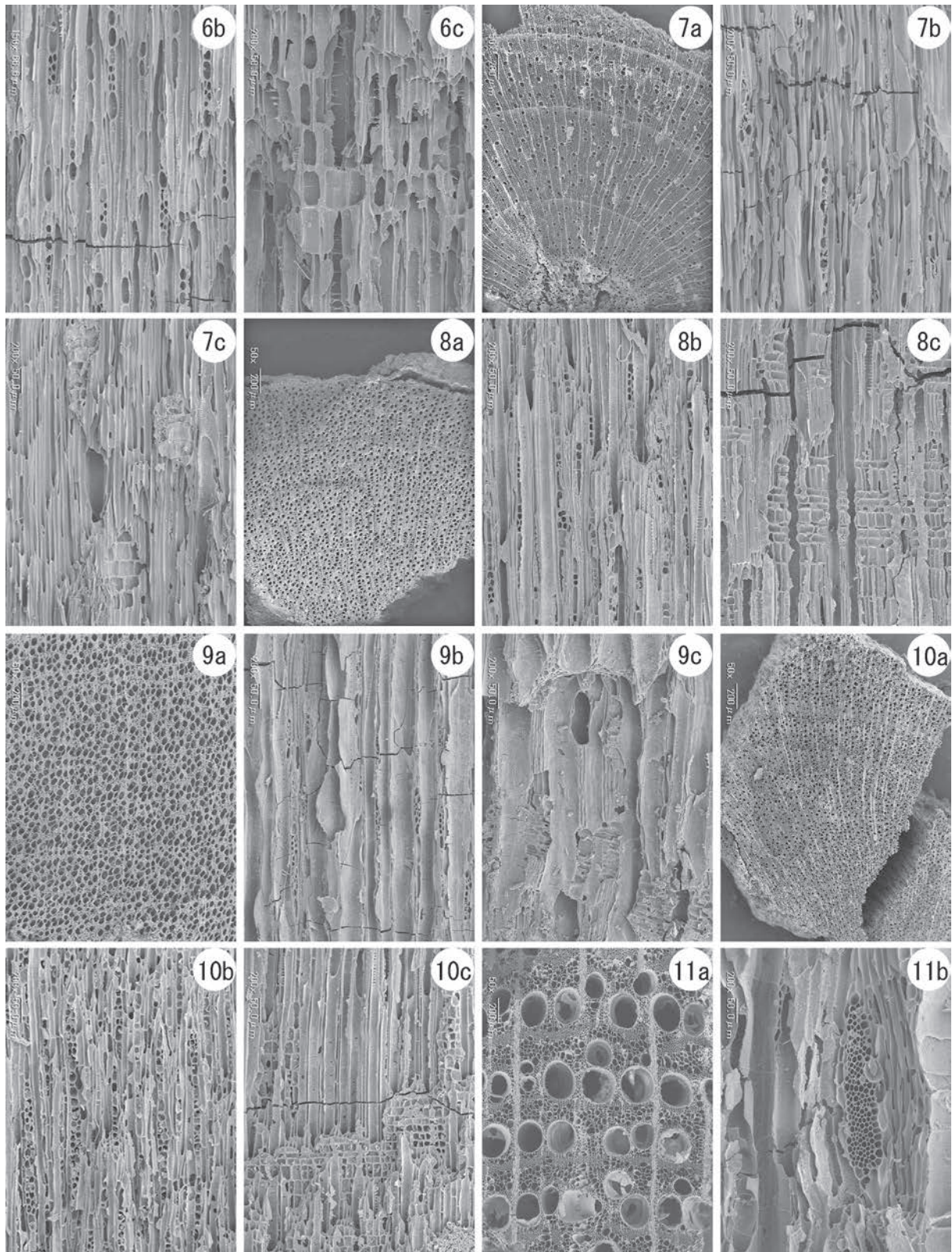


写真 2-8 等妙寺旧境内出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真（2）

6b-6c. シキミ (No. 11-1)、7a-7c. クスノキ科 (No. 15-6)、8a-8c. イスノキ (No. 8)、9a-9c. カツラ (No. 22-3)、10a-10c. ユズリハ属 (No. 20-3)、11a-11b. エノキ属 (No. 12-2)

a : 横断面、b : 接線断面、c : 放射断面

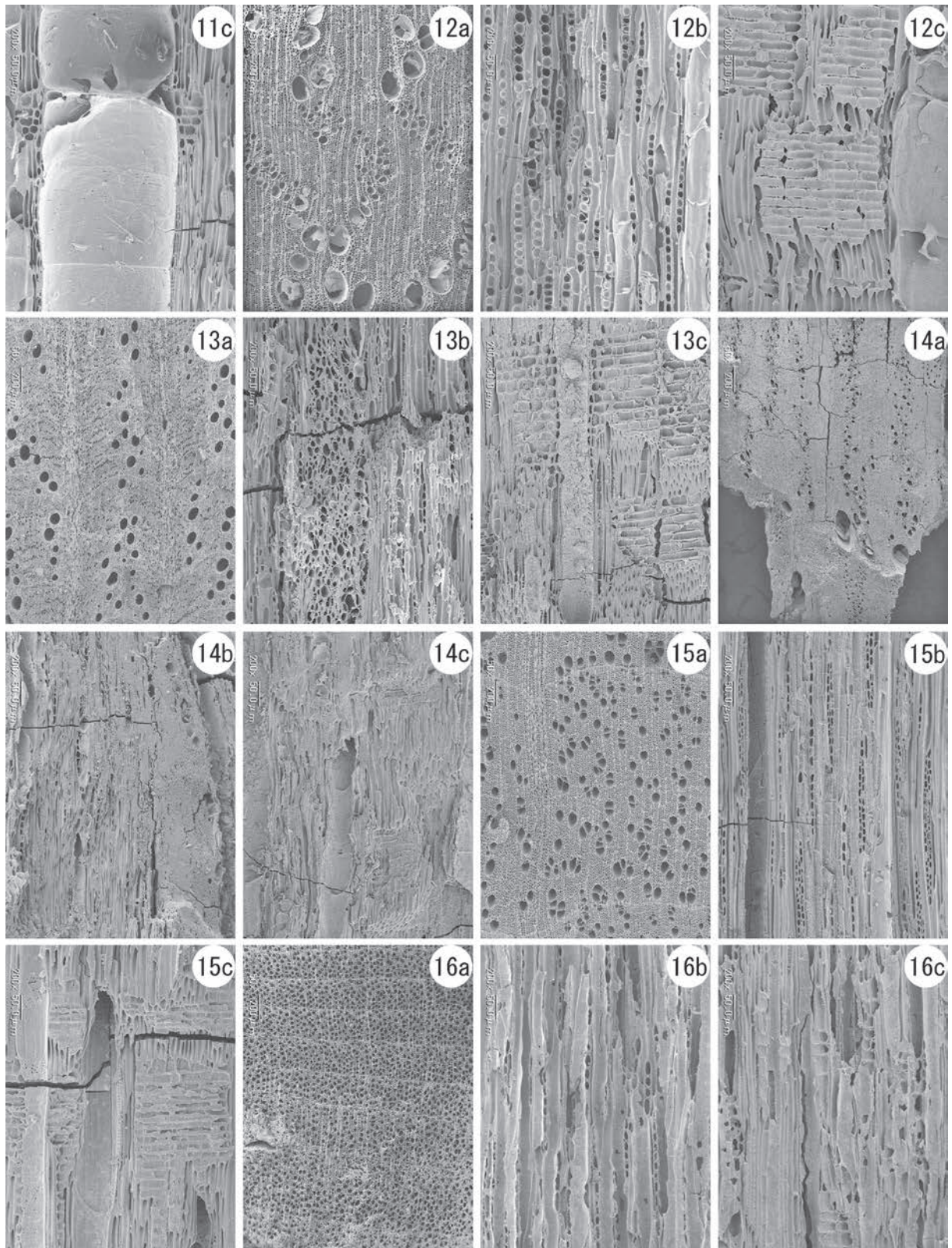


写真 2-9 等妙寺旧境内出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真 (3)

11c. エノキ属 (No. 12-2)、12a-12c. スダジイ (No. 11-4)、13a-13c. コナラ属アカガシ亜属 (No. 1)、14a-14c. コナラ属コナラ節 (No. 39-3)、15a-15c. クマシデ属イヌシデ節 (No. 13-3)、16a-16c. サカキ (No. 15-3)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

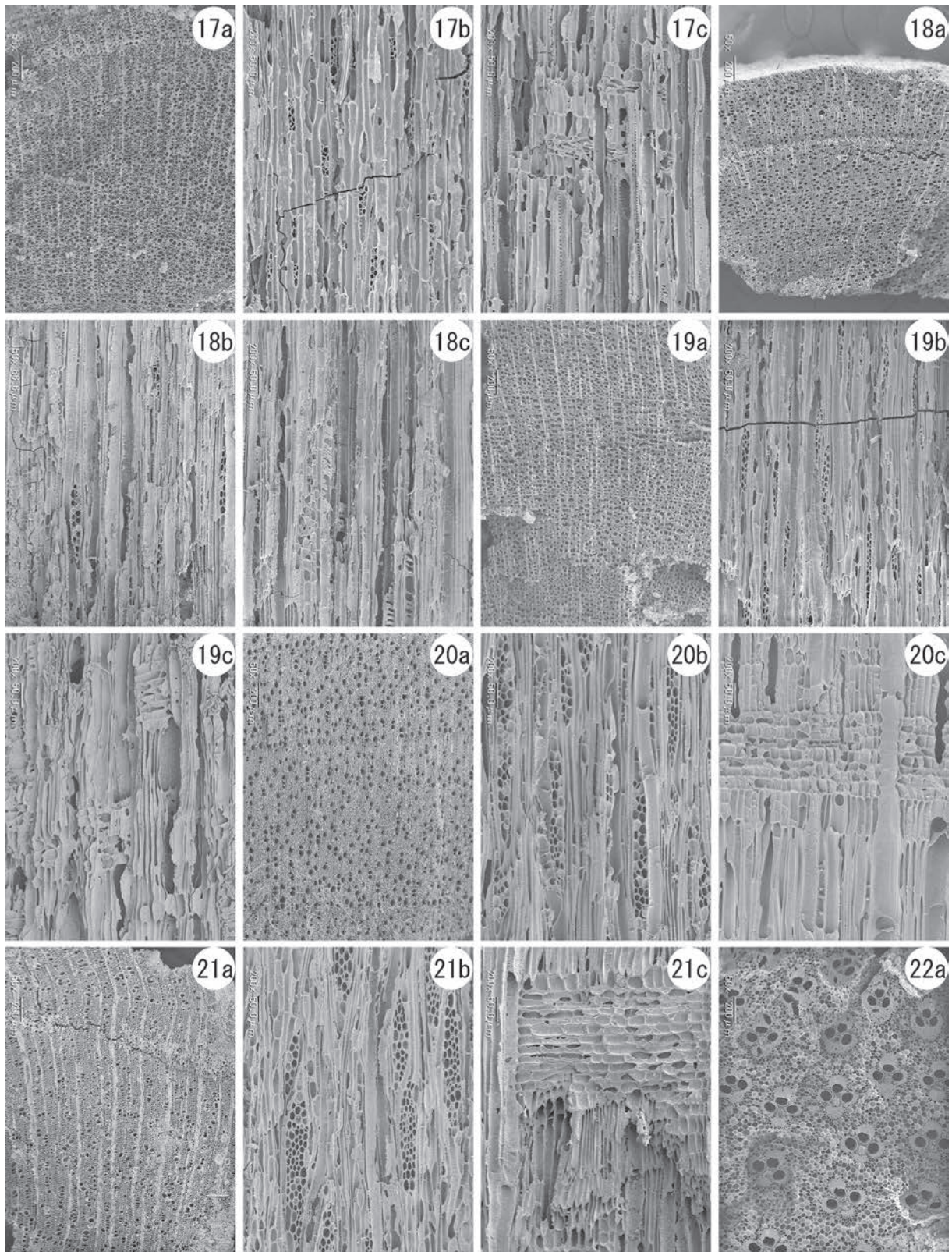


写真 2-10 等妙寺旧境内出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真（4）

17a-17c. ツバキ属 (No. 19)、18a-18c. ハイノキ属ハイノキ節 (No. 41-3)、19a-19c. アセビ (No. 18-4)、20a-20c. ムラサキシキブ属 (No. 49)、21a-21c. モチノキ属 (No. 39-6)、22a. タケ亜科 (No. 13-2)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

第3節 花粉分析

平坦部AⅢ区採取試料の花分析

森 将志 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

愛媛県北宇和郡鬼北町に所在する等妙寺旧境内において、古植生を検討するために花粉分析用の試料が採取された。以下では、この試料を用いて行った花粉分析の結果を示し、古植生について考察した。

(2) 試料と方法

分析試料は、Ⅲ区庭園地区池状遺構S X 0 1のベルト底土から採取された礫混じり黄褐色(2.5Y5/3)シルトと、同じく池状遺構S X 0 1底から採取された礫混じり灰オリーブ色(5Y5/2)粘土、池S G 0 1排水口付近から採取された礫混じり暗オリーブ色(5Y4/3)粘土の、計3点である。時期は、等妙寺旧境内の存続期間(1320～1588年)のいずれかと想定されている。これらの試料について、以下の手順で花粉分析を行った。

試料(湿重量約4g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス

表 2-10 産出花粉孢子一覧

学名	和名	Ⅲ区庭園地区		
		池SG01排水口 底	池状遺構SX01 底	池状遺構SX01ベ ルト底
樹木				
<i>Podocarpus</i>	マキ属	1	0	-
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑維管束亜属	3	7	1
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	188	52	22
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	3	0	-
<i>Betula</i>	カバノキ属	-	1	-
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	-	6	1
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	-	18	-
<i>Castanea</i>	クリ属	8	23	1
<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイノキ属-マテバシイ属	2	86	-
<i>Symplocos</i>	ハイノキ属	-	10	-
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	-	1	-
草本				
Gramineae	イネ科	-	1	-
<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	イタドリ節	-	2	-
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	1	13	-
Tubuliflorae	キク亜科	-	1	-
Liguliflorae	タンポポ亜科	-	-	-
シダ植物				
monolete type spore	単条溝孢子	41	3	8
trilete type spore	三条溝孢子	23	1	17
Arboreal pollen	樹木花粉	205	204	25
Spores	シダ植物孢子	1	17	-
Total Pollen&Spores	花粉・孢子総数	206	221	25
unknown-pollen	不明花粉	-	6	-

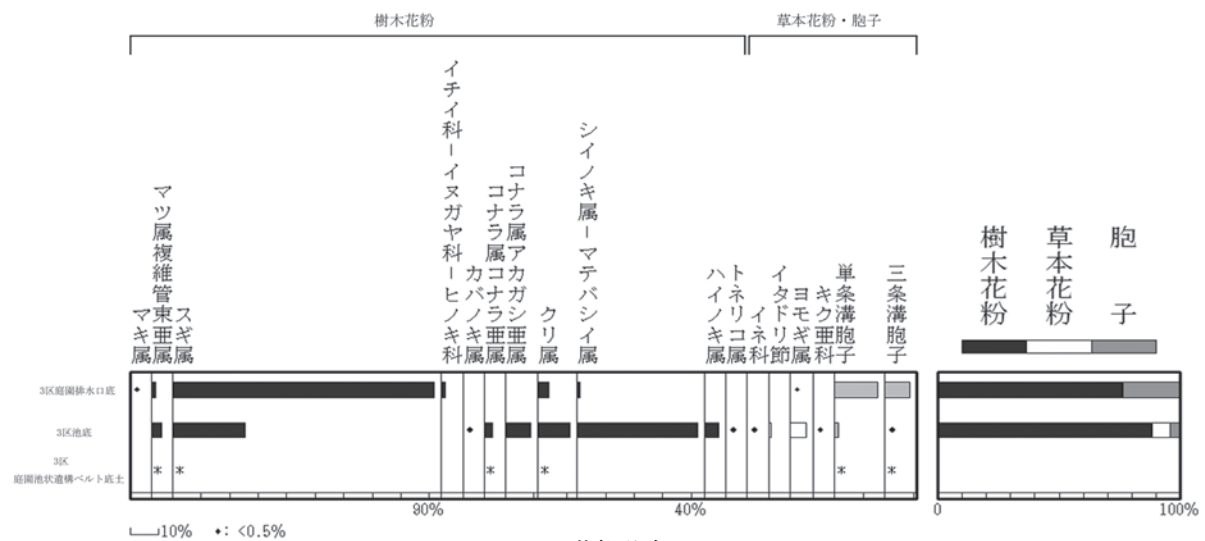


図 2-97 花粉分布図

樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基数として百分率で算出した。
*は樹木花粉 200 個未満の試料について、検出した分類群を示す。

処理（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の割合の混酸を加え 20 分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは樹木花粉が 200 を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、花粉が少ない試料についてはプレパラート 1 枚の全面を検鏡し、その間に現れる花粉・胞子を全て数えた。さらに、保存状態の良い花粉を選んで単体標本（PLC. 2190、2519～2526）を作製し、写真 2-11 に載せた。

(3) 結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉 11、草本花粉 5、形態分類のシダ植物胞子 2 の総計 18 である。これらの花粉・胞子の一覧表を表 2-10 に、花粉分布図を図 2-97 に示した。花粉分布図では、樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を、草本花粉・胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図表においてハイフン (-) で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。

検鏡の結果、Ⅲ区庭園地区池状遺構 S X 0 1 のベルト底土には十分な量の花粉化石が含まれていなかったが、池状遺構 S X 0 1 底と池 S G 0 1 排水口付近の試料では十分な量の花粉化石が得られた。池状遺構 S X 0 1 底と池 S G 0 1 排水口付近の試料では樹木花粉の産出割合が高く、池状遺構 S X 0 1 底ではスギ属やコナラ属アカガシ亜属、クリ属、シイノキ属-マテバシイ属、ハインノキ属が、池 S G 0 1 排水口付近ではスギ属などの樹木花粉の産出が目立つ。

(4) 考察

今回の分析試料は、全体的に花粉の保存状態が良好ではなかった。一般的に、花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境に堆積すると紫外線や土壌バクテリアなどによって分解され、消失してしまう。そのため、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では花粉が残りにくい。花粉の保存状態が良好ではないのは、試料が採取された池が常に水を湛えているような状況ではなく、堆積物の堆

積時や堆積後に乾燥状態（酸化的環境）に晒された時期もあったためと思われる。

花粉の保存状態が良好ではないながらも、池状遺構SX01底と池SG01排水口付近では十分な量の花粉が得られた。両試料ともに樹木花粉の産出割合が高く、草本花粉の産出割合が低い。等妙寺旧境内は山岳寺院であり、もともと草本類の分布が少ない場所に立地していたために草本花粉の産出が少ないと思われる。あるいは、遺構周辺は下草が刈られるなど、管理されていた状況も推測される。わずかではあるが、池状遺構SX01底ではヨモギ属をはじめとして、イタドリ節やイネ科、キク科などの産出が確認できる。特にヨモギ属は花粉塊の状態で産出しているものもあり、分布が疎らながらも、遺構周辺にはヨモギ属やイタドリ節、イネ科、キク科が生育していたと思われる。また、池SG01排水口付近ではシダ植物胞子が多産しているため、遺構周辺にはシダ植物も分布していたと考えられる。

樹木花粉では、両試料ともにスギ属の産出が目立つため、遺構周辺にスギ林が存在していたと考えられる。また、池状遺構SX01底では、シイノキ属-マテバシイ属をはじめ、コナラ属アカガシ亜属、ハイノキ属などの照葉樹が多く産出する。よって、遺構の周辺にこれらの照葉樹が生育していたと考えられる。さらに、二次林要素の植物を含むマツ属複雑管束亜属やコナラ属コナラ亜属、クリ属の産出も確認され、遺構周辺にはニヨウマツ類やナラ類、クリなどからなる二次林も存在していた可能性がある。以上に述べた樹木花粉の分類群のなかには、風媒花が多く含まれる。風媒花であれば、遠方から花粉が遺構に飛来する可能性があり、遺構に堆積する花粉には、遺構周辺に分布していた樹木のみならず、広範囲の地域に分布していた樹木の花粉も含まれる。したがって、花粉化石群集から植物の分布域を判断する場合、必ずしも遺構周辺に分布していたとは限らない点に注意が必要である。なお、現在の植生を見ると、史跡地周辺の大部分はスギ・ヒノキの植林地で、これを除けば、アカマツ林とカシ・シイ林が主体となる〔鬼北町教育委員会, 2010〕。今回の花粉分析から推測される古植生は、現在の植生と類似しており、遺構の花粉が遺跡周辺の山岳地を中心とした地域から供給されていたとすれば、中世においても現在と同様の植生が広がっていた可能性がある。

また、十分な量の花粉化石が得られた池状遺構SX01底と池SG01排水口付近では、花粉組成が著しく異なっていた。池状遺構SX01底ではシイノキ属-マテバシイ属の産出率が高いのに対し、池SG01排水口付近ではスギ属の産出率が最も高い。こうした花粉組成の相違が生じる理由としては、池の中の水の動きによって花粉の分布に偏りが生じた可能性や、池周辺の植物の分布を反映している可能性などが考えられる。

【引用文献】

鬼北町教育委員会 2010『史跡等妙寺旧境内保存管理計画策定報告書』98p, 鬼北町教育委員会

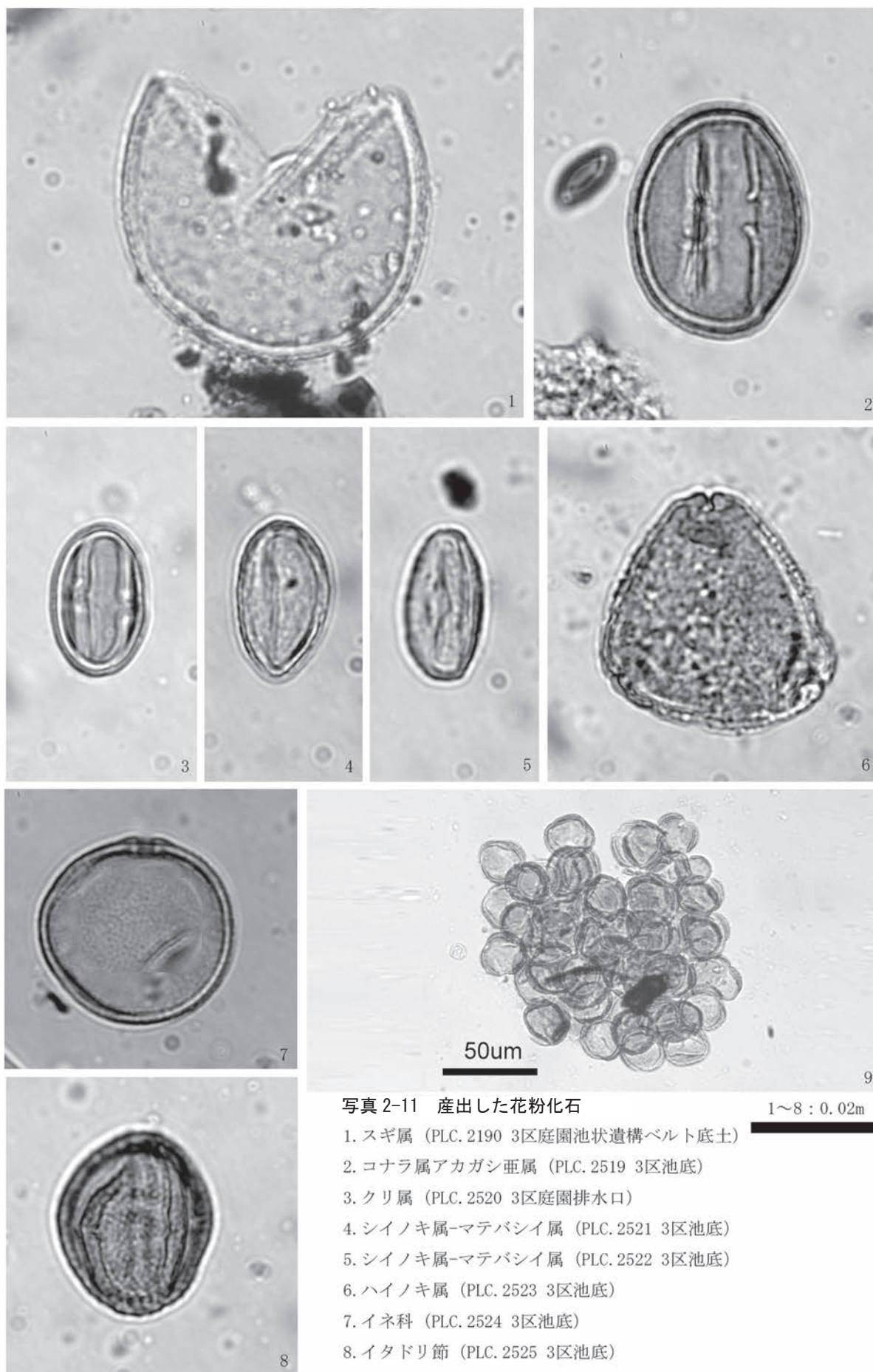


写真 2-11 産出した花粉化石

1~8 : 0.02m

1. スギ属 (PLC. 2190 3区庭園池状遺構ベルト底土)
2. コナラ属アカガシ亜属 (PLC. 2519 3区池底)
3. クリ属 (PLC. 2520 3区庭園排水口)
4. シイノキ属-マテバシイ属 (PLC. 2521 3区池底)
5. シイノキ属-マテバシイ属 (PLC. 2522 3区池底)
6. ハイノキ属 (PLC. 2523 3区池底)
7. イネ科 (PLC. 2524 3区池底)
8. イタドリ節 (PLC. 2525 3区池底)
9. ヨモギ属花粉塊 (PLC. 2526 3区池底)

第4節 珪藻分析

平坦部AⅢ区池状遺構S×O1採取試料の珪藻分析

野口真利江（パレオ・ラボ）

（1）はじめに

珪藻は、10～500 μmほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形や刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている（小杉，1988；安藤，1990）。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境（例えばコケの表面や湿った岩石の表面など）に生育する珪藻種が知られている。こうした珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

ここでは、等妙寺旧境内平坦部AⅢ区の池状遺構S×O1で採取された土層堆積物試料中の珪藻化石群集を調べ、堆積環境について検討した。

（2）試料と方法

試料は、平坦部Aの池状遺構底面の異なる地点から採取された土層堆積物2点である（表2-11）。

試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

表2-11 堆積物の特徴

分析No.	遺構	地点		層位	時期	堆積物の特徴
1	池状遺構 SX01	平坦部A Ⅲ区	土A	底面	中世	オリーブ褐 (2.5Y 4/3) 砂礫混じりシルト
2			土B	底面	中世	オリーブ褐 (2.5Y 4/4) 砂礫混じりシルト

(1) 湿潤重量約1.0gを取り出し、秤量した後ビーカーに移して30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を18回ほど繰り返した。(3) 懸濁残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作製した。

作製したプレパラートは顕微鏡下1000～600倍（原則1000倍）で観察し、プレパラートの2/3の面積について珪藻化石の同定・計数した。珪藻殻は、完形と非完形（原則として半分程度残っている殻）に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。また、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物1g当たりの殻数を計算した。

（3）珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉（1988）および安藤（1990）が設定し、千葉・澤井（2014）により再検討された環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種（W）として、汽水種は汽水不定・不明種（?）として、その他の種はまとめて不明種（?）として扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明（?）として扱っ

た。以下に、小杉（1988）が設定した海水～汽水域における環境指標種群と、安藤（1990）が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

[外洋指標種群 (A)] : 塩分濃度が 35 ‰以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

[内湾指標種群 (B)] : 塩分濃度が 26 ～ 35 ‰の内湾水中を浮遊生活する種群である。

[海水藻場指標種群 (C1)] : 塩分濃度が 12 ～ 35 ‰の水域の海藻や海草（アマモなど）に付着生活する種群である。

[海水砂質干潟指標種群 (D1)] : 塩分濃度が 26 ～ 35 ‰の水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。この生育場所には、ウミナシ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活する。

[海水泥質干潟指標種群 (E1)] : 塩分濃度が 12 ～ 30 ‰の水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミナシ主体の貝類相やカニなどの甲殻類相が見られる。

[汽水藻場指標種群 (C2)] : 塩分濃度が 4 ～ 12 ‰の水域の海藻や海草に付着生活する種群である。

[汽水砂質干潟指標種群 (D2)] : 塩分濃度が 5 ～ 26 ‰の水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。

[汽水泥質干潟指標種群 (E2)] : 塩分濃度が 2 ～ 12 ‰の水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。

[上流性河川指標種群 (J)] : 河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

[中～下流性河川指標種群 (K)] : 河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

[最下流性河川指標種群 (L)] : 最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。

[湖沼浮遊生指標種群 (M)] : 水深が約 1.5m 以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

[湖沼沼沢湿地指標種群 (N)] : 湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

[沼沢湿地付着生指標種群 (O)] : 水深 1m 内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態に優勢な出現が見られる種群である。

[高層湿原指標種群 (P)] : 尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

[陸域指標種群 (Q)] : 上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている）。

[陸生珪藻 A 群 (Qa)] : 耐乾性の強い特定のグループである。

[陸生珪藻 B 群 (Qb)] : A 群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する種群である。

(4) 結果

堆積物から検出された珪藻化石は、淡水種が41分類群21属31種4変種であった(表2-12、図2-98)。これらの珪藻化石は、淡水域における6環境指標種群(J、K、O、P、Qa、Qb)に分類された。以下では、各地点における珪藻化石の特徴とその堆積環境について述べる。

土A (分析No. 1)

堆積物1g中の珪藻殻数は 4.5×10^4 個、完形殻の出現率は69.5%である。淡水種からなる。また、堆積物中の珪藻殻数はやや少ない。環境指標種群では、陸生珪藻A群(Qa)が多く、陸生珪藻B群(Qb)、高層湿原指標種群(P)、沼沢湿地付着生指標種群(O)、上流性河川指標種群(J)、中～下流性河川指標種群(K)などを伴う。

環境指標種群の特徴から、ジメジメとした陸域や上流性～中～下流性河川を伴う沼沢湿地などの淡水域環境が推定される。

表2-12 堆積土中の珪藻化石算出表(種群は、千葉・澤井(2014)による)

No.	分類群	種群	種群	1	2
1	<i>Achnanthes biasolettiana</i>	24	W	6	
2	<i>A. ziegeri</i>	24	W		2
3	<i>Achnanthidium convergens</i>	14	J	2	1
4	<i>A. minutissimum</i>	23	Qb	4	
5	<i>Aulacoseira</i> spp.	25	?	2	
6	<i>Caloneis aerophila</i>	22	Qa		1
7	<i>C. bacillum</i>	24	W	1	
8	<i>Cocconeis placentula</i>	24	W	9	1
9	<i>Cymbella tumida</i>	24	W	4	1
10	<i>Diadesmis contenta</i>	22	Qa		2
11	<i>Eunotia muscicola</i> var. <i>perminuta</i>	24	W	2	
12	<i>E. pectinalis</i> var. <i>minor</i>	19	O	3	1
13	<i>E. praerupta</i>	24	W	2	
14	<i>E. rhomboidea</i>	20	P	5	
15	<i>E.</i> spp.	25	?	3	
16	<i>Frustulia rhomboides</i> var. <i>crassinervia</i>	24	W	2	
17	<i>F. vulgaris</i>	24	W	5	
18	<i>Gomphonema gracile</i>	19	O	1	
19	<i>G. parvulum</i>	24	W	2	1
20	<i>Hantzschia amphioxys</i>	22	Qa	3	
21	<i>Luticola mutica</i>	22	Qa	2	
22	<i>Navicula bryophilic</i>	24	W	1	
23	<i>N. pelliculosa</i>	24	W		2
24	<i>N. placenta</i>	24	W	2	
25	<i>N. seminulum</i>	24	W	1	
26	<i>N.</i> spp.	25	?	2	
27	<i>Neidium alpinum</i>	22	Qa	12	1
28	<i>Nitzschia intermedia</i>	24	W	1	
29	<i>N. palea</i>	24	W	3	
30	<i>N.</i> spp.	25	?	2	
31	<i>Orthosira roeseana</i>	22	Qa	1	
32	<i>Pinnularia borealis</i>	22	Qa	1	
33	<i>P. divergentissima</i>	24	W	1	
34	<i>P. gibba</i>	19	O		1
35	<i>P. subcapitata</i> var. <i>elongata</i>	20	P	4	5
36	<i>P.</i> spp.	25	?	4	
37	<i>Planothidium lanceolatum</i>	15	K	3	2
38	<i>Rhoicosphenia abbreviata</i>	24	W	1	
39	<i>Stauroneis anceps</i>	24	W	1	
40	<i>S. prominula</i>	25	?	7	
41	<i>Synedra</i> sp.	24	W	2	3
42	Unknown	26	?	21	5
1	上流性河川	14	J	2	1
2	中～下流性河川	15	K	3	2
3	沼沢湿地付着生	19	O	4	2
4	高原湿原	20	P	9	5
5	陸生A群	22	Qa	19	4
6	陸生B群	23	Qb	4	
7	広布種	24	W	46	10
8	淡水不定・不明種	25	?	20	
9	その他不明種	26	?	21	5
淡水種				107	24
合計				128	29
完形殻の出現率(%)				69.5	65.5
堆積物1g中の殻数(個)				4.5E+04	1.4E+04

土B (分析No. 2)

堆積物1g中の珪藻殻数は 1.4×10^4 個、完形殻の出現率は65.5%である。淡水種からなる。また、堆積物中の珪藻殻数は少ない。環境指標種群では、高層湿原指標種群(P)と陸生珪藻A群(Qa)が多く、上流性河川指標種群(J)、中～下流性河川指標種群(K)、沼沢湿地付着生指標種群(O)などを伴う。

環境指標種群の特徴から、ジメジメとした陸域や上流性～中～下流性河川を伴う沼沢湿地などの淡水域環境が推定される。

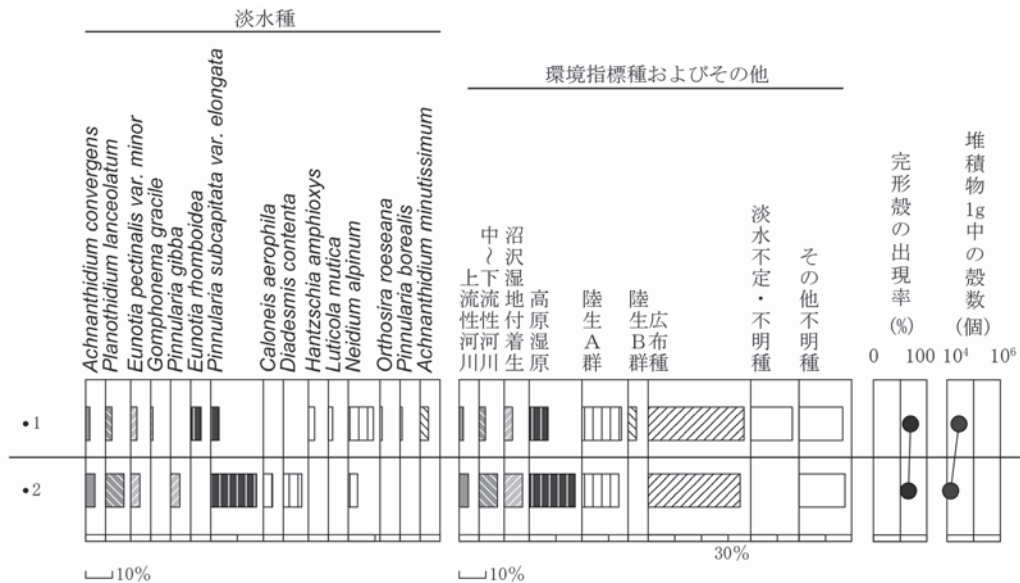


図 2-98 堆積物中の珪藻化石分布図（主な分類群を表示）

(5) 考察

分析した試料は、等妙寺旧境内平坦部AⅢ区で検出された池状遺構SX01底面の異なる地点から採取された土層堆積物2点である。この池状遺構は、水の流れを調節する集水桝的な役割で造られたと想定されている。試料は、全体的に珪藻殻数がやや少なく、淡水種のみからなる。環境指標種群の特徴から推定される環境を以下に述べる。

分析 No. 1（土A）、No. 2（土B）ともに河川性、沼沢湿地性、湿原性の指標種群と、陸生珪藻が産出している。分析 No. 2では高層湿原指標種群(P)の割合が多く、分析 No. 1では高層湿原指標種群(P)の割合は少なく、かわりに陸生珪藻B群(Qb)が産出する点や、分析 No. 2は珪藻化石の産出数が少ない点から、分析 No. 2の堆積物の方がより乾燥化が進んでいた可能性が考えられる。また、分析 No. 1、No. 2ともに湖沼沼沢湿地性の指標種群が産出しないため、湖沼性（止水域）の環境が成立していた可能性は低い。

考古学的な所見と合わせて推定すると、池状遺構は河川性と湿地性の性格を合わせ持った淡水域環境であり、分析 No. 1と分析 No. 2では分析 No. 1の方が安定して水があった可能性が高く、分析 No. 1は水路などを通じて水の供給が分析 No. 2より多かった可能性が考えられる。

【引用文献】

安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
 千葉 崇・澤井裕紀 (2014) 環境指標種群の再検討と更新. Diatom, 30, 7-30.
 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.

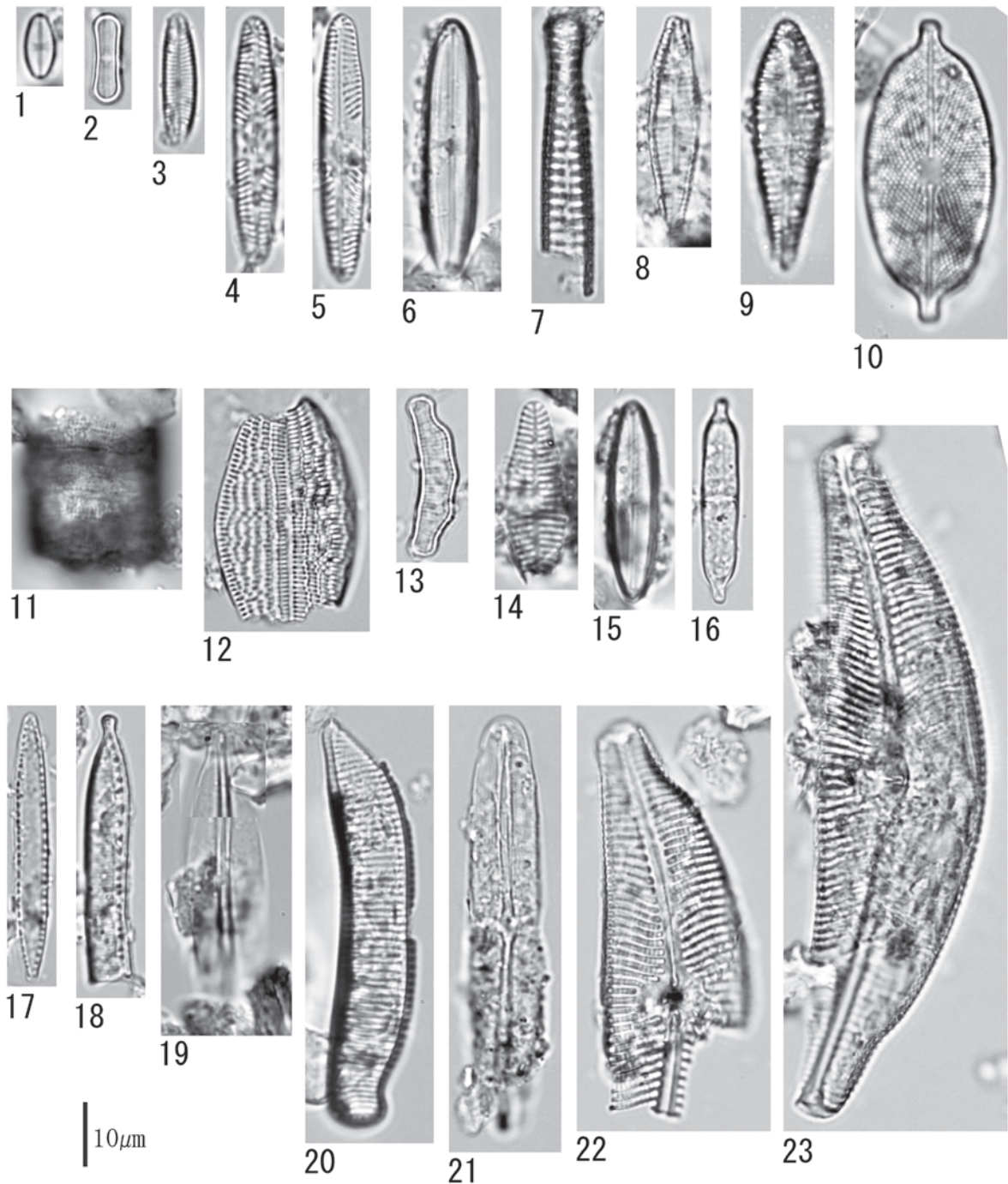


写真 2-12 堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真

1. *Navicula seminulum* (No. 1) 2. *Diadesmis contenta* (No. 2) 3. *Achnanthes biasolettiana* (No. 1)
 4. *Pinnularia subcapitata* var. *elongata* (No. 1) 5. *Pinnularia subcapitata* var. *elongata* (No. 1)
 6. *Neidium alpinum* (No. 1) 7. *Synedra* sp. (No. 2) 8. *Gomphonema gracile* (No. 1)
 9. *Gomphonema parvulum* (No. 1) 10. *Navicula placenta* (No. 1) 11. *Aulacoseira* sp. (No. 4)
 12. *Cocconeis placentula* (No. 2) 13. *Eunotia muscicola* var. *perminuta* (No. 1)
 14. *Planothidium lanceolatum* (No. 2) 15. *Neidium alpinum* (No. 1) 16. *Stauroneis prominula* (No. 1)
 17. *Nitzschia palea* (No. 1) 18. *Hantzschia amphioxys* (No. 1)
 19. *Frustulia rhomboides* var. *crassinervia* (No. 1) 20. *Eunotia praeupta* (No. 1)
 21. *Frustulia vulgaris* (No. 1) 22. *Cymbella tumida* (No. 1) 23. *Cymbella tumida* (No. 1)

第5章 附 論

附論1

等妙寺開創前夜の信仰空間をめぐる諸問題

久保 智康（叡山学院教授・京都国立博物館名誉館員）

1 池と伝観音堂跡の調査成果について

等妙寺は、鎌倉時代後期、天台宗戒家の祖、円観（恵鎮）が遠国に配置した四箇戒壇のうちの一寺で、円観の孫弟子理玉和尚（静義上人）が元応二年（1320）に奈良山に開山したと『宇和旧記』は記している。本堂・客殿・本坊跡（平坦部A、如意頭院跡）をはじめとする平坦面の発掘調査による遺構・遺物の検討から、等妙寺の成立年代が文献史料によるそれと合致することが確認され、中世をとおして境内域を拡大して隆盛をみたこの寺が、山寺遺跡として良好に遺されていることが明らかになった。

発掘調査とは別に留意すべき問題として、現在の等妙寺境内に建つ観音堂の本尊で山上の等妙寺から移座したとされる菩薩遊戯坐像のことがある。この像を等妙寺で如意輪観音と伝え、観音堂じたいも「寺院帳」に記す宝暦五年（1755）再建の「如意輪堂」とみていいこと、旧等妙寺平坦部Aを「如意頭院」と呼称してきたこと⁽¹⁾、平安時代後期に遡る絹本着色の如意輪観音像掛幅⁽²⁾を伝えてきたことから如意輪観音の信仰があったことは明白である。さらに後述する本像の像容の検討からも如意輪観音とみなして差し支えなく、以下では如意輪観音坐像と記す。岩田茂樹氏は、本像を詳細に調査して、等妙寺開創を100年ほど遡る13世紀第2四半期頃に造像されたことを明らかにした⁽³⁾。創建以前に遡る仏像は、一般論的に、別の場所から移座されたものとみなすこともあり得るが、岩田氏はその辺りについて言及を避けている。

天台宗の戒家の寺として成立した等妙寺であるから、本尊として最も相応しい尊格を挙げるならば、それは釈迦如来像である。ちなみに戒道場に掛ける授戒本尊図（等妙寺にも室町時代の古本が伝来する）は、中央に戒和上の含意で釈迦如来を描き、手前左右に羯磨師と教授師として僧形の文殊、弥勒両菩薩を描く⁽⁴⁾。また密教の灌頂という意味合いでは、両界曼荼羅の中心にあり、天台宗で釈迦如来と同体と説く胎藏界大日如来⁽⁵⁾を祀ることもあり得よう。いずれにしても戒家の重要寺院としての等妙寺が、密教の変化観音である如意輪観音を首尾一貫して本尊に祀る教理的脈絡は見出せない。

2019年3月に出土遺物の鑑識のため初めて旧等妙寺跡を訪れた筆者は、発掘調査中であった本堂跡背後の池跡の状況を実見した（図1）。折から、平安・鎌倉時代に遡る山寺の境内に築造されたところの巖崖・滝などを背後に負った池が、観音の住処とされる補陀落山を見立てたものであり、滋賀・石山寺（図2）と石川・



図1 旧等妙寺 池・滝と伝観音堂跡

那谷寺（図3）が現存する事例であるとする論考⁽⁶⁾を著し、各地の山寺に類例を捜していたところであった。旧等妙寺跡の池もまさにこれらの事例と近似するところから、発掘担当の幡上・織田両氏に、以下の5点を指摘した。

- ① 池の石組の一部は等妙寺創建以前の時期、すなわち13世紀以前まで遡るのではないか。
- ② 背後の岩盤を開鑿し巨石も用いて巖崖とし滝を落としたのも、同じく13世紀まで遡るのではないか。
- ③ 池背後の上方平坦面が「観音堂」と称されてきたので、ここに等妙寺開創以前から仏堂が営まれていたのではないか。
- ④ 以上が年代的に調査によって確認できたとする、それは等妙寺の前身寺院の存在を示唆し、堂の伝承名からしてもそこには観音を祀っていて、池・巖崖・滝・観音堂から構成される補陀落山を見立てた信仰空間が造られていたのではないか。
- ⑤ この観音堂に祀られた尊像こそ、現等妙寺の13世紀前半造像になる如意輪観音坐像ではなかったか。

本書で報告されるとおり、池の現状の大方は等妙寺開創時に形成されたが、石組の一部はそれ以前に遡ることが確認された。また調査中になる伝観音堂跡でも、等妙寺開創時のものとみられる仏堂跡と大規模な造成面の下に、小規模な仏堂跡や護摩供痕跡と思しい焼土層が検出されつつある。したがって、上記の指摘事項はほぼ確証が得られたことと思われ、②の巖崖と滝についても、初期段階の造成は等妙寺開創以前に遡る可能性がきわめて高くなったと考えられる。

2 二臂如意輪観音坐像の系譜と補陀落山の信仰空間

等妙寺観音堂の菩薩遊戯坐像（図4）は、前節で述べたように、状況証拠からみても如意輪観音として信仰されてきたということは間違いない。本節ではいま一つ踏み込んで、本像が造像段階から如意輪観音として製作されたことを、像容の検討から明らかにしたい。本像は、岩田茂樹氏が論じたとおり、鎌倉時代前期の仏像彫刻としてはきわめて秀逸な作行きである一方で、「左足を立膝にする」、「右足を下す」、「左手を膝の上に置く」、「右手を下に置く」という姿勢は、日本で造像され伝存する遊戯像ではほとんど類例がない。

清水真澄氏は、13世紀後半の鎌倉・禅居院伝来の観音菩薩半跏像を検討するにあたり、中国・韓国・日本に伝存する半跏像（遊戯像）を集成し、九つの類型に分類した⁽⁷⁾。等妙寺像をそれに照らすと、最も作例の多いNo. 1の類型の、手足の形が左右逆になるNo. 1'に当てはまる。事例としては陝西省延安清涼山万仏洞石窟像が挙げられているのみであるが、1・1'のすべてが中国で製作された像になり、大局的には、中国で最も主流であった菩薩半跏像を参照しつつ、手足を左右逆として日本国内で製作されたのが等妙寺像ということが出来る。

ここで留意すべきは、等妙寺像の造像にあたり、中国の諸像に見られない要素を付加した点である。まず注目したいのは右手の形で、手首を屈して掌を下に向けている。実際には、製作時期は不明ながら、本像の体軀に合わせた形状の岩座に手を添えた形をとる（図5）。もう一つの留意点は左手の掌を上に向けていることで、柄穴があり指を曲げているので如意宝珠を持っていたのではないかと岩田氏は推定した。しかし、文政二年（1819）に刊行された『等妙寺建立勸化帳』（等妙寺住職冷湛撰）の裏表紙に載る本像は、左手に蓮の花枝を持った姿で描かれている（図6）。筆者は、この両手の形と持仏、そして片足を岩座に垂下していることこそ、他例をみない本像が如意輪観音として造像されたことを



図2-1 石山寺 珪灰石露頭

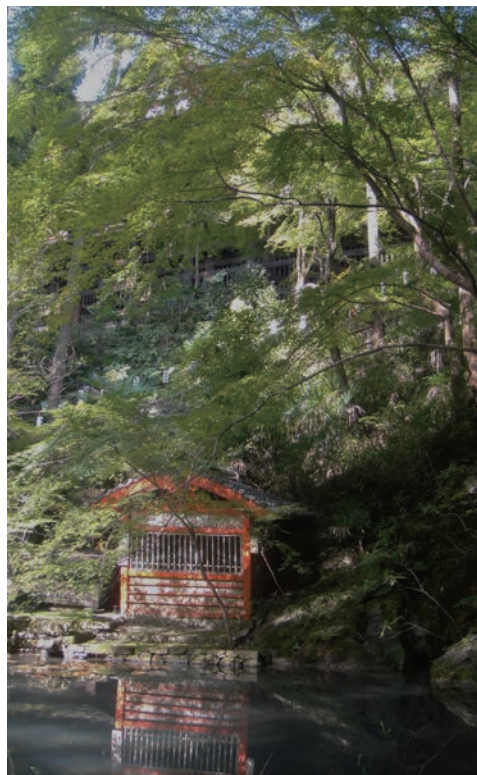


図2-2 石山寺 本堂崖下の池泉



図3 那谷寺 池と巖崖
向かって右奥の窟中に千手観音
を祀る本堂

示す重要な要件と考えており、以下で形姿に込められた意図を検討したい。

そもそも如意輪観音は通形を六臂とし、本像のごとき二臂像の類例は非常に少ない。そのような中で、二臂でしかも片足を垂下するという、等妙寺像と共通する形姿になる如意輪観音が石山寺本尊像である。石山寺の創建時の状況については、鎌倉時代の成立ながら『石山寺縁起』が具体的である⁽⁸⁾。

夫石山寺者、聖武皇帝之勅願、良弁僧正之草々也。本尊は二臂の如意輪、六寸の金銅の像、聖徳太子二生に御本尊云々。丈六の尊像を造て、其御身に彼少像をこめ奉る。

すなわち、聖武天皇の勅願により良弁が創建した寺で、本尊が六寸の金銅二臂の如意輪観音で丈六像の中に籠めていた。

しかし「正倉院文書」によれば、天平宝字五年(761)から造石山寺所による伽藍整備が始まり、塑像の丈六観音菩薩を造像、同六年に完成して、舍利を籠め「礒御坐」に安置されたとするが、この段階で本尊は「観音」としか記されていない⁽⁹⁾。井上一稔氏は、当該期の史料などの検討から、奈良時代には未だ密教の変化観音としての如意輪観音信仰は定着しておらず、平安時代に興った真言密教の中で、舍利を如意宝珠と同体と説く『大智度論』を根拠とし、石山寺二臂観音を舍利=如意宝珠の力をもつ如意輪観音と喧伝されるに至ったと論じた⁽¹⁰⁾。ちなみに、石山寺関係史料で最も古い『三宝絵』(永観二



図4 菩薩遊戯坐像



図5 磐座に坐した菩薩遊戯坐像



図6 『等妙寺建立勸化帳』表紙裏の本尊菩薩像

年（984）、源為憲撰）下、「東大寺千花会」に、

「近江の国志賀郡の河の辺にむかし翁の居て釣せし石あり。その上に如意輪観音を造り据ゑて祈り行はしめたまへ」とあり。すなわち尋ね求むるに、今の石山の所をえたり。観音を造りて祈るに、陸奥の国よりはじめて金出できたる由を申したてまつれり。すなはち年号を改めて天平勝宝と云ふ。とある⁽¹¹⁾。これは、大仏造立の鍍金に必要な金を求め金峯の蔵王に祈ったところ、志賀郡の河（瀬田川）の畔で釣りをする翁の居る石の上に如意輪観音を安置せよ、との説示を得て、今の石山に観音を造立したところ、陸奥で金を産出するに至った、という譚で、遅くとも10世紀後半には石山寺の二臂の観音が如意輪として知られていたのである⁽¹²⁾。

石山寺二臂如意輪観音像の印相については、『別尊雑記』巻第十八に見える記述が具体的である⁽¹³⁾。有所引二臂像与石山寺像頗有相違。従昔所造画二臂像、皆右手作施无畏。左手於膝上作与願印。垂下左足坐磐石上。大和国龍蓋寺丈六如意輪像亦同之。東大寺大仏殿左方如意輪亦同之垂下左足。石山寺焼亡之時、寺僧拜見之。左手作与願安膝上。左足垂下、右手持蓮花。と上安如意宝珠。其花茎分三枝。一枝未开花、一枝荷葉也。

古来の二臂像は、皆右手を施無畏印とし、左手を膝上に置いて与願印をなす。また左足は盤石の上に垂下するというが、石山寺が焼亡した際に寺僧が拝見した二臂像は、右手に三枝の蓮華を持ち、その上には如意宝珠を安じていた、という。石山寺の現本尊、四臂の如意輪観音像は承暦二年（1076）の火災後の再興像と考えられ、それ以前の平安中期に製作が遡る像（図7）と、山内法輪院持仏堂に祀っていた平安後期像（図8）という2軀の二臂如意輪観音像が伝存する⁽¹⁴⁾。いずれも手先は後補だが、当初の印相を踏襲しているとして、上記の記述に照らすと、前者が龍蓋寺（岡寺）像や東大寺大仏殿像と共通する印相で、後者が石山寺焼亡時に実見された像の印相ということになる。より古様な印相である前者が、石山寺創建時に造像された二臂の（如意輪）観音像の姿であったということになり、それに合致する図像が『別尊雑記』巻第十八に収載され（図9）、裏書でこれを「石山寺様」と記している⁽¹⁵⁾。いずれにしても、石山寺二臂像が左足を垂下して坐すのが本来的な姿であったのは間違いなく、創建以来の歴代本尊を礎座に安置したのも、その原則に則っていたとみてよいであろう。

ここまで石山寺二臂如意輪観音像について縷々述べてきた。改めて等妙寺像の像容・印相・持仏を



図7 石山寺蔵 二臂如意輪観音坐像 図8 石山寺蔵 二臂如意輪観音坐像 図9 『別尊雑記』所収 二臂如意輪観音

みると、手と足が左右逆になっているとはいえ、右足を磐座に垂下する点は石山寺歴代本尊と同じであり、左手に蓮華をもつという点も、前述した『別尊雜記』記載の石山寺焼亡時の本尊、もしくはそれを写したとみられる平安後期像と共通する。さらに後述するが、前節で挙げた④の想定どおり、磐座に坐す二臂像の下方に池を造っていることが何よりも大きな仏像安置空間の共通点でもある。以上から、等妙寺像の製作では、中国の半跏像の像容を基軸としつつも、鎌倉時代前期に石山寺で祀った本尊、二臂如意輪観音そのものを参照した可能性が大きいと思われる。

ただ1点、等妙寺像の重要な要件である右手を磐座に伏せる形は、石山寺本尊とは全く異なっている。前述の清水真澄氏分類のNo. 1 になる中国半跏像の多くが左手ではあるが同様に手を下に向けており、反対側の足を立膝にすることも相俟って、等妙寺像がそれら中国像の像容を引き継いでいると見えないこともない。しかし手首の屈し方がいささか異なり、中国像がいずれも左手首を直角に屈して腕を張り、身体の重量を支えているように表現されるのに対して（図10）、等妙寺像はそのような印象と違い、腕を張らず手首を軽く曲げて磐座に軽く置いているのである。清水氏は、中国像の姿勢について、下した足の反対側の手で体を支えるという「山や水や樹木に囲まれた自然環境の中で坐するという表現を、人体に照らして合理的写實的に表している」と評価したが、図像的な背景には言及していない⁽¹⁶⁾。

筆者は、等妙寺像の右手の形、加えていえば蓮華を持した左手も、六臂如意輪観音の図像を取り入れていると考えている。六臂の如意輪観音の図像は『大悲胎藏大曼荼羅』に載るものが通有で（図11）⁽¹⁷⁾、これに則った彫像が多数伝存する。左第一手は、腕をすんなりと伸ばし、手首を曲げて掌を蓮華座上にそこだけ描く磐上に添えている。等妙寺像の右手も、まさにこれと同様の様態を示していて、図像の左第二手に持つ蓮華もまた等妙寺像の左手のそれに共通する。六臂如意輪の像容は『観自在如意輪菩薩瑜伽法要』（唐・金剛智訳）の以下の記述に拠っており⁽¹⁸⁾、下線部が左第一・二手を示した部分である。

六臂身金色	皆想於自身	頂髻寶莊嚴	冠坐自在王	住於說法相
第一手思惟	愍念有情故	第二持意寶	能滿一切願	第三持念珠
爲度傍生苦	<u>左按光明山</u>	<u>成就無傾動</u>	<u>第二持蓮手</u>	<u>能淨諸非法</u>
第三手持輪	能轉無上法	六臂廣博體	能遊於六道	以大悲方便
斷諸有情苦				

とくに左第一手を「光明山」に按じる、という部分が、等妙寺像の右手の意味をも示唆する最も重要な記述である。光明山とは、東晋・仏駄跋陀羅の旧訳になる『華嚴經』六十卷本に見える補陀落山の異称で、六臂如意輪観音の第一手の掌を案じている磐こそが補陀落山を象徴する表現なのである。したがって、等妙寺像が二臂のうちの右手をそれと同じ形で添えた磐座そのものが、光明山すなわち補陀落山を含意しているといえるのである。

旧訳『華嚴經』で、光明山は以下のように説かれる⁽¹⁹⁾。

漸漸遊行至光明山。登彼山上周遍推求。見觀世音菩薩住山西阿。处处皆有流泉浴池、林木鬱茂地草柔軟。結跏趺坐金剛寶座。

また、唐・実叉難陀の新訳『華嚴經』八十卷本では、卷第六十八、入法界品で、「補怛洛迦」と名づく山、と訳した以下のごとき叙述がみえる⁽²⁰⁾。

善男子。於此南方、有山。名補怛洛迦。彼有菩薩、名觀自在。汝詣彼問。菩薩云何。学菩薩行、修菩薩道。即說頌曰、

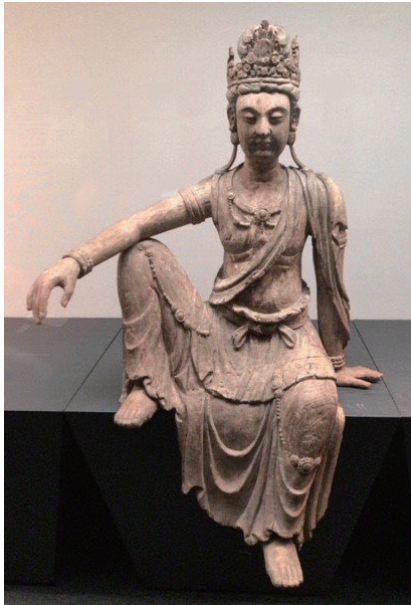


図 10 神奈川県立歴史博物館蔵 菩薩半跏像



図 11 仁和寺本『大悲胎藏大曼荼羅』所収
六臂如意輪觀音

海上有_レ山多_レ聖賢_一、衆宝所_レ成極清淨 華果樹林皆遍滿 泉流池沼悉具足。勇猛丈夫觀自在、
爲_レ利_レ衆生_一住_レ此山。汝應_レ往_レ問_レ諸功德_一、彼當_レ示_レ汝大方便_一。
時善財童子、頂礼_レ其足_一、遶無量匝已。

すなわち、南方の海上にある補陀落山は観世音菩薩の住処で、旧訳ではその山西阿に住むとする。両訳とも、泉が豊かに湧いて池沼に注ぐという補陀落山のイメージが説かれ、これが石山寺の（如意輪）観音が坐す磬座とそれを据えた石山、そしてその麓に造られた池までを含んだ補陀落山を含意したことは、先稿で詳しく論じたところである⁽²¹⁾。さすれば、等妙寺像と磬座のみならず、それを元々安置していた観音堂の直下に展開する池と滝・石組も、補陀落山とその周りの海を意味したという結論が導き出されるのである。

以上をまとめると次のようになろう。等妙寺観音堂本尊の菩薩遊戯像は、鎌倉時代に入って間もない頃に日本へ中国から将来された半跏像の形姿を基軸としながら、理由は判然としないが手足の表現を左右逆にして造像された。その際に、当時の如意輪観音の基本形であった六臂像の要件のうち、左第一手を磬座に安じることを右手に、また左第二手に蓮華を持つことを左手に取り入れることで、如意輪観音のより明確な表徴を加えた。そして本像を奈良山に導入した時に、石山寺本尊の二臂という異形性と足を磬座に垂下するという特徴を本像との共通項として、補陀落山を含意する滝・石組を含んだ信仰空間まで石山寺に倣って造り上げることで、完璧なまでの如意輪観音の信仰の場を現出させたのである。

3 平安時代の仏教環境

筆者は、現在進行中の伝観音堂跡の調査を注視している。1でも触れたとおり、等妙寺開創時のものとみられる仏堂跡と大規模な造成面の下に、小規模な仏堂跡や護摩供痕跡と思しい焼土層が検出され、ここで鎌倉時代前期の造像になる如意輪観音坐像を祀っていたことはほぼ間違いない。問題は、この平坦面の最初の造成時期、すなわち等妙寺の前身になる山寺の創建時期がどこまで遡るかという

ことである。筆者はこれまで古代・中世の山寺の全国動向について検討し、12～13世紀に造営、拡充された山寺には、前身が平安時代前～中期に遡るものが少なくないことを指摘してきた。その要件として、以下の点を挙げることができる⁽²²⁾。

- ① 平地から遙拝される山容の山（霊山）が存在し、その山麓・山中に平坦面が展開する。
- ② 平野部に古代の集落が展開する。古代の郡家（役所）、交通路なども関連する。
- ③ 古代の国境・郡境の山中に立地する。
- ④ 平安時代の仏像が存在する。
- ⑤ 山寺への入口近くの山麓に古社が存在する。

等妙寺を中心とする鬼北町から隣接する松野町にかけて、これらが当てはまる、すなわち古代の山寺が存在した可能性のある地区がいくつか指摘できる。そもそもこの一帯は、西伊予から西土佐へと向かう幹道を通じ、また四万十川の本・支流の舟運も古代に遡って営まれたであろう。したがって、平安時代には人が住み、集落も営まれたはずだが、遺跡分布調査では古代の遺物散布はごく少なく、古代宇和郡の郡家があったとされる西予市域の宇和盆地に比べ、人口がさほど多いとは言えないようである。ただし、人が往来すれば仏教僧も同様に往来したに違いない。平安時代はそんな時代である。北海道と南西諸島を除く全国各地の状況がそうであるように、当地域にも①に示した霊山に宿る神仏への信仰の場が営まれた可能性は十分ある。

まず、等妙寺の背後の奈良山の山塊、東高月山・郭公山・古鬼ヶ城の景観は霊山たるに相応しい。鬼ヶ城山系の三本杭と称される標高1226mの山頂遺跡から、奈良時代の須恵器が採集されている。そのような例は各地の霊山で知られ、神の降り立つ社や磐座への奉養品、あるいは山林修行の僧侶の足跡かも知れない。そのような霊山へ至る入口の山麓部、現在の等妙寺のある辺りの市ノ又、本谷、正連寺谷、市越などの谷々に、古代山寺の存在した可能性を考えたい。とくに正連寺谷には、相当大規模に展開する平坦面が確認されていて、将来的な発掘調査が期待される。

鬼北町中心部の近永や三間川兩岸の年則、国遠、清延、大門、内深田などは、古代幹道・舟運に沿った地区なので、小高い山々の山麓が注意を要する。例えば、年則の標高225mの独立峯（図12）は、神奈備形ともいえる秀麗な姿を市越辺りからも望むことができ、その南麓、三間川の畔に鎮座する弓瀧神社は国遠・清延・近永の三カ村の総鎮守ともされる。宇和郡に延喜式内社は見えず、文献上も古代に遡るかは判然としないが、立地環境からすると、交通路の安全祈願をも担った古社と思われる。⑤のように、山頂と山麓に神を祀る場合、その間は神聖で清浄な山林修行に相応しい浄処と認識されたことから、古代山寺が営まれたと述べる事例が全国各地にみられる⁽²³⁾。弓瀧神社と背後の独立峯の山中・山麓のいずれかにも、古代に遡る山寺が存在した可能性があり、平坦面の探索を勧めたい。

近年、鬼北・松野両町内で仏像調査が進められ、④に該当しそうな平安時代に遡る作例も確認された。広見川（四万十川）左岸の延野々、金峯山広福寺には、平安時代、11世紀に遡る阿弥陀如来坐像（図13）が伝わり、南に接して御嶽神社（蔵王神社）が鎮座する。またその前面の畑地が広福寺遺跡（図14）で、12世紀の遺物を伴った配石遺構と柱穴が検出されていて、寺院関連遺構の可能性も考えられている⁽²⁴⁾。大和（奈良県）の金峯山（現在の山上ヶ岳）は、平安時代半ばから蔵王権現の信仰を集め、寛弘四年（1007）の藤原道長による埋経の作善は当時からよく知られていた。平安後期には、金峯山と蔵王権現信仰、さらに如法経写経と経塚造営の作善も全国に拡大していった。広福寺と蔵王神社も平安後期まで遡る可能性が高く、とすれば周辺の丘陵上に経塚が造営されたことも考えられる。

広見川右岸、松野町松丸の河後森城跡の丘陵北麓の天満神社石段脇には永昌寺が管理する普門堂が



図 12 市越より望む年則の独立峯



図 13 広福寺蔵
阿弥陀如来坐像



図 14 広福寺遺跡



図 15 永昌寺蔵
十一面観音立像

あり、平安時代後期、12世紀に造像された十一面観音立像（図15）を祀る。天満神社は菅原道真を祭神とし、本社京都・北野天満宮では本地を十一面観音としてきたことから、普門堂の十一面観音も天満神社の本地仏であった可能性が指摘される。ただし天満神社は礁崎から宮の瀬、奥の谷へと移転し、現在地へは安政五年（1858）に遷宮したと伝えるので、元々この地区にあった本像がそれを契機に本地仏として移座されたとも考えられる。ちなみに永昌寺は、現在曹洞宗に属するが元は真言宗寺院で、山号を医王山とし本尊には薬師如来を祀っている。観音菩薩や薬師如来は、全国の古代山寺に最もよく祀られた尊格で、観音悔過や薬師悔過という、自己の罪障を仏に懺悔して厄災の消除を祈願する法会の本尊とされた。とくに12世紀前後に発展する山寺が、③に示したように国境や郡境にしばしばみられるのも、国衙や郡家が国域や郡域の厄災消除を願い、山寺に祈祷料を支出し、また造営・維持に当たることもあったからである。山上の寺に祀った古仏が山麓寺院に降りた事例は全国各

地に多く、普門堂の十一面観音立像も、山上の何処かの仏堂に祀られていたかも知れない。その平坦面の一部が河後森城跡の郭に利用された可能性も検証すべきであろう。

以上のごとく、鬼北・松野両町の三間川・広見川兩岸の山間に、等妙寺と同時期あるいはそれを遡る古代山寺が存在した可能性が十分考えられる。平坦面の踏査により事例が増えていけば、文献では知られざる古代の西伊予と西土佐の間の仏教僧の往還の具体像も見えてくるであろう。

【註】

- (1) 江戸時代に描かれた「等妙寺旧跡古図」（愛媛大学附属図書館蔵）の現本堂跡の位置の堂宇に「如意頭院」と注記される。
- (2) 西田多江「作品紹介 等妙寺蔵絹本着色如意輪観音像」『愛媛県美術館研究紀要』4号 2005年
- (3) 岩田茂樹「木造菩薩（伝如意輪観音）遊戯坐像」『國華』1435号 2015年
- (4) 戒家における東国戒壇として名をはせた鎌倉・宝戒寺の本尊は貞治四年（1365）に造像された地藏菩薩であるが、これは僧形であることに意味をもたせ戒和上を含意したものか。
- (5) 天台宗の円密一致の教理では、釈迦牟尼は生身の姿で教を説いたがそれはあくまで仮の姿であり（応身）、教を説く根本の存在（法身）こそ毘盧遮那仏すなわち大日如来に他ならず、つまり大日如来と釈迦如来は同体ということになる。
- (6) 久保智康「加賀・那谷寺の「奇石」と観音信仰」『坂本廣博博士喜寿記念論集 佛教の心と文化』同刊行会 2019年
- (7) 清水真澄「鎌倉 禅居院の観音菩薩半跏像について」『成城大学短期大学部 紀要』30号 1999年
- (8) 『続群書類従』28輯上 釈家部九十七
- (9) 井上一稔「奈良時代の如意輪観音信仰とその造像—石山寺像を中心に」『美術研究』353号 1992年
- (10) 『大日本古文書』巻之五（編年文書）
- (11) 江口孝夫校注『三宝絵詞』下 現代思潮社
- (12) 岩田茂樹氏は、『三宝絵』が語られる10世紀前半に活動した醍醐寺の淳祐（890-953）が石山寺に入寺したのを契機に、師の聖宝が興した如意輪観音信仰をこの寺に導入したと論じた（岩田「石山寺の彫像—本尊二臂丈六観音像を中心に」『観音のみてら 石山寺』奈良国立博物館 2002年）。
- (13) 『大正新修大蔵経』図像部3、164頁c。なお後半部分の記述は、『十卷抄』や天台宗の儀軌書である『阿婆縛抄』などでも引用する。
- (14) 前掲注(12)の奈良国立博物館編『観音のみてら 石山寺』に掲載される作品1・2。岩田氏による作品解説を参照。
- (15) 『大正新修大蔵経』図像部3、図像61。同177頁c
- (16) 前掲注(7)に同じ。
- (17) 『大正新修大蔵経』図像部1、701頁
- (18) 『大正新修大蔵経』20、213頁b
- (19) 『大正新修大蔵経』9、718頁c
- (20) 『大正新修大蔵経』10、366頁c
- (21) 前掲注(6)に同じ。
- (22) 久保智康「国府をめぐる山林寺院の展開—越前・加賀の場合—」『朝日百科 日本の国宝別冊 国宝と歴史の旅 3 神護寺薬師如来の世界』朝日新聞社 1999年。同「古代山林寺院の空間構成」『古代』110号 早稲田大学考古学会 2001年
- (23) 久保智康「山寺と神社の構成—神仏習合の空間論序説—」『古代日本の山寺』高志書院 2016年
- (24) 松野町ホームページ。https://www.town.matsuno.ehime.jp/soshiki/10/1208.html

附論 2

宗教史の立場から見た等妙寺研究の課題—「奈良山」とは—

山本 義孝（日本山岳修験学会理事・宗教学会員）

はじめに

2008年（平成20）3月28日に国指定史跡に指定された等妙寺旧境内については、2018年12月に「中世等妙寺の具体像に迫る」というテーマのもとで「国指定10周年記念シンポジウム」が開催され、それまでの発掘調査成果を総括するとともに、調査研究における現状と課題が整理された⁽¹⁾。等妙寺開基700年にあたる2020年には鬼北町・愛媛県歴史文化博物館共催テーマ展として「奈良山等妙寺の至宝と国史跡等妙寺旧境内展」が盛大に催され、現在も法灯を伝える天台宗等妙寺が継承する主要な寺宝が学術的評価を加えたうえで公開されただけでなく、中世山寺としての旧境内の発掘調査成果と合わせ、その背後に存在する信仰の根源でもあり、山中修行空間である「霊場奈良山」に所在する信仰遺跡調査の概要が示された⁽²⁾。これは今後の中世山寺・山岳霊場研究の在るべき方向性を具体的に示したものであるとして、高く評価されるだろう。

筆者は2015年から継続して等妙寺・等妙寺旧境内・霊場奈良山の調査研究に、宗教史研究の視点で携わらせていただくことになった。考古学が対象とする「山寺」というのは山の斜面を削って造成した人工平場の集合体を主な対象とし、これに付随する道痕跡、土盛り、集石等を含めた範囲を寺として仮に括り、その空間に対してトレンチを設定し、あるいは面的に発掘を行い構造解明と対象空間への読み取りを進めるが、この仮の対象範囲は、「山寺」が実際に機能していた当時の実態とは乖離している。

それは「山寺」がなぜ、その場所に営まれなければならなかったのかという最も基本となる問いに答えることができないからで、「山寺」はあくまでも宗教施設であり、信仰の根源が何処にあるのかを解明しないと、その問いに答えることができないからである。筆者は等妙寺研究に携わるにあたり、最初は旧等妙寺が営まれた「奈良山」なるものがどこを指し、どのような山中修行が繰り広げられたのか、山中にはどのような信仰遺跡が存在するのかという課題に対して多方面からアプローチを加えた。そしてこれを基にして「中世山寺」としての等妙寺旧境内だけを調査研究対象にするのではなく、これを含んだ広域空間、「奈良山」研究へ視点を移すこと、つまり「中世山寺」研究から「（山岳）霊場研究」へと目線を変えることを提唱した⁽³⁾。今後は等妙寺研究を南予という一地域だけのテーマとするのではなく、日本宗教史の枠組みの中で、どのように位置づけることが可能なかを検討する必要がある。本稿は今後、中世山寺としての等妙寺研究を進めるにあたり、基本となる「霊場奈良山」に対する問題点を整理したものである。



写真1 「奈良山等妙寺の至宝と信仰展」展示会場

写真2 一堂に公開される寺宝
【愛媛県立歴史文化博物館】

写真3 「山岳霊場「奈良山」と国史跡等妙寺旧境内展」展示会場

1 「奈良山」へのまなざし

現存する天台宗等妙寺の山号を「奈良山」という。旧等妙寺境内開山の経緯を記した最古の史料『齒長寺縁起』においても元応二年（1329）に開山和尚が宇和荘に入り「奈良山を開く」とあるので、これは単なる山号ではなく、実際の山系を指すと読み取ることができるが、これまでは「奈良山」に対する明確なアプローチは見られなかった。そこで、手はじめに「奈良山」なるものについて検討を進めよう。

（1）鬼ヶ城山系

宇和島市街地のすぐ東方には平野部を挟まず1000 mクラスのピークが連なる鬼ヶ城山系が所在し、これを構成する主尾根稜線が滑床溪谷を挟むように東方から①古鬼ヶ城（812 m）－②郭公岳（1010 m）－東高月山（1181 m）－③高月山（旧名称は高ツク / 1229 m）－櫛ヶ森（1064 m）－毛山（1089 m）－鬼ヶ城（1151 m）－大久保山（1158 m）－④八面山（1165 m）－⑤三本杭（旧名称は笹カ森 / 1226 m）－横の森（1200 m）－小屋ヶ森（1184 m）－⑥串ヶ森（1160 m）とU字形に連なっている（番号は図1の▲番号に対応）。

この主尾根上の稜線は一筋で突出したピークもなく、なだらかで、宗教者が回峰行を実践するには最適な地形をなしている。しかも主尾根上の植生は「役行者の木」と呼ばれ修験道で御神木とされる⁽⁴⁾。シヤクナゲ群落帯が複数確認できる。例えば郭公岳、鬼ヶ城、横の森から御祝山までの桧尾根の各主尾根上には特に巨樹が密集し、春峰入峰の時期に相当する5月には一面のピンク色・赤紫色の花に包

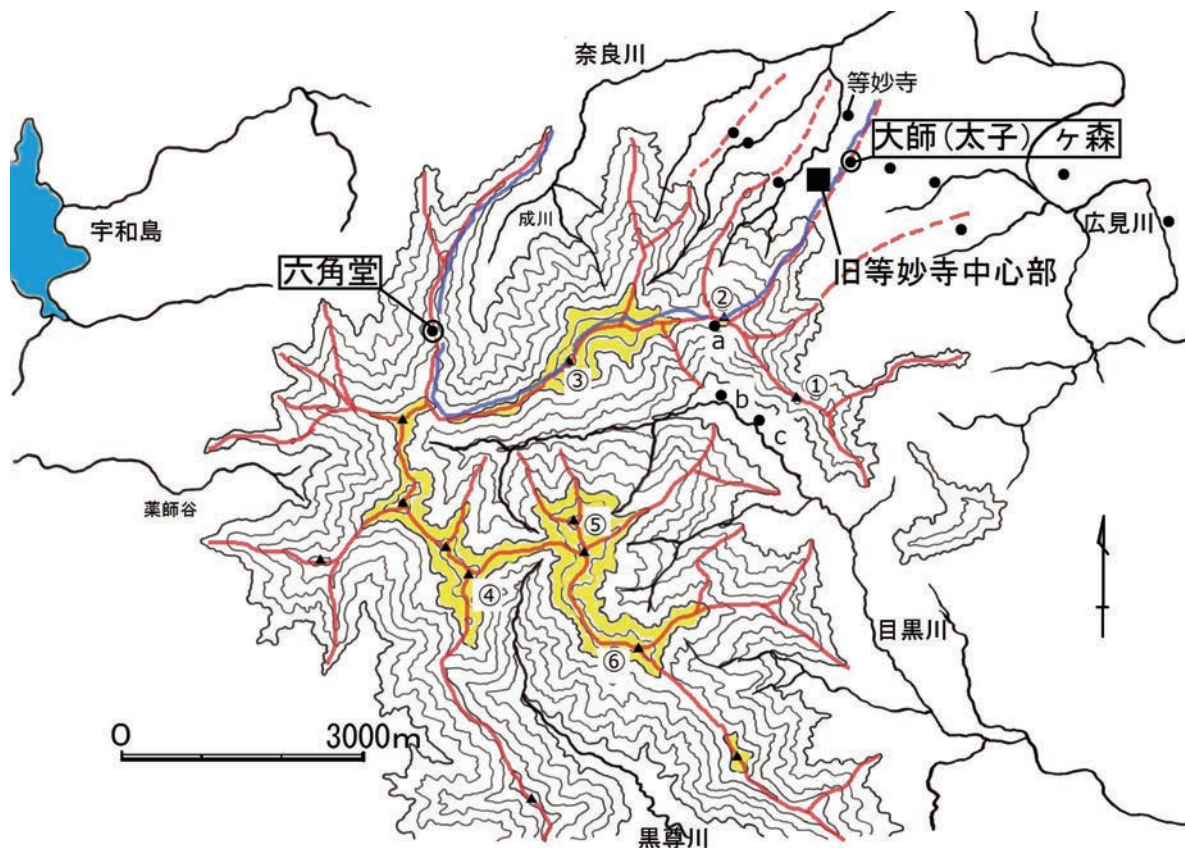


図1 鬼ヶ城山系と等妙寺・等妙寺旧境内の関係

—主尾根の稜線 —川 ▲主要山頂 ①古鬼ヶ城 ②郭公岳 ③高月山（高ツク） ④八面山 ⑤三本杭（笹カ森）
⑥串ヶ森 ●山岳信仰に関わる地点（磐座・岩屋・寺・堂） a 郭公岳磐座 b 鳥居岩 c 船岩



写真4 山岳修験の世界観で御神木として尊ばれるシャクナゲ群落帯が多い鬼ヶ城山系の主稜線

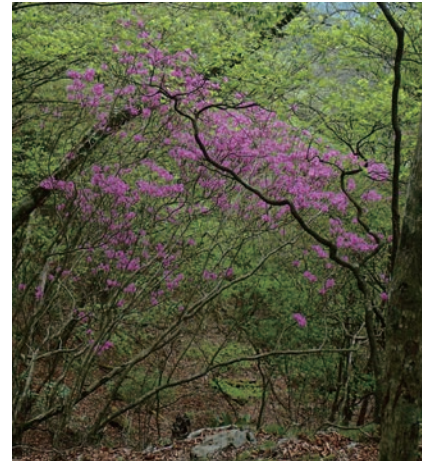


写真5 シャクナゲのトンネル
桜尾根稜線

まれた自然結界⁽⁵⁾を創りだしている。

鬼ヶ城山系の中心は山系最高点、標高1226mの三本杭で山頂部は外輪山状にU字状に取り囲む主尾根稜線からは突出して独立し、まわりの主尾根稜線をたどると、その姿を見ながら（つまり押しながら）巡る格好となる（写真11参照）。山頂部は一面の笹に覆われ本来は「笹カ森」⁽⁶⁾と呼ばれたが、近世期に宇和島藩領・吉田藩領・土佐藩領の堺杭を設けたことから「三本杭」と呼ばれると伝える。山頂からは縄文から弥生時代にかけての石器と共に8世紀代の須恵器坏蓋片が表採されており、律令期における国堺の山神祭祀の存在を考えさせる。

このように三本杭を中心とする鬼ヶ城山系の主尾根稜線上は、伊予国と土佐国の国境をなす自然地形からなる結界線でもあり、開山は意外に古い。等妙寺・等妙寺旧伽藍は鬼ヶ城山系の一角、郭公岳北麓に営まれているが、「奈良山」を郭公岳という単独のピークだけに充てることは誤りで、鬼ヶ城山系全域と認識するべきと考える。

（2）「奈良山」実態解明の手掛かりとなる「目黒山形模型」と「山境争裁許絵図」

鬼ヶ城山系を歴史的に紐解くうえで欠かせない資料が「目黒山形模型」（以下「山形模型」と略す・写真6）である。これは伊予国宇和郡目黒村（吉田領）と同郡二郎丸村（宇和島領）の山境争いの中で、幕府評定所に提出の裁判資料の一つとして詳細な現地踏査と測量をもとにして寛文五年（1665）に製作されたもので、模型は敷絵図と一体となっており、最大寸法は縦方向190cm、横方向262.1cm、敷絵図は243cm×318.7cmで、絵図の中央部を大きく空けて模型を置くスペースとし、模型外側の山麓部に村を配置し、模型と周辺村落との関係をわかりやすく示している⁽⁷⁾。

模型の仕様は木胎（銀杏）の上に胡粉が塗られ山は濃い緑、平地は黄土色に彩色され、山の斜面には樹木を描き、道は赤の実線、河川は藍色の実線、村境は白線、人家は家の形で描かれている。谷や尾根に白色（胡粉）で多くの書き込みがあり、貼り札も所々に見られる。製作に関する史料と共に一括保存されている点が資料的価値を高め、書き込みの解読不明箇所も復元できる。模型の範囲は松野町の目黒川流域を核に（図1の目黒川周辺）鬼ヶ城山系全域に及び、これは旧等妙寺を含んだ鬼ヶ城山系のうち図1で示したかなりの部分を占めているだけでなく、製作年代が寛文五年ということは中世期の景観や山中の土地利用の在り方がまだ殆ど残っている時期の作成であること、同年に幕府が作成した目印となる大岩など細部を書き込んだ「山境争裁許絵図」（以下「裁許絵図」と略す）（295.2



写真6 目黒ふるさと館で收藏展示される「目黒山形模型」



写真7 目黒ふるさと館で写真展示される「裁許絵図」

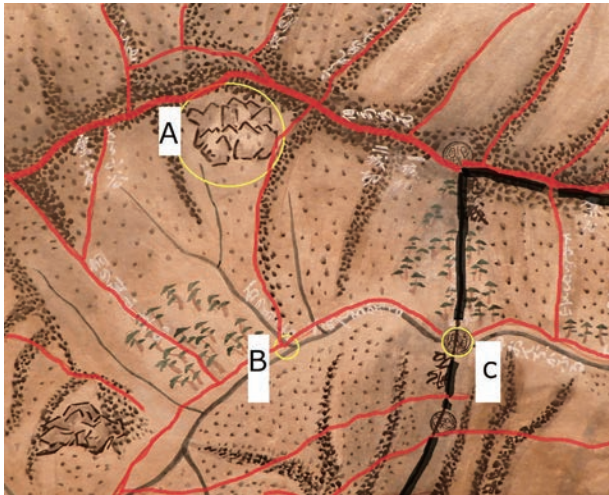


写真8 「裁許絵図」に描かれた磐座
A：郭公岳磐座（郭公崖） B：石の鳥居 C：船岩



写真9 郭公岳への結界「石の鳥居」

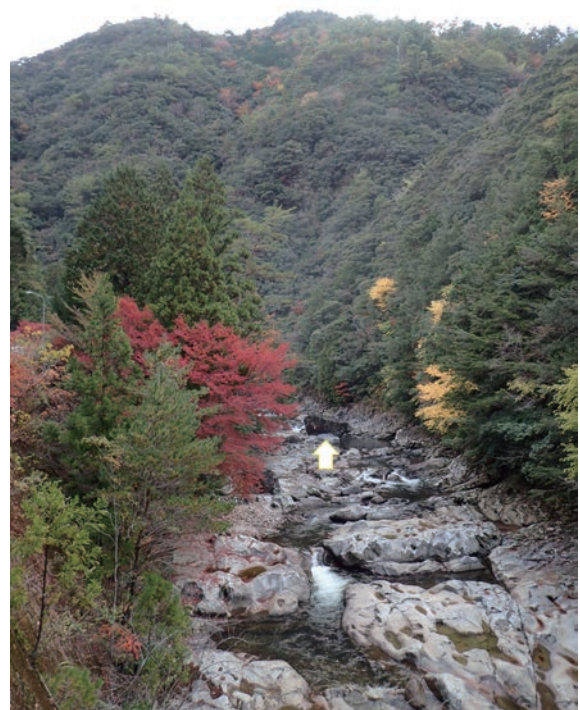


写真10 境界線の根拠となった目黒川中央の「船岩」
矢印の地点背後右側の山頂部が郭公岳

cm×255.5 cm)を合わせて検討することにより、中世「奈良山」の実態を窺うことができる。では「山形模型」と「裁許絵図」の細部を検討しよう。

寛文五年の幕府が定めた新境は「南ハ宇和島ヨリさら山ノ嶺ト申目黒ヨリハ初尾ノ森ト申所すこみとやの尾筋を通り船石ヘカカリ北ヲ鬼ヶ城ガ嶺マデヲ限東西ノ境ナリ 夫ヨリ大あかりおんじがなる口烏帽子岩地藏堂マデ嶺通りヲ南北ノ境ト相定訖」(建徳寺文書)⁽⁸⁾であり、「模型」と「裁許絵図」双方にはこの宇和島・吉田両藩との新境界線が記されている。これは笹ヶ森(三本杭)南側の支尾根分岐点となる皿山(はつおの森)から尾根稜線(すごみとや)を通り、御祝山(998m)からは東に折れ、その地点から目黒川の真ん中に所在する「船岩」までは地形を無視して直線で繋ぎ、「船岩」からはこの直線を延長して鬼ヶ城山系の主稜線上に相当する鬼ヶ城山西側の鞍部に繋いでおり(写真8の黒線が境界線でその目印として「船岩」が採用されている)、東側新境の目印にも「烏帽子岩」という大岩が採用されている。

「裁許絵図」には幾つかの大岩が描きこまれるが、特に郭公岳山頂南側に描かれた大岩(写真8のA)は高低差数十m程もある大巖で一帯はシャクナゲ群落帯となっており、上面は平坦で東西方向の主尾根稜線(鬼北町と宇和島市との行政境となる)南側には人工平場一面が造成され、中央部には25cm×30cm規模の柱受け部を加工した礎石(写真13)が一石据えられていることから、この大巖は磐座として宗教利用が行われ、人工平場はその前面に設けられた社殿跡か祭祀空間の可能性がある⁽⁹⁾。そうだとすれば、この磐座を核とする周辺部を郭公岳の山宮と見ることができるだろう。

「裁許絵図」の郭公岳山頂大岩の裾、目黒川畔には「石の鳥居」の文字が記入されている(写真8のB)。現地は花崗岩質の大岩が天井面を残して割れて鳥居状となったもので(写真9)、目黒川側の入口には注連縄が張られて結界を示しており、中を通り抜けることができる。「裁許絵図」を見ると、郭公岳山頂稜線部に向かう山道は「石の鳥居」を起点に描かれていることから、これが郭公岳磐座の一の鳥居として認識されていたことになる。このように信仰対象や磐座となる大岩を抽出して描いているとすれば、新境の目印となった「船岩」や「烏帽子岩」も同じように考えることができる。「船岩」の場所は郭公岳山頂への入口部に相当しており、目黒村の里の領域とその奥の神域との境を示す結界石であったことが留意され、幕府評定において特に新境となったのではないだろうか。

次に「山形模型」の特徴について指摘しておこう。この模型には、これが作製された当時の山道が赤線によって網羅されている。驚くのは主尾根の稜線が道となっていることは想像できるが、そこから派生する小尾根稜線の全てに赤線の道表示がされており、場所によっては斜面や稜線間の最短距離を結ぶ道も設けられていて、我々の想像を遥に越える密度の濃い山地利用が存在していたことである(図2・図3)。



写真11 郭公岳山頂磐座上より正面に望む三本杭(笹ヶ森)



写真12 郭公岳山頂磐座



写真13 柱受け部を加工した礎石



図2 目黒山形模型全景

山形模型を垂直方向から撮影した画像に記された朱書きの山道を強調したもの。尾根稜線はもちろんのこと、等高線に並行して斜面にも網の目状に肩幅に刈り込まれた山中路が詳細に書き込まれている。

写真14は「山形模型」のうち等妙寺周辺を示したものである。赤線で示される山道は全ての尾根稜線に記され、これを結ぶ連絡路が数多く存在することが判明する。「山形模型」の谷や尾根には白色（胡粉）で多くの地名の書き込みがあり、このうち旧等妙寺や磐座など信仰遺跡を窺わせるものとして「ゑほし岩・等妙寺・等妙寺火道頭・古等妙寺・大師ヶ森・正連寺跡・立岩・権現ヶ森・葉師谷頭・鳴の岩・石の鳥居・鬼ヶ城・船石」を挙げることができる。その呼称の該当推定地で現地踏査を実施し、対象地点を特定することで、これまで知られることのなかった磐座（例えば大師ヶ森・立岩・ゑほし（烏帽子）岩）等の信仰遺跡を見出す成果を上げている。「山形模型」「裁許絵図」は宇和島・吉田両藩の林業行政を詳細に物語ることができるだけでなく、中世「奈良山」の山地利用の実態を窺うことのできる希少価値の高い資料なのである。

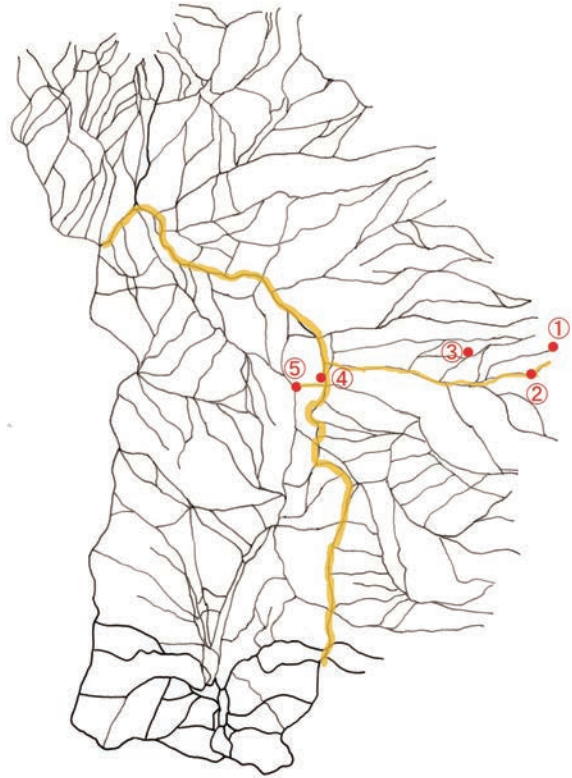


図3 目黒山形模型に書き込まれた山中路

目黒山形模型に記された朱書きの山中路だけを抜き出したもの。

- ①等妙寺 ②大師ヶ森 ③古等妙寺 ④郭公岳磐座
⑤石鳥居 ※色付き道は主尾根稜線及び等妙寺火道



写真14 「山形模型」等妙寺周辺

白線は主尾根の稜線（村境） 赤線は山道

2 「奈良山」の拡がり

(1) 篠山山系と「篠山山形模型」「篠山絵図」

鬼ヶ城山系の山並と松田川を挟んで向き合う篠山は高知県宿毛市と愛媛県愛南町・宇和島市の境界に位置する標高 1065m の山で、中世期から明治維新まで観音寺という山寺が所在し、四国八十八カ所霊場第四十番札所の平城山観自在寺（愛媛県愛南町）の元寺、あるいは奥之院とも言われる霊場である。

南北方向に延びる主尾根稜線は篠山山頂部を形成し、この稜線は鬼ヶ城山系と同じく伊予国と土佐国の国境をなしており、概ね稜線の東側が土佐国、西側が伊予国で分けられるが山頂部の堂社や麓の境界については宇和島藩と土佐藩の間で度重なる騒動が起きていて、万治元年（1658）には両藩により江戸の寺社奉行へ訴状が提出され「篠山境界争い」が生じている⁽¹⁰⁾。

ここで注目しておきたいのは、篠山においても「目黒山形模型」と同じように境界争いに伴う「篠山山形模型」が、遅くとも「目黒山形模型」の寛文五年（1665）を遡る明暦三年（1657）までには作製され、おなじくこれに伴うと考えられる「篠山絵図」⁽¹¹⁾も作製されていることである。山形模型は最大寸法 114.5 cm、短軸 67.1 cm の規模で杉材を用いて三個から構成されている。表面は材（木胎）の上に胡粉が塗られて彩色面が作られ、山地は濃い緑、山の斜面には木を描いている箇所も見受けられる。山頂部と観音寺の堂舎は朱色の家の形で表現され、道も朱の実線で描かれ、谷や尾根の所々、山頂付近には朱色で多くの堂舎名と地名が書き込まれている。この山形模型に関連して作製されたと考えられる「篠山絵図」を比較することにより、劣化によって山形模型の判読不明の記載内容を補うことができ、明暦三年以前作製という成立年代から、「篠山山形模型」「篠山絵図」共に篠山の中世期の姿を復元できる貴重な資料である。

篠山は明治の神仏分離により仏教関連の施設が全て取り壊され、仏像仏具は破却され本尊の観音立像等の一部が麓、正木地区の歓喜光寺に移された（第2章第4節で報告）ので、現地には神社化した権現堂の建物以外は一切残らず、跡地は完全に遺跡と化している。しかし「篠山絵図」には山頂部を中心とした諸施設と道が詳細に描かれており、踏査を行い現地と突き合わせることで神仏分離以前の山中での具体的な状況を知ることができる。

図4は篠山山頂部を中心にして主尾根稜線の形状を抜き出し、山系の形状を分析したものである。篠山山系のうち標高 1000 m を超える高さに達するのは 1065 m の篠山山頂部だけで、そこから派生した主尾根は南北方向では北方向に約 4 km の松田川で終わり、南方向では約 4.5 km の正木地区で終わり、そこには篠山権現（現篠山神社）一の鳥居が所在し、ここが少なくとも近世期における篠山山頂への登拝道入り口であり、この稜線がほぼ土佐側と伊予側の国境となっている（図4A-B）。

これに対し篠山の最高点から西方向へ派生する主尾根稜線（図4C-D）は、徐々に標高を下げながらも、その先端は宇和海に突き出た由良岬までの約 30 km にわたって続き、愛南町と宇和島市との行政境となっている。山岳修験における山中抖擻は連続する尾根筋を選んで峰中路（行者道）として肩幅（三尺道）に刈り込んで山中を移動する行動パターンを基本とし、その峰中路は一般に国境や郡境となり、現在も行政境として引き継がれているものが多いことからすれば、篠山山系における山岳修行の行動範囲は東西に延びる山系を主軸に想定するのが妥当であり、岬先端まで続く海への信仰と山の信仰との繋がりが篠山信仰の根底には存在すると考えられる（写真 22 参照）。

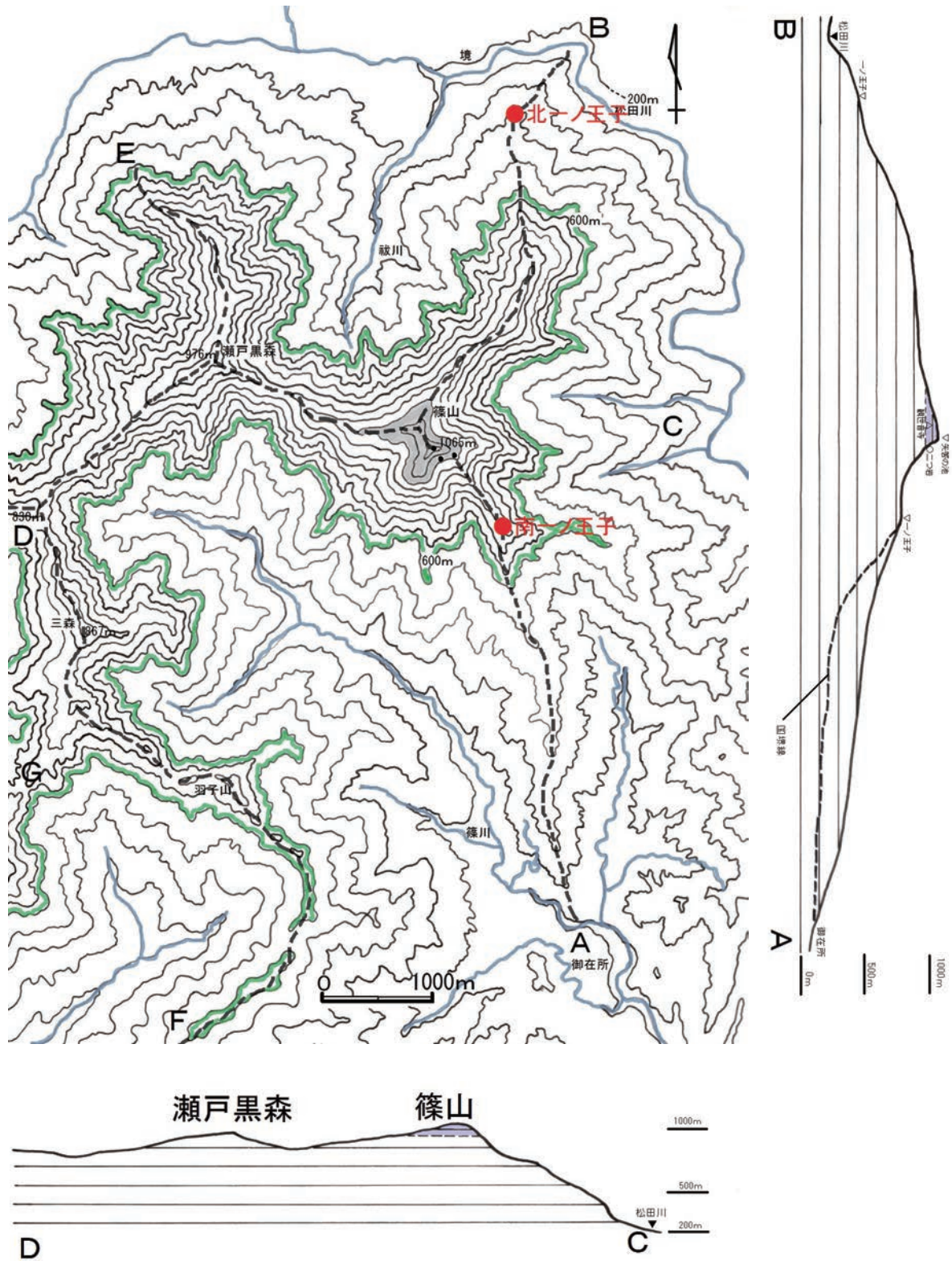


図4 篠山を中心とする主尾根稜線の関係

標高 600 m を境に上高度は 50 m 毎に、下高度は 100 m 毎に等高線を記し、尾根稜線と谷地形を示した。これを明確にするため図中の 600 m 等高線は太線で縁取りを施した。篠山山頂一帯は標高 950 m 前後を境として上高度では高木が減少し、笹を中心とする植生に変化するので、その範囲には色を塗り込み表示した。篠山には標高 950 m を境に植生と岩質変化による自然結界が存在し、これが篠山に対する信仰の根源をなしている。

(2) 篠山（弥山）蓮華座の空間構成

ここでは「篠山絵図」（以下、「絵図」と略す）と「篠山争論関係史料」⁽¹²⁾（以下「史料」と略す）を拠りどころにして、現地踏査と測量調査で得られた見解を整理する。

「絵図」では標高 900 m より上の山頂部は一面に笹を描いており、「篠山」の呼称が実際の植生から生じていることがわかる。この範囲には現在も高木は無く、山頂一帯はミヤコザザに覆われ、アケボノツツジの古木群落やシャクナゲが存在し、町指定天然記念物に指定され、旧来の植生分布を今でも認めることができる。「絵図」の笹が広がる頂上部裾とその下の木々が描かれる植生の境目には山頂裾部を一周廻る道が描かれている（図5「篠山絵図」のⅡ・Ⅴ）。「史料」のうち万治元年（1658）十月十五日付け乙 29 番の3「目安ヲ以申事」⁽¹³⁾には「彼山之腰を引廻したる道筋御座候其道より上を



写真 15 山頂の矢筈池

信仰の根源となる霊池で海と繋がり早魃時にも水位が変化しないという。

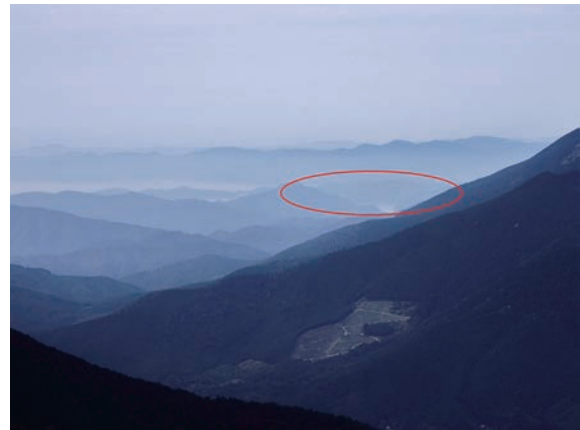


写真 16 篠山山頂から直視できる「鯨大師」を祀る九島



図5 「篠山絵図」に描かれた山頂周辺と書込み

山頂部の笹の植生範囲と外側の木々が広がる境目が明確に描き分けられその植生の境目に等高線に沿った道（Ⅱ）が存在したことが見て取れる。

- I 参詣道 II 行道路 III 尾根稜線 IV 主稜線上の道 V 行道路
 ①権現堂 ②矢筈の池 ③天狗堂 ④寺 ⑤観音堂 ⑥鐘突堂
 ⑦辺路屋 ⑧二岩



写真 17 尾根筋に位置する二石



写真 18 観音堂跡背後の大岩

蓮華座と名付け即権現山と申ならわし候蓮華座之の頭上に矢筈之池と申御池御坐候」と記され、この道を結界線として山頂までの空間を「蓮華座」と仏の座に見立てて権現山と称し、山頂には「矢筈之池」という神池が存在することを記述する。この裾を一周廻る道を設けるとい背景には、植生変化点を結界線と認識して管理道を設け、これを廻る行道が存在したこと、結界線から上部を神仏常住の世界と見立て、厳格な植生護持が図られたという山岳信仰観に基づく二点の存在を示唆している。

図5の「篠山絵図」を見ると、山頂には②「矢筈之池」前面に営まれた①「権現堂」が描かれる。矢筈之池は直径2 m程の小さな池であるが、これは宇和海と繋がっていて日照りが続いても水位が変わらないという靈験を持つ靈池で、申（1656年）ノ六月十八日付け乙29番の3頭書荷之事⁽¹⁴⁾には「一彼山境目池之中矢筈石境目にて尤堂寺も両国へかゝりし儀」と、山頂の矢筈池の石を国境とし、（観音寺の）堂等も伊予・土佐両国にかかるものだという認識であったことが読み取れる。この他、篠山の呼称について「篠山争論関係史料」には「小篠山」「両国之弥山」「笹権現堂弥山伊予土佐両国」とあり、小篠山⁽¹⁵⁾とも弥山信仰⁽¹⁶⁾に基づく弥山とも称していたことがわかる。

再び図5「篠山絵図」の「蓮華座」の部分を見ると行堂道に沿って、④「寺」、⑤「観音堂」、⑥鐘突堂、⑦辺路屋が集中しており、神宮寺と記される「篠山観音寺」を構成し、山頂の権現堂に上がる途中には篠山権現を守護する天狗を祀った③天狗堂が存在したことがわかる。この場所に篠山権現の本地仏を祀る観音堂が営まれた理由として、磐座として宗教利用がなされた大岩断崖の存在を指摘しなければならない。現地踏査時に観音堂跡基壇の背後一面に大岩が所在することを確認しており（写真18）、磐座信仰の場所が観音堂へ繋がることが想定される。

これに加え注目すべきは、尾根稜線を白線で描いている点で、その形状は「Y」字で矢筈の形をしており、その要にあたる位置に「矢筈池」が存在する事、下側の尾根を挟んで左右両側に巨石を描き⑧「二石」（二ツ石のこと）と記している事で、現地踏査の結果、この尾根筋は観音寺から山頂に通じる行者道であり、二ツ岩は山頂部への結界門であることが想定された（写真17）。

「篠山山形模型」及び「絵図」が存在することにより、「蓮華座」と称された篠山山頂域は、山頂が篠山権現垂迹の靈池を核にして、その前面に礼拝施設である権現堂を設けた神の座であり、裾部が本地仏の十一面観音（観音寺）鎮座という神仏融合した形態を自然植生の中に護持した靈場であったことが読み取れる。

（3）篠山の結界祭祀

次に注目したいのが靈場篠山における結界祭祀の在り方である。「篠山山形模型」「絵図」の双方には国境をなす主尾根の稜線上に二箇所の「一之王子」という地名の書き込みがあり、（図4平面地形図に赤字で記入）その場所はなだらかに延びる尾根筋が傾斜を強める地形の変換点に相当（図4 A—B断面）する事から、篠山本体の聖域の結界点に熊野九十九王子つくもおうじに通じる一之王子社を配したものと想定し、南側の地点に対して現地踏査を行い遺跡の所在を確認した。

篠山山頂から南に延びる主尾根稜線が傾斜を緩やかに変える標高約780 mの地点には篠山駐車場が設けられ、ここから南方向に約500 m間は高低差も無く、なだらかな尾根筋が続く。その中ほど、駐車場から約350 mの地点には標高782 mと一際高まるピークがあり、「貝ノ森」と呼ばれている。この地点は現地踏査を行った折に人工の加工部が存在することが判明したので測量調査を実施し、空間の読み取りを行った。

現地は細い尾根筋の南側斜面が岩盤剥き出しの大岩で、その前面には10 m×7 m規模の平場が設けられ、左右には地山を削り出したと考えられる土塁（C・D）状の高まりを確認することができる。大岩の前には3 m×4.5 m規模の長方形土壇（A）が認められ、東北側は尾根道（参詣路）と繋ぐ通路の出入口となっている状況を見てとれる。

調査の結果、この大岩は宗教的利用が認められる磐座であると判断し、地点名を取って「貝ノ森」磐座と呼ぶ。土塁状の高まり（C・D）は視覚上の結界を意味し、長方形土壇は北側に平らな方形の礼拝石が伴うことから磐座に伴う祭壇と解釈した。

地点名の「貝ノ森」とは山中修行の宗教者が、篠山権現に登拝するにあたり法螺を鳴らす故事に由来するのではないだろうか。

「貝ノ森」磐座から尾根稜線を約150 m先端に向かって進むと、一ノ王子社跡となる。ここには尾根稜線上の最も高い地点に7.5 m×5 m規模の人工平場を設け、北側には後背面カットを施し、南側には土留め石を一行に並べた社殿跡が良好に残っている。

社殿跡は基礎列石の多くを失っているが、その形状から流造で横長の相殿形式であったと推定される。社殿中心線の前には5、6段分の石段を設け、その前は伊予側の正木地区からの参詣道（西側）と土佐側の窪川村からの参詣道との合流点となっている。篠山山中の国境をなす稜線上で磐座祭祀の痕跡と、熊野信仰に通じる王子社の存在を確認したこと

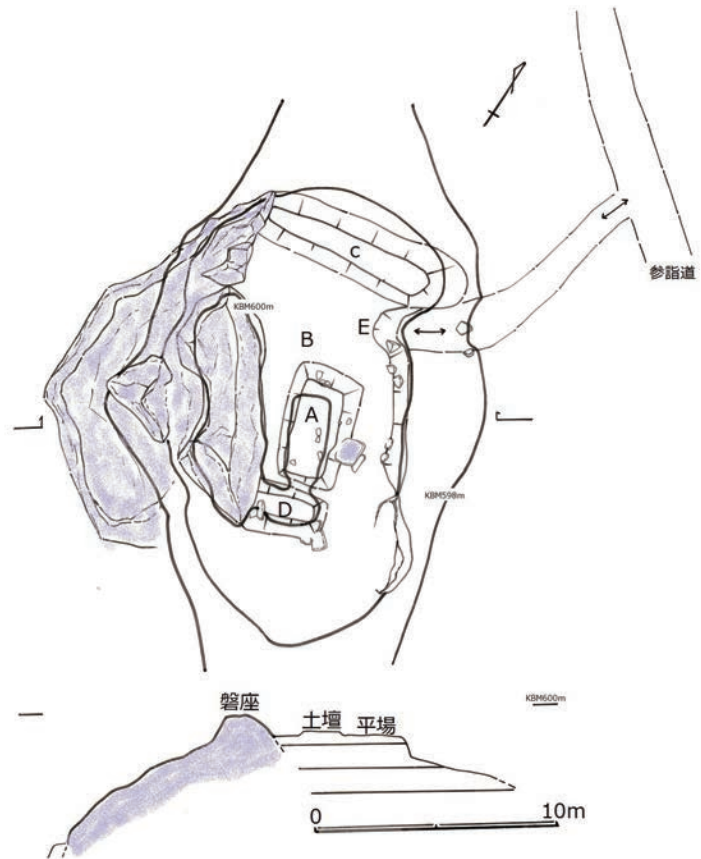


図6 篠山「貝ノ森」磐座

磐座前には地山を削り残して両脇に土塁状の高まりを設けた祭祀空間となる平場を設け、大岩前面には長方形の祭壇が伴っている。

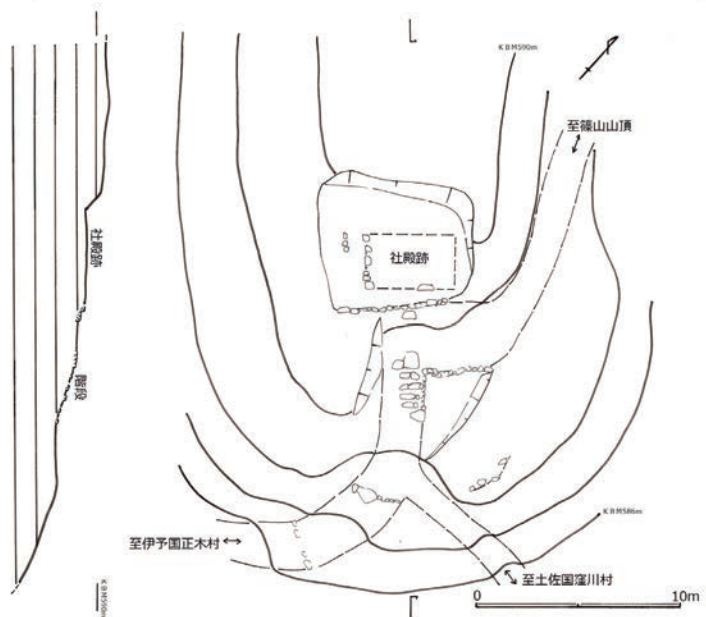


図7 篠山南一ノ王子社跡

「一之王子」と書き込まれた地点で伊予側・土佐側の参詣道の合流点と社殿の遺構を確認した。



正面

背面

光背(表)

光背(裏)

写真19 旧篠山観音寺十一面観音像

は、奈良山における信仰の実態を解明する糸口につながる成果である。

(4) 篠山観音寺の観音像と鰐口

明治の神仏分離で「蓮華座」の末端、篠山八号目に所在した観音寺は廃寺となり、南麓の正木地区の歎喜光寺境内（曹洞宗）に仏像・仏具類が降ろされた。その後権現堂を設けて祀られたものの多くの資料が失われている。ここでは中世期に遡る本地仏の十一面観音立像と寛正七年（1460）の銘を持つ鰐口を紹介する。



写真20 旧篠山観音堂鰐口

径 20 cm 寛正七年（1460）

与州御庄篠山観世音寺之鰐口
宗諦之置
寛正七年丙戌閏二月十八日

十一面観音立像は像高86 cm、頭部縦15.5 cm、頭部幅11 cm、頭部奥行13.5 cm、面幅10 cm、面高10.2 cm、足幅18 cmの規模を持つ。頭部の化仏は欠損し一木造で内刳はない。室町期の造像と推定。現在は旧暦10月17日に、観音寺での祭礼を村人が継承した花取り踊り時に供養が行われている。

鰐口は篠山観音堂に懸けられていたもので銘文は線彫りで形式からも年代には問題がない。『宇和旧記』には、もう一基存在したことが記されているが現在は失われている。銘は右側に「予州…」左側に「寛正…」と年月日、正下面に上向に「宗諦之置」と奉納者名を刻むので、写真20右の読みとなる⁽¹⁷⁾。

(5) 観音霊場としての篠山信仰の位置付け

等妙寺が置かれた「奈良山」という霊場がどのような拮がりを持つのかを検討するために、鬼ヶ城山系の南に隣接し、同じ伊予国・土佐国の国境をなす篠山山系の詳細を検討してきた。最後に篠山信仰について総括しておこう。

篠山は四国八十八ヶ所第40番札所の平城山観自在寺の前身で奥之院とされる⁽¹⁸⁾。先にみたように篠山には植生変化に基づく自然結界が設定され、古来自然護持⁽¹⁹⁾が図られた観音霊場で山中修業の空間、山寺であり、里寺としての観自在寺の信仰の根源である「奥之院」として位置付けることができる。どちらが後先というものではなく両者は併存関係にあり、伽藍を形成し経営主体となる寺家と山岳霊場とでは根源が異なる。初期の施設は篠山を直接遥拝する場所に遥拝所として設けられたと考えるが、愛南町御荘平城の地に営まれる現在の観自在寺境内には、鎮守社としての篠山権現が大師堂前に祀られてはいるものの、直接篠山山系を望むことはできない。

観自在寺はその寺名が観自在(観音)であるにもかかわらず、本尊は薬師如来である。これは弘法大師が一霊木で薬師如来像と脇侍の十一面観音像・阿弥陀如来像及び舟板名号(宝判)を彫ったという一霊木三体信仰に基づく縁起に由来するものであるが、脇侍を寺名にするのには無理がある。宗教民俗学者の五来重は、この仏像の組合せについて阿弥陀如来は熊野本宮、薬師如来は熊野新宮、観自在菩薩(観音菩薩)は那智(千手観音・如意輪観音)の本地であり、海を中心とする熊野信仰は新宮を中心に展開している。篠山は十一面観音を本地仏とする山岳霊場であり、熊野信仰が両寺成立の基層にあるという事を指摘している⁽²⁰⁾。篠山が熊野信仰の影響を大きく受けている事は、結界鎮守に熊野九十九王子に通じる一之王子社を配置する事からも妥当な見解と考える。

再び篠山に視線を戻すと、山頂の矢筈池からは宇和島沖の九島を目視することができる(写真16)。九島には観自在寺の海の奥之院にあたる臨海山龍光院(宇和島駅近くの宇和島市天神町に所在)に合祀されている、鯨に乗って上がったという説話を持つ「鯨大師」⁽²¹⁾ゆかりの願成寺が所在する。

このような伝承が成立する背景には、山岳霊場篠山(観音信仰)―観自在寺(観音信仰/津)―海の信仰(補陀落信仰)―観自在寺奥之院(九島鯨大師)というように、山の信仰と海の信仰の両者が基層に存在するからで、海を介して鬼ヶ城山系と篠山山系は繋がっているのである。

最後に山号となっている「平城山」について指摘しておきたい。史料的には近世期以前に山号を付したものは無く、弘法大師開基伝承が唱導され広められる元禄頃から、「平城(ひらじょう)」の地名を平城天皇に付与した説話が語られるようになり「平城山観自在寺」と名乗るようになる。これは、視線を変えれば「ならやま」と読むこともできる。鬼ヶ城山麓の等妙寺の山号が「奈良山」であることから、これと重なる山号は避け、字を変えて「平城山」とした可能性は無いのだろうか。海を介して両山系が繋がるのであれば、広義の「奈良山」というものを想定した方が、拮がり繋がる信仰の実態を反映した解釈といえるのではないだろうか。

3 山岳霊場「奈良山」の世界観

(1) 山形模型作成の背景と山岳霊場の聖域観

鬼ヶ城山系だけではなく、篠山山系まで含めた広義の「奈良山」では全国的に見ても類例が殆どない山の立体模型二基が作製されたわけであるが、その背景には、山岳霊場特有の事情が存在している。それは霊山における国堺争論である。それまで未確定であった国境や藩領境を確定させようとする動きに起因して争論が生じたのであるが、その根源には山岳における神仏への聖域観と聖域護持観

念が存在している。古来信仰対象となってきた霊山の多くでは、分水嶺をなす主尾根の稜線上が国境や郡境に用いられる事例は多い。

稜線上には人が通行可能な肩幅（幅三尺）だけ刈り拓いた尾根道（三尺道）が設けられ、そこは聖地と聖地を繋ぎ、神仏が往来する「路」であると同時に、行者道・修行路の意味合いを持っていた。これはもちろん、山棲の生活路でもあり獵師の通行路（獵道）としても用いられる。この聖地と聖地をつなぐ尾根道と、これに付随する一定幅の斜面は神が支配する領域であり、人間が支配するものではないという観念が存在した。従って、そこでは尾根道を基軸に自然林や原始林が護持されており、こうした事例は全国に存在する。境界が確定している尾根稜線の場合でも、「防火帯」と称して共同管理の空間となっている事例は多く現在に至るまで県境が確定しない事例として山梨県・静岡県の県境未確定地、富士山山頂と福岡県・大分県の県境未確定地、英彦山山頂が存在する。

同じ目線で「奈良山」を見ると「目黒山形模型」に記入された「等妙寺火道頭」が関連する。これは等妙寺の火道の頂上という意味であり、現等妙寺背後の主尾根稜線のピークに所在する「大師ヶ森」から始まり、山頂部の郭公岳山頂東側に取り付いている。この尾根道は近世期の村境でもあり、現在も鬼北町と松野町の行政境として踏襲されている。尾根稜線上には裾部から大師ヶ森地点（十禅師宮奥宮と推定）を始め、等妙寺火道A地点・B地点など旧等妙寺寺域東側の結界を構成する護法と推定する集石・列石・磐座からなる遺跡が続き、山頂からは滑床溪谷の「鳥居石」に下る尾根道と連続する。これは「鳥居石（一の鳥居／結界）」—「郭公岳山頂磐座（山宮）」—「護法群」—「大師ヶ森（十禅師宮奥宮）」へと連なり、奈良山の山神（権現）や修行者が通行する聖なる道（写真8のB（鳥居石）から始まる道・図3参照）ということができる。

山形模型としては西日本有数の修験道の拠点で豊前・筑前両国に跨る天台修験道（本山派）別山として位置づけられる彦山派本山の英彦山^{ひこさんしょうけい}（²²）に残された「彦山小形」が最古の事例である。これは元和二年（1616）に彦山霊仙寺大講堂再建時の余材で製作されたもので、彦山が主張してきた中世期の七里四方の神領や、守護不入の特権が近世期において失われていくとき、山伏たちが伝統的に聖域化していた彦山三所権現・霊仙寺境内だけは護持するために作成し、公儀に対する境界の説明や確認に再三用いており、出羽国の山岳霊場鳥海山^{ちょうかいざん}でも山頂部の境界をめぐる争論に伴い山形模型が作成されている。

鬼ヶ城山系、篠山共にこれに類する山形模型が作られた背景には、人的な境界を明確に定めないと

写真21 彦山小形（福岡県指定文化財）

木製 高 62 cm 幅 131 cm 奥行 135.8 cm。

17世紀。（英彦山神宮所蔵）

彦山の聖域・領域を示した木製の立体模型で現地形とも非常に合致し「山の木図」とも称される。元和二年（1616）小倉藩主細川忠興は彦山霊仙寺の大講堂を再建したが、その余材で制作したと伝える。従来宝物として霊仙寺の大講堂に保管されていた。模型は把手の付いた台座の上に載せられ、公儀に対する境界の説明や確認に何度も用いられていて、詳細に説明するためにも立体模型が必要であったと考えられている。





写真 22 日振島東沖より遥拝する両峰の「奈良山」 中央が篠山山系、左が鬼ヶ城山系



写真 23 宇和島湾より遥拝する 1000 m級の峰々が続く「奈良山」鬼ヶ城山系

いう霊山観が根底に存在するからで、両山域が江戸時代初期までこの観念を護持した霊山であったということ裏付けている。一般的な山絵図ではなく、木製の山形模型を作成しようとした新たな発想の原点には「彦山小形」存在の情報が影響していたのではないだろうか。

(2) 海からの目線—^{ようはい}遥拝—

山岳信仰を考える場合に、欠かすことができない目線として、神霊が宿る霊山や巨樹、磐座、滝などを直接目視し、拝む遥拝という行為の存在である。密教の修法ではたびたび観念上の見立てが行われるが、実際の山中修行においては、遥拝は極めて重要な要素で、行所の一つである「^{はなたて}華立」は山中修行路中（行者道・峰中路と呼ばれる）に無数に設けられ、「花の木」と呼ばれる檜などの常緑樹を竹筒などの容器に挿し、これを通して山岳霊場の見通しの効く尾根稜線から対象物を礼拝するというものである。

では、山岳霊場全体の姿はどこから遥拝するのが、最も神々しく見えるだろうか。これが、意外と障害物の多い陸地ではなく、海面なのである。例えば霊峰富士は駿河湾内から視ると、視界を遮るものが一切なく、裾から山頂まで、美しい弧を描いている。3000 m級の山並みが海岸線から一気に立ち上がる立山連峰の雄姿は、富山湾を挟んだ能登半島側から遥拝すると、余りの神々しさに身の震えを感じるほどである。「奈良山」の姿も宇和海や、日振島沖から遥拝すれば、壮大な立体化した曼荼羅空間の全体像を眼中に収めることができる。山岳信仰は海からの目線と、常世や補陀落浄土という

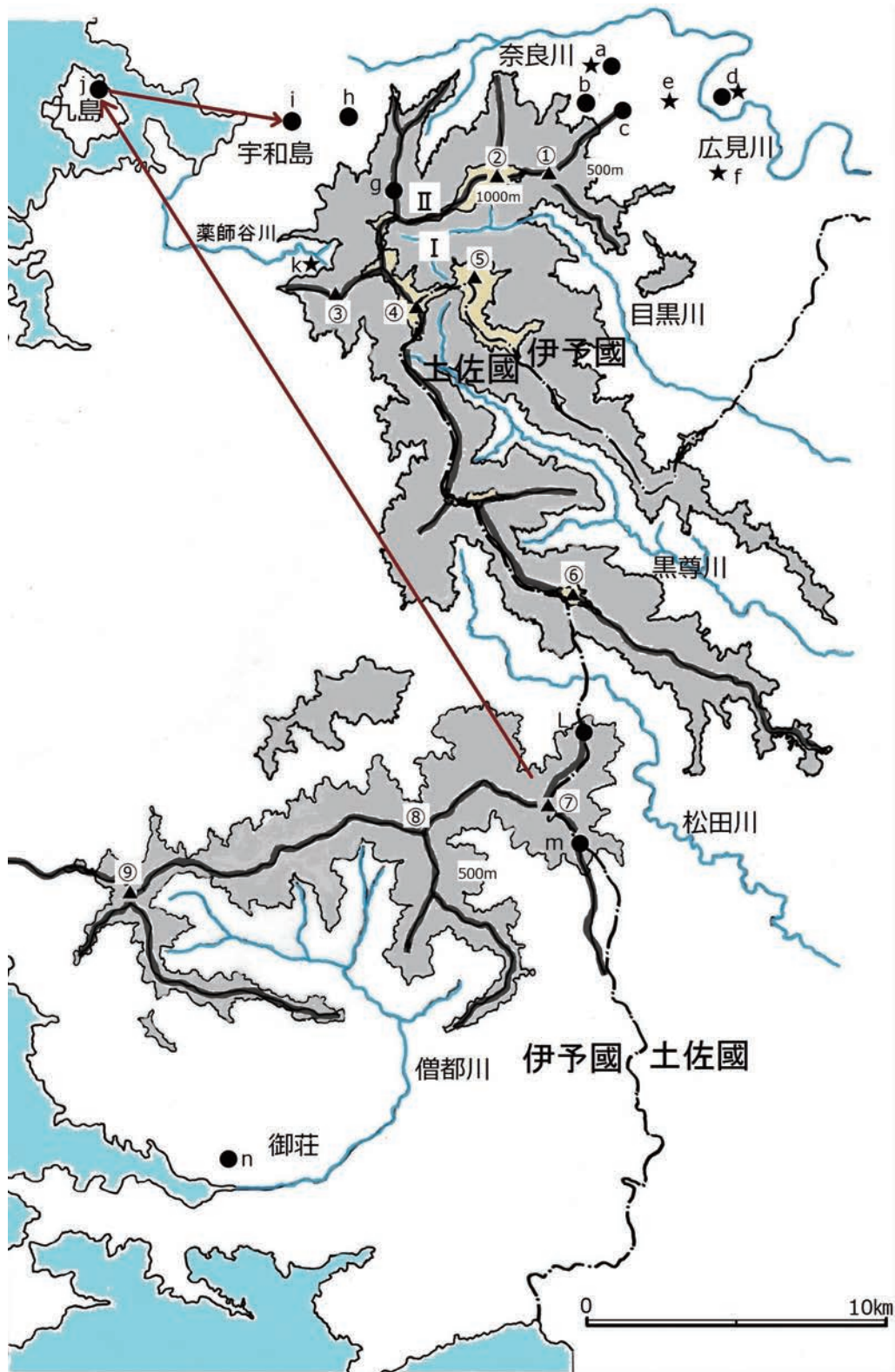


図8 鬼ヶ城山系（北）・篠山山系（南）と寺社の関係（一主尾根稜線）

- 社寺・堂 ★平安後期・鎌倉仏 ①郭公岳 ②高月山 ③権現山 ④八面山 ⑤三本杭（篠山）⑥大黒山 ⑦篠山
 ⑧瀬戸黒森 ⑨観音岳 a 等妙寺 b 等妙寺旧境内 c 大師（太子）ヶ森 d 広福寺（六奉行寺院）e 宮川弥勒堂 f 照源寺
 g 六角堂 h 静蓮寺（六奉行寺院）I 龍光院（観自在寺奥ノ院）j 鯨大師 k 東光寺（権現山本地仏）L 篠山一ノ王子社
 （北）m 篠山一ノ王子社（南）n 観自在寺（四国八十八カ所第四十番札所） ※ →は篠山と奥之院の関係

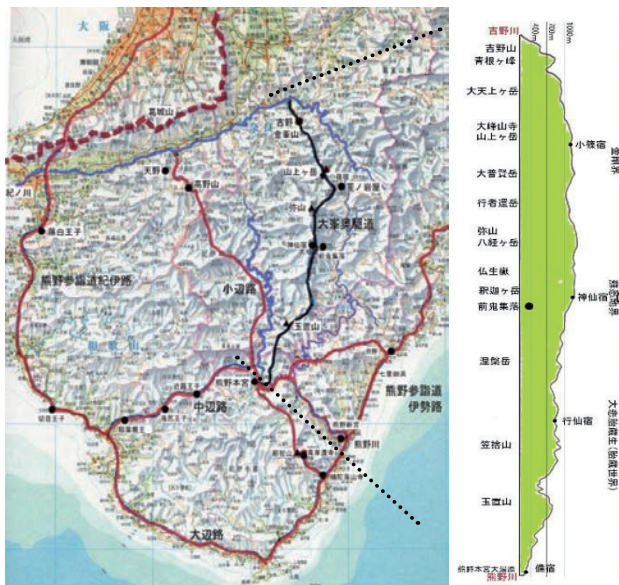


図9 紀伊半島中央部に設定された金胎一具の曼荼羅観

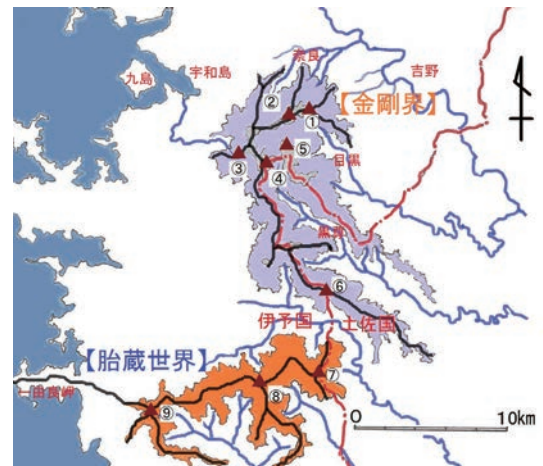


図10 「奈良山」に設定された金胎一具の曼荼羅観

- ①郭公岳 ②高月山 (高ツク)
- ③権現山 ④八面山 ⑤三本杭 (笹力森)
- ⑥大黒山 ⑦篠山 ⑧瀬戸黒森 ⑨観音岳

海の神仏の世界との繋がりが切り離せない。

(3) 「奈良山」に敷かれた金胎一具の曼荼羅観

山岳霊場が成立する思想的背景には山系に対し大悲胎蔵生の世界（胎蔵世界）と金剛界の世界と認識する「両峰一具」の観念があり、これを「金胎両峰」と称する。このように実際の山系を曼荼羅に見立てる試みの最初は延暦二十四年（805）には成立したとされる「大峰縁起」に見ることができるが、この史料は単独では現存せず、その内容が本文記事の記載年号の下限が建久三年（1192）の『諸山縁起』⁽²³⁾に組み込まれ記載されている。このうち第一項大菩提山（大峰山）仏生土要事では「入大峯籠、十二年春出胎蔵界後門、同十三年庚寅年同入金剛界初門」と大峰山系に対し金胎両部の曼荼羅世界であることを明記し、続く「胎蔵初門」以下では胎蔵世界の曼荼羅中諸尊の名のついた嶺が列記されていて、大峰山系に対して実際に曼荼羅空間に見立てたことがわかる⁽²⁴⁾。これに次ぐのが文保二年（1318）に比叡山慈眼房光宗によって編まれた「溪嵐拾葉集」所収の修験道関係の切紙で、大峰を金胎両峰の峰ととらえ、入峰修行は曼荼羅である山岳に結縁することが目的と記されている⁽²⁵⁾。修験道の根本道場である吉野の金峰山から熊野本宮に至る山岳霊場成立の前提にはこの曼荼羅観が存在している。

図9は金峯山—大峰山—熊野本宮の曼荼羅観を特に断面として模式的に示したものであるが、留意すべきは、これが単独で孤高の山ではなく、連続する山並みという地形的要因が必要という点である。つまり、曼荼羅世界に見立てた峰々の連なりを修行者自らが抖擻しながら、各ピークの山頂部（杜）や鞍部に護法として迎えた諸神仏を礼拝し、あるいはそこから遥拝する行為を主目的とする山中修行ということである。この目線で広義の「奈良山」を金胎一具の曼荼羅観を見た場合、南に位置する篠山山系の峰々は熊野信仰を根底にしていることから大悲胎蔵生（胎蔵世界）に、北に位置する鬼ヶ城山系の峰々は吉野・金峯山の金剛界として認識することができ、南西四国の峰々に熊野・金峯山の世界観を導入した「大峯写し」⁽²⁶⁾が存在したことになる。



写真24 「奈良山」周辺に残る平安・鎌倉仏

① k 東光寺（権現山本地仏 薬師如来 11世紀／像高150cm） ② d 広福寺（蔵王権現社 阿弥陀如来 11世紀／像高75cm） ③ f 永昌寺普門堂（旧天満宮十一面観音 12世紀／像高86cm） ④ e 宮川弥勒堂（弥勒菩薩 13～14世紀／像高61cm） ⑤ b 旧等妙寺（菩薩遊戯坐像 13世紀前半／像高89cm） ※アルファベットは図8の位置に該当

4 霊場「奈良山」の成立と位置

等妙寺旧境内を検討する視点として「奈良山」という（山岳）霊場概念を導入したことにより、幾つもの展望が浮かび上がる。大峯写しで金胎一俱の立体曼荼羅として設定された「奈良山」の世界を紐解くことにより、発掘が進められている旧等妙寺が成立した壮大な背景を描いてみた。『齒長寺縁起』には、元応二年（1329）に等妙寺開山の理玉和尚は宇和荘に入り奈良山を開いたと記し、これは発掘調査で姿を現した旧等妙寺の本堂跡や客殿・庫裡一体型の本坊跡が示す年代観とも矛盾しない。

しかしながら、「奈良山」という目線で周囲を見渡すと、松野町側の広見川流域には字吉野に蔵王神社が存在し、字延野々には「奈良山」での山中修行を实践する等妙寺同行集団「寺奉行六箇所」の一つ広福寺に平安後期の阿弥陀如来座像が、永昌寺普門堂にも旧天満宮本地仏と推定される平安後期の観音立像が伝来する。さらに字豊岡の宮川弥勒堂の弥勒菩薩坐像（鎌倉後期）は「奈良山之絶頂」から移したものである⁽²⁷⁾。宇和島側でも、権現山の本地仏は平安後期の薬師如来立像というように、鬼ヶ城山系周辺には平安後期から鎌倉期に属する仏像が集中することが特筆される。しかも等妙寺旧境内本尊として祀られていた二臂菩薩像遊戯坐像（伝如意輪観音像）は鎌倉時代前期の作例であり、等妙寺に伝来する四天王寺系二臂如意輪観音画像は院政期の愛媛県最古の仏画と、いずれも等妙寺成立を大きく遡り、前身寺院の存在を考える必要がある。

こうした状況から勘案すると、山岳霊場「奈良山」の成立は早ければ撰閑期には遡り、院政期（12世紀）には金峯山（弥勒菩薩－如意輪観音－蔵王権現）信仰に通じる霊場として確立したと指摘することができ、この下地が既に存在していたからこそ、天台戒律復興教団が新たな活動拠点として奈良山中に等妙寺を構えた、という脈絡が見えてくる。それは、山岳霊場として特定の教団が独占しない「奈良山の寺」⁽²⁸⁾ から国王の氏寺と称される京都白河の法勝寺末「奈良山等妙寺」への変化であり、14世紀前半の宇和荘に大きな宗教変革の波が押し寄せたことを意味している。

【註】

(1) 『等妙寺旧境内国史跡指定10周年記念シンポジウム 中世等妙寺の具体像に迫る』愛媛県鬼北町教育委員会 2018

- 年。このうち調査担当者の幡上敬一「基調報告 奈良山等妙寺の調査研究における現状と課題」、織田誠司「【研究報告 1】等妙寺旧境内の発掘調査成果について—本堂・本坊跡を中心に—」で総括されている。
- (2) 等妙寺開基 700 年記念 鬼北町・愛媛県歴史文化博物館共催テーマ展『奈良山等妙寺の至宝と国史跡等妙寺旧境内展』鬼北町教育委員会 2020 年。【会期：奈良山等妙寺の至宝展〈文書展示室〉・令和 2 年 11 月 14 日～12 月 13 日、国史跡等妙寺旧境内展〈考古展示室〉・令和 2 年 11 月 14 日～令和 3 年 1 月 24 日】
- (3) 拙稿「山寺研究から霊場研究へ」『山岳信仰と考古学Ⅲ』同成社 2020 年 p195～213。
- (4) 長野覚「山岳聖域の自然林と神木」『宗教民俗研究 第 14・15 合併号』日本宗教民俗学会 2006 年。修験道は石楠花（ジャクナゲ）を霊樹・神木として扱う。大峯山寺本尊蔵王権現と役行者像はもちろん山上宿坊の祭壇には花の有無に関わらず石楠花を供え、これを聖地に移植して石楠花帯の自然結界を形成する事例は全国的に存在する。
- (5) 結界とは密教思想に基づき聖地・伽藍・堂・社等に霊的バリアを設け浄地とすることで、山岳霊場、聖地には幾重にも結界が設けられるが、尾根稜線・川など自然界の堺（変換点）や植生変化点を自然界の結界（自然結界）とする事例は一般的に行われている。修験道で尊ばれた御神木の群落を保護し、接ぎ木をして群落を上げその植生により結界空間を設けることが修験道の根本道場である大和大峯山系や九州彦山系などで確認できる。
- (6) 山岳信仰に基づく山名の特徴として、特に宇和郡周辺には山頂部に対し「〇〇森」と呼称する箇所が多いのが特徴で、山頂部を神の宿る自然結界として植生を意識し残してきたため、「森」がつく山名が集中している。
- (7) 『目黒山形模型並びに関係資料調査報告書』愛媛県松野町教育委員会 2000 年。『目黒山形模型並びに関係資料調査報告書Ⅱ』愛媛県松野町教育委員会 2005 年。
- (8) 『〔建徳寺文書〕宇和島・吉田両藩の林業と目黒村山境争いの顛末書（抜粋）』松野町教育委員会 1991 年。
- (9) 平場中央に一石だけ柱受けの加工を施す礎石が据えられるとすれば、例えば修験道の峰入りに先立つ柱松のような柱を立てて祀る祭祀などが想定できるかもしれない。
- (10) 篠山境界争い及び「篠山山形模型」「篠山絵図」に関する記載内容は『篠山山形模型並びに関係資料調査報告書』宇和島市教育委員会 2009 年に基づいている。山形模型は現在、宇和島市の伊達博物館において展示保管されている。
- (11) 「篠山絵図」は現在愛南町指定文化財に指定され、一本松郷土資料館に保管展示されている。「元禄二年の篠山絵図」との貼紙があるが後世に貼られたものである。宇和島市の調査によって、この絵図は「篠山山形模型」とその記載範囲、及び記載地名などが一致し、篠山における国境争論に関連した「篠山山形模型」作製にあたり制作されたことが裏付けられている。
- (12) 『篠山山形模型並びに関係資料調査報告書』宇和島市教育委員会 2009 年所収「Ⅱ 篠山争論関係文書」P28～39。
- (13) 先掲「Ⅱ 篠山争論関係文書」P33。
- (14) 先掲「Ⅱ 篠山争論関係文書」P31。
- (15) 「篠山」の呼称は鬼ヶ城山系では最高峰の三本杭の旧名「篠ヶ森」を連想させる。西日本最大の修験霊山彦山では、山頂部の植生は高木がなく笹が繁茂し、彦山講の代参者はこの笹を刈って持ち帰り、仲間と分けたのち細かく砕いて飼育している牛馬の餌に混ぜて与えれば病気になるという信仰があった。権現を祀る霊山山頂の笹は、権現の霊験があると信じられる霊的植物であった。
- (16) 「彌（弥）山」とは須弥山浄土に例えられた霊山や神仏の宿る霊山＝御山という意味を持つ山名。因みに国東六郷山の惣鎮守（山神）、太郎天童垂迹の霊山も屋山（弥山）、安芸宮島の神体山も弥山、出雲大社背後の北山山系の最高峰は弥山、伯耆大山の山頂を構成するトップは弥山であり、大山の回峰行を「弥山禪定」という。
- (17) 愛南町の公式ホームページでは「与州御庄篠山観世音寺鯛口寛正七年丙戌閏二月十八日宗諦稔置之」と紹介している。
- (18) 石野弥栄『伊予国観自在寺の歴史』平城山 観自在寺 2010 年。
- (19) 自然護持というのは、結界内を神仏常住の浄地として一木一草も刈り取ることなく保全するため、継続的に廻峰行などを行って護持を図る行為で、自然保護とは本質的に異なる。我国の山岳霊場には都市近郊にもかかわらず、護持を図ってきたことにより、自然林や植生が保全されている事例が複数存在する。
- (20) 五来重「薬師信仰総論—薬師如来と庶民信仰—」『民衆宗教史叢書第十二薬師信仰』1986 年 P26・27。
- (21) 鯨大師は弘法大師の創建と伝えられる。鯨大師は島で参拝には不便ということで寛永八年（1631）に対岸の元結掛に移され、その後明治時代に、龍光院に合わせ祀られ、残されたお堂を馬目木大師と呼ばれるようになった。

(22) 西日本最大規模の修験道彦山派の霊山、彦山は靈元法皇の院宣により享保十四年(1729)に「英」の一字を賜ったことから、彦山を英彦山に改めている。研究者による歴史的な記述ではそれ以前を「彦山」、以後を「英彦山」と使い分ける場合がある。また、山そのものを指す場合は地名表記として「英彦山」を使う。

(23) 「諸山縁起」は修験道の根本霊場である大峰山、熊野山、金峰山、葛城山および笠置山の縁起、由緒を集めた記録で現在宮内庁書陵部に所蔵され、内容は大菩提山(大峰山)仏生土要事、熊野参詣還向次第をはじめ多数の項目にわたる。これが《諸山縁起》として集大成されたのは鎌倉初期とされる。

(24) 宮家準「中世における修験の思想一教義書を中心として」『中世文学』24巻中世文学会1979年p6～10。宮家は「諸山縁起」所載の二十項目の第一項は「大峰山の起源伝承」でこれは平安時代末から鎌倉時代にかけて熊野詣をした天皇や上皇が披見したり、歴代聖護院門跡が相承した「大峰縁起」と推測している。

『諸山縁起』の「胎蔵初門」以下の諸尊名が付いた嶺の順番を胎蔵世界現図曼荼羅に当てはめると、外金剛部院西方中央(最下端)の難波天からはじまり、隣接する仏・菩薩を順次たどって外金剛部院東方中央(最上端)の守門天女まで達し、実際の曼荼羅設定が行われたことを読み解くことができる。2004年度に科研費研究成果報告がなされた「大峯の口伝・縁起形成に関する文献学的研究—『諸山縁起』を中心に—」(研究代表者 川崎剛志)では「大菩提山仏生土要事」には天皇・貴顕・高僧・行者等による峯々への經典安置が多数注記されているが、うち高僧については『僧綱補任』に拠り採用されたことを根拠に、古代から続く国家的な大峯信仰史を捏造すべくこれらの註記がくわえられたのであろうと推断している。

(25) 300巻のうち113巻が現存する。比叡山西塔北谷の黒谷別所にいた光宗(1276-1350)の著で、1318年(文保二)6月の自序がある。仏事・法会の次第や教理の研修に際して作られた筆録や聞書を書きとどめたもので、《阿婆縛抄》《覚禪抄》と並ぶ、中世の仏教教学集成の代表的な書とされる。

(26) このような金胎一具の峰が設定された事例(「大峰写し」と仮称しておく)は、彦山(胎蔵世界)と宝満山(金剛界)、彦山(胎蔵世界)と福智山(金剛界)、肥前牛尾山(金剛界)と肥前・筑前国境の背振山(胎蔵世界)、出雲鱒淵山(金剛界)と枕木山(胎蔵世界)、伯耆大山(金剛界)と美(三)徳山(胎蔵世界)など国峰(くにのみね)と呼ばれ、平安末から鎌倉期にかけて諸国に設定されたが、解明されている事例はまだ少ない。

(27) 松野町に所在する正善寺は一遍上人(1239-1289)所縁の寺とされるが、ここに所蔵される「正善寺旧記・擬旧記」(万治二年(1659)・安永四年(1775))という史料に「有今奈良山之絶頂欲以弥勒尊像称十二坊中之本尊者非也奈良山者台家也峨眉山者济家也」という記載があり、奈良山から移した弥勒像を祀ったのが、この宮川弥勒堂と考えられる。

(28) 等妙寺建立以前の「奈良山」に中世山寺が存在したという意味で「奈良山の寺」と呼んでおく。但し、旧等妙寺の場所に限らず、広範囲に及ぶ山中には複数の堂・社が営まれていたと考えており、それらを総合した呼称として用いている。

附論 3

I 区本坊地区・II 区本堂地区出土の土師質土器について

織田 誠司（鬼北町教育委員会）

1 はじめに

中世土器の研究は、各地において開発事業に関連した発掘調査が急激に増加した 1980 年代以降、飛躍的に発展した。各地で増加した中世遺跡の遺構・遺物の年代を確定するためにも、数多く出土し、耐用年数の短い在地土器の編年研究が重要かつ早急な課題として認識されるようになったためである。その後、今日まで土器の分類・編年論に留まらず、生産技術論や機能・用途論、流通・消費論など各地で研究が深化してきた。

一方、愛媛県南予地域に目を転じると、研究は極めて低調で、個別遺跡の検討例として唯一、幡上敬一氏による等妙寺旧境内の試掘調査出土資料を対象とした 14～16 世紀の編年的考察〔幡上 2005〕に留まっている。2000 年代に入って四国横断自動車道の建設に伴い発掘調査件数が若干の増加をみたものの、検討に耐えうる良好な資料の蓄積は進まず、未だ土器様相でさえも十分に明らかにされていないのである。今後の資料増加に期したいところではあるが、良好な資料の急激な増加は望めないため、現状で把握し得る在地土器様相を示し、共通認識を得ておく必要があるだろう。

そこでまず、等妙寺旧境内出土の土師質土器、I 区本坊地区及び II 区本堂地区から得られた新出資料について、今後の調査研究に資することを目的にその様相を整理してみたい。

2 既往の研究と本論の視点

(1) 既往の研究と問題の所在

先行研究となる幡上氏の編年的考察では、平坦部 A-1（山王跡）、平坦部 A-2（観音堂跡）、平坦部 A（如意頭院跡）、平坦部 B、平坦部 12（福寿院跡）の試掘調査によって得られた資料を対象とし、胎土・色調、法量、形態、技法（成形、調整、底部切り離し）に着目した分類から型式を設定、それら各型式の層位的な出土状況から大きく I～III 期に変遷を整理する。検討資料には年代を推定し得る良好な共伴遺物がないことから、高知県西部や中予地域出土資料との比較により年代を推測している。資料的な制約を前提としながらも、層位的な出土状況と杯・皿の分類を踏まえた変遷の想定は現在でも有効と考えており、疑義はない。

しかしながら、各段階の年代的な位置づけに課題を残すと同時に、近年の新出資料の中には従来の分類に当てはまらないものも出てきており、発掘調査の進捗に応じてその都度検証作業は欠かせない。また敢えて問題提起すれば、分類基準が曖昧という点が挙げられよう。現在でも同様の状況ではあるが、全体形状を残す資料に限られるため、形態、すなわち体部の開き方や口縁端部の形状での分類や型式学的検討が難しい。従って分類基準は胎土・色調、技法（成形、調整、底部切り離し）の比重が自ずと高くなってしまふ。

(2) 本論の視点

前述した問題意識から今回の検討では、等妙寺旧境内出土の土師質土器のうち、I 区本坊地区及び II 区本堂地区から得られた新出資料を対象とし、その様相を明らかにすることで、今後の調査研究に

資することを目的とする。

なお、本検討では様相の把握に主眼を置くため網羅を指向せず、分類記号等を用いた細かな型式（形式）は敢えて設定しない。複数の分類・編年案が乱立することで生じる混乱を避け、また現状では資料数や残存状態、出土状況などに多くの制約があり、今後の調査研究の進展に伴い大幅な修正を迫られる可能性が高いためである。よって、比較的出土数の多いI区本坊地区出土資料については、時期差を看取できる出土状況から大きくA～D群に分け、その中で諸特徴からまとまりを捉えられるものはグルーピングし、変遷や年代を推定するという手順で検討を進めることとしたい。

3 I区本坊地区出土の土師質土器

(1) 出土状況による資料群の設定

I区本坊地区出土の土師質土器は器種・器形などバラエティに富んでおり、多様かつ混沌とした状況が窺われた。そこでまず、把握を容易にするために出土状況からA～D群を設定した。

A群：本坊建物跡礎石より下面の基盤整地層中から出土した一群。

B群：鍛冶関連遺構など鍛冶工房跡に伴う状況で出土した一群。

C群：表層出土あるいは表面採集など本坊建物跡の存続期間と時期を同じくするものが主体と考えられる一群。

D群：1588年と推定される火災層直下で出土した一群。

(2) A群の土師質土器

A群の資料は6点確認している（図1）。43は杯で、逆台形状を呈しており、口径に比して底径が小さく、器高が高い。体部中位で変換し、外反する器形などから杯B類〔幡上2005〕と判断できる。そのほか底部から大きく開く体部をもつタイプ（32、44）や、大小2法量の皿（46、31）が出土している。底部切り離しは32、46が回転糸切り、ほかは不明である。A群の資料は薄手のものが多く、色調は総じて「にぶい橙～浅黄橙色」の白色系である。

(3) B群の土師質土器

B群の資料は5点確認している（図2）。4は内湾器形の皿で、内面体部下半に細かい単位のヘラ状工具痕が観察される。ほかに底部からの立ち上がりの角度がきついタイプ（6、29）や、小皿（28）、皿（5）がある。B群の資料中には、見込みにヘラ状工具による回転ナデが施されるもの（28）もあるが、外面の調整痕は目立たない。底部切り離しはすべて回転糸切りである。色調は総じて「橙色」を呈している。

(4) C群の土師質土器

C群の資料数は本坊跡の中で圧倒的に多く、器種・器形など最もバラエティに富んでいる。形態、調整、法量、色調・胎土、底部切り離しなどの諸特徴からグルーピングする（図3）。

i) 極小皿・小皿・皿

先行研究では、器高を基準とし、2.5cm以下を「皿」、3.0cm以上を「杯」、中間的な法量のものを「小杯」と区分している〔幡上2005〕。破片資料が主であり、類型化できるだけの十分な資料数が得られていないが、「杯」、「皿」に加え、新たに口径6.5～8.5cm、器高1.5～2.0cm、底径5.0～6.0cm内

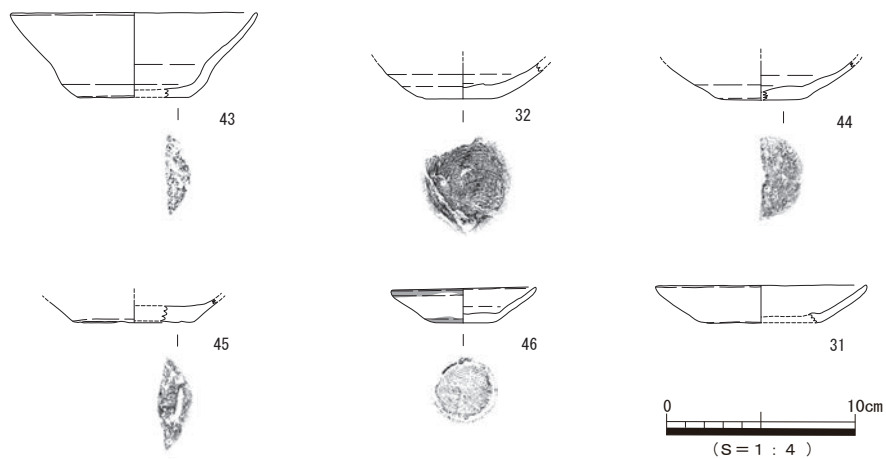


図1 I区本坊地区出土 A群の土師質土器

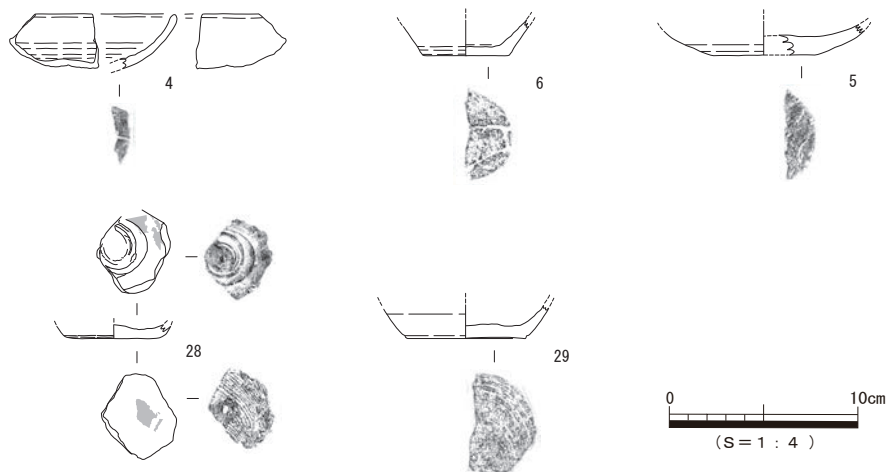


図2 I区本坊地区出土 B群の土師質土器

外のものを「小皿」、推定口径5.0～6.0cm、推定器高1.5～2.0cm、底径4.0cm以下のものを「極小皿」として器種設定しておきたい（図3-47、55、58）。以下、皿は諸特徴からグルーピングする。

皿①グループ 底部から直線的に立ち上がる器形で、非常に厚手のタイプ。明瞭な調整痕をもたない。復元口径7.8～10.0cm、器高2.5～3.0cm、復元底径5.0～7.0cmを測る。すべて「橙色」を呈しており、底部切り離しは静止糸切りである（図3-60、61）。

皿②-aグループ 底部から内湾しながら口縁部にいたる器形で、やや薄手のタイプ。内外面に明瞭な調整痕をもたず、器面は平滑である。復元口径11.0～11.6cm、器高3.0cm、復元底径7.0を測る。「橙色」を呈する（図3-64）。

皿②-bグループ 底部から内湾しながら口縁部にいたる器形で、やや厚手のタイプ。外面にヘラ状工具による多段ナデが施される。復元口径9.8～12.8cm、器高3.0cm、復元底径4.4cmを測る。「橙色」を呈する（図3-63、66）。

ii) 杯

杯①グループ 全体形状は不明であるが、見込みに幅広の回転ナデののち、一文字ナデが施されるタイプ。復元底径4.0～4.8cmのものを確認している。「橙色」を呈し、底部は回転糸切りによる（図3-69）。

杯②-aグループ 底部からきつい角度で立ち上がり、直線的に口縁部にいたるもの。外面にヘラ状工具による多段ナデが施される。復元底径5.5～6.5cmを測り、色調は「橙色」である。底部切り離しは回転糸切りによる。杯G類〔幡上2005〕に相当する（図3-71、74）。

杯②-bグループ 全体形状は不明であるが、底部からきつい角度で立ち上がるタイプで、内外面に明瞭な調整痕をもたないもの。器面は平滑である。復元底径4.3～5.2cmを測り、色調は「橙色」である。底部切り離しは回転糸切りによる（図3-77）。

杯②-cグループ 全体形状が不明で、底部からきつい角度で立ち上がるタイプのうち、杯②-a、杯②-bに該当しないものを含めた（図3-78）。

杯③グループ 底部が肥厚し、全体的に厚手のタイプ。見込み外縁部にヘラ状工具による圏線、外面に多段ナデが施されるものが多い。底径6.0cm前後のサイズで占められ、色調は「橙色」を呈する。底部切り離しは回転糸切り（図3-80、83）と静止糸切り（図3-92、93）がみられ、細分が可能である。静止糸切りは底部の肥厚化が顕著なものに多くみられる傾向がある。杯E類〔幡上2005〕の範疇に含まれる。I区本坊地区出土資料は底部片に限られ、全体形状を推定し得なかったが、III区庭園地区小祠跡A出土資料が参考になる。近隣では河後森城跡（松野町）で同タイプが多く出土している。

iii) 杯もしくは皿

底部のみ残存し、杯か皿かの判別が難しい資料についても底部の形状、調整、法量、色調・胎土、底部切り離しなどの諸特徴からグルーピングを試みる。なお、口縁部片は対象外とした。

杯・皿①グループ 全体形状は不明である。見込み中央部が、部分的に施される渦巻き状ナデにより窪むタイプである。復元底径4.7～4.8cmを測る。色調は「にぶい黄橙～明黄褐色」で、底部切り離しは回転糸切りと静止糸切りが存在する（図3-101）。

杯・皿②-aグループ 全体形状は不明であるが、底部から段をなして体部へといたるタイプと想定される。薄手のつくりで見込みには不定方向のナデが施され、器面は若干の凹凸をもつ。底径4.2～5.0cmを測る。「浅黄橙～にぶい橙色」を呈し、底部は回転糸切りによる（図3-105）。

杯・皿②-bグループ 全体形状は不明であるが、底部からゆるやかに立ち上がるタイプを大きく括った。内面はナデにより平滑である。「浅黄橙～にぶい橙色」を呈し、底部切り離しは回転糸切りである。個体差が大きいものを内包しており、課題が残る（図3-112）。

杯・皿③グループ 全体形状は不明であるが、底部から内湾しながら立ち上がるタイプである。薄手のつくりで内外面にヘラ状工具による多段ナデが施される。復元底径5.6～6.0cmを測る。「橙色」を呈し、底部切り離しは回転糸切りによる（図3-115）。

杯・皿④グループ 全体形状は不明であるが、見込み中央へ向かって器壁が薄くなるタイプである。外面にのみヘラ状工具による回転ナデが施され、内面はナデにより器面が平滑なものが多い。復元底径5.6～6.4cmにおさまる。「橙色」を呈し、底部は回転糸切りによる（図3-118）。

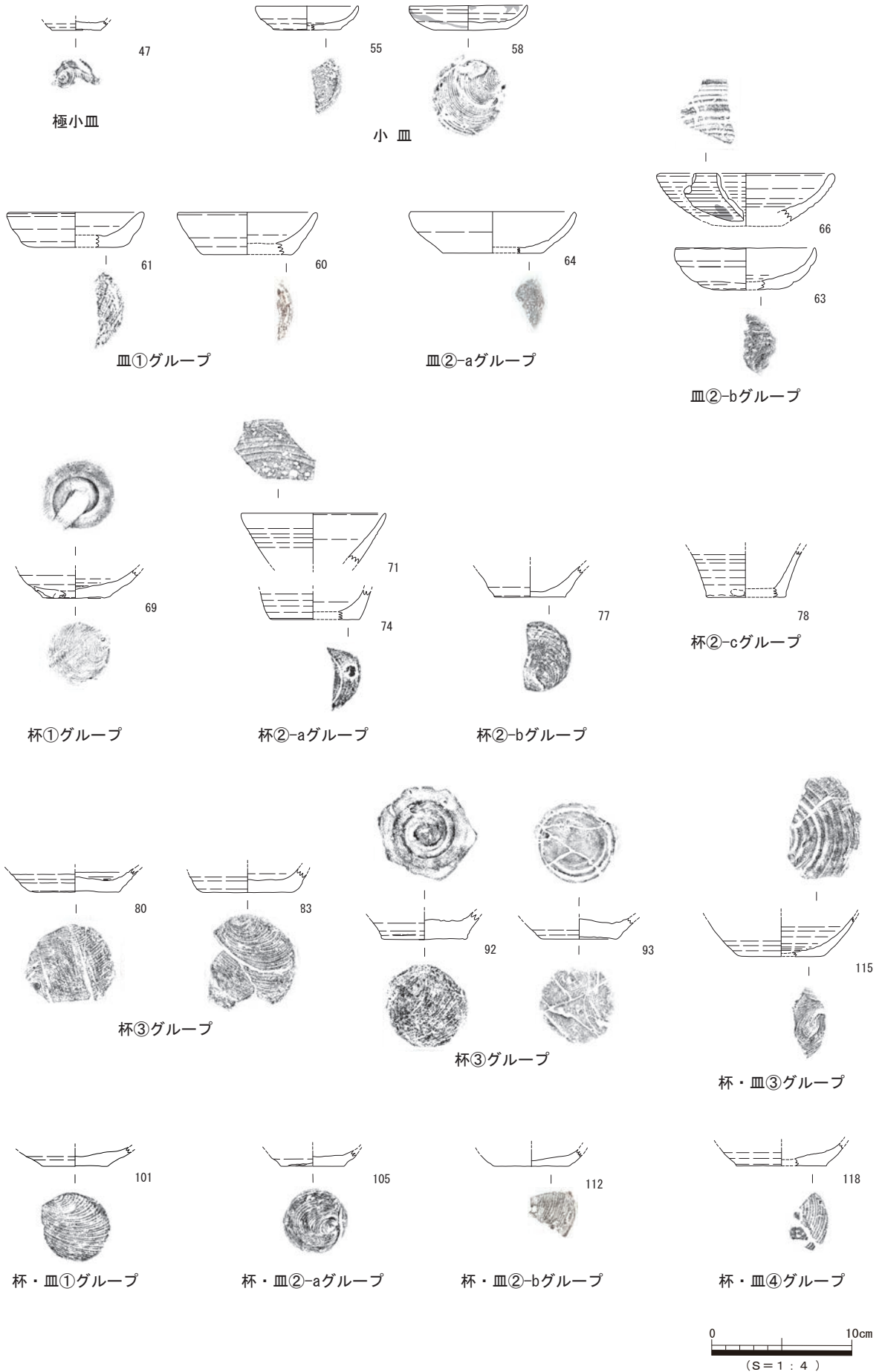


図3 I区本坊地区出土 C群の土師質土器

iv) その他の器種

杯・皿類以外のものとしては小型の火鉢や、香炉の脚部片などが出土している。

(5) D群の土師質土器

D群は1588年と考えられる火災層直下で出土した一群で、3点を確認している（図4）。42は扁平な皿で、40、41は皿と杯の中間的な量量である。薄手のつくりで、体部中位で変換し、やや外反する。見込みにはへら状工具による回転ナデの痕跡が観察される。底部は回転糸切りで、色調は総じて「橙色」である。

参考資料として2点挙げておく。437はII区本堂跡裏斜面の焼土面直下から出土した皿で、底部から大きく外反する形状を呈する。回転ナデにより丁寧な器面調整が施されている。精緻な胎土で、色調は「灰白色」である。127はI区本坊地区出土・採集で、437と共通する。

4 II区本堂地区出土の土師質土器

II区本堂地区出土・採集資料は少なく10点にも満たない（図5）。小皿（439、438）や小振りな皿もしくは杯（441、433）を中心に構成され、「にぶい橙色～橙色」を呈する。424、425は底部からの立ち上がり強いタイプで杯G類〔幡上2005〕に似るが、焼成が非常に堅緻で硬質な特徴をもつ。440は円盤高台状の底部からきつく立ち上がる形状で、色調は「浅黄橙色」である。宇和島市三間町所在の新田神社遺跡採集品中に類似資料を確認している。

5 資料の検討

(1) 変遷と年代の見通し

i) 変遷の概要

先に示した出土状況A～D群は、発掘調査により明らかとなった遺構変遷と対応させることで、概ね次のように年代を付与することができる。

A群：本坊建物跡礎石より下面の基盤整地層から出土した一群で、15世紀前半頃と推定される。

色調は「にぶい橙～浅黄橙色」の白色系で占められ、本資料群に含まれる杯B類〔幡上2005〕は、先行研究で示された年代観と一致する。

B群：鍛冶工房跡に伴う遺構から出土した一群で、15世紀後半頃と推定される。図2-28の小皿

など見込みにへら状工具による回転ナデを施すものがみられるが、外面の調整痕は目立たない。色調は「橙色」である。A群資料と系譜関係を捉えられず、時間的隔たりが存在する可能性がある。

C群：表層出土あるいは表面採集など本坊建物跡の存続期間と時期を同じくするものが主体と考え

られる一群で、15世紀末～16世紀後半頃の時期幅で捉えられる。器種・器形のバリエーションに富み、様々なタイプを内包するため、系譜や並行関係を把握するのは難しい。多くは「橙色」のもので占められる。

D群：1588年と考えられる火災層直下で出土した一群で、16世紀末頃の所産と推定される。C群

ではみられない薄手、外反器形の新たなタイプが出現する。色調は「橙色」で、「白色」のものもみられる。

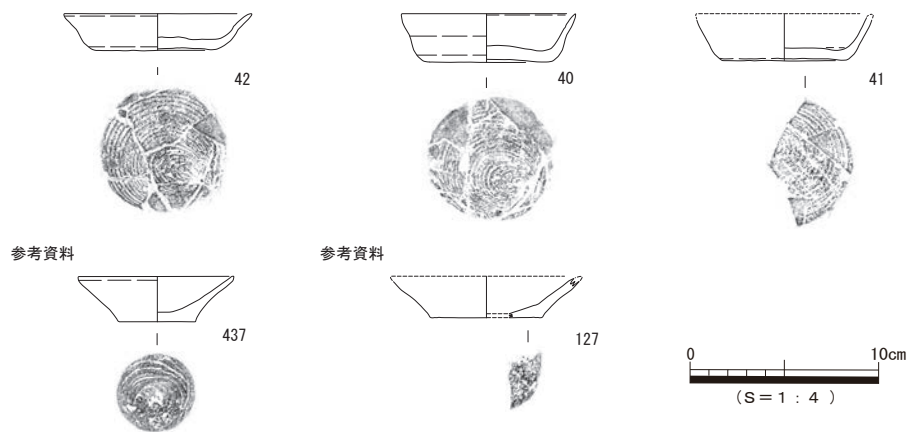


図4 I区本坊地区出土 D群の土師質土器

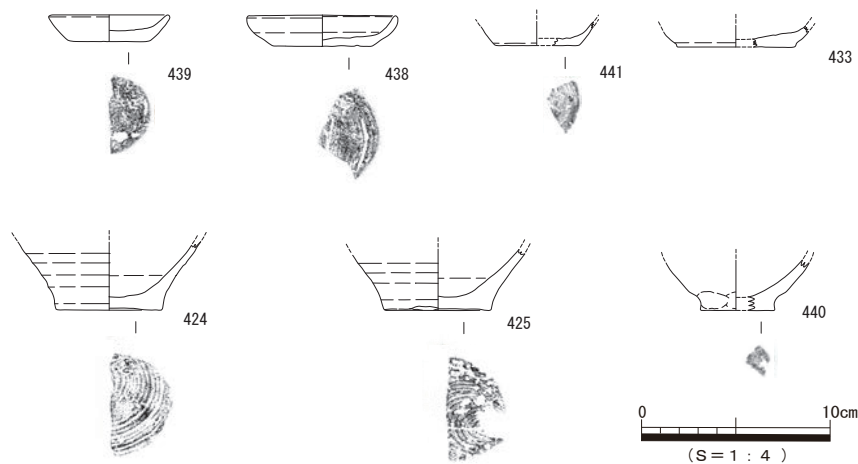


図5 II区本堂地区出土の土師質土器

ii) C群の系譜・並行関係について

現状ではC群は15世紀末～16世紀後半頃という時期幅でしか捉えることができず、その上資料の残存状態も相まって、各グループ間の先後関係やC群内での年代的位置づけは判然としない。しかしながら、調整、色調・胎土、底部切り離しなどを手がかりに、内外面の装飾化（ヘラ状工具による回転ナデ）や器壁の肥厚化、粗雑化を基調的な変化とみれば、以下に示す1→2→3→4の推移は想定できよう。

- 1 B群：内面に調整痕があり、外面にはみられない。内外面ないものもある。色調は「橙色」で、回転糸切り主体（図6－4、5、6、28、29）。
- 2 C群：杯・皿④グループ 内面に調整痕はなく、平滑に仕上げる。外面にヘラ状工具による回転ナデ。「橙色」。回転糸切り（図6－118、119）。
- 3 C群：杯③グループ 内面見込み、外面にヘラ状工具による回転ナデ。底部がやや肥厚する。「橙色」。回転糸切り主体（図6－80）。

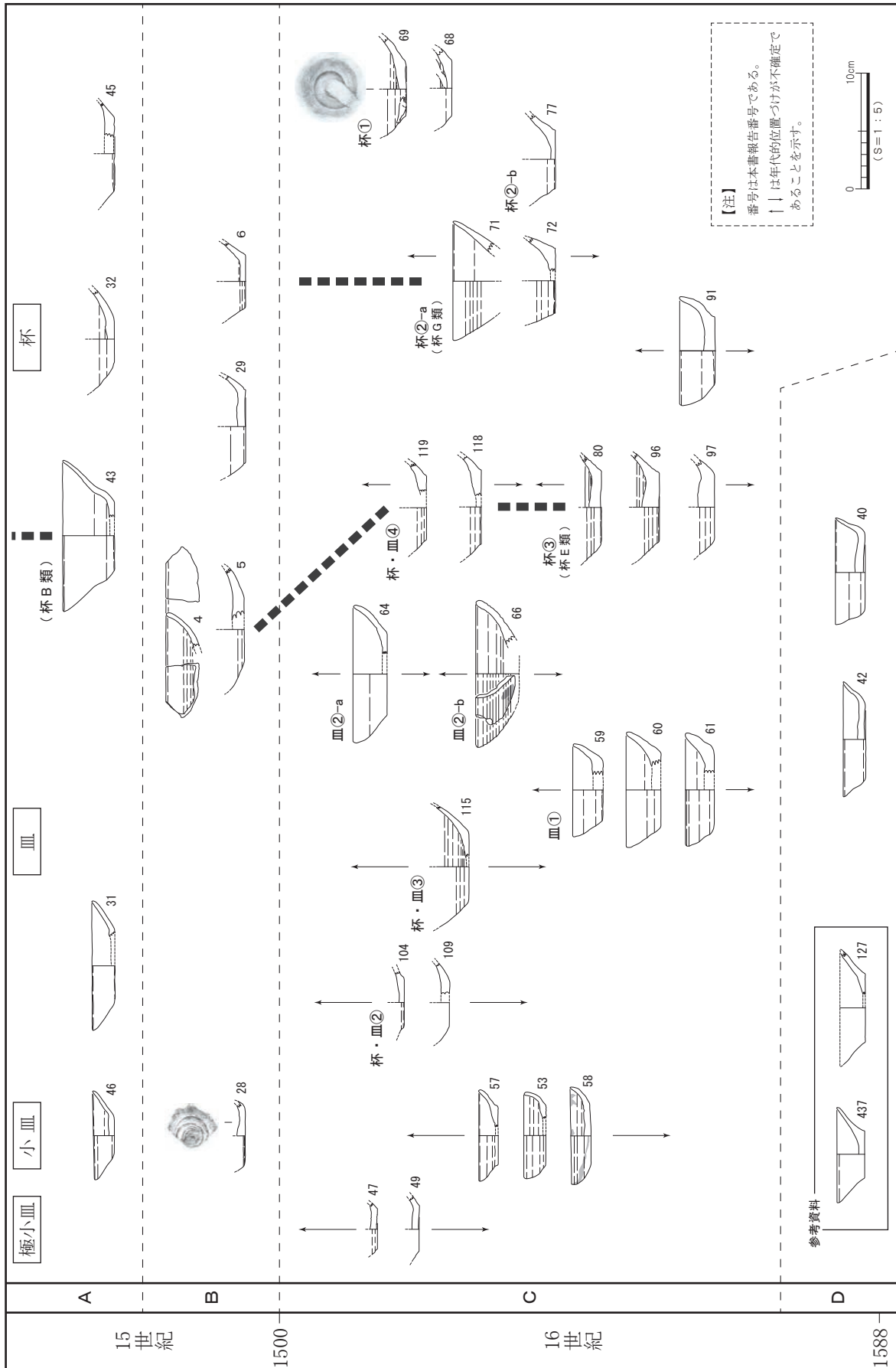


図6 平坦部A I 区本坊地区出土 土師質土器の変遷試案

4 C群：杯③グループ 内面見込み、外面にへら状工具による回転ナデ。底部の肥厚化が顕著。「橙色」。静止糸切り（図6-96、97）。

加えて、内面見込みの調整痕は不明瞭ながら、肥厚した器壁をもち、「橙色」、静止糸切りなどの特徴をもつ皿①グループ（図6-59～61）は、杯③グループ（図6-96、97）との共通性が窺え、これと並存する可能性が高い。また、杯①グループは内面見込みに幅広の回転ナデののちに一文字ナデが施されるものを括ったが、同様のタイプは西予市所在の松葉城跡採集品や音地遺跡出土資料などに顕著にみられ、西予市宇和地域の特色と言える。等妙寺旧境内の出土は僅少であることから、宇和地域からの持ち込みなど2次的にもたらされたのであろう。西予市音地遺跡SD1の出土例から16世紀前半頃を下限と位置づけておく（図6-68、69）。

（2）Ⅰ区本坊地区及びⅡ区本堂地区出土資料の特徴と予察

最後に今後の展望も含め、所見を述べておきたい。検討資料はすべて回転台成形のもので占められており、底部切り離しは回転糸切り主体であった。静止糸切りは16世紀代になると、杯③グループや皿①グループなど一部タイプにのみ認められる。一方、回転へら切りによるものが過去報告資料中に1点確認された（本書報告番号803）。全体数の中ではごく少量と思われるが、底部切り離し不明としたものの中に該当資料が含まれる可能性もあり、注意を要する。

繰り返しになるが、Ⅰ区出土資料は様々なタイプを内包しており、諸特徴からまとまりを捉えてもなお同一系譜で考えにくい状況が見受けられた。これが時期差に起因するのか、あるいは土器生産の動態を示しているのか検討の余地がある。また、器種構成を見ると低平な皿形態がほとんどみられず、小振りな杯・皿が主体となる点は注目される。すでに研究の蓄積がなされた西部瀬戸内地域周辺に目を向けると、「15世紀後半頃には低平な皿が普及し始め、16世紀にかけて主流となる」傾向が広く看取される〔池澤2004など後掲参考文献〕。当該期における研究の対象は城館跡が大多数であることは考慮すべきであるが、小振りな杯・皿を主体とする器種構成が等妙寺旧境内、あるいは南予地域の地域性と言えるのか否か今後明らかにする必要があるだろう。

Ⅱ区出土資料は少ないが、焼成が非常に堅緻で硬質なタイプ（図5-424、425）は特異である。Ⅱ区のみで出土していることから、本堂に伴う仏具等特殊な用途を想定しておきたい。

6 結語

以上、雑駁ながら等妙寺旧境内出土の土師質土器、Ⅰ区本坊地区及びⅡ区本堂地区から得られた新出資料について、先行研究を踏まえながら様相を整理した。資料の状態や出土状況に制約があるため、発掘調査の進捗に応じて今後も検証を継続していかねばならない。

特にバリエーション豊富な15世紀後半～16世紀代の資料群、本検討でいうB群、C群については、松野町域や宇和島市域など近隣地域出土資料との相互比較により、グルーピングの妥当性の有無を検証することで、年代的位置づけや土器生産・流通の動態、地域性の問題等に迫れるものと考えている。後日を期したい。

関連資料の調査にあたっては以下の方々や機関にお世話になりました。記して感謝申し上げます。

宇和島市教育委員会、愛媛県歴史文化博物館、兒玉洋志、西予市教育委員会、高木邦宏、高山剛、富田尚夫、西澤昌平、松野町教育委員会（敬称略）

【参考文献】

池澤俊幸 2004 「四国における古代後期から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究 X VIII』

今治市教育委員会編 2019 『史跡 能島城跡—平成 15 ～ 27 年度整備に伴う調査総括報告書—』

(財) 愛媛県埋蔵文化財センター編 1998 『湯築城跡』 第 1 分冊

(財) 愛媛県埋蔵文化財センター編 2003 『常定寺遺跡 音地遺跡 伊崎越遺跡』

北島大輔 2010 「IX 章大内式の設定—中世山口における遺物編年の細分と再編—」『大内氏館跡 XI』 山口市教育委員会

鬼北町教育委員会編 2005 『等妙寺跡—平成 11 年～平成 16 年度学術調査に伴う埋蔵文化財調査報告書 第 7 集—』

長 直信 2018 「第 2 章大友氏館跡出土の土器と権力—その様相と特質—」『戦国大名大友氏の館と権力』 吉川弘文館

幡上敬一 2005 「第 2 節 遺物」『等妙寺跡—平成 11 ～平成 16 年度発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第 7 集—』 鬼北町教育委員会

松野町教育委員会編 1999 『史跡 河後森城跡—現在までの調査と成果—』

松野町教育委員会編 2019 『予土境界地域における中世遺跡群の調査』